小学生における関係性攻撃の認識についての研究

平成 27 年度

関口　雄一
筑波大学大学院人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻

―目次―

第Ⅰ部　理論的検討

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第１章　小学生の関係性攻撃に関する研究の動向・・・・・・・・・・4

第 1 節　小学生の関係性攻撃の先行研究　・・・・・・・・・・・・・・・・5

第 2 節　従来の関係性攻撃研究における問題点・・・・・・・・・・・・・13

第２章　社会的情報処理モデルに関する研究の動向・・・・・・・・・16

第 1 節　小学生の社会的情報処理モデルの先行研究・・・・・・・・・・17

第 2 節　従来の社会的情報処理モデル研究における問題点・・・・・・26

第３章　本論文の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第 1 節　本論文における目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

第 2 節　本論文で扱う概念の説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

第 3 節　本論文の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

第Ⅱ部　実証的検討

第４章　小学生の関係性攻撃の認識と攻撃行動に関する検討
（研究 1・研究 2）
・・・・・・・・・・・・・・36

第 1 節　小学生用関係性攻撃観尺度の項目収集（研究 1-1）・・・・・・37

第 2 節　小学生用関係性攻撃観尺度の作成と信頼性の検討（研究 1-2）・46

第 3 節　小学生用関係性攻撃観尺度改訂版の作成と信頼性・妥当性の検討
（研究 2）・・・・69

第 4 節　第 4 章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

第５章　小学生の関係性攻撃生起の内的プロセスに関する検討
（研究 3・研究 4・研究 5・研究 6）・・100
第 1 節　小学生の関係性攻撃の認識と解釈ステップの検討
（研究 3）・・・・103
第 2 節　小学生の関係性攻撃の認識と目標明確化ステップの検討
（研究 4）・・・・118
第 3 節　小学生の関係性攻撃の認識と反応検索ステップの検討
（研究 5）・・・・131
第 4 節　小学生の関係性攻撃の認識と反応決定ステップの検討
（研究 6）・・・・141
第 5 節　第 5 章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155

第６章　小学生の関係性攻撃の認識と心理社会的適応の関連
（研究 7・研究 8）・・・157
第 1 節　小学生の関係性攻撃の認識と社会的適応の関連の検討
（研究 7）・・・・160
第 2 節　小学生の関係性攻撃の認識と内在化問題の検討
（研究 8）・・・・176
第 3 節　第 6 章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・190

第Ⅲ部　総合的考察

第 7 章　本研究のまとめと意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・194
第 1 節　本研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195
第 2 節　本研究の学問的意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・202
第 3 節　本研究の社会的・臨床的貢献・・・・・・・・・・・・・・・203
第 4 節　本研究の限界と今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・205

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・207
要旨・資料

第Ⅰ部

理　論　的　検　討

はじめに　小学生の攻撃行動と社会的状況

小学生の心理社会的適応を考える際に，小学生にとって身近で，常に大きな社会的関心を集め続けている問題として，いじめや暴力といった攻撃行動に注目することは重要だと考えられる。そして，小学生が実際にどの程度いじめや暴力といった問題に曝されているかを示す資料のひとつとして，文部科学省の発表している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」が挙げられる。それによると，平成 20 年度以来，生徒間暴力の発生件数が 3 万件を越え続けている（文部科学省，2014）。また，いじめの認知件数については，平成 18 年度から平成 23 年度の間に，わずかな減少傾向が認められるものの，ほとんど横ばいの状態であったことが示されている（文部科学省，2014）。また，平成 24 年度にいじめが大きな社会的関心を集めると，いじめの認知件数は約 19 万 8 千件と，前年度（約 7 万件）より倍以上に増加した数値の報告がなされている（文部科学省，2014）。この大きな数値の変動は，いじめ自殺事案が大々的に報道されたことを受けて，積極的にいじめを把握しようと努めた結果であると指摘されており，“結果に示された数値は，そのまま鵜呑みにできない，実態は誰にも分からない”と言及されている（国立教育政策研究所, 2013）。

一方で，国立教育政策研究所が実施している小学生本人に対する自記式のいじめについての調査に「いじめ追跡調査」がある。この調査は，小学生と中学生を対象に，1998 年から実施されている縦断調査であり，6 月と 11 月の年間 2 回の調査が実施されている。その 2010 年から 2012 年までの 3 年間の結果についての，最新の報告は，「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の結果と異なるものであった。つまり，最も典型的ないじめ行為である「仲間はずれ・無視・陰口」の被害経験率は，男子で 45.4％～51.0%であり，女子は 50.5％～56.8％の範囲であり，急増したり，急に減少したりした傾向は報告されていない（国立教育政策研究所, 2013）。この傾向は加害経験率にも言え，2010 年から 2012 年までの 3 年間で，「仲間はずれ・無視・陰口」の加害経験は，男子で 39.8％～49.4%であり，女子は 42.9％～50.1％の範囲であった。同様に，「からかう・悪口」，「軽くぶつかる・叩く・蹴る」，「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」といった行為ごとの加害・被害の経験率にも 2 倍以上の変動は見られず，その推移は 2％～5％に収まっていた（国立教育政策研究所，2013）。この自記式の調査結果から，小学生の周囲でのいじめ行為の発生について，「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」が示しているような急激な増加はないものの，恒常的に一定数の小学生が攻撃行動に曝されていることが考えら

れる。

また,「いじめ追跡調査」によると，いじめの行為によって，その経験率や特徴に違いがあり，異なる対応が必要であることが言及されている。具体的には,「仲間外れ・無視・陰口」の経験率が最も高く，4 割以上の経験者がいるのに対し,「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」 といった暴力を伴ういじめの経験率は，男子で 2 割～3 割，女子では 1 割未満～2 割弱であるなど，発生頻度に大きな違いがあることが挙げられる（国立教育政策研究所, 2013）。そして，いじめ行為ごとの特徴として，継続性の低さが指摘されている。縦断調査の結果から，3 年間「仲間外れ・無視・陰口」の被害が継続した小学生は 3 名（0.4%）であり，一度も被害を受けなかった者は 164 名（21.6%）であった。さらに，3 年間加害経験が継続した小学生は 1 名（0.13%）であり, 一度も関与しなかった者は 172 名（22.6%）であった（国立教育政策研究所, 2013）。つまり，被害経験も加害経験も一度は経験したと報告している者が大多数であったと言える。この結果から,「仲間外れ・無視・陰口」には一部の特定の小学生だけが巻き込まれているわけではなく，ほとんどの小学生が被害者も加害者も経験し，その役割を入れ替わりながら経過するという実態が示唆されるのである。これら，いじめの形態ごとの経験率の違いと,「仲間外れ・無視・陰口」という行為の普及率の高さについては，以下のような説明がなされている。つまり，暴力に比べ,「仲間外れ・無視・陰口」は問題性の低い些細な問題であるため，誰もが被害者になりうるだけでなく, 加害者として加わることが容易であるために, 普及率が高くなっているのである。しかし，その些細な行為も，しつこく繰り返されたり，誰もが加わりやすいことから集団で集中的に行われたりした場合，被害者に大きな精神的苦痛（いらだち・困惑・不安感・屈辱感・孤立感・恐怖感等）がもたらされることも指摘されている（国立教育政策研究所, 2013）。

以上の議論から，本研究では，小学生の心理社会的適応を脅かす攻撃行動を取り上げる中でも，その行為の形態の違いを考慮する。特に，小学生の加害・被害両方の経験率が最も高く，深刻な不適応を招く可能性のある「仲間外れ・無視・陰口」，つまり関係性攻撃に焦点を当てることとする。

第１章　小学生の関係性攻撃に関する研究の動向

第１節　小学生の関係性攻撃の先行研究

本論では，小学生の心理社会的適応に関わる重要な問題として，攻撃行動，その中でも特に関係性攻撃に焦点を当てる。そこで，まずは関係性攻撃の先行研究について，本節で概観する。

そもそも，攻撃行動（aggression）とは，「他者に対して苦痛や危害を与えることを意図して行われる行動」と定義されている（大渕，1993; 2011）。子どもの攻撃行動は，被害者に危害や苦痛を与えることはもちろんのこと，加害者自身にも否定的な影響をもたらすことが明らかにされてきた（Sullivan, Farrell, & Kliewer, 2006）。攻撃行動が加害者にもたらす否定的な影響としては，まず，仲間関係との関連が指摘できる。攻撃行動を多く示す小学生は，仲間から拒否されることや，嫌われることが多いということが数多く指摘されてきた（Cairns, Cairns, Neckerman, Gest, & Gariepy, 1988; Dodge, Coie, Pettit, & Price, 1990）。また，児童期の攻撃行動が，青年期の非行等の反社会的行動を予測することが明らかになっている（Dishon, Véronneau, & Myers, 2010）。他にも，攻撃行動は，加害者の精神的健康にも否定的に関与する。例えば，反復して持続的な，反社会的，攻撃的，また反抗的な行動パターンを特徴とする行為障害の子どもは大うつ病性障害の診断基準を満たすことが多いことが指摘されている（Biederman, Faraone, Mick, & Lelon, 1995）。さらに，小児期に行為障害と大うつ病性障害が併存していることは，将来の反社会的パーソナリティ障害のリスクを高めることも示されている（Kasen, Cohen, Skodol, Johnson, Smailes, & Brook, 2001）。以上の先行研究で示されたように，攻撃行動への従事は，加害者のその後の不適応を予測する重要な決定要素であると考えられてきた。そのため，攻撃行動は過去数十年に亘って，心理学における中心的なトピックであった。

攻撃行動を扱った研究の多くは，その生起メカニズムを明らかにしようとする試みであった。それら数多くの先行研究を，大渕（1993; 2011）は特定の理論に基づいた分類が可能だとした。それら先行研究の知見を参考にすると，攻撃行動の生起メカニズムを説明する理論を３つに分類することができる。つまり，①情動発散説，②社会的機能説，③統合理論である。①情動発散説は，攻撃行動を不快な情動の表出あるいは発散とみなす立場の理論である。その特徴は，欲求不満によって生じた不快な内的緊張を減少させるための反応として攻撃行動を捉えることである（ドラード・ドーブ・ミラー・マウラー・シアーズ，1959）。この理論のポイントは，攻撃行動は不快な内的な葛藤の解消のために生じるということである。つまり，欲求不満な状態に至った事態の解決のために，攻撃行動は遂行され

ないのである。そのため，攻撃行動は，欲求不満とは因果的に無関係の対象に向けられることもあるとされる。一方で，②社会的機能説は，ある目的を達成するための手段として，自覚的に選択された結果，攻撃行動が生起するとみなす立場である。攻撃行動の動機づけや，攻撃行動の生起に至るまでの情報処理過程について検討した研究が代表例と考えられる（Ohbuchi & Tedeschi, 1997; Pettit & Mize, 2007）。最後の③統合理論は，先述した不快情動説に基づく衝動的な攻撃行動の生起メカニズムと，社会的機能説に基づく目標達成のための攻撃行動の生起メカニズムを統合した二過程モデルが代表例である（大渕, 2011）。また，社会的学習理論なども含めた，攻撃行動に関する主要な理論を網羅して統合を試みた一般的攻撃モデルも挙げられる（Anderson & Bushman, 2002）。以上のように，攻撃行動の生起メカニズムの研究の蓄積によって，明らかになった最も重要な点は，攻撃行動の生起は単一の原因に帰属させることができないということである。攻撃行動は，複数のリスク因子と防御因子の複雑な相互作用を経た結果であり，しかも，それらの作用は全て，性別や年齢によって変化するのである（コナー, 2008）。そのため，攻撃行動の生起を考えるにあたっては，数多くのリスク因子と防御因子が相互作用し，また時間的変化にも影響を受けるという発達的な視点が重要であると考えられる。発達的な視点を持つことは，攻撃行動の予防という観点からも有意義なことであると考えられる。そして，攻撃行動に対する発達心理学的なアプローチの分野の動向として，攻撃行動の細分化の流れが挙げられる。以降，本節では細分化された攻撃行動の特徴，心理社会的不適応との関連についての先行研究を概観する

第１項　細分化された攻撃行動の研究の動向

攻撃行動を細分化することで，過剰な攻撃行動に従事する者の特徴をより浮き彫りにすることが可能になる。その浮き彫りになった特徴は，個別の攻撃行動に対するよりユニークな予防，対応に重要な示唆を与えることが期待される。そのために，攻撃行動を細分化し，捉える研究が行われている。数多くの研究が，攻撃行動は複数次元の構造を持つことを指摘している（Dodge & Coie, 1987; Little, Jones, Henrich, & Hawley, 2003）。攻撃行動の細分化は，主に二つの視点，つまり，攻撃行動の機能面からの細分化と，攻撃行動の形態面からの細分化がなされている。

まず，攻撃行動の機能面に注目して細分化された攻撃行動の代表例として，反応的攻撃（reactive aggression）と能動的攻撃（proactive aggression）の分類が挙げられる。反応的攻

撃は, 攻撃誘発刺激に対して怒り感情を伴って示される攻撃行動を指す。この攻撃行動は, Dollard や Berkowits の欲求不満攻撃仮説やその改訂理論を理論的な基盤としており，欲求不満対象に対する突発的な攻撃や脅威に直面した時の防御姿勢，強い興奮などによって特徴づけられる（Dodge & Coie, 1987）。なお，現在では欲求不満は常に攻撃をもたらすわけではなく，不快感情と結びついた時に攻撃行動を喚起すると理解されている（Berkowitz, 1989）。一方で，能動的攻撃は何らかの目的（例えば，物や社会的優位性の獲得）を達成するために用いられる攻撃行動を示し，怒り感情を伴わない場合も多いとされている。能動的攻撃は社会的学習理論を理論的な根拠とし，社会的な相互作用場面での攻撃行動のモデリングを通して学習され，さらに正または負の強化によって，攻撃行動が維持されると考えられている。つまり，能動的攻撃はパターン化された意図的な行動であり，目的を獲得する手段として用いられる（Dodge & Coie, 1987）。

反応的攻撃と能動的攻撃は，非常に高い相関関係にあることが示されている。実際，36 の一般児童・青年（非行少年や臨床群を除く）を対象にした研究をメタ分析した結果，反応的攻撃と能動的攻撃の相関係数の平均の推定値は r＝.78（95%CI=.773-.786）であることが示された（Card & Little, 2007）。こうした, 高い相関のため, 反応的攻撃と能動的攻撃は, 心理社会的適応との関連に似た傾向があることが示されている。例えば，両者とも向社会的行動傾向の低さと仲間からの拒否，あるいは社会的選好（social preference）指名率の低さとの関連を指摘されている（Card & Little, 2007）。他にも，自己制御の困難さや多動性，非行傾向，仲間からの攻撃被害を受ける傾向と内在化問題，そして学業成績といった結果変数に対して，反応的攻撃と能動的攻撃は似た関連を示すことが報告されている（Card & Little, 2007）。しかし，内在化問題を筆頭に，向社会的行動傾向の低さ，自己制御困難さと多動性，仲間からの拒否，社会的選好度の低さ，そして仲間からの被害のそれぞれは，能動的攻撃よりも反応的攻撃に強く関連することも明らかにされた（Card & Little, 2007）。つまり，反応的攻撃は，能動的攻撃よりも不適応と関連している程度が大きいと考えられているのである。この反応的攻撃と能動的攻撃の不適応との関連の違いは，両者の行動の特徴によって説明されうる。反応的攻撃の特徴である，情動発散的であり，計画性の乏しい行動傾向は，攻撃行動を有効に働かせることを阻害している可能性がある。つまり，反応的攻撃の従事者は, 既に仲間内で地位を確立している仲間に対して遂行してしまい, 結果, その攻撃行動が仲間内で非難されるリスクを持つことが指摘されている（Card & Little, 2007）。一方で，能動的攻撃の遂行者は，計画的に，秩序立てて，たやすく屈服できるよう

な集団内での地位の低い者を攻撃対象に選ぶことが可能と考えられている。そのため，攻撃行動は効果的な目的遂行の手段として機能し，かつ集団内での非難に悩む心配もないと考えられている（Card & Little, 2007）。このように，攻撃行動を細分化することで，各攻撃行動の独自の効果を検討することが可能になるのである。

第 2 項　関係性攻撃研究の登場

前述した通り, 攻撃行動は, その加害者も被害者も心理社会的不適応に関わることから, 絶えず，研究対象として注目されてきた。しかし，研究の主な対象であった攻撃行動の形態は,「たたく, 殴る, 蹴る, 押す」などの行為に代表される身体的攻撃（physical aggression）であった。身体的攻撃に関心が集まっていたのは，多くの研究が男性を対象に研究を行っていたためであり，男性が多く示す行動が身体的攻撃であったためである（Hyde, 1984）。同様に，身体的攻撃や言語的攻撃（verbal aggression）などの目に見える形態をとる攻撃行動である外顕的攻撃（overt aggression）は，一貫して女性よりも男性に多く見られる行動であることが報告されている（Loeber & Stouthamer-Loeber, 1998）。そのために，攻撃行動の分野では，女性を研究対象に含めなかったり，あるいは対象に含めていても性差を全く考慮しない研究が実施されてきた（Björkqvist, 1994）。

しかし，80年代から90年代頃にかけて，攻撃行動をより幅広く捉えようとする研究が増えて来た。そうした研究では, 従来の身体的攻撃や言語的攻撃だけでなく, より潜在的で, 間接的で, ターゲットの社会的関係にダメージを与えるような攻撃行動に注目が集まった。それらの代表的な3つの攻撃行動が，間接的攻撃（indirect aggression），社会的攻撃（social aggression），そして関係性攻撃（relational aggression）である。間接的攻撃とは，ターゲットと面と向かわず，噂を流したり，し返しに他の人と親しくするといった行動を指す（Lagerspetz, Björkqvist, & Peltonen, 1988）。間接的攻撃は，加害者が特定されないことが最大の特徴であり，その特徴ゆえに被害者からの反撃や他者から加害行為を非難されることを避けることができる。次に，社会的攻撃は，ターゲットの社会的な地位か自尊心，あるいはその双方を傷つけることを目的とした攻撃行動である（Cairns, Cairns, Neckerman, Ferguson, & Gariépy, 1989; Galen & Underwood, 1997）。具体的には，噂の流布や表情による非言語的な否定的表現を行うこと，オストラシズムを用いて仲間集団内の被受容感を操作する行動が社会的攻撃に含まれるとされる（Cairns et al., 1989; Galen & Underwood, 1997）。そして，関係性攻撃は，ターゲットの友人関係や，仲間集団の中に含まれているという気

持ちに，重大なダメージを与えることを意図した行動と定義された攻撃行動である（Crick & Grotpeter, 1995）。関係性攻撃の具体的な行動には，ターゲットを無視することや仲間から排除すること，故意に友情を撤回しようとすることで相手を傷つけたり，コントロールすること，ターゲットの否定的な噂を流し，仲間から拒否されるように仕向けることなどの行為が含まれる。これらの間接的攻撃，社会的攻撃，関係性攻撃は，非常に似た特徴を持っていながら，詳細な部分で異なる特徴を持っている（Xie, Cairns, & Cairns, 2005）。具体的には，間接的攻撃は攻撃のターゲットに対して面と向かって危害を加えないことが最大の特徴であるが，社会的攻撃や関係性攻撃は常に間接的な行動形態をとる訳ではない。また, 社会的攻撃は, 表情による否定的なメッセージの伝達を攻撃の形態として含めるが, 関係性攻撃にはそういった形態は想定されていない。加えて，社会的攻撃はターゲットの社会的地位を傷つけることを目的とする行為が中心であるのに対し（Galen & Underwood, 1997），関係性攻撃にはターゲットとの親密な人間関係を盾に相手を操作し，言うことを聞かせる行為が含まれる点も異なる。そのため，関係性攻撃の特徴のひとつに，親密な仲間関係内で生じるというものが挙げられる（Gropeter & Crick, 1996）。つまり，関係性攻撃は競争相手を貶める場合や特定の 1 人を集団から排除する場合だけでなく，親密な友人関係内でも生じる可能性が想定されており，社会的攻撃よりも多くの文脈で使用される可能性があると考えられる。よって，本研究では，典型的ないじめの行為である「無視，仲間外れ，陰口」に合致し，使用される文脈も多い関係性攻撃に注目する。

前述の経緯の通り，関係性攻撃の概念が提唱された背景には，従来の攻撃性研究の対象者が男性中心であり，それまで検討が不十分であった女性の攻撃性に関心が集まってきたことが挙げられる。関係性攻撃に注目することで，女性の方が男性よりも攻撃性が低いのではなく，問題として扱われていた攻撃行動の形態が，女性よりも男性に目立つ形だったということが示された（Crick, 1996; Crick, 1997; Crick, Bigbee, & Howes, 1996; Crick & Grotpeter, 1995; Grotpeter & Crick, 1996）。そして，関係性攻撃が女性に多く見られる行動であることの説明は，児童期における男子と女子の仲間集団の違いからなされている。関係性攻撃研究の文脈では，男子も女子も互いに誰かを傷つけたいときに，自分の属する性別が最も価値を置くものを侵害する方法を採用すると論じている。そのため，身体的な力強さや支配性を重視する男子では身体的攻撃が，対人関係を重視する女子では関係性攻撃が用いられやすいと考えられている (Crick & Grotpeter, 1995; Rose & Rudolph, 2006)。つまり，男子の仲間グループでは，身体的な有能さ，支配，優位な社会的立場の確立などが価値の

ある目標と考えられており，そのために身体的攻撃が有効な攻撃手段として採用されるのである。同様に，女子においては，仲間グループ内において親和関係を構築することが価値のある目標と考えられており，その目標を阻害するのに最も適した攻撃形態が関係性攻撃であると考えられるのである（Rose & Rudolph, 2006）。このように，男子と女子のそれぞれの仲間集団の中での文化が異なることが，発現する攻撃行動の形態にも関連すると考えられている。

しかし，関係性攻撃の性差については，自己評定や他者評定，観察法などの測定方法により，その結果が一貫していないことも明らかにされている（Archer, 2004; Card, Stucky, Sawalani, & Little, 2008; Smith, Rose, & Schwartz-Mette, 2010）。また文化圏の違いによっても，関係性攻撃における性差が一貫していないことも指摘されている。実際，イタリアや日本，ロシアなど家族主義的あるいは集団主義的文化圏では，関係性攻撃に性差がみられないという結果も示されている（Hart, Nelson, Robinson, Olsen, & McNeilly-Choque, 1998; 坂井・山崎，2004; Tomada & Schneider, 1997）。少なくとも，本邦において，関係性攻撃の性差は認められていない（勝間・山崎, 2008; 坂井・山崎, 2004）。これらの事実は，対人関係を重視する女子において関係性攻撃が重大な攻撃行動であることと同様に，相互協調性を重視する集団主義の文化圏においても，関係性攻撃が重大な攻撃行動である可能性を示唆している。つまり，本邦において，関係性攻撃は，男女を問わず子ども達が価値を置く対人関係を破壊する深刻な攻撃行動であるために，男女共に人を傷つける際には関係性攻撃を同程度に採用している可能性が考えられる。そのために，本邦では関係性攻撃の性差が確認されていないと考えられる。この文化的背景を考慮すると，本邦において関係性攻撃に注目する重要性が推察されるだろう。

第３項　関係性攻撃と心理社会的適応の関連

外顕的攻撃行動への関与が，被害者はもちろん加害者にとっても心理社会的不適応につながることと同じように，関係性攻撃への従事は，加害者の心理社会的不適応と関連することが多くの研究で示されている。

まず，関係性攻撃と仲間関係や社会的適応の関連が検討されている。関係性攻撃傾向の高い児童は，そうでない児童に比べて，仲間から拒否されたり，より孤独感を感じていることが示されている（Crick & Grotpeter, 1995）。また，小学生を対象にした縦断的研究で，関係性攻撃が将来の仲間からの拒否を予測すること，さらに，女子においては仲間からの

拒否が将来の関係性攻撃を予測することが示されている（Werner & Crick, 2004; Zimmer-Gembeck, Geiger, & Crick, 2005）。

次に，小学生において関係性攻撃と内在化問題の関連も指摘されている。内在化問題（internalizing problem）とは，Achenbach（1966）により提唱された子どもの精神医学的症状の分類であり，過度の不安や恐怖，抑うつ，引っ込み思案や身体的愁訴などの問題行動を指す。そして，小学生を対象にした縦断的研究で，関係性攻撃が将来の内在化問題を予測することが明らかにされている（Crick, Ostrov, & Werner, 2006; Murray-Close, Ostrov, & Crick, 2007）。

さらに，内在化問題に対をなす概念として，外在化問題（externalizing problem）がある。外在化問題も，Achenbach（1966）により提唱された精神医学的症状の分類であり，具体的には，注意散漫や非行傾向，攻撃的行動など，年齢相応に状況に見合った行動をコントロールすることができず，周囲の大人や仲間に厄介を与える問題行動が含まれる。この外在化問題に関しても，関係性攻撃との関連が検討されており，小学生の関係性攻撃と非行傾向，反社会的な逸脱行動との関連が指摘されている（Crick et al., 2006; Prinstein, Boergers, & Vernberg, 2001）。他にも，関係性攻撃と境界性パーソナリティ障害傾向の関連が縦断的研究によって示されている（Crick, Murray-Close, & Woods, 2006）。

以上のように，関係性攻撃は数多くの心理社会的不適応と関連することが示されている。しかし，関係性攻撃と心理社会的適応の問題は，時に複雑な結果を示している。まず，社会的適応との関連について言及すれば，関係性攻撃を多く示す小学生は，単純に仲間からの拒否と関連するだけではないことが明らかになっている。関係性攻撃と社会的適応の関連については，ソシオメトリック指名法を用いた研究による報告の蓄積が多い。ソシオメトリック指名法は，子ども達に「最も好きなクラスメイト（あるいは同学年の子ども）3 名」と「最も好きではないクラスメイト（あるいは同学年の子ども）3 名」を指名させ，その得点から 5 つの仲間内地位群を分類し，個人の人気や不人気を捉える方法である（Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982）。その 5 つの仲間内地位とは，人気児群（the popular group），拒否児群（the rejected group），無視児群（the neglected group），敵味方児群（the controversial group），平均児群（the average group）である [1)]。この中でも，敵味方児群は，仲間からの肯定的な指名と否定的な指名の両方を多く受けている小学生を指し，仲間から拒否されているが味方も多いということを意味している。そして，関係性攻撃について，上記の 5 群の仲間内地位間での得点を算出すると，敵味方児が最も高い関係性攻撃得点を示すことが

明らかにされている（Crick & Grotpeter, 1995）。つまり，関係性攻撃児は単に拒否されている訳ではなく，ある一部の仲間からは受容されているという特徴があることも示されたのである。

同様の知見は，小学生から青年を対象にした別の仲間指名法を用いた研究からも報告されている。その仲間指名法とは，子ども達に「最も好きな（好きではない）クラスメイト」を指名させることに加え，「最も人気のある（最も人気のない）クラスメイト」の指名も行わせる方法である。つまり，個人の好き—嫌いの指名率に加え，仲間内での人気の指名率によって，新たに仲間内での地位を捉える方法である。従来のソシオメトリック指名法により捉えられる仲間内での地位は，ソシオメトリックによる人気（sociometric popularity）とされ，ある個人が仲間集団内で好かれている程度を測定するものと考えられている。一方で, 人気に注目した仲間内での地位は, 仲間が認知している人気（peer perceived popularity）と呼ばれ，ある個人の仲間集団内での社会的な影響力や知名度，魅力を測定する指標であると考えられている（Parkhurst & Hopmeyer, 1998）。そして，これら 2 つの人気は，関係性攻撃との関連で異なる結果を示すことが明らかにされている。まず，ソシオメトリックによる人気の高さは，関係性攻撃と負の関連を示している。しかし，仲間から認知された人気は，関係性攻撃と正の関連を示すこと，さらに，その関連が学年を上がるにつれて，より強力になっていくことが報告されている（Cillessen & Mayeux, 2004; Rose, Swenson, & Waller, 2004）。以上の研究を踏まえると，関係性攻撃への従事は，基本的には仲間からの拒否を招く恐れがあるが，一方で，仲間集団内における影響力の強さや地位の高さとも関連する可能性も指摘できる。こうした背景として，外顕的攻撃にない関係性攻撃の特徴が関連していることが考えられる。関係性攻撃は，外顕的攻撃に比べて匿名性が高く，目に見えない方法で遂行可能という特徴や，被害者，加害者などの役割が時間の経過と共に変化するため周囲から分かりにくいといった特徴がある(Craig, Pepler, & Atlas, 2000)。この関係性攻撃の不可視性を活かすことによって，関係性攻撃児は社会的な力を維持したまま，被害者の周囲の人間関係を操作可能だと推察されており（Xie et al., 2002），身体的攻撃とは異なる形で，仲間内地位と関連することが考えられる。

また，関係性攻撃と心理的適応との関連においても，一貫しない結果が示されている。前述したように，多くの研究において，小学生の関係性攻撃は基本的に内在化問題などの心理的不適応と関連することが示されている（Crick et al., 2006; Murray-Close et al., 2007）。しかし，本邦においては，女子においてのみ関係性攻撃と抑うつに負の関連がみられると

いう結果が示されている（坂井・山崎, 2003）。この性差の背景として，関係性攻撃が女子の重視する社会的関係をターゲットにする攻撃行動であるため（Crick & Grotpeter, 1995），女子の心理社会的不適応に対して関係性攻撃が独自の関連を示す可能性が考えられる。Crick（1997）においても, 性別による攻撃行動と適応の関連の差異について言及している。具体的には，関係性攻撃に高い水準で従事する男子，つまり男子にとって標準的でない攻撃行動に従事する者は，関係性攻撃に従事する女子や身体的攻撃に従事する男子よりも適応問題により大きなリスクを持つことが報告されている。逆に，身体的攻撃に従事する女子も，他の仲間よりも心理社会的不適応と関連するリスクが大きくなることが示されている。また，海外の児童期から青年期を対象にした報告においても，関係性攻撃と抑うつや不安といった内在化問題の関連を仲間が認知した人気が調整することが報告されている。具体的には，仲間が認知した人気が低いか平均的である場合，関係性攻撃は将来の内在化問題の増加を有意に予測するが，仲間が認知した人気が高い場合，関係性攻撃は将来の内在化問題を予測しないことが示されている（Rose & Swenson, 2009）。他にも，関係性攻撃の加害と被害に関する反芻傾向の高い場合に，関係性攻撃は抑うつと関連を示すが，反芻傾向が低い場合には，関係性攻撃と抑うつの間に関連がみられないことが報告されている（Mathieson, Klimes-Dougan, & Crick, 2014）。

以上の知見を考慮すると，外顕的攻撃と同様に，関係性攻撃は基本的には心理社会的不適応に関連することが明らかである。しかし，外顕的攻撃と異なり，関係性攻撃独自の適応問題との関連も示唆されている。そのため，攻撃行動を細分化して捉え，関係性攻撃に独特な心理社会的適応問題との関連を検討することは，関係性攻撃の予防，対応を考える上で非常に重要なことだと考えられるだろう。

第２節　従来の関係性攻撃研究における問題点

攻撃行動を細分化して捉えるという研究の文脈の中で，関係性攻撃を扱った研究は，他の攻撃行動にはみられない関係性攻撃に独特の関連要因を示すことに成功してきた。しかし，関係性攻撃について扱った先行研究には以下の 2 点の問題点が指摘できる。

第一に，本邦における関係性攻撃研究の蓄積が乏しいことが挙げられる。前述した研究の多くは，米国にて実施されたものであり，米国に比較すると日本の小学生を対象とした関係性攻撃の研究は圧倒的に少ないという現状である。さらに米国では，関係性攻撃と心理社会的適応の関連についての検討のほか, 関係性攻撃の生起メカニズムを検証するため,

子ども達の内的プロセスと関係性攻撃の関連を扱った研究が盛んに実施されている。しかし，本邦においては，小学生を対象にした研究は数えるほどしかない状態である。そのため，日本の小学生の心理社会的適応に関係性攻撃がもたらす影響は不明確なままである。欧米と異なり，相互協調性を重視する日本社会において，関係性攻撃への従事は子ども達の適応問題を考えるうえで，非常に重要であると考えられる。そのため，本邦における関係性攻撃の研究の蓄積が必要であると考えられる。

そして，第二の問題点として，関係性攻撃と適応の関連について不明瞭な点が多いことが指摘できる。結局，関係性攻撃に従事することは不適応になるのか，ならないのかという議論に関して，一貫した結果は得られていない。このような状況にあるのは，関係性攻撃と心理社会的不適応の関連について，様々な要因による調整効果の検討が進められているためだと考えられる。具体的には，前述したような性別や社会的地位といった要因による，関係性攻撃と心理社会的適応の関連の仕方の変化の検討が進んでいる（Crick, 1997; Rose & Swenson, 2009; 坂井・山崎，2003）。これら性別や仲間内地位が，関係性攻撃と適応問題の関連において調整効果を持つのは，関係性攻撃の独自の特性が関連しているためだと考えられる。つまり，関係性攻撃と心理社会的不適応の関連における調整効果を検討することで，心理社会的適応に対する関係性攻撃のユニークな関連を明らかになることが期待できる。そこで，性別や仲間内地位，あるいは関係性攻撃に関与している立場などの調整要因を含めたうえで，関係性攻撃と心理社会的適応の関連を議論する必要があると考えられる。

脚注

1) Coie ら(1982)は，各々の子どもが受けた肯定的指名数と否定的指名数を学級ごとに標準得点化し，固定的指名得点（L）と否定的指名得点（D）とした。さらに，それらを基に社会的選好得点（SP: social preference = L－D）と社会的影響力得点（SI: social impact = L+D）を算出した。そして，これら SP 得点，SI 得点，L 得点，D 得点によって，以下の 5 つの仲間内地位群を分類する方法を考案した。まず，人気児群に分類されるのは，SP>1，L > 0，D< 0 の得点を示した子どもである。次に，拒否児群には，SP<-1，L<0，D>0 の得点を示す子どもが分類される。また，無視児群には，SI<-1，L<0，D<0 の得点を示す子どもが分類される。そして，敵味方児群には，SI>1，L>0，D>0 の条件に該当する子どもが分類される。最後に平均児群は，－0.5<SP<0.5 の範囲内に得点が収

まった子どもが該当する。

第２章　社会的情報処理モデルに関する研究の動向

第１節　小学生の社会的情報処理モデルの先行研究

子どもの問題行動の理解を助けるアプローチのひとつに，子どもが他者との関係についてどのように考えているかという点や，その考え方の生じる内的プロセスを扱う社会的認知についての研究がある。子どもの適応に関連する対人相互作用場面における社会的認知には，手がかりの符号化や解釈，可能な反応の生成などの多様な側面が明らかにされている。その研究の文脈の中でも，攻撃行動の生起メカニズムに関して有力な知見を提供している社会的認知の包括的な理論が，社会的情報処理（social information processing; SIP）モデルであろう（Crick & Dodge, 1994; Dodge, Pettit, McClaskey, & Brown, 1986）。社会的情報処理モデルは，小学生の適応上重要な場面で即時的に作用し，社会的情報処理の様々な構成要素をまとめた包括的なモデルである。当初のモデルでは，過去の経験から得た社会的知識を参考に，社会的手がかりの符号化，表象化，反応検索，反応決定，実行の 5 つの情報処理のプロセスを想定していた（Dodge et al., 1986）。このモデルを Figure 2-1 に示す。このモデルにより，情報処理の過程は細分化され，どこの段階で不適切な情報処理が行われたのかを明確にすることができるようになった。さらに，その改訂モデルでは，情報処理のプロセスに目標の明確化が加えられ，さらに直線モデルから円環モデルへと改訂された（Crick & Doge, 1994）。そのモデルを Figure 2-2 に示す。このモデルによると，社会的行動の表出は，過去経験から獲得した各自の潜在的知識構造を利用しながら，手がかりの符号化と解釈，目標の明確化，反応の検索，反応決定，実行という 6 つのオンラインのステップでの情報処理を通して行われると想定している。そして，どこか 1 箇所以上のステップにおける情報処理に，エラーや歪みが発生することで，社会的に有能でない行動が引き起こされると考えられている。また，基本的には刺激は 6 つのステップに沿って系列的に処理されることが想定されているが，非直線形の循環的な構造となったことで，多様なフィードバックループを持ち，さらに実際の対人相互作用場面では複数のステップでの情報処理が同時に遂行されるという仮定を含んだモデルとなっている。このように，社会的情報処理モデルは，外的刺激（情報）を受け取り，それに対して何らかの行動がとられるまでのプロセスに，いくつかの段階を設けて，社会的に有能でない行動を取りやすい子どもの特徴を明らかにしている。そして，有能でない行動の代表として，攻撃行動が取り上げられている。そのため，社会的情報処理モデルの実証的研究は，主に攻撃的な児童・青年を対象として行われている。

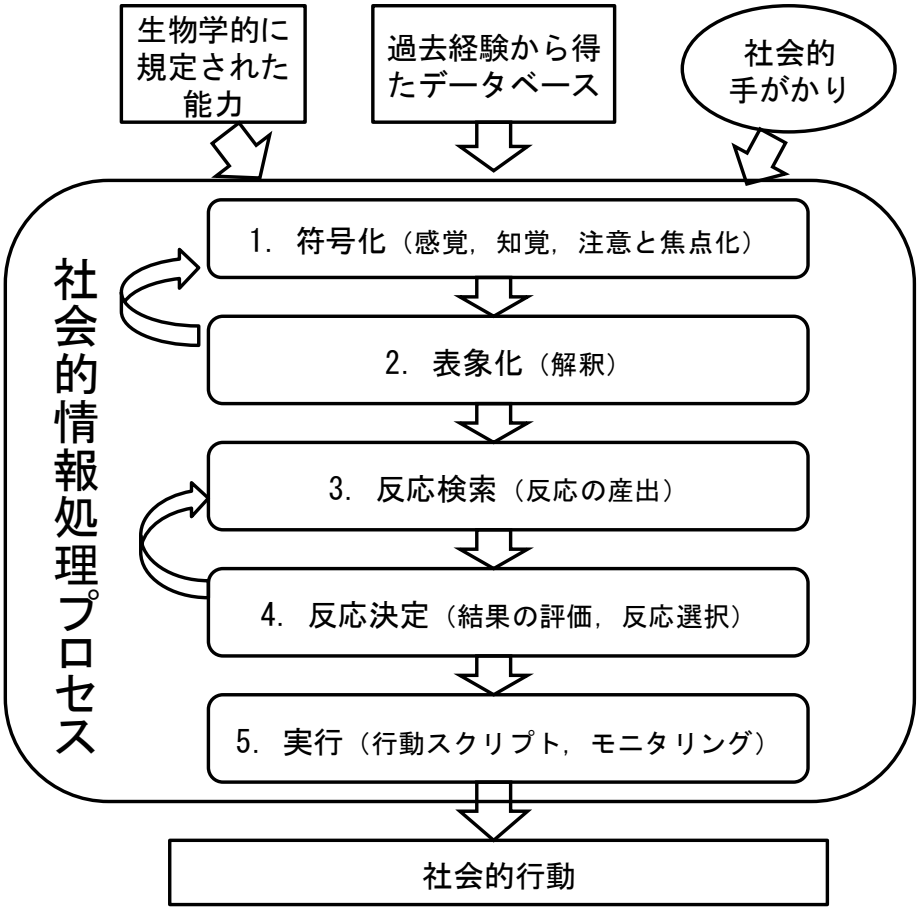


Figure 2-1 社会的情報処理モデル（Dodge et al., 1986）

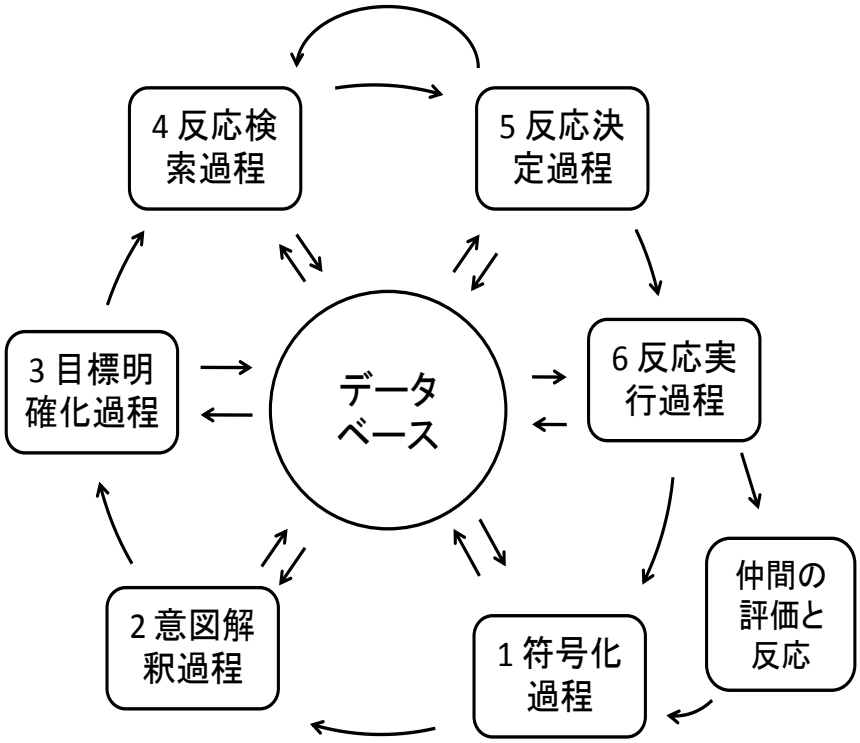


Figure 2-2 改訂版社会的情報処理モデル（Crick & Dodge, 1994）

なお，その後 SIP モデルは，感情や道徳性を統合した新たなモデルが提案されている（Lemerise & Arsenio, 2000; Arsenio & Lemerise, 2004）。それらの新しいモデルによる実証的研究は未だ研究数は乏しいが，少しずつ研究数の蓄積が始まっている。

第１項　オンライン情報処理過程と攻撃行動に関する実証的研究

本項では，SIP モデルのオンライン情報処理と攻撃行動の関連について言及している先行研究を概観する。まず，第 1 ステップ「手がかりの符号化」と第 2 ステップ「解釈」を取り上げる。第 1・第 2 ステップは，直面した社会的情報における手がかりに焦点を当てる符号化のプロセスと,その手がかりを解釈するに至るまでのプロセスである。その際に，過去の経験を通して得た関連する知識である潜在的知識構造を参照し，眼前に提示された状況を解釈し，理解する。以上が第 1，第 2 ステップの機能であり，自分が置かれている状況，特に仲間からの被害を受ける状況の解釈は，非常に重要である。この情報処理過程において，攻撃行動の生起に関連する情報処理の歪みは，敵意帰属バイアス（hostile attributional bias）に非常に多くの注目が集まっており，研究の蓄積も多い。敵意帰属バイアスとは，加害者の意図が曖昧な状況において，自分が何らかの被害を受けた場合，加害者の行動が故意に行われたなどと，より悪意のあったものとして解釈する傾向のことである。そして，敵意帰属バイアスが高い男子は，仲間から攻撃を受ける以上に攻撃行動を示すことが明らかにされている（Dodge & Frame, 1982）。他にも，物理的被害を受ける道具的挑発場面における敵意帰属バイアスの高さと，身体的攻撃の関連が男子において顕著であったことを示す報告がある（Crik, Grotpeter, & Bigbee, 2002）。さらに，関係性攻撃を多く行う子どもは，架空の関係性挑発の社会的文脈において，符号化と解釈のステップに相手の行動を敵意的に認知する歪みが見られることも示されている（Crick, 1995）。

次に，SIP モデルの第 3 ステップ「目標の明確化」の歪みに注目する。このステップは，状況の解釈を受けて，対人相互作用の中でどのような結果を求めるのかを決定する機能を持っている。小学生 3~6 年生を対象にした研究では，能動的攻撃を多く示す児童は，仲間関係を高めようとする目標を選択することが少ないことが示されている（Crick & Dodge, 1996）。また，別の研究でも，高い水準の攻撃行動を示す児童は，仲間との友好な関係を維持しようとする目標を選択することが少なく，自分の意見を主張しようとする目標を選択することがあると報告されている（濱口，2001）。以上のことから，攻撃行動に関連する目標の明確化の歪みは，対人葛藤場面において，仲間との関係を維持しようとするよりも，

自分の欲求を満たすような自己中心的な目標を持つ傾向だと考えられている。さらに最近では，情動反応を組み込んだ SIP モデルの検証において，児童の怒り気分が，目標明確化過程の歪みを促進させることも報告されている（Harper, Lemerise, & Caverly, 2010）。

続いて，SIP モデルの第 4 ステップ「反応検索」の歪みについて言及する。反応検索は，社会的情報の心的表象とその状況における目標を形成した後に，長期記憶に保存してある反応行動にアクセスするステップであると想定されている。先行研究では，反応行動として検索されるレパートリーの数の少なさと攻撃行動への従事の関連性が指摘されている（Pettit, Dodge, & Brown, 1988）。さらに攻撃行動を多く示す子どもの場合，最初に検索した行動が社会的に有能な行動であっても，2 番目以降に検索した行動が攻撃的であることが示されている（Richard & Dodge, 1982）。つまり，攻撃行動に関連する反応検索の歪みとは, 検索される反応行動の選択肢に攻撃行動が多く含まれていることだと考えられている。

最後に，SIP モデルの第 5 ステップ「反応決定」を取り上げる。反応決定は，特定の状況に対する反応行動のレパートリーにアクセスした後に生じるステップで，その際に生成した各行動を 3 つの観点から評価すると考えられている。その 3 つの観点とは，生成した反応行動が適切かどうかに注目する反応評価（response evaluation），行動の表出により起きうる結果に注目する結果予期（outcome expectance），各反応行動を自分が行うことができるかという自身の能力面への自信である自己効力感（self-efficacy）とされている。そして，攻撃行動の生起にかかわる反応評価の歪みとして，攻撃行動をより好ましく評価する傾向と，向社会的行動や主張的行動をより否定的に評価する傾向が報告されている（Crick & Ladd, 1990）。また，結果予期に関しては，攻撃行動によって物的報酬が得られると予期する傾向や自己満足が得られると予期する傾向，否定的な結果を回避することができると予期する傾向が，攻撃行動の高さと関連することが示されている（Perry, Perry, & Rasmussen, 1986）。最後に，自己効力感については，攻撃行動の得点の高い小学生ほど攻撃行動に対する自己効力感も高いことが示されている（Perry et al., 1986）。以上のことから，攻撃行動の生起に関わる反応決定における歪みとは，攻撃行動を適切なものと評価することや，肯定的な結果をもたらすと予期する傾向，攻撃行動を実行する自信が強いことであると考えられる。

第２項　潜在的知識構造[1)] と攻撃行動に関する実証的研究

前項で述べたように，SIP モデルは情報処理のプロセスを細分化することで，攻撃行動

の生起に関連する社会的認知の諸特徴の多くを明らかにしてきた。しかし，その研究の大半は，SIP モデルにおけるオンライン情報処理過程の各ステップにのみ注目したものであった。SIP モデルでは，各ステップにおける情報処理は，潜在的知識構造（latent mental structure）との相互作用の結果もたらされると想定されている。そこで，攻撃行動の生起メカニズムにおける潜在的知識構造の役割についても検討する必要があると考えられる。

SIP モデルにおける潜在的知識構造とは，通称データベースとも呼ばれる。それは過去の経験に基づいて形成される記憶の貯蔵で，獲得されたルールや社会的知識から構成されるといわれている（Crick & Dodge, 1994）。そして，潜在的知識構造は，個々の出来事に関する記憶から成り立つというよりも，それらの記憶がまとめられ，そこから抽出された一般的な心的表象と考えられている （Dodge, 1993; Huesmann, 1988）。この潜在的知識構造の具体例としては, 世界に対する敵意的なスキーマや攻撃的な反応行動のレパートリー, 否定的なセルフスキーマが該当すると考えられている（Dodge, 1993）。また，社会心理学分野ではスクリプトやスキーマ，臨床心理学分野では内的ワーキングモデルなども潜在的知識構造と似た概念とされている（Crick & Dodge, 1994）。そして, その潜在的知識構造は, 社会的手がかり刺激を処理する 6 つのステップに作用して，情報処理の負担を軽減し，結果的に表出される行動を統制するように機能すると想定されている（Crick & Dodge, 1994）。つまり，潜在的知識構造の機能は，情報処理作業の効率化だと言える。しかし，この機能は作業を効率よく行うことが目的であるため，常に正しい情報処理が行われるわけではない。つまり，潜在的知識構造に依拠することが，問題行動の生起に関連することが考えられるのである。例えば，潜在的知識構造に偏りがある場合，提示されている社会的手がかり刺激を無視したり，歪んで捉えたりして，結果的に逸脱した行動が生じる可能性が考えられるだろう。さらに Dodge（1993）は，潜在的知識構造の内容に踏み込んで，世界に対する敵意的なスキーマや攻撃的な反応行動のレパートリーといったデータベースは，行為障害の形成の重要な要因であると論じている（Dodge, 1993）。このように，潜在的知識構造が攻撃行動の生起に関連する可能性があるならば，その機能や構造について更に検討する必要性があると考えられる。しかし，前述したように，SIP モデルと攻撃行動の関連を検討した多くの研究は，オンラインの情報処理過程に注目しているものが多く，潜在的知識構造について検討したものは少なかった。そのため，潜在的知識構造の機能についての注目は近年ますます高まっている（Werner & Hill, 2010）。以下では，潜在的知識構造と攻撃行動の関連について検討した数少ない研究について概観する。

攻撃行動との関連を検討する際に，潜在的知識構造は攻撃行動をどの様に捉えるかという個人の態度や信念を測定することで検討されてきた。その代表的なものが規範的信念（normative beliefs）である。規範的信念は命令的規範（injunctive norm）と記述的規範（descriptive norm）の 2 つの側面があるとされている（Cialdini, Kallgren, & Reno, 1990）。命令的規範は，大半の人々が容認あるいは否認する社会的な望ましさの基準を指し，攻撃行動を容認するかどうか，あるいは報復的な攻撃行動の場合なら容認するかどうかという観点で検討されてきた（Huesmann & Guerra, 1997）。一方，記述的規範は，大半の人々がとる行動の標準を意味し，攻撃行動の生起頻度に関する知識構造として扱われてきた（Henry, Guerra, Huesmann, Tolan, VanAcker, & Eron, 2000）。

規範的信念についての研究では，命令的規範に類する研究が中心に行われている。Huesmann & Guerra（1997）では，小学 1~5 年生を対象に，1 年間の間隔を空けて 2 回の調査が実施されている。その結果，外顕的攻撃を容認する傾向は，学年が上がるほど強まること，小学生の外顕的攻撃を容認する傾向と実際の外顕的攻撃行動の遂行に関連があること，その関連が学年を上がるにつれて強まることが示された。また，この研究では，小学校低学年児童の攻撃行動傾向が，1 年後の規範的信念を予測する一方で，4 年生では，逆に規範的信念が 1 年後の攻撃行動を予測する結果が示された。Huesmann & Guerra（1997）は，この結果から，小学校低学年児童の攻撃行動についての規範的信念は，まだ不安定な状態で，攻撃行動を規定する機能を持たないが，仲間との相互作用や，教員・両親からの指導といった社会化を通して次第に安定し，高学年にさしかかった頃には，行動を規定するようになると論じている。したがって，攻撃行動についての規範的信念の発達には児童期の早期が非常に重要であることが述べられている。さらに，一度，規範的信念が攻撃行動を規定するようになると，行動を変えるためには信念を変容させる必要があることも論じられている。

また，規範的信念は，社会的情報処理の細分化したステップを介して攻撃行動に関連するかどうかという，SIP モデルの検証も実施されている（Zelli, Dodge, Lochman, Laird, & Conduct Problems Prevention Research Group, 1999）。Zelli らは，小学 3，4，5 年生を対象に，2 年間にわたり攻撃行動についての規範的信念，社会的情報処理変数としての敵意的帰属バイアス，攻撃的反応へのアクセス，攻撃的結果の肯定的評価の 3 つの変数，そして攻撃行動を測定した。その結果，報復的行動への容認が，1 年後の逸脱した社会的情報処理変数を予測し，さらにその中でも反応検索ステップの情報処理の歪みが，2 年後の攻撃行動

を予測することが示された。つまり，報復的行動を許容する信念は，対人相互作用場面における反応行動のレパートリーの質が攻撃的なものに偏ることを予測し，結果的に攻撃行動を導くということが示されたのである（Zelli et al., 1999）。この研究の結果から，潜在的知識構造とオンラインの情報処理の 2 つの側面が，それぞれ攻撃行動を予測するのに妥当な概念であることが示唆され，さらに SIP モデルの理論通りに，潜在的知識構造がオンラインの情報処理を介して行動に影響することが示された。以上の様に，研究数は少ないものの，潜在的知識構造の機能と，それが理論通りに作用することが明らかになっていると思われる。

第３項　潜在的知識構造と関係性攻撃に関する実証的研究

SIP モデルにおける潜在的知識構造が，攻撃行動に果たす役割についての検討は 90 年代後半から行われるようになった。しかし，先に挙げた研究で対象となっていた攻撃行動は，全て身体的攻撃や言語的攻撃などの外顕的攻撃であった。つまり，関係性攻撃と潜在的知識構造の関連は検討されてこなかった。その中，Werner & Nixon (2005)は，関係性攻撃に対して潜在的知識構造が果たす機能について，子ども達が関係性攻撃をどの様に捉えているかという観点から検討した。具体的には，関係性攻撃と外顕的攻撃それぞれの具体的な行動に対して，容認する傾向である規範的信念の測定を行った。その結果，7，8 年生の女子を対象にした研究 1 では，仮説通りに外顕的攻撃と関係性攻撃それぞれに対する規範的信念が分類されるという結果が示された。また，それぞれの攻撃形態に対する規範的信念は，偏相関分析を実施することで，該当する攻撃形態のみと関連を示すことも明らかになった。つまり，外顕的攻撃に対する規範的信念は外顕的攻撃のみに，関係性攻撃に対する規範的信念は関係性攻撃にのみ関連したのである。ただし，関係性攻撃の具体的な行動のひとつである「他者の悪い噂を流す」ことに対する規範的信念のみ，別の因子構造を構成するという結果になった。以上の研究を踏まえて，Werner & Nixon（2005）は 5，6 年生の小学生を対象に研究 2 を行っている。そこでは，先の研究と同様に，関係性攻撃についての規範的信念は，「他者の悪い噂を流す」行動のみ別の因子を構成したが，基本的に攻撃形態別に分類されるという結果になった。また，攻撃形態別の規範的信念が該当する攻撃行動のみと関連することを再現し，関係性攻撃に許容的であるほど関係性攻撃を遂行するということも明らかにした。この研究の結果，小学生においても，攻撃形態のそれぞれに対する特定の規範的信念が存在する可能性が示唆され，攻撃行動への介入には，その攻撃行

動に特有の信念に注目する必要性があることが指摘された。しかし，この研究では，因子分析の際に，「噂を流す」行動のみ独立した因子を構成するなど，従来の関係性攻撃を構成する行動と一致しない結果がみられたという問題も提示された。さらには，その因子構造のモデルは，適合度が GFI=0.81，CFI=0.76，RMSEA=0.12 など必ずしも十分とは言えない値であるという問題点も含まれていた。

また，関係性攻撃の規範的信念について，学級と個人のマルチレベルによる効果が検討された研究もある。その研究では，小学生の規範的信念と学級の規範的信念という階層データを測定し，小学生個人だけでなく，学級の規範的信念が 1 年後の関係性攻撃と有意に関連することを示した（Werner & Hill, 2010）。つまり，関係性攻撃に対して許容的なクラスほど，1 年後に関係性攻撃が増加したという結果が示されている。その他に，対象が子どものみならず，その親の関係性攻撃に対する規範的信念を扱った研究もある。例えば，関係性攻撃は規範に反すると強く報告した母親を持つ幼児のみ，教師評定の関係性攻撃が低いという結果を示した研究がある（Werner, Senich, & Przepyszny, 2006）。さらに，母親の関係性攻撃に関する規範的信念が，女児の関係性攻撃についての規範的信念を介して，女児の仲間からの受容に関連することが示された。つまり，母親の関係性攻撃を容認する傾向が高いと，女児が関係性攻撃を容認する傾向も高まり，結果，その女児が仲間から受容されなくなるがことが示された（Werner & Grant, 2009）。加えて，記述的規範に関して，母親は関係性攻撃のことを，身体的攻撃よりも多く起きていて，かつ肯定的なものと捉えていた（Werner & Grant, 2009）。一般に，頻繁に目にする行動は，その問題性や深刻さが低くみられがちになることが指摘されている（Bauman & Del Rio, 2006）。そのため，身体的攻撃よりも関係性攻撃が子ども達の中で標準的にみられる行動と捉えられ，結果，身体的攻撃よりも関係性攻撃に肯定的な評価を与えている可能性が示唆されている。そして，最後に，関係性攻撃についての規範的信念と，敵意帰属バイアスの関連の検討を試みた研究がある。つまり，潜在的知識構造とオンラインの情報処理の両者が関係性攻撃の生起に関わるかどうかという SIP モデルの検証についての研究である。しかし結果は，敵意帰属バイアスの尺度の信頼性の問題により，実際の関連は検討されておらず，追試が待たれている状態である（Linder, Werner, & Lyle, 2010）。

そして，規範的信念以外にも関係性攻撃をどのように捉えるか，という観点から検討した研究がある。例えば，攻撃行動の有害性について検討した研究がある。それらの報告によると，子ども達は基本的に関係性攻撃を有害であり，敵意的なものであり，精神的苦痛

をもたらすものとみなしているが，特にその傾向は男子よりも女子に高いことが示されている(Crick et al., 2002; Marry-Close, Crick, & Galotti, 2006)。また，同じ研究から，小学生は有害とみなすほど攻撃行動に従事する可能性が示唆されている。それは，子ども達が攻撃行動を有害であると, その効果を理解しているが故に, ある目的を達成しようとする時に，有効な方略として攻撃行動を採用する傾向があると考えられるためである。この点について，子ども達が，特に関係性攻撃を有効な問題解決の方法と捉える傾向に注目する必要性を議論している研究もある。関係性攻撃と子ども達の社会的地位の関連を検討した研究では，魅力的で知名度が高く，集団内での影響力が強い人気児と関係性攻撃の関連が指摘されている（Cillessen & Mayeux, 2007）。つまり，人気児は，仲間内での影響力を強めることや自らの高地位を維持するといった社会的な利益を得るために，関係性攻撃に従事している可能性があることが示唆されているのである（Cillessen & Mayeux, 2004）。最後に，上記の関係性攻撃の有害性や有効性といった捉え方に加えて，関係性攻撃の不可視性について言及している研究が挙げられる (Bauman & Del Rio, 2006)。関係性攻撃的な行為は，親しい仲間集団内で生じることや，一人の子どもが時間の経過に伴い加害者や被害者，傍観者など多様な役割で関与することが知られている（Craig et al., 2000）。さらに，関係性攻撃の被害の痕跡は，身体的攻撃に比して，目立ちにくいという特徴も挙げられる。これらの知見から, 子ども達が関係性攻撃を秘匿可能性の高いものと捉える可能性が指摘できるだろう。

第２節　従来の社会的情報処理モデル研究における問題点

以上のように，関係性攻撃の生起における，潜在的知識構造の機能については，いくつかの研究が散見されるのみで，その蓄積が十分ではない。関係性攻撃の生起に関わる潜在的知識構造は，小学生や母親が関係性攻撃をどの様に捉えているかという観点から検討されてきた。特に先行研究で中心的に扱われてきたのは，関係性攻撃は容認できるかどうかという捉え方である規範的信念であった。しかし，規範的信念の測定尺度は，関係性攻撃がさらに細分化された因子構造になったり, 適合度が十分でないという問題を抱えていた。また，関係性攻撃についての記述的規範や，有害性，有効性，秘匿可能性といった観点から検討した先行研究も存在しているが，それらは個別になされた議論であり，関係性攻撃についての潜在的知識構造の内容がまだ網羅的・包括的に取り扱われていないのである。そのために，以下の 3 点の議論がなされていない状態である。第一に，関係性攻撃についての潜在的知識構造が，実際の関係性攻撃の遂行に関連を示すかどうかが明らかになって

いない。規範的信念の中でも，関係性攻撃を容認する傾向を示す命令的規範と実際の関係性攻撃の関連は示されているが（Werner & Hill, 2010; Werner & Nixon, 2005），その他の捉え方，例えば関係性攻撃の有効性や秘匿可能性と攻撃行動の関連など，直接検討されていないものがある。よって，関係性攻撃の捉え方を包括的に捉える質問紙尺度を作成し，実際の関係性攻撃との関連を検討する必要がある。第二に，関係性攻撃についての潜在的知識構造がオンライン情報処理過程を介し，実際の行動の表出に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証が必要である。外顕的攻撃についての規範的信念が，反応検索を介して，攻撃行動の表出に関連をすることは示されているが（Zelli et al., 1999），関係性攻撃の場合にも同様に SIP モデルに適合するのかどうかは未だ明確にされていない（Linder et al., 2010）。そこで，関係性攻撃の生起について，潜在的知識構造とオンライン情報処理を含めた SIP モデルの全体的な検証の必要があるだろう。そして第三に，関係性攻撃についての潜在的知識構造が実際の攻撃行動に関連を示した場合，子ども達の心理社会的適応とどのような関連が示されるのかが明らかになっていない。そのため，関係性攻撃についての潜在的知識構造が関係性攻撃の遂行と関連し，そして攻撃行動が心理社会的不適応と関連するかどうか検討する必要がある。

なお，先行研究では関係性攻撃の規範的信念について，母親を対象とした研究もなされているが，本論文では小学生を対象に研究を実施する。それは第一に，小学生の身近に関係性攻撃が蔓延しており，関係性攻撃が小学生の心理社会的不適応と密接に関連するためである（国立教育政策研究所, 2013）。そして，第二に，小学生の潜在的知識構造と攻撃行動の関連を検証することは，関係性攻撃への介入において重要な示唆を得ることにつながるためである。Huesmann & Guerra（1997）によれば，規範的信念が攻撃行動を規定するには，仲間との相互作用や，教員・両親からの指導といった社会化の過程を経る必要があるとされている。そして，小学校高学年の年齢段階にならないと，規範的信念が攻撃行動を規定する機能を持たないことが示されている。そして，規範的信念が攻撃行動を規定するようになってから介入するには，行動を規定する規範的信念にも働きかける必要があることが示唆されている。よって，本論文で，小学生高学年を対象にして，潜在的知識構造が実際に行動と関連するかどうか検証することで，小学生の関係性攻撃に介入する際には，認知面への介入も必要であるといった示唆を得られる可能性が期待できる。

脚注

1） Dodge（1993）や Crick & Dodge（1994）によると，潜在的知識構造は，無意識下において，自動的に情報処理過程に作用することが想定されている。しかし，潜在的という表現は，どちらかというと状況依存的なオンライン情報処理過程と対立させ，データベースはあくまで状況に依らない一般的な概念であることを強調するために必要な表現であったとも考えられている（吉澤，2005）。規範的信念も，質問紙で測定されているため，実際は意識上の概念を測定していることになるが，状況に依存しないという意味で潜在的知識構造と捉えられている。状況に依存しないという観点から，潜在的知識構造は特定の刺激に対して活性化するものではなく，多様な社会的状況と相互作用しながら，動的に構成されている情報処理の基盤と捉えられている。こうした捉え方のため，潜在的知識構造は内的ワーキングモデルやスキーマに類似した概念と想定されていると考えられる。

第３章　本論文の目的

第１節　本論文における目的

以上の議論から，小学生の関係性攻撃への従事は，子ども達の心理社会的不適応と密接に関わる重要な問題であることが明らかである。しかし，先行研究では，以下の 3 点の議論が解決されていない状態である。第一の問題は，関係性攻撃についての潜在的知識構造を包括的に捉える尺度が不在であり，それが実際の関係性攻撃の遂行に関連を示すのかどうかが明らかになっていないことである。第二の問題は，関係性攻撃についての潜在的知識構造がオンライン情報処理過程を介し，実際の行動の表出に関連を示すかどうかという SIP　モデルの検証がなされていないことである。そして第三の問題は，関係性攻撃についての潜在的知識構造が実際の攻撃行動に関連を示した場合，子ども達の心理社会的適応とどのような関連が示されるのかが明らかになっていないことである。

そこで，本研究では，上記の 3 つの問題を検討することを目的とする。まず，小学生の関係性攻撃についての潜在的知識構造を網羅的に捉えることができる質問紙尺度を作成し，関係性攻撃との関連を検討することを第一の目的とする。次に，関係性攻撃についての潜在的知識構造がオンライン情報処理過程を介し，実際の行動の表出に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証を行うことを第二の目的とする。最後に，関係性攻撃についての潜在的知識構造と関係性攻撃の遂行，心理社会的不適応との関連を検討することを第三の目的とする。なお，その際には，性別などの調整変数の関連を考慮し，より詳細な検討を行う必要があると考えられる。そして，以上の目的を達成するために，本研究では，小学生高学年（4，5，6 年生）を対象にした質問紙調査を実施する。

第２節　本論文で扱う概念の説明

本研究では，関係性攻撃とそれに関する潜在的知識構造を中心に検討する。そこで，まずは関係性攻撃の定義を改めて確認する。その上で，関係性攻撃についての潜在的知識構造について検討した先行研究を参考に，その内容について整理，分類を行うことで，包括的な概念化を行う。

まず，関係性攻撃は，「ターゲットの友人関係や，仲間集団の中に含まれているという気持ちに，重大なダメージを与えることを意図した行動」と定義された攻撃行動である（Crick & Grotpeter, 1995）。そして，関係性攻撃を構成する具体的な行動は，無視や陰口・噂を流すこと，友情の撤回の脅しや人間関係を操作することで，仲間外れにしたり，言う事を聞かせようとすることが含まれる。なお，これらの行動は，全て加害者側が一人でも

集団でも遂行可能な行動であるが，先行研究における関係性攻撃が個人差を反映した質問紙尺度で測定されていることを踏まえ，基本的には個人による行動であると捉える。

続いて，関係性攻撃の潜在的知識構造について包括的に概念化を試みる。先行研究で検討されてきた内容は，以下の 3 つに大別可能だと考えられる（Table3-1）。第一に，関係性攻撃の良し悪しや，多寡の基準に関する内容であり，それらは“規範”と分類できると考えられる。規範に関する内容は，先行研究において命令的規範，記述的規範といった観点から検討されてきたものに一致すると考えられる。第二に，関係性攻撃の有効性に関連する内容は，“効果”という分類にまとめることが可能だと考えられる。関係性攻撃の有害性や関係性攻撃を問題解決の有効な手段とみなす傾向などが該当すると考えられる。そして，第三に，関係性攻撃の不可視性に関する内容を，“秘匿可能性”と分類する。これら三種類の内容は，いずれも関係性攻撃について過去の経験から形成された捉え方であり，SIP モデルにおける潜在的知識構造に該当すると考えられる。Dodge(1993)の発達精神病理学モデルによると，事象に関する表象は行為障害の発生に関与すると想定されている。つまり，関係性攻撃に関する，規範，効果，秘匿可能性といった潜在的知識構造の構成要素は，小学生の関係性攻撃の生起に関与することが考えられる。事実，先行研究による個別の検討では，関係性攻撃についての規範的信念が，実際の関係性攻撃と関連することが示されており，関係性攻撃の有効性への期待と攻撃行動の関連も示唆されている（Cillessen & Mayeux, 2004; Marry-Close et al., 2006; Werner & Hill, 2010; Werner & Nixon, 2005）。さらに，関係性攻撃の不可視性は教師など周囲の人物が被害の程度を軽く見積り，事態への不介入を導く可能性が指摘されている（Bauman & Del rio, 2006）。そのため，関係性攻撃が秘匿可能性の高いものだと捉えた場合も攻撃行動が促進されることが想定できる。そこで，本研究では，小学生の関係性攻撃の捉え方，つまり関係性攻撃についての潜在的知識構造を“関係性攻撃観(perception of relational aggression)”と呼ぶこととする。そして，関係性攻撃観の定義を，“過去の経験から形成された関係性攻撃に対する個人の構造化された知識”とし，本研究ではその内容を，関係性攻撃についての規範や効果，秘匿可能性と想定する。

第３節　本論文の構成

前述した本研究の 3 つの目的を踏まえ，本論文の構成を Figure 3-1 に示した。第 I 部は理論的検討として，関係性攻撃および社会的情報処理モデルの先行研究を列挙し（第 1 章・第 2 章），本研究の目的と本研究で扱う関係性攻撃の概念の整理，ならびに本研究の構成を

Table 3-1 関係性攻撃観の定義と想定される構成要素の分類

関係性攻撃観の定義		過去の経験から形成された関係性攻撃に対する個人の構造化された知識	
想定される構成要素		言及された先行研究	項目例
規範	命令的規範	Huesmann & Guerra (1997) Werner & Nixon (2005) Werner & Hill (2010)	・関係性攻撃をすることはOKである。 ・報復の場合は，関係性攻撃をすることはOKである。
	記述的規範	Werner & Grant (2009)	・関係性攻撃は頻繁にあることである。
効果	有効性	Cillessen & Mayeux (2004)	・関係性攻撃は相手を思い通りにできる。
	有害性	Marry-Close et al (2006)	・関係性攻撃は有害なものである。
秘匿可能性	不可視性	Bauman & Del Rio (2006)	・関係性攻撃は気づかれにくいものである。

【第Ⅰ部】　理論的検討

はじめに　―小学生の攻撃行動と社会的状況―
第１章　小学生の関係性攻撃に関する研究の動向
　第１節　小学生の関係性攻撃の先行研究
　第２節　従来の関係性攻撃研究における問題点
第２章　社会的情報処理モデルに関する研究の動向
　第１節　小学生の社会的情報処理モデルの先行研究
　第２節　従来の社会的情報処理モデル研究における問題点
第３章　本論文の目的
　第１節　本論文における目的
　第２節　本論文で扱う概念の説明
　第３節　本論文の構成

【第Ⅱ部】　実証的検討

第４章　小学生の関係性攻撃の認識と攻撃行動に関する検討
　第１節　小学生用関係性攻撃観尺度の項目収集　【研究 1-1】項目収集
　第２節　小学生用関係性攻撃観尺度の作成と信頼性の検討　【研究 1-2】原版の作成
　第３節　小学生の関係性攻撃観尺度改訂版の作成と信頼性・妥当性の検討　【研究 2】改訂版の作成
第５章　小学生の関係性攻撃生起の内的プロセスに関する検討
　第１節　小学生の関係性攻撃の認識と解釈ステップの検討
　【研究 3】敵意帰属バイアスの関連
　第２節　小学生の関係性攻撃の認識と目標明確化ステップの検討
　【研究 4】主張目標・関係維持目標の関連
　第３節　小学生の関係性攻撃の認識と反応検索ステップの検討
　【研究 5】反応行動レパートリー数の検討
　第４節　小学生の関係性攻撃の認識と反応決定ステップの検討
　【研究 6】攻撃肯定評価，結果効力感，自己効力感の検討
第６章　小学生の関係性攻撃の認識と心理社会的適応の関連
　第１節　小学生の関係性攻撃の認識と学校生活満足度の検討　【研究 7】承認，被侵害の関連
　第２節　小学生の関係性攻撃の認識と内在化問題の検討　【研究 8】抑うつ，不安の関連

【第Ⅲ部】　総合的考察

第７章　本研究のまとめと意義
　第１節　本研究のまとめ
　第２節　本研究の学問的意義
　第３節　本研究の社会的・臨床的貢献
　第４節　本研究の限界と今後の展望

Figure 3-1 本論文の構成

示す（第 3 章）。

そして，第Ⅱ部以降は実証的検討を行うが，本論文の目的に合わせて 3 つの章から構成する。まず，小学生の関係性攻撃観を測定する質問紙尺度を開発し，その信頼性と妥当性を検討する（第 4 章）。次に，関係性攻撃観をデータベースに位置付け，SIP モデルの検証を行う（第 5 章）。SIP モデルのオンライン情報処理の各ステップとの関連を検討するため，4 つの研究によって第 5 章は構成される。そして，関係性攻撃観と攻撃行動，さらに心理社会的適応の関連について検討する（第 6 章）。小学生の社会的適応と心理的適応との関連を検討するため，第 6 章は 2 つの研究から構成される。

最後に，第Ⅲ部では，本研究全体の総合的な考察と本研究の結果から導き出された学問的・臨床的意義，および研究の限界について議論する。

第Ⅱ部

実　証　的　検　討

第 4 章

小学生の関係性攻撃の認識と攻撃行動に関する検討
（研究 1・研究 2）

第 4 章のはじめに

本章では，小学生の関係性攻撃観の測定を可能とする質問紙尺度の作成を目的に実施された 2 つの研究について報告する。本章の構成は，まず，第 1 節で関係性攻撃観の内容を明らかにするために実施された予備調査について報告する（研究 1 - 1)。その予備調査の結果に基づき，関係性攻撃観尺度の原版の作成を試みた調査について第 2 節で報告する（研究 1-2)。最後に，研究 1-2 で作成された関係性攻撃観尺度の改良を行い，信頼性と妥当性を検討することを目的に行われた調査を第 3 節で報告する（研究 2)。

第 1 節　小学生用関係性攻撃観尺度の項目収集（研究 1-1）

第 1 項　目的

本研究では，関係性攻撃観を「過去の経験から形成された関係性攻撃に対する個人の構造化された知識」と定義した。具体的には，関係性攻撃観の構成内容として,「規範」,「効果」,「秘匿可能性」を想定した。本研究の目的は，先行研究から得られた上記の関係性攻撃観の内容が，実際の小学生の持つ関係性攻撃に関する知識に合致するのかを検討し，その過程を通して小学生の関係性攻撃観の内容を網羅的に把握することにある。調査の方法は質問紙調査であった。

第 2 項　方法

1.　対象者

千葉県の小学 5，6 年生 208 名（5 年生男子 53 名，5 年生女子 52 名，6 年生男子 52 名，6 年生女子 49 名，6 年生性別不明 2 名）であった。そのうち全く回答していない 1 名を除いた 207 名を分析の対象者とした。

2.　調査時期

調査時期は 2010 年 7 月から 2010 年 9 月であった。

3.　手続き

事前に小学校に電話で協力を依頼し，同意を得られた小学校に対し，研究の目的や調査内容や調査方法を示した文書を郵送した。それらの文書をもとに，

調査の実施について教員内で検討してもらった後，学校長，教頭，担任教師の最終的な同意を得た。

同意が得られた小学校に，人数分の質問紙を個別に封筒に入れた状態でクラスごとに袋に分けたものを持参した。調査の実施方法は，クラス担任の教員ないし，調査担当となった教員による各クラスでの一斉配布という形をとった。質問紙へ記入し，小学生本人が質問紙を封筒に封入した後にクラス担任の教員ないし，調査担当となった教員が回収を行った。また学校の代表者から同意書に署名と押印をしてもらった。配布から回収までの期間は 3 週間程度であった。回収率は 98.11％であった。

回答は全て無記名で行われた。倫理的配慮として，調査への協力は自由であり，協力しなかった場合にも不利益は一切生じないこと，また調査の結果は小学校へ必ずフィードバックすることを質問紙及び依頼文に明記した。また，調査対象者が小学生であるということも考慮し，質問紙はテストではなく，学校の成績に一切関係しないなどの質問紙に記載してある注意事項を，調査実施直前に教員に述べてもらった。なお，回答を拒否した者を対象に，友人関係についての読み物教材を準備していたが，調査に同意をした学校側から，教材の配布を拒否されたため，実際の配布には至らなかった。また，教員との相談の結果，読み物以外の教材の配布も行わなかった。

4. 質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 1 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。また，本調査が筑波大学大学院の人間総合科学研究科研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②小学生の性別と学年

回答にあたる小学生の基本的な情報として，性別と学年について記入を求め

た。

③関係性攻撃経験

関係性攻撃の接触経験について回答を求めた。関係性攻撃の説明は，その代表的な 3 つの攻撃形態である無視，仲間外れ，悪い噂話を流すという行為を提示した上で，それらの行動をまとめた表現として「意地悪な行為」と教示した。そして，その「意地悪な行為」の経験（加害・被害・目撃など第三者的な立場）の有無について尋ねた。

④文章完成法による関係性攻撃観についての項目収集

実際に小学生が抱いている関係性攻撃観の項目を集めるために，文章完成法による質問項目を設けた。関係性攻撃についての説明は，先述の関係性攻撃経験での同様の説明を付記し，「意地悪な行為」という表現で行った。そして，「あなたは，これらの意地悪な行為についてどの様なイメージを持っていますか」という教示のもと，回答欄の文頭にある「無視は」，「仲間外れは」，「悪い噂を流すのは」という 3 種類の記述（Ex.「無視は_____ 」）に文章を続けるように回答を求めた。

第 3 項　結果

1.　KJ 法による記述の分類

小学 5，6 年生 207 名の回答から，954 件の記述が得られた。そのうち関係性攻撃について，加害や被害，目撃など何らかの立場での経験があると回答した 177 名の記述 800 件を，第一の分類対象とした。そして，未経験群 30 名の記述 154 件については，経験群の後に分類を行った。

得られた記述に対して，KJ 法を援用して心理学を専攻する大学院生 4 名が分類した結果，13 種類の小カテゴリが得られた（Table 4-1）。その中の 11 種類の小カテゴリは事前に仮定した関係性攻撃観の構成内容である規範，効果，秘匿可能性に含まれる内容であると考えられた。そこで，それら想定していた関係性攻撃観の構成内容に含まれる小カテゴリを包含する上位の分類として，「A.命令的規範」，「B.記述的規範」，「C. 効果」，「D. 秘匿可能性」の 4 つの大

Table 4-1　小学生の関係性攻撃の認識についての自由記述分類結果

カテゴリ		経験群		未経験群		記述例
		度数	%	度数	%	
A 命令的規範						
A1	否定的認識	203	25.38%	32	20.78%	無視はよくないと思う
A2	正当化	58	7.25%	11	7.14%	どうでもいいとされている人だったら，仲間外れもしかたないと思う
A3	肯定的認識	15	1.88%	3	1.95%	悪い噂話を流すことは，おもしろいと思う
B 記述的規範						
B1	頻度	73	9.13%	4	2.60%	仲間外れはふつうのことだと思う
B2	普及	8	1.00%	3	1.95%	悪い噂話を流すことは，誰だって悪ふざけで1回はしていると思う
B3	集団	12	1.50%	0	0.00%	仲間外れはグループですることだと思う
C 効果						
C1	有害性	309	38.63%	68	44.16%	無視は相手をきずつけると思う
C2	肯定的効果	39	4.88%	20	12.99%	悪い噂話を流すことは，相手をすごくこらしめることができると思う
C3	事態悪化	15	1.88%	1	0.65%	悪い噂話はどんどん広がっていってしまうと思う
C4	否定的効果	46	5.75%	6	3.90%	自分もいい気分にならないと思う
D 秘匿可能性						
D1	秘匿可能性	6	0.75%	4	2.60%	無視しても，バレにくいと思う
E その他						
E1	対処	3	0.38%	0	0.00%	仲間外れされたら，誰かに相談した方がいい
E2	分類不能	13	1.63%	2	1.30%	噂を流すのは，いい噂なら別にいいと思う
	合計	800	100%	154	100%	

カテゴリを設定した。なお,「命令的規範」は関係性攻撃の良し悪しに関する捉え方であり,「記述的規範」は関係性攻撃の多寡に関する捉え方,「効果」は関係性攻撃がターゲットや自己に影響を与えるものとする捉え方,「秘匿可能性」は関係性攻撃を不可視のものとする捉え方を意味する。さらに事前に想定していなかった 2 種類の小カテゴリが「E. その他」に含まれる結果になった。4 名の分類の一致率は 94%で，分類が一致しなかった記述に関しては，全員が合意に至るまで協議を行った。以下に決定された分類名について述べる。

まず,「無視はひどい」「仲間外れは悪いこと」などの記述は小カテゴリ「否定的認識」と命名された。「A1. 否定的認識」の度数の経験群の割合は 25.38%であり, 未経験群における割合は 20.78%であった。次に,「悪い噂を流すのは，相手が嫌いな人なら仕方がない」「どうでもいいとされている人だったら，仲間外れもしかたないと思う」などの記述は，小カテゴリ「A2. 正当化」と命名された。経験群における度数の割合は 7.25%で，未経験群では 7.14%であった。そして,「無視は楽しい」,「悪い噂を流すのは面白い」などの記述は小カテゴリ「A3. 肯定的認識」と命名，分類された。経験群の度数の割合は 1.88%で，未経験群では 1.95%あった。以上の 3 つの小カテゴリは，全て関係性攻撃の良し悪しに関する評価の記述であると考えられた。そのため事前に想定した大カテゴリ「A. 命令的規範」にこれらのカテゴリが含まれると考えられた。

また,「無視はよくあることだと思う」や「悪い噂話を流すのは，よく見る」などの記述は小カテゴリ「B1. 頻度」と命名，分類された。経験群の度数の割合は 9.13%であり, 未経験群では 2.60%であった。続いて,「無視は大人もする」や「悪い噂話を流すのは誰だってやった事がある」といった記述は，小カテゴリ「B2. 普及」と命名された。経験群において得られた記述全体に対する度数の割合は，1.00%であり，未経験群においては 1.95%であった。そして,「仲間外れは集団でする」などの記述は，小カテゴリ「B3. 集団」と命名，分類された。経験群の度数の割合は 1.50%で，未経験群では 0%であった。以上の 3 つの小カテゴリは，関係性攻撃の行動の基準に関する評価の記述であると考えられた。そのため事前に想定した大カテゴリ「B. 記述的規範」にこれらの小カテゴリが含まれると考えられた。

続いて,「無視は相手を傷つけると思う」や「仲間外れは，された人が学校に

来たくなくなる」などの記述は，小カテゴリ「C1. 有害性」と命名，分類された。経験群における度数の割合は最も大きい 38.63%であった。未経験群でも44.16%と最大の度数の割合を示した。次に，「無視すれば，相手を思い通りにできると思う」や「悪い噂を流すのは，相手をすごくこらしめることができる」などの記述は，小カテゴリ「C2. 肯定的効果」と命名，分類された。経験群における度数の割合は 4.88%であり，未経験群の度数の割合は 12.99%であった。また，「悪い噂を流すと，どんどん広がってしまうと思う」や「仲間外れはいじめの始まりだと思う」などの記述は小カテゴリ「C3. 事態悪化」と命名された。経験群における度数の割合は 1.88%で，未経験群では 0.65%であった。さらに，「無視は，自分も嫌な気持ちになると思う」や「仲間外れは友だちのしんようを無くしてしまうと思う」などの記述は小カテゴリ「C4. 否定的効果」と命名，分類された。経験群における度数の割合は 5.75%であり，未経験群における度数の割合は 3.90%であった。以上の，4 つの小カテゴリは，関係性攻撃遂行の結果，一般的に生じると予想される効果を示す記述であると考えられた。そこで，事前に想定した大カテゴリ「C.効果」にこれらの小カテゴリが含まれると考えられた。

最後に，「無視は周りから見えない」や「仲間外れは気付かれない」などの記述は，「D. 秘匿可能性」と命名，分類された。経験群における度数の割合は 0.75%で，未経験群では 2.60%であった。

この他に，事前に想定しなかった項目として，「仲間外れは，されたら，他の子と仲良くなればよい」や「無視されたら，誰かに相談したほうがいい」などの記述が得られた。これらの記述は，小カテゴリ「E1. 対処」と命名，分類された。経験群における度数の割合は，0.38%であった。未経験群では「E1. 対処」の記述は得られなかった。そして，「悪い噂話を流すのは，いい噂なら別にいいと思う」や「悪い噂話を流すのは，いい噂も聞けるかもしれない」など攻撃行動としての前提を覆すような記述は，「E2. 分類不能」と命名された。度数の割合は，経験群で 1.63%，未経験群で 1.30%であった。これら 2 つの小カテゴリは，先行研究からの事前の想定には含まれていなかった記述であったため，便宜的にカテゴリ「E. その他」に含まれるものとした。

以上の結果から明らかなように，未経験群の記述の分類は，経験群の分類結

果に包含され，関係性攻撃に関与していないことによって，新たなカテゴリが生成されることはなかった。そこで，上記の 13 カテゴリをもって，関係性攻撃観の内容が網羅的に捉えられたと考えられた。

第 4 項　考察

本研究は小学生の関係性攻撃観を，実態調査から網羅的に把握することを目的に実施された。その結果，小学生の関係性攻撃観は，先行研究から仮定した「A. 命令的規範」,「B. 記述的規範」,「C. 効果」,「D. 秘匿可能性」の 4 種類の大カテゴリにほとんどの記述が含まれることが明らかになった。また，関係性攻撃経験の有無によって，関係性攻撃に対して異なる捉え方の記述は見られなかった。そして，先行研究の知見からは想定されなかった「E1. 対処」という分類も新たに生成された。「E1. 対処」の記述例として,「仲間外れにされたら，誰かに相談した方がいい」という記述が挙げられる。この記述は，関係性攻撃は軽視できる問題ではないという小学生の捉え方を反映していると考えられる。しかし，他の記述では,「無視されても，気にしない方がいいと思う」など，関係性攻撃を大きな問題ではないと捉える内容も得られた。これら関係性攻撃を他者の援助が必要な重大な問題と捉えることも，気にするほどでもない大きな問題ではないと捉えることも，小学生の心理社会的適応に密接に関わる可能性が考えられる。そのため,「E1. 対処」を新たなカテゴリとして加える必要があると言えるだろう。また，小学生の関係性攻撃観の内容を網羅的に捉えるという本研究の目的からも,「E1. 対処」を今後の検討に含める必要があると考えられる。

以上をもって，小学生の関係性攻撃観の概念を包括的に捉えられたと判断した。そこで，本研究で得られた関係性攻撃観の構造を網羅的に捉える記述を作成し，関係性攻撃観尺度の元項目を 50 項目作成した（Table 4-2)。次節の研究では，その元項目から関係性攻撃観尺度を作成し，その信頼性を検討することを目的とする。

Table 4-2-1　関係性攻撃観尺度元項目

A1	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	よくないと思う(否定的認識)
A1		ひきょうだと思う(否定的認識)
A1		ひどいことだと思う(否定的認識)
A1		自分もされたらいやだと思う(否定的認識)
A1		する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う(否定的認識)
A1		する人のことを正しいと思わない(否定的認識)
A1		する人の気持ちが分からない(否定的認識)
A1		する人はとても悪い人だと思う(否定的認識)
A2	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないと思う(正当化)
A2		される方にも問題があると思う(正当化)
A2		されたら，やり返した方がいいと思う(正当化)
A2		うっかりしてしまっていることがあると思う(正当化)
A2		きらいな人にするのはしかたがないと思う(正当化)
A3	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	されても，そんなに傷つかないと思う(肯定的認識)
A3		それほど悪いことではないと思う(肯定的認識)
A3		やってる側は楽しいと思う(肯定的認識)
B1	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	よくあることだと思う(頻度)
B1		ふつうにあることだと思う(頻度)
B1		たまにしかないことだと思う(頻度)
B1		何度でもできると思う(頻度)
B2	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	誰でもやっていることだと思う(普及)
B2		やったことがない人はいないと思う(普及)
B2		かんたんにできると思う(普及)
B2		その気になればできると思う(普及)
B2		大人もすることだと思う(普及)

注）アルファベットと数字は予備調査のカテゴリに対応

Table 4-2-2　関係性攻撃観尺度元項目

B3	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	ひとりを相手に大勢でやることだと思う(集団)
B3		一人だけではできないと思う(集団)
C1	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	された人をきずつけると思う(有害性)
C1		された人が学校に来たくなくなると思う(有害性)
C1		された人につらい思いをさせることだと思う(有害性)
C2	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	することで，相手をこらしめられると思う(肯定的効果)
C2		することで，相手に思い知らせてやれると思う(肯定的効果)
C2		することで，相手を思い通りにできると思う(肯定的効果)
C3	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	すると，けんかやいじめにつながると思う(事態悪化)
C3		ずっと続いてしまうものだと思う(事態悪化)
C3		どんどん広がってしまうものだと思う(事態悪化)
C4	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	すると，後できっと後悔すると思う(否定的効果)
C4		すると，自分もいやな気持ちになると思う(否定的効果)
C4		すると，した人もつらくなると思う(否定的効果)
C4		する人は，同じようにやり返されると思う(否定的効果)
C4		すると，した人の信頼がなくなると思う(否定的効果)
C4		すると，した人は仲間をなくすと思う(否定的効果)
D1	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	ごまかせると思う(秘匿可能性)
D1		自分がやったと気づかれないですむと思う(秘匿可能性)
D1		まわりの人が気づきにくいものだと思う(秘匿可能性)
D1		こっそりやるので，秘密にできると思う(秘匿可能性)
E1	ひとりぼっちにする攻撃は（を）	されたら，他の子と仲良くなればいいと思う(対処)
E1		されても、気にしない方がいいと思う(対処)
E1		されたら，誰かに相談した方がいいと思う(対処)
E1		するような人とは，無理に仲良くしない方がいいと思う(対処)

注）アルファベットと数字は予備調査のカテゴリに対応

第 2 節　小学生用関係性攻撃観尺度の作成と信頼性の検討（研究 1-2）

第 1 項　目的

研究 1-1 の結果から，小学生の関係性攻撃観の構成要素を網羅的に捉えることができた。そこで，本研究では，研究 1-1 で得た関係性攻撃についての記述を基に作成した原項目を用いた質問紙調査を実施し，小学生用関係性攻撃観尺度を作成し，同時にその信頼性と妥当性を検討する。

また，本研究では，作成した関係性攻撃観尺度の下位尺度の性差・学年差の検討も行う。関係性攻撃に対する許容性の性差・学年差に関しては，先行研究で報告されていないが，外顕的攻撃に対する許容性は，学年が上がるにつれ高まることが先行研究で示されている（Huesmann & Guerra, 1997）。また関係性攻撃とソシオメトリックテストによる仲間からの人気の指名率の相関が，学年の上昇に伴い大きくなることも報告されている（Cillessen & Mayeux, 2004）。以上のことから，高学年ほど関係性攻撃に対して許容的であるという仮説が考えられる。

さらに，本研究では，関係性攻撃観の弁別的妥当性についても検討する。つまり，作成した関係性攻撃観尺度が，外顕的攻撃を統制した関係性攻撃と有意な関連を示し，一方で関係性攻撃を統制した外顕的攻撃とは関連を示さないことを検討するのである。先行研究では，身体的攻撃を統制した上で，関係性攻撃と関係性攻撃に許容的な信念の関連を検討しており，それを実証している（Werner & Nixon, 2005）。そのために本研究では，関係性攻撃観と攻撃性の偏相関分析を実施する。

第 2 項　方法

1.　対象者

千葉県の 3 つの小学校に通う 5，6 年生 582 名（5 年生男子 128 名，5 年生女子 140 名，5 年生性別不明 5 名，6 年生男子 155 名，6 年生女子 152 名，6 年生性別不明 2 名）であった。そのうち著しく回答に不備のあった 27 名を除いた 555 名（5 年生男子 116 名，5 年生女子 133 名，5 年生性別不明 5 名，6 年生男子 152 名，6 年生女子 148 名，6 年生性別不明 1 名）を分析の対象者とした。ただし，分析の対象となる範囲の回答に不備がない限り，全てを分析の

対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2. 調査時期

調査時期は 2010 年 10 月から 2010 年 11 月であった。

3. 手続き

事前に小学校に電話で協力を依頼し，同意を得られた小学校に対し，研究の目的や調査内容や調査方法を示した文書を郵送した。それらの文書をもとに，調査の実施について教員内で検討してもらった後，学校長，教頭，担任教師の最終的な同意を得た。

同意が得られた小学校に，人数分の質問紙を個別に封筒に入れた状態でクラスごとの袋に分けたものを持参した。調査の実施方法は，クラス担任の教員ないし，調査担当となった教員による各クラスでの一斉配布という形をとった。質問紙へ記入し，小学生本人が質問紙を封筒に封入した後にクラス担任の教員ないし，調査担当となった教員が回収を行った。また学校の代表者から同意書に署名と押印をしてもらった。配布から回収までの期間は 3 週間程度であった。回収率は 96.36%であった。

回答は全て無記名で行われた。倫理的配慮として，調査への協力は自由であり，協力しなかった場合にも不利益は一切生じないこと，また調査の結果は小学校へ必ずフィードバックすることを質問紙及び依頼文に明記した。また，調査対象者が小学生であるということも考慮し，質問紙はテストではなく，学校の成績に一切関係しないなどの質問紙に記載してある注意事項を，調査実施直前に教員に述べてもらった。なお，回答を拒否した者を対象に，友人関係についての読み物教材を準備していたが，調査に同意をした学校側から，教材の配布を拒否されたため，実際の配布には至らなかった。また，教員との相談の結果，読み物以外の教材の配布も行わなかった。

4. 質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 2 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。本調査が筑波大学大学院の人間総合科学研究科研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②小学生の性別と学年，出席番号

回答にあたる小学生の基本的な情報として，性別と学年，出席番号について記入を求めた。

③関係性攻撃観尺度元項目

研究 1-1 での結果を参考に，小学生の関係性攻撃観を捉える自記式の質問項目を作成した。この質問紙は，過去の経験から形成された小学生の関係性攻撃についての潜在的知識構造である関係性攻撃観を測定するためのものである。大カテゴリ「命令的規範」,「記述的規範」,「効果」,「秘匿可能性」に含まれる 11 種類の小カテゴリに加え，それらに含まれない「対処」も含めた全 12 カテゴリの記述から，関係性攻撃観を網羅的に捉えるものであり，50 項目からなる（項目については研究 1-1 の Table 4-2-1，Table 4-2-2 を参照）。

また，質問紙の性質上，関係性攻撃の定義が求められたので，関係性攻撃の最も代表的な 3 つの攻撃形態である「無視」,「仲間外れ」,「かげ口」を提示し，それらの行為を質問紙上では，「(仲間を）ひとりぼっちにする攻撃」とまとめて表現する旨を教示した。この際，単純な「意地悪な行為」という表現を避け，人間関係を侵害する印象を与える「ひとりぼっちにする攻撃」という表現を採用した。つまり，「ひとりぼっちにする攻撃」とは，質問紙上で「無視」,「仲間外れ」,「かげ口」を総称し，小学生に分かりやすく関係性攻撃の定義を伝えることを意図した表現であった。ただし，仲間外れと異なり，無視や陰口は，必ずしもターゲットを孤立させることを基本的な機能としていない。無視はターゲットの冷遇や回避を基本的な機能とする。また，陰口はターゲットの社会的評価を貶めることが基本的な機能である。よって，ここでの「ひとりぼっちにする攻撃」という表現は，無視や陰口を包含する表現としては不十分であるとも考えられる。そこで，各項目の先頭にリード文として,「ひとりぼっちにする

攻撃は（を）」と表記し，さらに（「無視」,「仲間外れ」,「かげ口」）と併せて記載し，常に「ひとりぼっちにする攻撃」が「無視」,「仲間外れ」,「かげ口」の3つの行動を意味することを明示した。質問紙の回答に当たっては,「この質問は,「無視・仲間はずれ・かげ口」といった,「（仲間を）ひとりぼっちにする攻撃」について，いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて，次の質問について「１：まったくそう思わない～４：とてもそう思う」の中で，一番あてはまると思うものに○をつけてください。」と教示し，回答を求めた。「１：まったくそう思わない，２：あまりそう思わない，３：少しそう思う，４：とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

④小学生用 P-R 攻撃性質問紙

調査対象となった小学生の攻撃行動の特徴を測定する目的のために，坂井・山崎（2004）が作成した「小学生用 P-R 攻撃性質問紙」を用いた。小学生用 P-R 攻撃性質問紙は，自記式の攻撃性測定用の質問紙である。この質問紙は，攻撃性の細分化によるきめ細かい介入を可能とすべく,攻撃行動を関係性攻撃，表出性攻撃，不表出性攻撃の3側面に細分化して測定することを目的に作成されたものである。よって，尺度の構成は「不表出性攻撃」,「表出性攻撃」,「関係性攻撃」の3つの下位尺度からなる。下位尺度はそれぞれ7項目，計21項目となっている。今回は実際の攻撃行動を検討するため，敵意を測定する「不表出性攻撃」を除外し,「表出性攻撃（以下，外顕的攻撃）」と「関係性攻撃」のみ合計 14 項目を採用した。なお，尺度作成時の信頼性係数は，α=.80－.83と高い値が得られていた。各質問項目について自分がどの程度あてはまるかを,「まったくあてはまらない…1，あまりあてはまらない…2，よくあてはまる…3，とてもよくあてはまる…4」の4件法で回答を求めた。

⑥フィラー項目

本研究の目的には含まれないが，調査項目のうちネガティブな内容のものが大半を占めていた本質問紙において，ネガティブな印象を中和させる目的で，肥後橋（2005）が作成した「学校における社会的スキル（児童用）」の下位尺

度「思いやりのスキル」のみを採用した。各項目に対して，日ごろの行動はどのくらい当てはまるかを，「ぜんぜんしない…1，あまりしない…2，ときどきする…3，いつもする…4」の 4 件法で回答を求めた。これらの項目はネガティブな印象の中和が目的のフィラー項目であるので，分析には用いなかった。

第 3 項　結果

1.　関係性攻撃観の因子構造

まず，関係性攻撃観尺度全 50 項目について，4 件法で回答を求め，「まったくそう思わない」を 1 点，「あまりそう思わない」を 2 点，「少しそう思う」を 3 点，「とてもそう思う」を 4 点と得点化を行い，各項目の平均値，標準偏差，歪度，尖度を算出した（Table4-3）。

次に，関係性攻撃観原尺度 50 項目について，主因子法による因子分析を行ったところ，固有値 1.0 以上で，11 因子が抽出された。固有値の減衰状況（8.00，3.77，1.81，1.72，1.44，1.31，1.23…）から，2 因子が適当だと判断された。しかし，因子の解釈可能性から 2 因子の採用は難しかったので，固有値 1 以上を示した因子数 7 から主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い，各因子数において十分な負荷量を示さなかった項目を削除し，因子が解釈可能かどうか検討を行った。そして，因子の解釈が困難であった場合には，因子数を 7 から順次減らし，同様の作業を繰り返した。結果，最終的に因子の解釈可能性と各因子に残る項目数の点から 24 項目の 4 因子解が適当であると判断された（Table4-4）。なお，回転前の 4 因子で 24 項目の全分散を説明する割合は 47.04%であった。

第 1 因子は 9 項目から構成された。その代表項目として負荷量の高い上位 3 項目をあげると，「ひとりぼっちにする攻撃をすると，した人の信頼がなくなると思う（C4. 否定的効果）」（.64），「ひとりぼっちにする攻撃をすると，した人は仲間を無くすと思う（C4. 否定的効果）」（.62），「ひとりぼっちにする攻撃をすると，けんかやいじめにつながると思う（C3. 事態悪化）」（.61），「ひとりぼっちにする攻撃は，された人が学校に来たくなくなると思う（C1. 有害性）」（.61）となる。これらは関係性攻撃に対して非常にネガティブな印象を持っているということを示していると考えられる。そこで第 1 因子は「否定的認識」と命名

Table 4-3 項目分析の結果

項目内容	平均値	標準偏差	歪度	尖度
01A1_よくないと思う(否定的認識)	3.78	0.49	-2.61	8.11
02A3_それほど悪いことではないと思う(肯定的認識)	1.46	0.76	1.79	2.79
03B1_何度でもできると思う(頻度)	1.74	0.95	1.04	-0.08
04C1_された人をきずつけると思う(有害性)	3.72	0.75	-2.80	6.86
05B1_よくあることだと思う(頻度)	2.31	0.99	0.11	-1.08
06A2_先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないと思う(正当化)	2.36	1.01	0.07	-1.13
07A1_する人のことを正しいと思わない(否定的認識)	3.32	1.02	-1.27	0.25
08C2_することで，相手をこらしめられると思う(肯定的効果)	2.19	1.09	0.43	-1.12
09C3_すると，けんかやいじめにつながると思う(事態悪化)	3.61	0.74	-2.14	4.21
10C4_すると，後できっと後悔すると思う(否定的効果)	3.52	0.80	-1.70	2.18
11B2_大人もすることだと思う(普及)	2.58	1.09	-0.11	-1.28
12D1_ごまかせると思う(秘匿可能性)	1.66	0.84	1.22	0.84
13B3_ひとりを相手に大勢でやることだと思う(集団)	2.27	1.18	0.30	-1.43
14A1_ひきょうだと思う(否定的認識)	3.46	0.93	-1.65	1.47
15B2_かんたんにできると思う(普及)	2.31	1.11	0.23	-1.31
16C4_する人は，同じようにやり返されると思う(否定的効果)	3.08	0.96	-0.75	-0.45
17A2_されたら，やり返した方がいいと思う(正当化)	1.95	0.96	0.68	-0.58
18A2_きらいな人にするのはしかたがないと思う(正当化)	1.78	0.90	0.95	0.00
19A3_やってる側は楽しいと思う(肯定的認識)	2.22	1.06	0.26	-1.23
20A1_する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う(否定認識)	3.47	0.87	-1.57	1.43
21C3_ずっと続いてしまうものだと思う(事態悪化)	2.83	0.94	-0.40	-0.72
22C1_された人が学校に来たくなくなると思う(有害性)	3.55	0.76	-1.72	2.31
23B1_ふつうにあることだと思う(頻度)	1.93	0.92	0.66	-0.50
24B2_誰でもやっていることだと思う(普及)	1.85	0.91	0.81	-0.25
25D1_自分がやったと気づかれないですむと思う(秘匿可能性)	1.59	0.84	1.38	1.09
26C2_することで，相手に思い知らせてやれると思う(肯定的効果)	1.98	0.89	0.59	-0.46
27C4_すると，自分もいやな気持ちになると思う(否定的効果)	3.29	0.86	-1.06	0.34
28C4_すると，した人の信頼がなくなると思う(否定的効果)	3.63	0.70	-2.11	4.34
29E1_されたら，他の子と仲良くなればいいと思う(対処)	2.33	1.08	0.23	-1.22
30A2_うっかりしてしまっていることがあると思う(正当化)	2.45	0.95	-0.12	-0.94
31B3_一人だけではできないと思う(集団)	2.75	1.09	-0.31	-1.21
32A1_ひどいことだと思う(否定的認識)	3.74	0.62	-2.68	7.29
33B2_その気になればできると思う(普及)	2.33	1.02	0.19	-1.10
34C3_どんどん広がってしまうものだと思う(事態悪化)	3.41	0.78	-1.28	1.18
35D1_された人につらい思いをさせることだと思う(有害性)	3.72	0.68	-2.70	6.96
36A3_されても，そんなに傷つかないと思う(肯定的認識)	1.34	0.70	2.34	5.27
37A1_する人はとても悪い人だと思う(否定的認識)	3.28	0.90	-1.09	0.27
38A1_する人の気持ちが分からない(否定的認識)	2.98	0.98	-0.55	-0.81
39C2_することで，相手を思い通りにできると思う(肯定的効果)	1.64	0.83	1.24	0.86
40C4_すると，した人もつらくなると思う(否定的効果)	3.15	0.95	-0.87	-0.27
41B1_たまにしかないことだと思う(頻度)	2.14	0.95	0.43	-0.75
42D1_まわりの人が気づきにくいものだと思う(秘匿可能性)	2.41	1.10	0.08	-1.31
43A1_自分もされたらいやだと思う(否定的認識)	3.71	0.71	-2.68	6.59
44D1_こっそりやるので，秘密にできると思う(秘匿可能性)	1.65	0.85	1.26	0.86
45B2_やったことがない人はいないと思う(普及)	2.36	1.06	0.13	-1.21
46E1_されても、気にしない方がいいと思う(対処)	2.75	1.10	-0.34	-1.22
47A2_される方にも問題があると思う(正当化)	2.76	1.01	-0.36	-0.96
48C4_すると，した人は仲間をなくすと思う(否定的効果)	3.29	0.89	-1.07	0.19
49E1_されたら，誰かに相談した方がいいと思う(対処)	3.64	0.72	-2.12	3.98
50E1_するような人とは，無理に仲良くしない方がいいと思う(対処)	3.42	0.80	-1.32	1.08

注1）項目番号後のアルファベットと数字は予備調査のカテゴリに対応

注2）各項目の「ひとりぼっちにする攻撃は（を）」は省略した

Table 4-4　関係性攻撃観尺度因子分析の結果（主因子法　プロマックス回転）

項目内容	F1	F2	F3	F4	h^2	平均（標準偏差）
F1：否定的認識（α=.80）						
28C4 すると，した人の信頼がなくなると思う(否定的効果)	.64	-.04	.08	.05	.37	3.63 (0.70)
48C4 すると，した人は仲間をなくすと思う(否定的効果)	.62	-.08	.20	-.07	.35	3.29 (0.89)
09C3 すると，けんかやいじめにつながると思う(事態悪化)	.61	.11	-.02	.03	.33	3.61 (0.74)
22C1 された人が学校に来たくなくなると思う(有害性)	.61	.08	.04	-.03	.33	3.55 (0.76)
10C4 すると，後できっと後悔すると思う(否定的効果)	.57	.05	-.09	.00	.37	3.52 (0.80)
49E1 されたら，誰かに相談した方がいいと思う(対処)	.57	-.13	-.01	.14	.34	3.64 (0.72)
14A1 ひきょうだと思う(否定的認識)	.55	.16	-.12	-.06	.33	3.46 (0.93)
27C4 すると，自分もいやな気持ちになると思う(否定的効果)	.55	-.15	-.01	.06	.36	3.29 (0.86)
20A1　する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う(否定的認識)	.49	.11	-.02	-.06	.24	3.47 (0.87)
F2：身近さ（α=.77）						
05B1 よくあることだと思う(頻度)	.04	.75	.03	-.09	.49	2.31 (0.99)
23B1 ふつうにあることだと思う(頻度)	-.07	.67	.05	-.02	.52	1.93 (0.92)
15B2 かんたんにできると思う(普及)	.10	.65	-.05	.09	.42	2.31 (1.11)
11B2 大人もすることだと思う(普及)	.06	.63	.07	-.27	.27	2.58 (1.09)
33B2 その気になればできると思う(普及)	-.06	.53	-.09	.16	.38	2.33 (1.02)
24B2 誰でもやっていることだと思う(普及)	-.14	.52	.11	-.02	.43	1.85 (0.91)
13B3 ひとりを相手に大勢でやることだと思う(集団)	.14	.47	-.26	.14	.20	2.27 (1.18)
F3：正当化（α=.70）						
17A2 されたら，やり返した方がいいと思う(正当化)	.08	-.06	.78	.01	.51	1.95 (0.96)
06A2 先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないと思う(正当化)	-.02	-.03	.73	-.08	.46	2.36 (1.01)
18A2 きらいな人にするのはしかたがないと思う(正当化)	-.03	.27	.42	.09	.50	1.78 (0.90)
F4：利便性（α=.68）						
44D1 こっそりやるので，秘密にできると思う(秘匿可能性)	-.13	.06	-.05	.52	.35	1.65 (0.85)
39C2 することで，相手を思い通りにできると思う(肯定的効果)	-.03	-.10	.05	.51	.25	1.64 (0.83)
25D1 自分がやったと気づかれないですむと思う(秘匿可能性)	-.04	.11	.08	.45	.36	1.59 (0.84)
26C2 することで，相手に思い知らせてやれると思う(肯定的効果)	.06	.17	.28	.43	.53	1.98 (0.89)
31B3 一人だけではできないと思う(集団)	.18	-.06	-.11	.34	.08	2.75 (1.09)
得点間相関（左下）＼因子間相関（右上）	F1	F2	F3	F4		
否定的認識	•	-.41	-.52	-.39		
身近さ	-.28	•	.58	.63		
正当化	-.38	.46	•	.58		
利便性	-.35	.52	.53	•		

注1）項目番号後のアルファベットと数字は予備調査のカテゴリに対応

注2）各項目の「ひとりぼっちにする攻撃は（を）」は省略した

注3）各因子に対する.40以上の負荷量を太枠で囲った

注4）記載されている得点間相関はすべて0.1%水準で有意

された。

第 2 因子は 7 項目から構成された。その代表項目として負荷量の高い 3 項目をあげると,「ひとりぼっちにする攻撃は，よくあることだと思う（B1. 頻度)」(.75),「ひとりぼっちにする攻撃は，ふつうにあることだと思う（B1. 頻度)」(.67),「ひとりぼっちにする攻撃は，簡単にできると思う（B2. 普及)」(.65) となる。これらは関係性攻撃が日常的によくあることだという認識や，関係性攻撃は自分にとって容易に遂行可能な行為であるという自信を示していると考えられる。よって，第 2 因子は「身近さ」と命名された。

第 3 因子は 3 項目のみから構成された。その代表項目として負荷量の高い全 3 項目をあげると,「ひとりぼっちにする攻撃をされたら，やり返した方がいいと思う(A2. 正当化)」(.78),「ひとりぼっちにする攻撃を先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないと思う（A2. 正当化)」(.73),「ひとりぼっちにする攻撃を，きらいな人にするのはしかたがないと思う（A2. 正当化)」(.42) となる。これらは関係性攻撃の遂行に対して，それが報復的な場合や攻撃対象側に問題がある場合には許容されるという認識であることを示していると考えられる。そこで，第 3 因子は「正当化」と命名された。

最後に，第 4 因子は全 5 項目から構成された。その代表項目をあげると,「ひとりぼっちにする攻撃は，こっそりやるので，秘密にできると思う（D1. 秘匿可能性)」(.52),「ひとりぼっちにする攻撃をすることで，相手を思い通りにできると思う（C2. 肯定的効果)」(.51),「ひとりぼっちにする攻撃は，自分がやったと気づかれないですむと思う（D1. 秘匿可能性)」(.45) となる。これらの項目は，関係性攻撃は周囲に気づかれにくい上に，攻撃対象に優位に働きかけることができる，使い勝手のよい攻撃行動だと認識していることを示していると考えられる。そこで，第 4 因子は「利便性」と命名された。

2. 関係性攻撃観の下位尺度の信頼性と得点分布

また，各因子に対して.40 以上の負荷量を持つ項目の α 係数を算出した。すると第 1 因子「否定的認識」の α 係数は.80（有効回答数 535）であり，第 2 因子「身近さ」の α 係数は.77（有効回答数 529)，第 3 因子「正当化」の α 係数は.70（有効回答数 552)，第 4 因子「利便性」の α 係数は.68（有効回答数

542）であった。第 4 因子の α 係数がわずかに低いものの，使用に耐えられる範囲内の信頼性におさまっていた。そのため，各因子に対して内的一貫性が確認されたと考えられた。そこでこの結果に基づき，各因子に.40 以上の負荷量を示した項目の項目得点を加算し，項目数で割った値を下位尺度得点とした。この得点は理論的には 1 点から 4 点に分布する。「否定的認識」は得点が高いほど関係性攻撃に対して否定的であることを示す。「身近さ」は得点が高いほど，関係性攻撃が頻繁に生じており，誰しも遂行可能だという認識を持っていることを示す。「正当化」は得点が高いほど，小学生が関係性攻撃の遂行に対して，報復など限定的に許容する規範を持っていることを示す。「利便性」は得点が高いほど，関係性攻撃を有用な攻撃行動だと認識していることを示す。各得点の平均値は「否定的認識」の平均値が 3.50（*SD*=0.50），「身近さ」が 2.22（*SD*=0.68），「正当化」が 2.03（*SD*=0.76），「利便性」が 1.71（*SD*=0.61）であった。また，各下位尺度得点の分布を示したヒストグラムを Figure 2-1～2-4 に示す。

次に，既存の尺度に関しては因子分析による各尺度の因子構造の検討は行わずに，信頼性の検討のみ実施した。まず，小学生用 P-R 攻撃性質問紙尺度のうち「外顕的攻撃」を示す 7 項目について，4 件法で回答を求め，信頼性の確認を行った。「まったくあてはまらない」を 1 点，「あまりあてはまらない」を 2 点，「よくあてはまる」を 3 点，「とてもよくあてはまる」を 4 点と回答を得点化し，α 係数の算出を行った。その結果，「外顕的攻撃」の 7 項目の α 係数は.83（有効回答数 527）と非常に高い信頼性が示された。この結果に基づき，「外顕的攻撃」の 7 項目の回答得点を加算し，項目数の 7 で割った値を下位尺度得点とした。この得点は理論的には 1 点から 4 点に分布し，この得点が高いほど，小学生の外顕的攻撃性は高いということを示す。「外顕的攻撃」の平均点は 2.11（*SD*=0.65）であった。以下の分析ではこの下位尺度得点を使用した。

同様に，小学生の攻撃性のうち「関係性攻撃」を示す 7 項目について，4 件法で回答を求め，信頼性の検討を行った。「外顕的攻撃」と同じように回答を得点化し，α 係数の算出を行った。その結果，「関係性攻撃」の 7 項目の α 係数は.85（有効回答数 524）と非常に高い信頼性が示された。この結果に基づき，「外顕的攻撃」と同様の手法で「関係性攻撃」の下位尺度得点を算出した。「関係性攻撃」の平均点は 1.77（*SD*=0.60）であった。以下の分析ではこの下位尺度得点

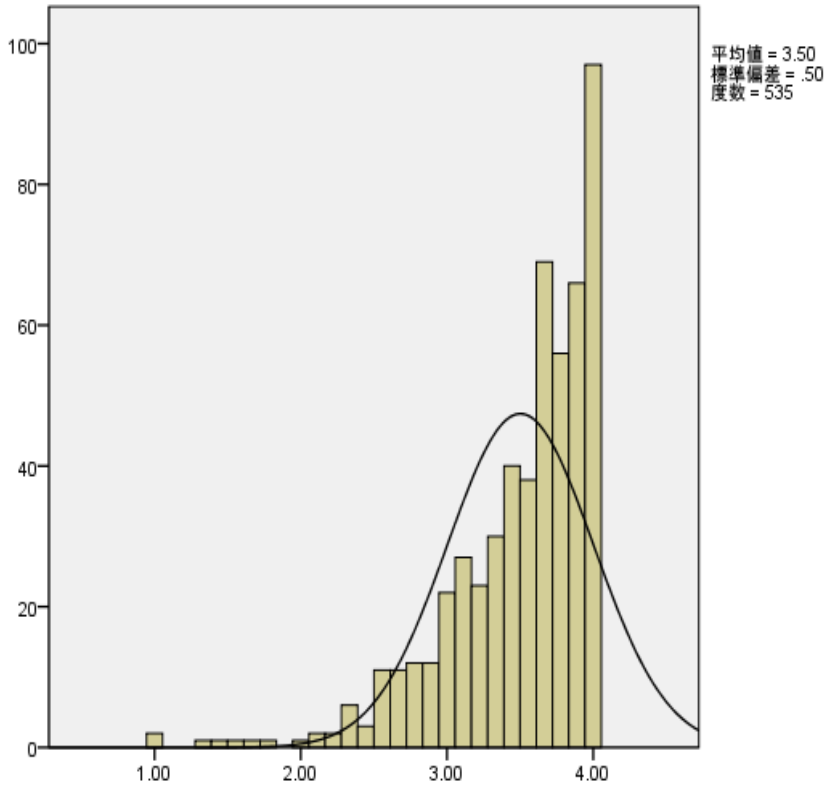


Figure 4-1 否定的認識の度数分布

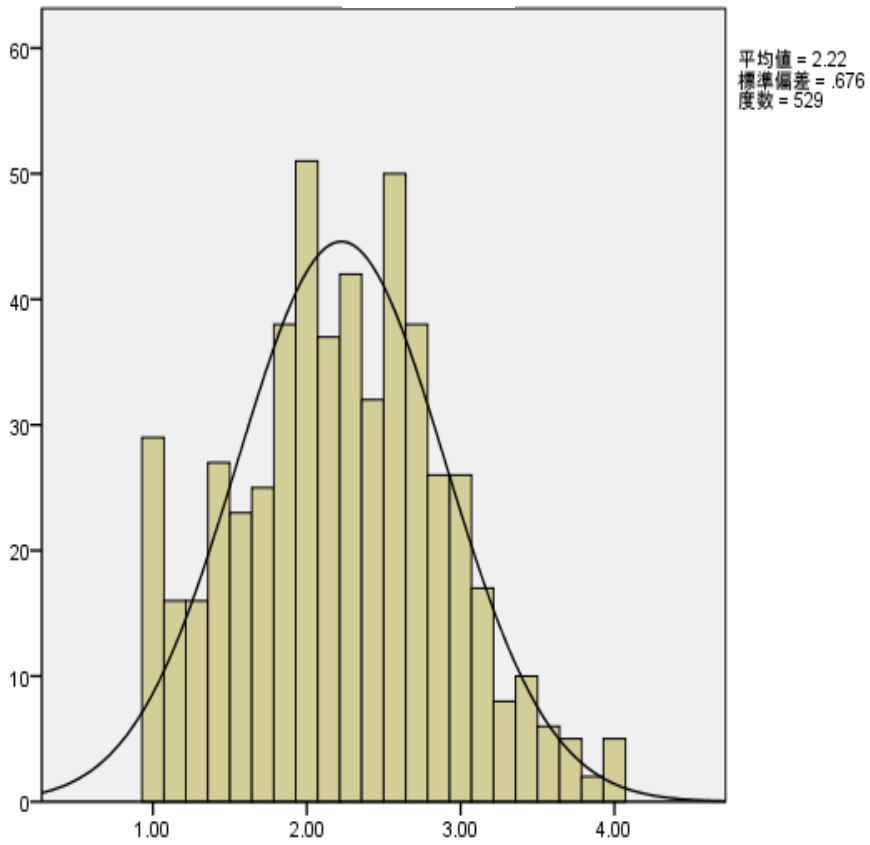


Figure 4-2 身近さの度数分布

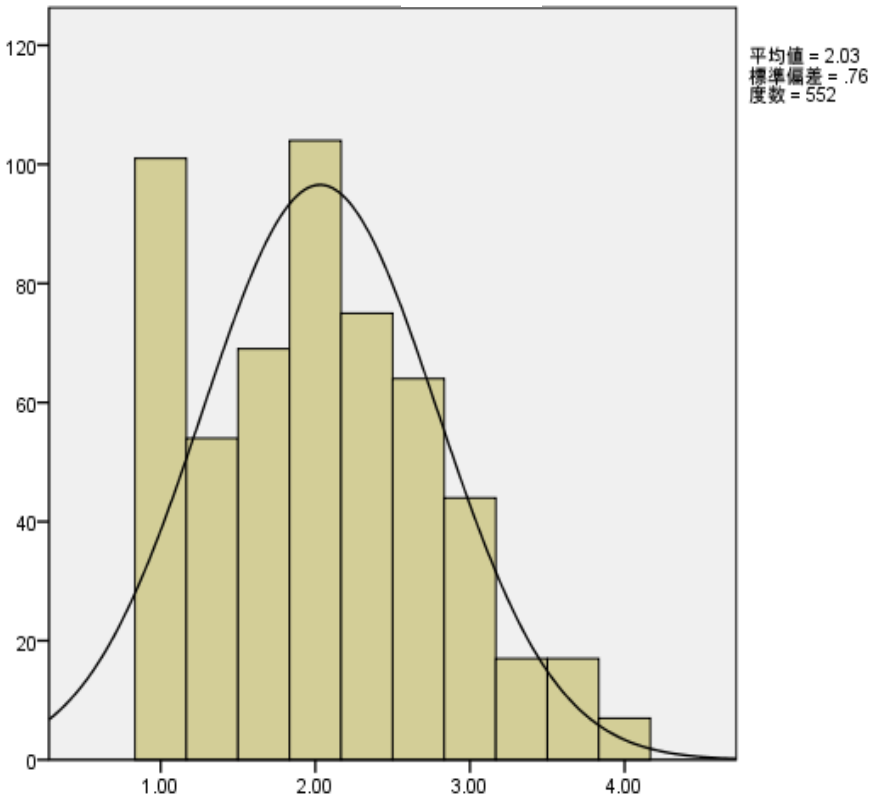


Figure 4-3　正当化の度数分布

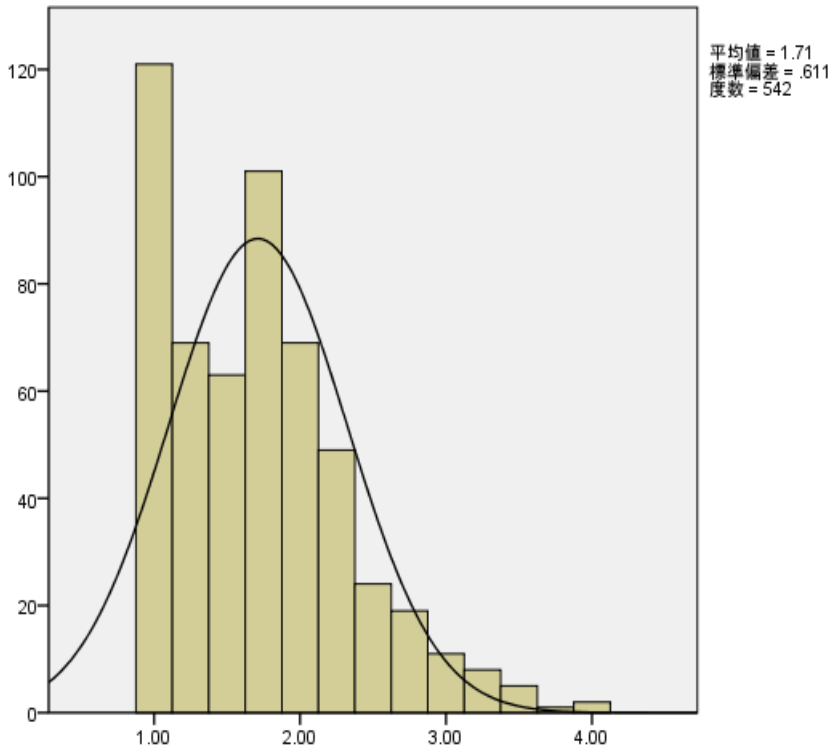


Figure 4-4　利便性の度数分布

を使用した。そして，以上にまとめた本研究で使用する尺度の得点分布と信頼性係数を Table4-5 に示す。

3. 各下位尺度得点の性差・学年差

関係性攻撃観の各下位尺度得点と小学生の攻撃性の各下位尺度得点を従属変数とした性別（2）×学年（2）の 2 要因分散分析を行った。その結果を Table 4-6 に示す。

分散分析の結果,「否定的認識」において有意傾向の交互作用がみられた（$F_{(1,525)}$=3.36, p<.07）。交互作用が有意傾向であったことから，Bonferroni 法による単純主効果の検定を行った。その結果,「否定的認識」については，男子における学年の単純主効果が有意で（$F_{(1,525)}$=4.36, p<.05），5 年生は 6 年生よりも高い得点を示した（p<.05）。つまり，男子においては，5 年生の方が 6 年生よりも「否定的認識」の得点が有意に高いことが明らかにされた。

次に「身近さ」において，有意な学年の主効果が認められ（$F_{(1,520)}$=10.10, p<.01），6 年生は 5 年生よりも高い得点を示した（p<.05）。よって，6 年生の方が 5 年生よりも関係性攻撃観の「身近さ」の得点が有意に高いことが明らかにされた。

また,「外顕的攻撃」においては,有意な性別の主効果が認められ（$F_{(1,518)}$=5.65, p<.05），男子は女子よりも高い得点を示した（p<.05）。よって，男子の方が女子よりも「外顕的攻撃」の得点が有意に高いことが明らかにされた。

4. 関係性攻撃観下位尺度と攻撃性の関連

関係性攻撃観の各下位尺度得点同士の関連を検討するために，下位尺度間の相関係数を算出することとした。その際,「身近さ」に有意な学年差がみられたことを考慮して,学年別に相関係数を算出した。その結果を Table 4-7 に示す。その結果によると，5，6 年生のどちらにおいても,「否定的認識」はその他 3 つの下位尺度得点と低～中程度の負の相関を示した（全て p<.001）。一方で,「否定的認識」を除く「身近さ」,「正当化」,「利便性」は中～比較的高い正の相関を示した（全て p<.001）。学年ごとに異なる結果を示した相関はみられなかった。

Table 4-5 尺度得点の分布と信頼性

変数	n	項目数	得点	分布		理論的中間点	α係数
			平均値(標準偏差)	歪度	尖度		
否定的認識	535	9	3.50 (0.50)	-1.59	3.50	2.5	.80
身近さ	529	7	2.22 (0.68)	.13	-.40	2.5	.77
正当化	552	3	2.03 (0.76)	.38	-.52	2.5	.70
利便性	542	4	1.71 (0.61)	.86	.59	2.5	.68
外顕的攻撃	527	7	2.11 (0.65)	.42	-.16	2.5	.83
関係性攻撃	524	7	1.77 (0.60)	1.08	1.56	2.5	.85

Table 4-6 性別（2）×学年（2）の二要因分散分析

従属変数	全体 平均（SD）	性別	5年生	6年生	主効果（*F*値） 性別	主効果（*F*値） 学年	交互作用
否定的認識	529名 3.50(0.50)	男子 女子	3.56(0.46) 3.51(0.55)	3.43(0.47) 3.54(0.50)	n.s.	n.s.	3.36^{+} 男子：6年生<5年生
身近さ	524名 2.00(0.55)	男子 女子	2.09(0.66) 2.14(0.71)	2.32(0.66) 2.29(0.65)	n.s.	10.10^{**} 5年生<6年生	n.s.
正当化	546名 2.02(0.76)	男子 女子	2.12(0.77) 2.03(0.79)	2.07(0.76) 1.92(0.72)	n.s.	n.s.	n.s.
利便性	536名 1.71(0.61)	男子 女子	1.69(0.55) 1.71(0.66)	1.73(0.60) 1.69(0.62)	n.s.	n.s.	n.s.
外顕的攻撃	522名 2.11(0.64)	男子 女子	2.20(0.67) 2.08(0.67)	2.15(0.63) 2.01(0.60)	5.65^{*} 女子<男子	n.s.	n.s.
関係性攻撃	518名 1.77(0.59)	男子 女子	1.72(0.55) 1.79(0.67)	1.76(0.61) 1.80(0.55)	n.s.	n.s.	n.s.

注）$^{+}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$

Table 4-7　関係性攻撃観の下位尺度間相関(学年別)

	否定的認識	身近さ	正当化	利便性
否定的認識		-.28 ***	-.36 ***	-.42 ***
身近さ	-.27 ***		.52 ***	.57 ***
正当化	-.40 ***	.42 ***		.56 ***
利便性	-.29 ***	.48 ***	.51 ***	

注1）$^{***}p<.001$

注2）右上が5年生，左下が6年生の相関

続いて，関係性攻撃観と攻撃性の関連を検討するために相関係数を算出することとした。その際，関係性攻撃と外顕的攻撃の間に有意な相関がみられたため（r=.57，p<.001），攻撃性相互の関連を統制した偏相関分析を実施した。また，関係性攻撃観の学年差を考慮して，学年別にも偏相関係数を算出した。その結果を Table4-8～4-10 に示す。

その結果，5 年生においては，関係性攻撃観の各下位尺度得点と関係性攻撃の間に低～中程度の有意な偏相関がみられた（全て p<.001）。一方，外顕的攻撃との間には「正当化」が中程度の有意な正の偏相関を示し（r=.42，p<.001），「利便性」はほとんど関連を示さないものの有意な値を示した（r=.16, p<.05）。次に，6 年生においては，「身近さ」，「正当化」，「利便性の知識」と関係性攻撃の間に低～中程度の有意な偏相関がみられた（p<.001）。「否定的認識」と関係性攻撃においては，有意な偏相関がみられたものの，ほとんど関連がないという結果であった（r=-.17, p<.01）。一方，外顕的攻撃との間には「正当化」が低い有意な正の偏相関を示し（r=.20，p<.001），「否定的認識」，「身近さ」，「利便性の知識」との間には有意なものの偏相関係数の値が小さく，ほとんど関連を示さないことが明らかにされた（p<.05）。

第 4 項　考察

1.　関係性攻撃観の因子構造

本研究の主要な目的は，小学生用の関係性攻撃観尺度を作成することであった。しかし，尺度作成の手続きの最初の段階である項目分析において，歪度と尖度の値が示したように，多くの項目に得点の偏りが確認された。多くの項目で得点の偏りがみられた理由としては，本研究で扱った関係性攻撃という行動が社会的規範を強く反映するものであったためだと考えられる。特に得点の偏りが大きかった項目は，「A1. 否定的認識」や「A3. 肯定的認識」，「C1. 有害性」といったカテゴリに分類されたものが多かった。「A1. 否定的認識」や「A3. 肯定的認識」は，関係性攻撃を容認するか否かといった内容を示す項目群から構成されていた。そして，「C1. 有害性」とは関係性攻撃が被害者に及ぼす否定的な効果についての知識を示す項目であった。以上のカテゴリの項目は，社会的規範を反映した内容であったため，結果的に，得点の偏りが大きくなった

Table 4-8　関係性攻撃観と攻撃性の偏相関（全体）

	否定的認識	身近さ	正当化	利便性
関係性攻撃	-.30 *** (-.39 ***)	.34 *** (.48 ***)	.24 *** (.45 ***)	.39 *** (.52 ***)
外顕的攻撃	-.11 * (-.29 ***)	.12 ** (.36 ***)	.30 *** (.46 ***)	.14 ** (.39 ***)

注1）$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

注2）関係性攻撃との相関は，外顕的攻撃を制御変数とした偏相関係数であり，
外顕的攻撃との相関は関係性攻撃を制御変数とした偏相関係数である。

注3）（ ）内は相関係数

Table 4-9　関係性攻撃観と攻撃性の偏相関(5年生)

	否定的認識	身近さ	正当化	利便性
関係性攻撃	-.46 *** (-.51 ***)	.41 *** (-.57 ***)	.22 *** (.50 ***)	.40 *** (.56 ***)
外顕的攻撃	.00 (-.31 ***)	.11 (-.41 ***)	.42 *** (.56 ***)	.16 * (.44 ***)

注1）$^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$

注2）関係性攻撃との相関は，外顕的攻撃を制御変数とした偏相関係数であり，
外顕的攻撃との相関は関係性攻撃を制御変数とした偏相関係数である。

注3）（ ）内は相関係数

Table 4-10　関係性攻撃観と攻撃性の偏相関(6年生)

	否定的認識	身近さ	正当化	利便性
関係性攻撃	-.17 ** (-.29 ***)	.28 *** (.40 ***)	.26 *** (.39 ***)	.38 *** (.48 ***)
外顕的攻撃	-.19 ** (-.29 ***)	.15 * (.33 ***)	.20 *** (.35 ***)	.14 * (.34 ***)

注1）$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

注2）関係性攻撃との相関は，外顕的攻撃を制御変数とした偏相関係数であり，
外顕的攻撃との相関は関係性攻撃を制御変数とした偏相関係数である。

注3）（ ）内は相関係数

のだと考えられる。しかし，関係性攻撃観尺度の項目は小学生の自由記述調査の結果を踏まえて作成されており，内容的妥当性は高いと考えられた。そのため，尺度作成時に，得点の偏りの大きな項目を削除することは，尺度全体の意味構造を歪ませてしまう可能性も考えられた。そこで，本研究では，そのままの項目群による尺度作成を優先した。

次に，本研究では因子分析を行ったが，その過程で，50 項目から半部以上の項目が削除された。この中で，研究 1-1 で網羅的に収集した関係性攻撃観の小カテゴリのうち，「A3. 肯定的認識」の項目は全て因子負荷量が低く，削除されるという結果となった。因子数を 4 にした因子分析の結果では，「A3. 肯定的認識」の項目は，「否定的認識」に該当する項目群の中で，逆転項目として低い負の因子負荷量を示していた。この因子負荷量が小さくなった理由としては，「否定的認識」の項目群が，「A1. 否定的認識」や「C1. 有害性」，「C4. 否定的効果」，「C3. 事態悪化」といった多様な要素を含んでいたためだと考えられる。現に，採用された項目の因子負荷量も決して大きなものではなかった。その中で，関係性攻撃の肯定的な捉え方を意味する「A3. 肯定的認識」の項目は，相対的に他の項目との相関が弱まった可能性が考えられる。しかし，「A3. 肯定的認識」の項目と逆転項目のような意味内容である「A1. 否定的認識」の項目は，最終的な因子分析の結果に残った。そのため，尺度の内容的妥当性は保持されたと考えられた。よって，最終的な因子分析結果を採用した。

また，因子分析の最終的な結果，関係性攻撃観尺度は，24 項目 4 因子解が採用された。その 4 因子とは「否定的認識」，「身近さ」，「正当化」，「利便性」である。第 1 因子である「否定的認識」は，小カテゴリ「C4. 否定的効果」，「C2. 事態悪化」，「C1. 有害性」，「E1. 対処」，「A1. 否定的認識」の項目から構成された。つまり「否定的認識」は大カテゴリ「A. 命令的規範」，「C. 効果」，「E. その他」における，関係性攻撃について否定的な記述が集まって構成された。第 2 因子である「身近さ」は，小カテゴリ「B1. 頻度」，「B2. 普及」，「B3. 集団」，つまり大カテゴリ「B 記述的規範」から構成された。第 3 因子の「正当化」は小カテゴリ「A2. 正当化」のみから構成された。そして，第 4 因子「利便性」は小カテゴリ「D1. 秘匿可能性」と「C1. 肯定的効果」から構成された。これらの結果から，事前に想定した関係性攻撃観の構造とは大きく異なる結果が示

されたことが明らかにされた。しかし，最終的に，「A3. 肯定的認識」以外の全てが残り，その「A3. 肯定的認識」と逆転項目のような記述内容である「A1. 否定」の項目が残っているため，内容的妥当性を有していると考えられる。また，4 因子の各尺度得点の α 係数も概ね満足できる値であり，本尺度の内的一貫性も確認されたと考えられる。

以上の各因子を構成した小カテゴリや，因子間相関，下位尺度得点間相関の結果から，関係性攻撃観は大きく2つの領域に分けられることが考えられる。つまり，「否定的認識」による関係性攻撃を容認しない側面と，「身近さ」，「正当化」，「利便性」による関係性攻撃を許容する側面であると考えられる。この可能性は，関係性攻撃との相関分析によっても支持されている。つまり，「否定的認識」は「関係性攻撃」と負の相関を示したのに対し，「身近さ」，「正当化」，「利便性」は関係性攻撃と正の相関を示したのである。本研究の結果は同時点による相関関係の検討のみのため，予測の域を出ないが，関係性攻撃を容認しない「否定的認識」は関係性攻撃を低め，関係性攻撃を許容する「身近さ」，「正当化」，「利便性」は関係性攻撃を高める可能性が示唆されたのである。

2. 各下位尺度の性差・学年差

関係性攻撃観の各下位尺度についての性別（2）×学年（2）の 2 要因分散分析の結果では，「身近さ」のみ有意な学年差がみられた。有意傾向の交互作用がみられた「否定的認識」においても，単純主効果の検定の結果，男子における学年の主効果が有意であった。これらの結果から，関係性攻撃観と学年の関連について考察する必要が考えられた。

「身近さ」に関しては，6 年生の方が 5 年生よりも得点が高いという結果が示された。有意傾向の交互作用がみられた「否定的認識」の単純主効果の検定の結果については，5 年生の方が 6 年生よりも得点が高いという結果が示された。これらの結果が示していることは，6 年生の方が 5 年生よりも関係性攻撃を身近に感じており，かつ否定的に捉えていない傾向があるということである。この結果は，先行研究で示された知見に一致するものであると考えられる。まず，「身近さ」の学年差については，いじめ問題から説明が可能であろう。文部科学省の統計によれば，いじめ問題が，その認知件数でピークを迎えるのは中

学 1 年生である（文部科学省，2014）。よって，このいじめに特徴的な攻撃形態として捉えられる関係性攻撃を，6 年生の方が 5 年生よりも身近に感じるということは，現状のいじめ問題を反映した結果と考えられる。また，関係性攻撃に対する「否定的認識」について，6 年生の方が 5 年生よりも低いという点については，攻撃行動を容認する規範的信念の先行研究から説明可能である。Huesmann & Guerra（1997）は，外顕的攻撃を容認する傾向が学年の上昇に伴い高まるということを示し，それは社会化が進んだ結果であると考察している。彼らは，対象とした子どもが都市部にあるハイリスクの小学校に在籍していることを踏まえ，攻撃行動が頻発する環境で適応するために，子ども達は攻撃行動を容認する傾向を年々高めた可能性があると指摘している（Huesmann & Guerra, 1997）。この知見を考慮すると，関係性攻撃が頻発しているとされる現状に適応するために，小学生の関係性攻撃を容認しない傾向が学年の上昇に伴い低下したと考えることができるだろう。

なお，本研究では，小学生用 P-R 攻撃性質問紙の「外顕的攻撃」について，男子の方が女子よりも得点が高いという性差が示されたが，この点に関しても先行研究の知見と一致する結果であったと言える（坂井・山崎，2004）。

3. 関係性攻撃観と攻撃性の偏相関

関係性攻撃観の弁別的妥当性について検討するために，関係性攻撃観の各下位尺度と小学生用 P-R 攻撃性質問紙の下位尺度である「関係性攻撃」と「外顕的攻撃」の偏相関分析を実施した。つまり，外顕的攻撃を統制した上で，関係性攻撃観と関係性攻撃に有意な関連が示されると同時に，関係性攻撃を統制した上で関係性攻撃観と外顕的攻撃に有意な関連が示されないという仮説を検証したのである。

その結果，関係性攻撃観の下位尺度は，一方の攻撃性を統制しても関係性攻撃と外顕的攻撃の両方に有意に関連することが示された。しかし，外顕的攻撃との偏相関係数はほとんどが.20 以下の低い値であり，関連が非常に弱いことが示された。一方で，関係性攻撃との偏相関係数は，その多くが低～中程度の大きさを示していた。これらの結果から，関係性攻撃観が関係性攻撃のみと関連することが部分的に説明されたと考えられる。ただ，関係性攻撃観の「正当

化」のみは両方の攻撃性に対して同程度の関連を示した。この結果に対しては，「正当化」の項目内容が，関係性攻撃に対して特化した記述ではなかったという可能性が考えられる。つまり，「正当化」の項目は，攻撃行動全般に対する正当化を示していたということが考えられるのである。当然，項目内には「ひとりぼっちにする攻撃」という記述があったが，それ以上に報復の許容や攻撃対象への原因帰属といった内容が，関係性攻撃だけでなく，外顕的攻撃にも共通する記述であったと考えられるのである。さらに学年別の偏相関の結果から，5 年生においては関係性攻撃よりも外顕的攻撃と「正当化」の相関が高いことが示された。前述のとおりに「正当化」が攻撃行動全般に対する内容を反映しているものだとすると，6 年生よりも関係性攻撃経験の蓄積が少ないと考えられる 5 年生において，外顕的攻撃の方が相関係数が大きくなったと考えられるかもしれない。以上の結果から，関係性攻撃観の弁別的妥当性が部分的に示されたと考えられる。

4．本研究のまとめ

本研究は，小学生の関係性攻撃観を測定する尺度作成とその作成した尺度の信頼性の確認および妥当性の検討を目的としていた。本研究の結果，小学生の関係性攻撃観を測定する尺度が作成された。そして，小学生の関係性攻撃観は「否定的認識」，「身近さ」，「正当化」，「利便性」の 4 つの因子構造であることが明らかにされた。同時に，各因子を構成した項目による α 係数は.68～.80 と十分な内的一貫性も示された。また，関係性攻撃観の各下位尺度と「関係性攻撃」，「外顕的攻撃」の偏相関分析の結果から，「否定的認識」，「身近さ」，「利便性」は，「外顕的攻撃」を統制すると，「関係性攻撃」のみと意味のある関連が示されることが明らかになった。以上のことから，関係性攻撃観尺度の信頼性と妥当性を検討する本研究の目的は達成されたと考えられる。

しかし，本研究の尺度作成において，原項目が非常に多く，最終的には半数近くが採用されなかったこと，また多くの項目で得点の偏りがみられたことから，関係性攻撃観尺度の項目を精選することと，件法を改め，得点の偏りを修正する必要性が示唆された。

第 3 節　小学生用関係性攻撃観尺度改訂版の作成と信頼性・妥当性の検討（研究 2）

第 1 項　目的

本研究では，小学生用関係性攻撃観尺度の改訂版を作成し，信頼性と妥当性を検討することを目的とする。先の研究 1 において作成された尺度は，原項目数が多いにもかかわらず，最終的に半数の項目が採用されない結果であった。そこで，本研究では，研究 1 の結果に基づき，小学生の関係性攻撃についての認識の内容を網羅したまま項目を精選し，新たな尺度を作成することを目的とする。また，研究 1 では，関係性攻撃観尺度の多く項目に得点の偏りが確認された。そこで，回答者の得点の分布を広げるため，本研究からは関係性攻撃観尺度の件法を 5 件法に改める。

また，本研究では，研究 1 と同様に，作成した関係性攻撃観尺度の下位尺度得点の性差・学年差の検討を行う。特に学年差については，本研究でも，高学年ほど関係性攻撃に許容的であると仮定し，関係性攻撃観尺度の下位尺度得点を比較検討する（Cillessen & Mayeux, 2004）。

そして，本研究では，作成した関係性攻撃観尺度の妥当性の検討を，以下の 2 つの観点から実施する。まず，作成した関係性攻撃観尺度の各下位尺度得点を，関係性攻撃の経験群ごとに比較する。先行研究では，関係性攻撃に許容的な者ほど関係性攻撃に従事することが指摘されている（Werner & Nixon, 2005）。つまり，関係性攻撃の加害経験のある者は，加害経験のない者より関係性攻撃に対して許容的であることが予想される。一方，被害経験が多い者は，被害経験のない者より，関係性攻撃に対して否定的であることが予想される。次に，作成した関係性攻撃観尺度の下位尺度得点と，実際の攻撃行動の関連を検討する。関係性攻撃と外顕的攻撃を相互に統制させた上で，関係性攻撃観尺度の各下位尺度得点が，2 つの攻撃行動と関連を示すかどうかを検討する。そのために，本研究では，共分散構造分析を用いた分析を実施する。以上の 2 つの方法により，作成した関係性攻撃観尺度の改訂版の妥当性の検討を行う。

第 2 項　方法

1　対象者

茨城県と千葉県の小学校に通う 4，5，6 年生 757 名（4 年生男子 114 名，4 年生女子 114 名，5 年生男子 168 名，5 年生女子 130 名，5 年生性別不明 3 名，6 年生男子 122 名，6 年生女子 103 名，6 年生性別不明 1 名）であった。なお，本研究では，分析の対象となる範囲の回答に不備がない限り，全てを分析の対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2　調査時期

調査時期は 2011 年 12 月から 2012 年 8 月であった。

3　手続き

研究 1-2 と同様の手続きによって，調査を実施した。

4　質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 3 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。本調査が筑波大学大学院の人間総合科学研究科研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②児童の性別と学年，出席番号，生年月日

回答にあたる児童の基本的な情報として,性別と学年について記入を求めた。なお，縦断調査も可能とするため，出席番号と生年月日の回答も求めていた。

③関係性攻撃観尺度改訂版

研究 1 の結果を参考に，小学生の関係性攻撃観を捉える自記式の質問項目を改良し，精選した。この質問紙は，過去の経験から形成された関係性攻撃観を

測定するためのものである。項目の再検討の過程は以下の通りであった。まず，研究 1 で得られた 4 因子「否定的認識」,「身近さ」,「正当化」,「利便性」に分類された項目のうち，因子負荷量の高かった項目を中心に項目を選んだ。さらに，研究 1-1 で得たカテゴリの内容を踏まえつつ，因子負荷量が低い項目でも内容的に重要であると考えられた項目を採用した。この過程では，特に関係性攻撃の独自の特徴である秘匿可能性の項目を重要視し，項目数を増やす措置を取った。そして，最終的に 28 項目を作成した。

教示文には，元の尺度と同じく，関係性攻撃の定義を明示し,「無視」,「仲間外れ」,「かげ口」をまとめて「(仲間を) ひとりぼっちにする攻撃」と表現した。そして，各項目の先頭に「ひとりぼっちにする攻撃は（を)」というリード文を表記した。質問紙の回答に当たっては,「この質問は,「無視・仲間はずれ・かげ口」といった,「（仲間を）ひとりぼっちにする攻撃」について，いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて，次の質問について「１：まったくそう思わない～５：とてもそう思う」の中で，一番あてはまると思うものに〇をつけてください。」と教示し，回答を求めた。「１：まったくそう思わない，２：あまりそう思わない，３：どちらともいえない，４：少しそう思う，５：とてもそう思う」の 5 件法で回答を求めた。

④小学生用 P-R 攻撃性質問紙

研究 1-2 でも使用した坂井・山崎（2004）の「小学生用 P-R 攻撃性質問紙」を用いた。「外顕的攻撃」と「関係性攻撃」のみ合計 14 項目を採用した。各質問項目について自分がどの程度あてはまるかを,「まったくあてはまらない…1, あまりあてはまらない…2，よくあてはまる…3，とてもよくあてはまる…4」の 4 件法で回答を求めた。

⑤関係性攻撃経験質問項目

児童の関係性攻撃経験を調べるために姜・大重（2005）の作成した関係性攻撃経験質問項目を参考に，独自に質問項目を作成した。姜・大重（2005）をそのまま採用しなかった理由としては，項目のリード文に含まれる関係性攻撃行

動が，関係性攻撃観尺度で提示した「無視」,「仲間外れ」,「かげ口」に該当しなかったためである。そこで，本研究では，項目のリード文に「誰かに対しての「無視」や「仲間外れ」,「かげ口」などを」と表記することとした。そして，それに続けるように「(1) 自分がしたことがある，(2) 友達が他の友達にしているところを見たり聞いたことがある，(3) 自分がされたことがある，(4) どれもあてはまらない」の 4 つの項目を設定した。そして,「あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？あてはまるものすべてに〇をつけてください」という教示のもと，該当する項目全てに○をつけるように回答を求めた。

関係性攻撃経験の分類基準は姜・大重（2005）に従い，(1) にのみ〇をつけた群を能動的経験群，(2) にのみ〇をつけた群を受身的経験群，(3) にのみ〇をつけた群を被経験群，(1) と (2) に〇をつけた群を能動・受身的経験群，(1) と (3) に〇をつけた群を能動・被経験群，(2) と (3) に〇をつけた群を受身・被経験群，(1) と (2) と (3) に〇をつけた群を全経験群とした。また (4) に〇をつけた群を経験無し群とした。各群の人数分布を Table4-11 に示す。

しかし，能動的経験群と被経験群，能動・被経験群の 3 つの群における人数が著しく低くなってしまったため,本研究ではさらに独自に分類基準を設けた。つまり，能動的経験群と能動・受身的経験群をまとめ「加害群」，被経験群と受身・被経験群をまとめて「被害群」，能動・被経験群と全経験群をまとめて「加害・被害群」，そして受身的経験群をそのまま「受身群」とした。なお，経験無し群も「未経験群」と表記を改めた。本研究の新しい分類基準に基づく各群の人数分布を Table4-12 に示す。

第 3 項　結果

1. 関係性攻撃観の因子構造

まず，関係性攻撃観尺度改訂版全 28 項目について，5 件法で回答を求め,「まったくそう思わない」を 1 点,「あまりそう思わない」を 2 点,「どちらともいえない」を 3 点,「少しそう思う」を 4 点,「とてもそう思う」を 5 点と得点化し，平均値と標準偏差，歪度と尖度を算出した（Table4-13)。その結果，やはり複数の項目で，得点の偏りが確認できた。

Table 4-11　関係性攻撃経験の人数分布

	n	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
能動的経験群	30	4.0	4.1	4.1
受身的経験群	87	11.5	11.8	15.9
被経験群	67	8.9	9.1	25.0
能動・受身的経験群	35	4.6	4.7	29.7
能動・被経験群	26	3.4	3.5	33.3
受身・被経験群	128	16.9	17.4	50.6
全経験群	121	16.0	16.4	67.1
経験無し	243	32.1	33.0	100.0
合計	737	97.4	100.0	

注）姜・大重（2005）の基準による分類

Table 4-12　関係性攻撃経験の人数分布

	n	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
加害群	65	8.6	8.8	8.8
被害群	195	25.8	26.5	35.3
受身群	87	11.5	11.8	47.1
加害・被害群	147	19.4	19.9	67.0
未経験群	243	32.1	33.0	100.0
合計	737	97.4	100.0	

注）加害群は，能動的経験群と能動・受身経験群の合計

被害群は，被経験群と受身・被経験群の合計

加害・被害群は，能動・被経験群と全経験群の合計

Table 4-13 項目分析の結果

項目内容	平均値	標準偏差	歪度	尖度
01C1_された人が学校に来たくなくなると思う（有害性）	4.29	1.12	-1.73	2.17
02B1_よくあることだと思う（頻度）	2.66	1.19	0.18	-0.97
03A2_先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないことだと思う（正当化）	2.87	1.38	0.12	-1.19
04D1_目立たないので，周りの人に隠されていると思う（秘匿可能性）	2.68	1.29	0.24	-0.99
05C3_すると，けんかやいじめにつながることだと思う（事態悪化）	4.45	0.98	-2.07	3.78
06B2_大人もすることだと思う（普及）	3.01	1.45	-0.03	-1.35
07A2_されたら，やり返した方がいいと思う（正当化）	2.57	1.35	0.42	-0.94
08C2_することで，相手に思い知らせてやれると思う（肯定的効果）	2.57	1.31	0.37	-0.90
09A1_ひきょうだと思う（否定的認識）	4.05	1.26	-1.16	0.24
10B2_かんたんにできると思う（普及）	2.80	1.42	0.20	-1.25
11A2_嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う（正当化）	2.53	1.25	0.31	-0.90
12D1_周りの人が気づきにくいものだと思う（秘匿可能性）	2.90	1.36	0.10	-1.18
13A1_する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う（否定的認識）	4.26	1.13	-1.55	1.49
14B1_ふつうにあることだと思う（頻度）	2.29	1.24	0.56	-0.76
15A2_される方が悪い場合もあると思う（正当化）	3.18	1.27	-0.34	-0.95
16D1_こっそりできることなので，秘密にされていると思う（秘匿可能性）	3.12	1.25	-0.11	-0.89
17C4_すると，自分もいやな気持ちになると思う（否定的効果）	3.98	1.14	-1.01	0.21
18B2_誰でもやっていることだと思う（普及）	2.23	1.22	0.67	-0.59
19A2_怪我させるわけではないので，まだ許されると思う（正当化）	1.76	1.04	1.34	1.20
20C2_することで，相手を思い通りにできることだと思う（肯定的効果）	1.84	1.08	1.21	0.75
21C4_すると，した人の信頼がなくなることだと思う（否定的効果）	4.02	1.30	-1.21	0.28
22B1_たまにしかないことだと思う（頻度）	2.64	1.17	0.26	-0.67
23A2_怒るようなことをされたら，してもしかたがないと思う（正当化）	2.77	1.30	0.17	-1.04
24D1_やった人が見つかりにくいと思う（秘匿可能性）	2.96	1.36	0.04	-1.18
25E1_されたら，誰かに相談した方がいいと思う（対処）	4.46	0.99	-2.12	3.99
26B2_やったことがない人はいないと思う（普及）	2.81	1.33	0.12	-1.07
27A2_相手に乱暴なことをするよりも，悪いことではないと思う（正当化）	2.21	1.20	0.60	-0.59
28D1_大人の目を盗んでできることだと思う（秘匿可能性）	2.74	1.42	0.19	-1.27

注1）項目番号後のアルファベットと数字は予備調査のカテゴリに対応

注2）各項目の「ひとりぼっちにする攻撃は（を）」は省略した

次に関係性攻撃観尺度改訂版 28 項目について,最尤法による因子分析を行ったところ,固有値 1.0 以上で,6 因子が抽出された。固有値の減衰状況は,5.25,2.77,1.68,1.57,1.36,1.10,0.97…であった。そこで,固有値が 1 以上を示した因子数 6 から,最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い,各因子に十分な負荷量を示さなかった項目や,複数の項目に大きな負荷量を示し項目を削除していった。しかし,6 因子の解釈が困難であったため,因子数 6 から順次因子数を減らしながら最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い,同様の手続きを繰り返した。

そして,最終的に 24 項目の 4 因子解が適当であると判断された(Table4-14)。なお,回転前の 4 因子で 24 項目の全分散を説明する割合は 43.20%であった。

第 1 因子は 6 項目から構成された。その代表項目として負荷量の高い上位 3 項目をあげると,「ひとりぼっちにする攻撃は,ふつうにあることだと思う(B1.頻度)」(.70),「ひとりぼっちにする攻撃は,誰でもやっていることだと思う(B2.普及)」(.69),「ひとりぼっちにする攻撃は,よくあることだと思う(B1.頻度)」(.65)となる。第 1 因子は,関係性攻撃が日常的な行動であるという考えや,関係性攻撃を容易と捉える内容の項目群によって構成された。つまり,第 1 因子は研究 1 で得られた「身近さ」に該当する項目群によって構成された。よって,第 1 因子は「身近さ」と命名された。

第 2 因子は 9 項目から構成された。その代表項目として負荷量の高い 3 項目をあげると,「ひとりぼっちにする攻撃をすると,けんかやいじめにつながると思う(C2. 事態悪化)」(.69),「ひとりぼっちにする攻撃は,ひきょうだと思う(A1. 否定的認識)」(.64),「ひとりぼっちにする攻撃は,された人が学校に来たくなくなると思う(C1. 有害性)」(.50)となる。これらは関係性攻撃に対して非常にネガティブな印象を持っているということを示していると考えられる。第 2 因子は,関係性攻撃に対するネガティブな考え方や,関係性攻撃を有害なものと捉える内容の項目群によって構成された。つまり,第 2 因子は研究 1 で得られた「否定的認識」に該当する項目群によって構成された。よって,第 2 因子は「否定的認識」と命名された。

第 3 因子は 4 項目のみから構成された。その代表項目として負荷量の高い全 3 項目をあげると,「ひとりぼっちにする攻撃をされたら,やり返した方がいい

Table 4-14　関係性攻撃観尺度(改訂版)の因子分析の結果(最尤法　プロマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	h^2	平均	(標準偏差)
F1: 身近さ(α=.71)							
14B1_ふつうにあることだと思う(頻度)	.70	-.01	.03	.02	.52	2.29	(1.24)
18B2_誰でもやっていることだと思う(普及)	.69	-.14	-.10	-.01	.48	2.23	(1.22)
02B1_よくあることだと思う（頻度）	.65	.14	.06	-.05	.41	2.66	(1.19)
06B2_大人もすることだと思う（普及）	.52	.22	.05	-.04	.26	3.01	(1.45)
10B2_かんたんにできると思う（普及）	.40	.07	.05	.11	.22	2.80	(1.42)
26B2_やったことがない人はいないと思う（普及）	.38	-.11	-.10	.02	.15	2.81	(1.33)
F2:否定的認識(α=.70)							
05C3_すると，けんかやいじめにつながることだと思う（事態悪化）	.26	.69	-.03	-.05	.45	4.45	(0.98)
09A1_ひきょうだと思う（否定的認識）	.08	.64	.10	-.03	.36	4.05	(1.26)
01C1_された人が学校に来たくなくなると思う（有害性）	.15	.50	-.11	.00	.26	4.29	(1.12)
19A2_怪我させるわけではないので，まだ許されると思う（正当化）	.20	-.43	.07	.08	.34	1.76	(1.04)
13A1_する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う（否定的認識）	-.17	.42	.10	.27	.25	4.26	(1.13)
25E1_されたら，誰かに相談した方がいいと思う（対処）	-.18	.42	.00	.13	.24	4.46	(0.99)
17C4_すると，自分もいやな気持ちになると思う（否定的効果）	-.11	.37	-.08	-.06	.22	3.98	(1.14)
27A2_相手に乱暴なことをするよりも，悪いことではないと思う（正当化）	.22	-.34	-.02	.09	.22	2.21	(1.20)
21C4_すると，した人の信頼がなくなることだと思う（否定的効果）	.06	.33	.02	.13	.12	4.02	(1.30)
F3:正当化(α=.74)							
07A2_されたら，やり返した方がいいと思う（正当化）	-.03	-.01	.85	-.12	.64	2.57	(1.35)
03A2_先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないことだと思う（正当化）	-.04	.08	.72	.01	.47	2.87	(1.38)
08C2_することで，相手に思い知らせてやれると思う（肯定的効果）	.05	-.09	.59	.01	.43	2.57	(1.31)
11A2_嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う（正当化）	.23	-.01	.32	.09	.28	2.53	(1.25)
F4:秘匿可能性(α=.68)							
12D1_周りの人が気づきにくいものだと思う（秘匿可能性）	-.07	.01	-.06	.68	.41	2.90	(1.36)
24D1_やった人が見つかりにくいと思う（秘匿可能性）	.08	.07	-.12	.60	.36	2.96	(1.36)
16D1_こっそりできることなので，秘密にされていると思う（秘匿可能性）	.07	.07	.02	.48	.27	3.12	(1.25)
04D1_目立たないので，周りの人に隠されていると思う（秘匿可能性）	-.01	.01	.08	.48	.26	2.68	(1.29)
20C2_することで，相手を思い通りにできることだと思う（肯定的効果）	.09	-.22	.19	.23	.25	1.84	(1.08)

得点間相関（左下）＼因子間相関（右上）	F1	F2	F3	F4
身近さ	•	-.28	.49	.44
否定的認識	-.18	•	-.32	-.07
正当化	.34	-.24	•	.36
秘匿可能性	.35	-.15	.26	•

注1）項目番号後のアルファベットと数字は予備調査のカテゴリに対応する

注2）各項目の「ひとりぼっちにする攻撃は（を）」は省略した

注3）各因子に対する.35以上の負荷量を太枠で囲った

注4）記載されている得点間相関はすべて0.1%水準で有意

と思う（A2. 正当化）」（.85），「ひとりぼっちにする攻撃を先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないと思う（A2. 正当化）」（.72），「ひとりぼっちにする攻撃をすることで，相手に思い知らせてやれると思う（C2. 肯定的効果）」（.59）となる。第 3 因子は，報復的な関係性攻撃を許容するという内容の項目群によって構成された。つまり，第 3 因子は研究 1 で得られた「正当化」に該当する項目群を中心に構成された。よって，第 3 因子は「正当化」と命名された。

最後に，第 4 因子は 5 項目から構成された。その代表項目をあげると，「ひとりぼっちにする攻撃は，周りの人が気づきにくいものだと思う（D1. 秘匿可能性）」（.69），「ひとりぼっちにする攻撃は，やった人が見つかりにくいものだと思う（D1. 秘匿可能性）」（.60），「ひとりぼっちにする攻撃は，こっそりできることなので，秘密にされていると思う（D1. 秘匿可能性）」（.48）となる。第 4 因子は，関係性攻撃の目立たなさという特徴に関する項目群によって構成された。そこで，第 4 因子は「秘匿可能性」と命名された。

次に，各因子に対して.35 以上の負荷量を持つ項目の α 係数を算出した。すると第 1 因子「身近さ」の α 係数は.71（有効回答数 738）であり，第 2 因子「否定的認識」の α 係数は.70（有効回答数 739），第 3 因子「正当化」の α 係数は.74（有効回答数 748），第 4 因子「秘匿可能性」の α 係数は.68（有効回答数 733）であった。第 4 因子の α 係数がわずかに低いものの，使用に耐えられる範囲内の信頼性におさまっていた。そのため，各因子に対して内的一貫性が確認されたと考えられた。そこでこの結果に基づき，各因子に.35 以上の負荷量を示した項目の項目得点を加算し，項目数で割った値を下位尺度得点とした。この得点は理論的には 1 点から 5 点に分布する。「否定的認識」は得点が高いほど関係性攻撃に対して否定的であることを示す。「身近さ」は得点が高いほど，関係性攻撃が頻繁に生じており，誰しも遂行可能だという認識を持っていることを示す。「正当化」は得点が高いほど，報復的な関係性攻撃の遂行に対して許容的であることを示す。「秘匿可能性」は得点が高いほど，関係性攻撃は目立たない攻撃行動だと捉えていることを示す。各得点の平均は「身近さ」が 2.64（SD=0.83），「否定的認識」が 4.24（SD=0.65），「正当化」が 2.67（SD=1.09），「秘匿可能性」が 2.70（SD=0.80）であった。そして，以上の各下位尺度得点の分布を表したヒストグラムを Figure 4-5～4-8 に示す。

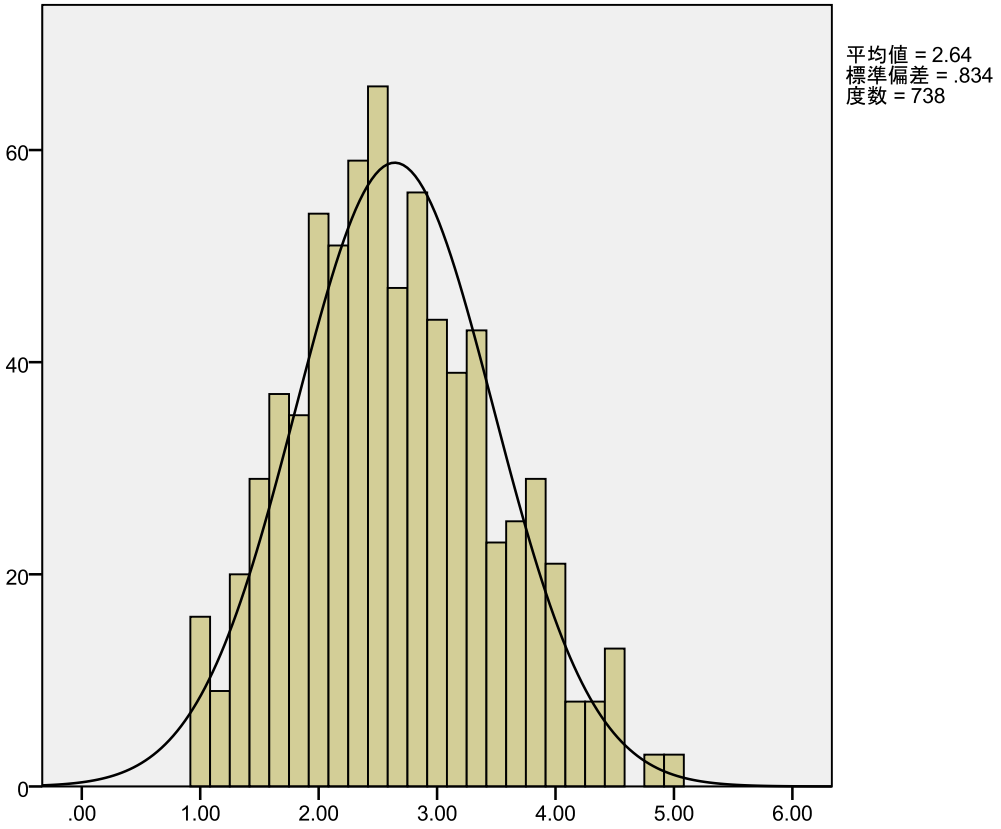


Figure 4-5 身近さの度数分布

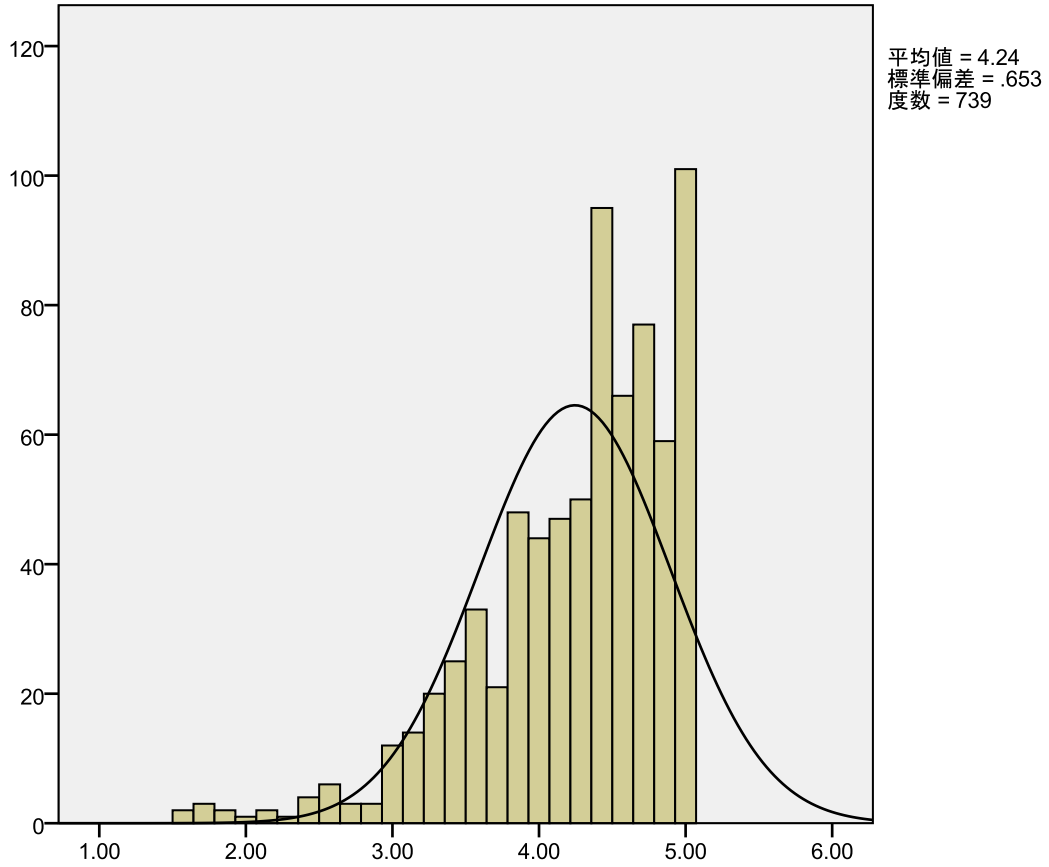


Figure 4-6 否定的認識の度数分布

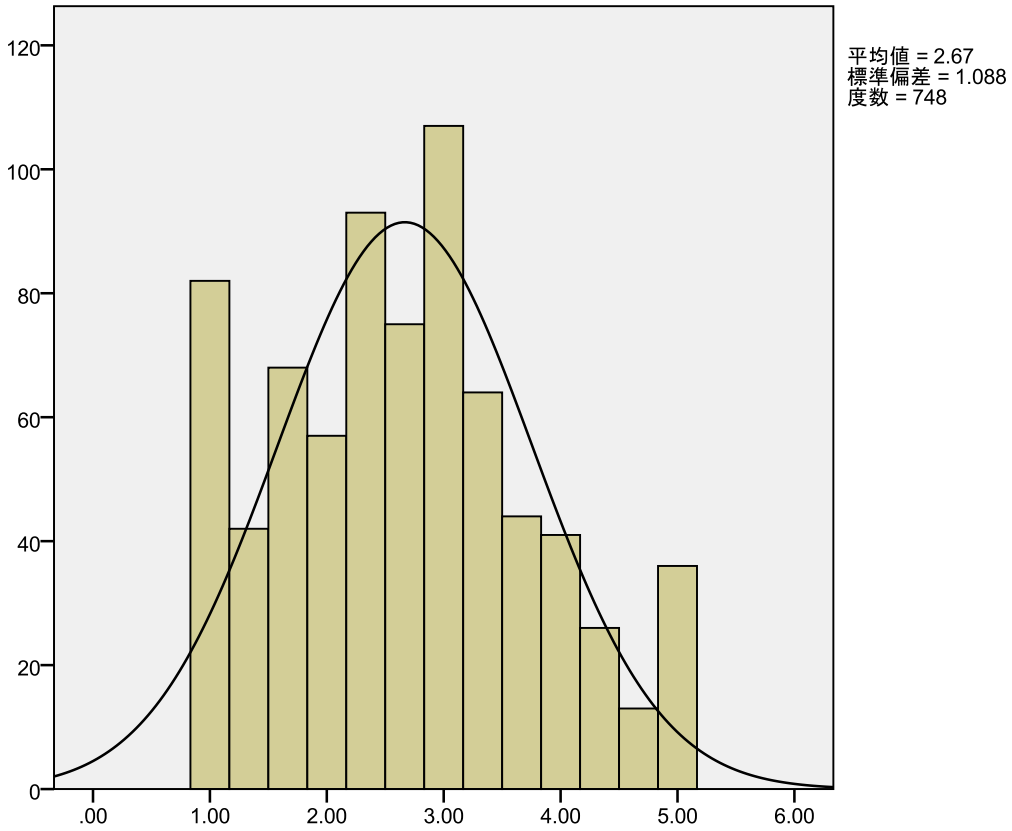


Figure 4-7　正当化の度数分布

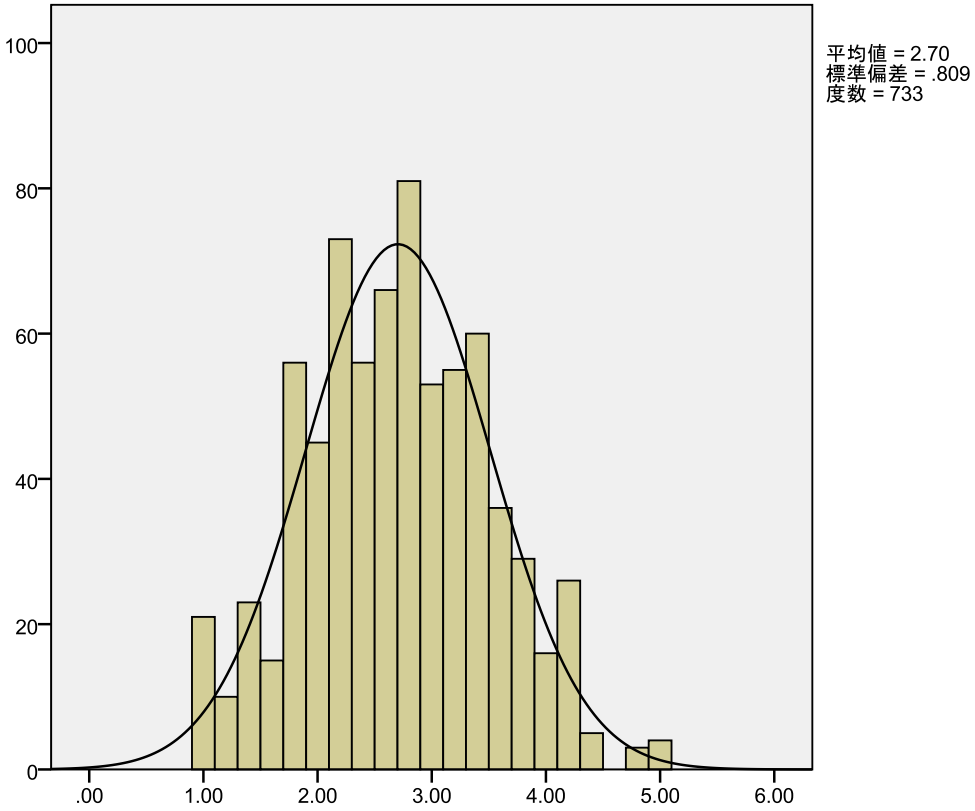


Figure 4-8　秘匿可能性の度数分布

次に，既存の尺度に関しては因子分析による各尺度の因子構造の検討は行わずに，信頼性の検討のみ実施した。まず，小学生用 P-R 攻撃性質問紙尺度のうち「外顕的攻撃」を示す 7 項目について，4 件法で回答を求め，信頼性の確認を行った。「まったくあてはまらない」を 1 点,「あまりあてはまらない」を 2 点,「よくあてはまる」を 3 点,「とてもよくあてはまる」を 4 点と回答を得点化し，α 係数の算出を行った。その結果,「外顕的攻撃」の 7 項目の α 係数は.85（有効回答数 732）と非常に高い信頼性が示された。この結果に基づき,「外顕的攻撃」の 7 項目の回答得点を加算し，項目数の 7 で割った値を下位尺度得点とした。この得点は理論的には 1 点から 4 点に分布し，この得点が高いほど，児童の外顕的攻撃傾向は高いことを示す。「外顕的攻撃」の平均点は 2.05（SD=0.70）であった。以下の分析ではこの下位尺度得点を使用した。

同様に，児童の攻撃性のうち「関係性攻撃」を示す 7 項目について，4 件法で回答を求め，信頼性の検討を行った。「外顕的攻撃」と同じように回答を得点化し，α 係数の算出を行った。その結果,「関係性攻撃」の 7 項目の α 係数は.82（有効回答数 743）と非常に高い信頼性が示された。この結果に基づき,「外顕的攻撃」と同様の手法で「関係性攻撃」の下位尺度得点を算出した。「関係性攻撃」の平均点は 1.67（SD=0.56）であった。以下の分析ではこの下位尺度得点を使用した。以上にまとめた本研究で使用する尺度の得点分布と信頼性係数を Table4-15 に示す。

2. 各下位尺度得点の性差・学年差

関係性攻撃観の各下位尺度得点ならびに，外顕的攻撃と関係性攻撃の尺度得点を従属変数とし，性別と学年を独立変数とした多変量分散分析を行った。その結果，性別と学年の主効果，および交互作用のデータ全体の群間の差を示す Wilks のラムダが有意であった（性別：$\Lambda(6, 666)=.92$, $p<.001$, 学年：$\Lambda(12, 1332)=.86$, $p<.001$, 交互作用：$\Lambda(12, 1332)=.96$, $p<.01$）。そこで，各従属変数について，性別と学年と要因とする二要因の分散分析を行った（Table4-16）。

分散分析の結果,「否定的認識」において有意傾向の交互作用がみられた（$F_{(2,671)}=2.98$, $p<.051$）。Bonferroni 法による単純主効果の検定を行った結果,

Table 4-15 尺度得点の分布と信頼性

変数	n	項目数	得点	分布		理論的中間点	α係数
			平均値(標準偏差)	歪度	尖度		
否定的認識	739	7	4.24 (0.65)	-1.194	1.660	3.0	.70
身近さ	738	6	2.64 (0.83)	.291	-.369	3.0	.71
正当化	748	3	2.67 (1.09)	.288	-.593	3.0	.74
秘匿可能性	733	4	2.70 (0.81)	.099	-.312	3.0	.68
外顕的攻撃	732	7	2.05 (0.70)	.535	-.373	2.5	.85
関係性攻撃	743	7	1.67 (0.56)	.917	.764	2.5	.82

Table 4-16 性別（2）×学年（3）の二要因分散分析

従属変数	性別	4年生(N=212) 平均 (SD)	5年生(N=258) 平均 (SD)	6年生(N=207) 平均 (SD)	総和 平均 (SD)	主効果 F値$_{(df)}$ 性別	主効果 F値$_{(df)}$ 学年	交互作用 F値$_{(df)}$
否定的認識	男子(N=360)	4.33 (0.51)	4.14 (0.67)	4.14 (0.75)	4.20 (0.66)	$9.33_{(1,671)}^{**}$ **男子<女子**	*ns*	$2.98_{(2,671)}^{\dagger}$ 5・6年生：男子<女子 男子：5年生<4年生
	女子(N=317)	4.31 (0.64)	4.35 (0.62)	4.41 (0.58)	4.35 (0.61)			
	総和	4.32 (0.58)	4.24 (0.65)	4.27 (0.68)	4.27 (0.64)			
身近さ	男子(N=360)	2.30 (0.69)	2.50 (0.75)	2.95 (0.90)	2.58 (0.83)	$5.06_{(1,671)}^{*}$ **男子<女子**	$40.42_{(2,671)}^{**}$ **4年生<5年生<6年生**	*ns*
	女子(N=317)	2.34 (0.67)	2.74 (0.79)	3.08 (0.96)	2.72 (0.86)			
	総和	2.32 (0.68)	2.61 (0.78)	3.02 (0.93)	2.64 (0.84)			
正当化	男子(N=360)	2.56 (1.07)	2.88 (1.06)	2.95 (1.19)	2.81 (1.12)	$9.87_{(1,671)}^{**}$ **女子<男子**	$5.80_{(2,671)}^{**}$ **4年生<6年生**	*ns*
	女子(N=317)	2.42 (1.01)	2.45 (1.09)	2.75 (1.03)	2.53 (1.05)			
	総和	2.49 (1.04)	2.69 (1.10)	2.86 (1.12)	2.68 (1.10)			
秘匿可能性	男子(N=360)	2.51 (0.76)	2.50 (0.78)	3.03 (0.81)	2.67 (0.82)	*ns*	$12.32_{(2,671)}^{***}$ 4・5年生<6年生	$3.93_{(2,671)}^{*}$ 4・5年生：男子<女子 男子：4・5年生<6年生
	女子(N=317)	2.73 (0.78)	2.73 (0.84)	2.87 (0.85)	2.77 (0.82)			
	総和	2.62 (0.78)	2.61 (0.81)	2.96 (0.83)	2.72 (0.82)			
外顕的攻撃	男子(N=360)	1.96 (0.68)	2.13 (0.64)	2.33 (0.82)	2.14 (0.73)	$18.62_{(1,671)}^{***}$ **女子<男子**	$15.01_{(2,671)}^{***}$ **4年生<5・6年生**	*ns*
	女子(N=317)	1.72 (0.58)	1.97 (0.64)	2.06 (0.67)	1.92 (0.64)			
	総和	1.84 (0.64)	2.06 (0.65)	2.21 (0.76)	2.04 (0.70)			
関係性攻撃	男子(N=360)	1.47 (0.47)	1.71 (0.59)	1.84 (0.60)	1.68 (0.58)	*ns*	$20.43_{(2,671)}^{***}$ **4年生<5年生<6年生**	*ns*
	女子(N=317)	1.51 (0.50)	1.62 (0.53)	1.82 (0.52)	1.64 (0.53)			
	総和	1.49 (0.48)	1.67 (0.57)	1.83 (0.56)	1.66 (0.56)			

注）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

「否定的認識」は，5 年生における性別の単純主効果が有意で（$F_{(1,671)}$=6.93, p<.01），女子は男子よりも高い得点を示した（p<.01）。また，6 年生における性別の単純主効果も有意で（$F_{(1,671)}$=8.76, p<.01），女子は男子よりも高い得点を示した（p<.01）。さらに，男子における学年の単純主効果が有意で（$F_{(2,671)}$=3.13, p<.05），多重比較の結果，4 年生は 5 年生よりも高い得点を示した（p<.10）。次に，「身近さ」得点において，有意な性別の主効果が認められ（$F_{(1,671)}$=5.06, p<.05），女子は男子よりも高い得点を示した（p<.05）。また，「身近さ」得点には，学年の主効果も認められた（$F_{(2,671)}$=40.42, p<.001）。Tukey 法による多重比較の結果，5 年生は 4 年生よりも高い得点を示し，さらに 6 年生は 4，5 年生よりも高い得点を示した（p<.001）。

また，「正当化」得点において，有意な性別の主効果が認められ（$F_{(1,671)}$=9.87, p<.01），男子は女子よりも高い得点を示した（p<.01）。また，「正当化」得点には，学年の主効果も認められた（$F_{(2,671)}$=5.80, p<.01）。Tukey 法による多重比較の結果，6 年生は 4 年生よりも高い得点を示した（p<.01）。

さらに，「秘匿可能性」において有意な交互作用がみられた（$F_{(2,671)}$=3.93, p<.05）。交互作用が有意であったことから，Bonferroni 法による単純主効果の検定を行った。その結果，「秘匿可能性」は，4 年生における性別の単純主効果が有意傾向で（$F_{(1,671)}$=3.77, p<.053），女子は男子よりも高い得点を示した（p<.053）。また，5 年生における性別の単純主効果も有意で（$F_{(1,671)}$=5.25, p<.05），女子は男子よりも高い得点を示した（p<.05）。さらに，男子における学年の単純主効果が有意で（$F_{(2,671)}$=16.11, p<.001），多重比較の結果，6 年生は 4，5 年生よりも高い得点を示した（p<.001）。

そして，「外顕的攻撃」得点に，有意な性別の主効果が認められ（$F_{(1,671)}$=18.62, p<.001），男子は女子よりも高い得点を示した（p<.001）。また，「外顕的攻撃」得点には，学年の主効果も認められた（$F_{(2,671)}$=15.01, p<.001）。Tukey 法による多重比較の結果，5，6 年生は 4 年生よりも高い得点を示し（p<.001），6 年生は 5 年生よりも有意傾向の高い得点を示した（p<.10）。

最後に，「関係性攻撃」得点には，有意な学年の主効果が認められた（$F_{(2,671)}$=20.43, p<.001）。Tukey 法による多重比較の結果，5 年生は 4 年生よりも高い得点を示した（p<.01）。そして，6 年生は 4 年生よりも高い得点を示し

（p<.001），同時に 5 年生よりも高い得点を示した（p<.01）。

3. 関係性攻撃経験による関係性攻撃観下位尺度得点差

関係性攻撃の加害経験のある児童は，被害経験しかない児童に比べて，関係性攻撃に許容的になるという仮説を検討するために，関係性攻撃経験による関係性攻撃観下位尺度得点の差の検討を実施した。関係性攻撃観の各下位尺度得点を従属変数，関係攻撃経験を独立変数とする一要因分散分析を行った。その結果を Table 4-17 に示す。

分散分析の結果,「否定的認識」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められた（$F_{(4,715)}$=9.24, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ,「被害群」は「加害群」よりも有意に高い得点を示し（p<.01），同時に「加害・被害群」に対しても有意に高い得点を示した（p<.001）。また,「受身群」も「加害群」より有意に高い得点を示し（p<.05）,「加害・被害群」に対しても有意に高い得点を示した（p<.001）。さらに,「未経験群」は「加害・被害群」より有意に高い得点を示した（p<.001）。

次に,「身近さ」得点に関係性攻撃経験の有意な主効果がみられた（$F_{(4,714)}$=36.86, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ,「加害・被害群」が，その他の全てのグループよりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.001）。また,「加害群」が,「未経験群」よりも有意に高い得点を示した（p<.001）。

続いて,「正当化」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められた（$F_{(4,726)}$=11.54, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ,「加害群」が,「被害群」と「受身群」,「未経験群」よりも高い得点を示した（被害群，受身群：p<.01，未経験群：p<.001）。同様に,「加害・被害群」も,「被害群」と「受身群」,「未経験群」よりも高い得点を示した（いずれも p<.001）。

最後に,「秘匿可能性」得点については，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められなかった（$F_{(4,709)}$=0.77, p>.10）。

4. 関係性攻撃観下位尺度得点と攻撃行動得点の関連

関係性攻撃観の各下位尺度得点と外顕的攻撃，関係性攻撃のそれぞれの関連

Table4-17　関係性攻撃観についての経験群間比較

	全体	加害群	被害群	受身群	加害・被害群	未経験群	F値$_{(df)}$
否定的認識	720名	63名	189名	84名	145名	239名	$9.24_{(4,715)}^{***}$
	4.25(0.65)	4.05(0.74)[ac]	4.38(0.58)[b]	4.37(0.49)[b]	4.02(0.77)[a]	4.29(0.60)[bc]	
身近さ	719名	64名	190名	83名	143名	239名	$36.86_{(4,\ 714)}^{***}$
	2.65(0.84)	2.83(0.77)[a]	2.53(0.80)[ab]	2.53(0.74)[ab]	3.29(0.83)[c]	2.35(0.69)[b]	
正当化	731名	64名	194名	85名	145名	243名	$11.54_{(4,\ 726)}^{***}$
	2.67(1.08)	3.08(1.14)[a]	2.57(1.06)[b]	2.42(0.96)[b]	3.08(1.07)[a]	2.49(1.04)[b]	
秘匿可能性	714名	61名	191名	81名	143名	238名	$0.77_{(4,\ 709)}$
	2.70(0.81)	2.77(0.72)	2.65(0.86)	2.73(0.79)	2.78(0.79)	2.69(0.81)	

注1）$^{***}p<.001$

注2）各得点について，異なるアルファベットがついているものの間に有意な差がみられた

を，各尺度得点間の相関係数を算出した。その際，各尺度得点で確認された性差や学年差を考慮し，性別ごと，ならびに学年ごとの相関係数も算出した。その結果を Table4-18，19，20 に示す。

まず，関係性攻撃観の各下位尺度得点同士の関連について言及すると，「否定的認識」得点は，「身近さ」と「正当化」，「秘匿可能性」の下位尺度得点と低い有意な負の相関を示した。一方で，「身近さ」，「正当化」，「秘匿可能性」は低～中程度の有意な正の相関を示した。男女別では，女子にのみに「否定的認識」と「利便性」に有意な負の相関が示された（r=-.14, p<.01）。また，学年別では，6 年生のみに「否定的認識」と「秘匿可能性」に有意な負の相関が示された（r=-.16, p<.01）。そして，5 年生では，「否定的認識」と「身近さ」の間に有意な関連が示されなかった。

次に，関係性攻撃観の各下位尺度得点と外顕的攻撃，関係性攻撃の関連について言及すると，「否定的認識」得点は，「外顕的攻撃」と「関係性攻撃」の尺度得点と有意な低い負の相関を示した。一方で，「身近さ」，「正当化」，「利便性」は，2 つの攻撃行動の得点に対して低～中程度の有意な正の相関を示した。学年別では，4 年生のみ「秘匿可能性」と「関係性攻撃」に有意な相関が示されなかった。なお，関係性攻撃と外顕的攻撃の間には，有意な高い正の相関がみられた。

続いて，外顕的攻撃得点と関係性攻撃得点間の高い相関を考慮して，双方を統制しあった攻撃行動得点と，関係性攻撃観の各下位尺度得点の関連を検討するために，Amos22 を用いた共分散構造分析を実施した。

まず，モデルの第一水準には，関係性攻撃観の各下位尺度得点を置き，全ての変数間に相関を設定した。次に，第二水準に外顕的攻撃得点と関係性攻撃得点を置き，双方に誤差項を設置した。そして，第一水準の全ての変数から 2 つの攻撃行動得点にパスを引いた。以上のモデルから分析を始め，有意でないパスを削除し，適合度が最適となるモデルを探索した。その結果，得られたモデルの適合度は，$\chi^2_{(1)}$=3.44,p<.10，GFI=.998，AGFI=.965，CFI=.997，RMSEA=.060 であり，十分な値を示していた。このモデルを Figure4-9 に示す。

モデルの結果を詳しく見ると，関係性攻撃観の下位尺度のうち，「否定的認識」，「身近さ」，「正当化」の各得点は，外顕的攻撃と関係性攻撃の双方に有意な関

Table 4-18　各尺度得点間の相関係数

	1	2	3	4	5	6
1　否定的認識	-	-.18 ***	-.24 ***	-.15 ***	-.22 ***	-.24 ***
2　身近さ		-	.34 ***	.34 ***	.44 ***	.42 ***
3　正当化			-	.26 ***	.44 ***	.35 ***
4　秘匿可能性				-	.14 ***	.19 ***
5　外顕的攻撃					-	.64 ***
6　関係性攻撃						-

注1）$^{***}p<.001$

Table 4-19　各尺度得点間の相関係数（男女別）

	1	2	3	4	5	6
1　否定的認識	-	-.29 ***	-.27 ***	-.25 ***	-.20 ***	-.27 ***
2　身近さ	-.13 **	-	.44 ***	.33 ***	.43 ***	.44 ***
3　正当化	-.21 ***	.30 ***	-	.30 ***	.40 ***	.38 ***
4　秘匿可能性	.04	.35 ***	.26 ***	-	.12 *	.14 **
5　外顕的攻撃	-.21 ***	.49 ***	.45 ***	.18 ***	-	.65 ***
6　関係性攻撃	-.22 ***	.41 ***	.33 ***	.24 ***	.64 ***	-

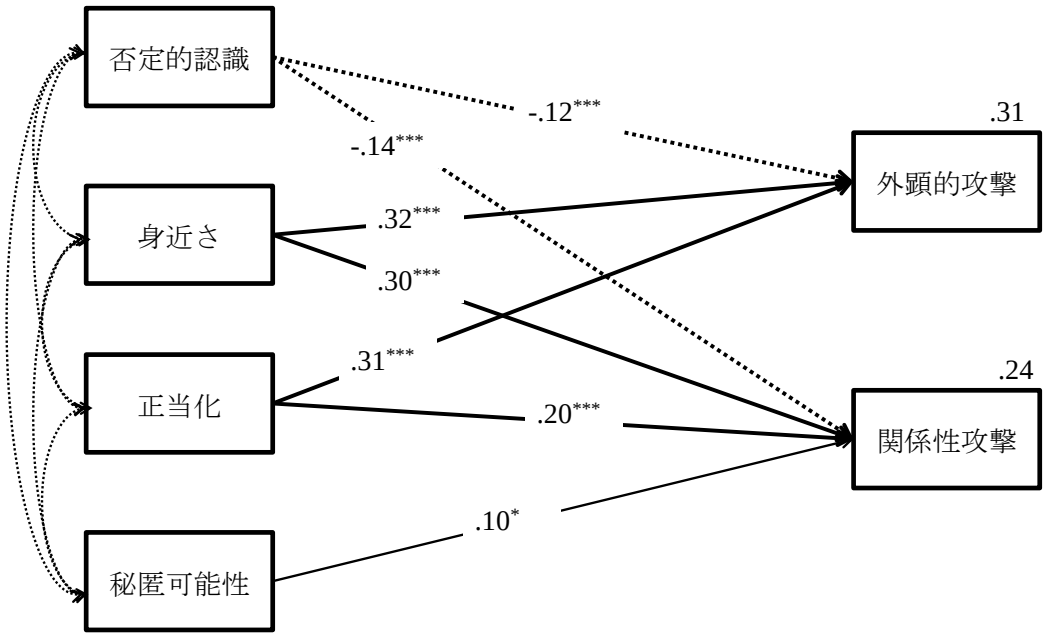
注1）$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

注2）右上が女子，左下が男子の相関係数行列

Table 4-20　各尺度得点間の相関係数（学年別）

	2 身近さ	3 正当化	4 秘匿可能性	5 外顕的攻撃	6 関係性攻撃
1 否定的認識					
4年生	-.16 *	-.22 ***	-.01	-.23 ***	-.33 ***
5年生	-.01	-.19 ***	.04	-.14 *	-.27 ***
6年生	-.38 ***	-.32 ***	-.16 *	-.27 ***	-.13 †
2 身近さ					
4年生		.19 **	.09	.46 ***	.48 ***
5年生		.25 ***	.35 ***	.32 ***	.25 ***
6年生		.50 ***	.44 ***	.46 ***	.45 ***
3 正当化					
4年生			.16 *	.29 ***	.19 **
5年生			.25 ***	.38 ***	.34 ***
6年生			.33 ***	.61 ***	.45 ***
4 秘匿可能性					
4年生				-.14 *	-.05
5年生				.13 *	.22 ***
6年生				.30 ***	.29 ***
5 外顕的攻撃					
4年生					.70 ***
5年生					.63 ***
6年生					.56 ***

注1）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$



注 1) $\chi^2_{(1)}$=3.44,p<.10， GFI=.998， AGFI=.965， CFI=.997， RMSEA=.060

注 2) $^{*}p$<.05， $^{***}p$<.001

注 3) 誤差項と相関係数の記載は省略した

Figure4-9 関係性攻撃観尺度の下位尺度得点と攻撃行動の関連

連を示した。しかし,「秘匿可能性」のみは，関係性攻撃にのみ有意な関連を示した。

第 4 項　考察

1.　関係性攻撃観尺度改訂版の因子構造

本研究の主要な目的は，研究 1 で作成した関係性攻撃観尺度を改良することにあった。研究 1 で作成した尺度は，原項目が 50 項目と非常に多く，かつ多くの項目に得点の偏りが認められていた。本研究では，項目を精選し，件法を 5 件法に改めることで，尺度の改良を試みた。その結果，多くの項目の得点の偏りは改善された。

因子分析の最終的な結果，得られた関係性攻撃観尺度改訂版は，24 項目 4 因子構造であった。その 4 因子とは「身近さ」,「否定的認識」,「正当化」,「秘匿可能性」であり，研究 1-2 で得た結果とほぼ同じであった。第 1 因子である「身近さ」は，関係性攻撃の生起頻度や行動の普及についての認識を示す項目群から構成された。これらの項目は，先行研究から想定された分類である「B. 記述的規範」に該当すると考えられた。第 2 因子である「否定的認識」は，関係性攻撃について否定的な記述が集まって構成された。これら，関係性攻撃を容認しないという社会的な望ましさを規定する内容の項目群は，先行研究で論じられてきた命令的規範に該当すると考えられた。しかし，命令的規範には，報復的な攻撃行動を容認するという項目も含まれることが想定されており,研究 1-1 におけるカテゴリ生成においても,「A2. 正当化」のカテゴリが「A. 命令的規範」に含まれている。本研究では，その「A2. 正当化」に該当する項目群は，独立した第 3 因子を構成した。ただし，先行研究でも，攻撃行動について一般的に許容する傾向と，報復的攻撃行動について許容する傾向は分けて検討されている（Huesmann & Guerra, 1997）。よって,「否定的認識」と「正当化」が分かれて因子を構成したことは，先行研究の規範の分類に合致した結果であると考えられる。なお, 第 3 因子の正当化には,「C2. 肯定的効果」が新たに含まれ，より一層関係性攻撃に対する肯定的な捉え方を反映する因子となった。そして，第 4 因子「秘匿可能性」は小カテゴリ「D1. 秘匿可能性」から構成された。それらは，関係性攻撃が周囲に気づかれにくい手段であることといった記述内容

の項目群である。

最終的に残った項目は，研究 1 の結果から想定していた項目内容を網羅していたため，十分な内容的妥当性を有していると考えられた。そして，4 因子の各尺度得点の α 係数も概ね満足できる値であり，本尺度の内的一貫性も確認されたと考えられた。

2. 各下位尺度得点の性差・学年差

関係性攻撃観の各下位尺度得点についての性別と学年による 2 要因分散分析を実施した結果，多くの性差・学年差が示された。まず，「否定的認識」得点は，4 年生と女子の得点が高いことが示された。次に，「身近さ」得点は，女子の得点が高く，学年が上がるごとに得点が高くなることが示された。続いて，「正当化」得点は，男子の得点が高く，6 年生の得点が高いことが示された。そして，「秘匿可能性」得点は，4，5 年生で女子の得点が高く，男子では 6 年生の得点が高いことが示された。

以上の結果から，小学生の関係性攻撃の捉え方には，以下の特徴があることが考えられる。第一に，社会的な望ましさを規定する命令的規範に関わる「否定的認識」や「正当化」の結果から，関係性攻撃を許容する傾向は男子と高学年で高く，関係性攻撃を許容しない傾向は女子と低学年で高いということである。ここで示された，攻撃行動を否定的に捉える傾向が男子よりも女子の方が高いという結果は先行研究と一致した知見である（Murray-Close et al., 2006）。また，高学年になるほど，関係性攻撃を許容する傾向が高まることも，先行研究の知見に一致した結果である（Cillessen & Mayeux, 2004）。この点は，研究 1 と同様に，高学年ほど関係性攻撃が頻繁に起きている状況での社会化が進み，その状況に適応するために関係性攻撃を容認する傾向が高まると考えられる。

第二に，「身近さ」得点の結果から，女子の方が男子よりも，また高学年の方が低学年よりも関係性攻撃を日常的な現象とみなしている可能性が示唆された。そもそも，関係性攻撃は女性に多く用いられる攻撃行動として提唱されているため（Crick & Grotpeter, 1995），男子よりも女子の方が関係性攻撃についての「身近さ」得点が高いことは自然であると考えられる。また，文部科学省の統計によれば，いじめ問題が，その認知件数でピークを迎えるのは中学 1 年生と

されている（文部科学省，2014）。よって，いじめに特徴的な攻撃形態である関係性攻撃を，6 年生の方が 5 年生よりも身近に感じるということは，現状のいじめ問題を反映した結果と考えられる。

第三に,「秘匿可能性」得点の結果から，元々女子は男子よりも関係性攻撃の道具的な機能面を熟知しており，学年の上昇に伴い，男子も関係性攻撃の機能の理解を深めていく可能性が示唆された。前述したように，関係性攻撃は女性が多く用いる攻撃行動とされている。それは，女性にとって重要な社会的な関係にダメージを与える関係性攻撃が，女性を傷つけるためには有効であるためである（Crick & Grotpeter, 1995）。このことから，女子は男子よりも早く，関係性攻撃の道具的な有用性を理解している可能性が考えられる。そして同時に，関係性攻撃の遂行が頻繁になる，小学生高学年の時期に，男子も関係性攻撃についての知識を得て，女子と同程度の水準にキャッチアップする可能性も考えられる。

3. 関係性攻撃経験による攻撃観の差異

関係性攻撃の経験の違いにより，関係性攻撃観の下位尺度得点に差が生じるかどうかを検討するために，関係性攻撃観の各下位尺度得点について，関係性攻撃経験による一要因の分散分析を実施した。その結果,「否定的認識」,「身近さ」,「正当化」の尺度得点において，経験の有意な差が確認された。

まず，関係性攻撃に対する命令的規範にかかわる「否定的認識」と「正当化」得点は，関係性攻撃経験との関連で類似した結果を示した。多重比較の結果から,「否定的認識」は加害経験のない児童の得点が低く，逆に「正当化」得点は，加害経験のある児童の得点が他の群よりも高いことが示された。この結果は，攻撃行動を許容する傾向と実際の攻撃行動の関連を指摘してきた先行研究の知見に一致するものと考えられる（Huesmann & Guerra, 1997; Werner & Nixon, 2005）。つまり，事前に想定した加害経験と関係性攻撃を許容する傾向に関連があるという仮説が支持されたと言えるだろう。

次に,「身近さ」得点については，加害・被害経験群の得点が他の全ての群よりも高く，そして加害経験群が未経験群よりも高得点という結果が示された。この結果から，加害も被害も経験している小学生が最も関係性攻撃を日常的な

ものと捉えている可能性が示唆された。そして逆に，関係性攻撃を全く経験していない小学生が関係性攻撃を日常的な現象と捉えていない可能性が示唆された。関係性攻撃の具体的な行動である無視は，その実施が容易であるため，加害・被害の立場が頻繁に入れ替わることが指摘されている（国立教育政策研究所, 2013）。つまり，加害経験も被害経験も持つ児童は，関係性攻撃の渦中にいると考えられるので,「身近さ」得点が高くなることは自然であると考えられる。

最後に,「秘匿可能性」得点には，経験による有意な差はみられなかった。「秘匿可能性」は関係性攻撃の道具的な側面に関する認識なので，単純な加害経験や被害経験よりも，関係性攻撃による成功体験や失敗体験が関連している可能性がある。関係性攻撃はターゲットの周囲の社会的関係を操作するため，加害者の仲間集団内での地位が低い場合，有効な関係性攻撃を遂行できず，不適応につながることが示唆されている（Card & Little, 2007）。一方で，社会的に有能な加害者は，関係性攻撃の遂行によって，自分の高い地位を維持することができると指摘されている（Cillessen & Mayeux, 2007）。なお，関係性攻撃の遂行の結果の成否は，加害者の反応的攻撃傾向と能動的攻撃傾向のバランスが関わっているとされている（Card & Little, 2007）。つまり，より経験を細分化するか，児童の社会的地位，あるいは攻撃行動の機能面に関わる性格傾向などを統制することで,「秘匿可能性」と経験の関連について，新たな知見を得ることが期待できるだろう。

以上の関係性攻撃観尺度の下位尺度得点と経験の関連から，関係性攻撃観尺度の基準関連妥当性が示されたと考えられる。

4. 関係性攻撃観と攻撃行動の関連

関係性攻撃観の各下位尺度得点と 2 種類の攻撃行動の関連を検討するために，共分散構造分析を実施した。その結果,「否定的認識」,「身近さ」,「正当化」の 3 つの得点は外顕的攻撃と関係性攻撃の双方の攻撃行動得点と有意な関連を示した。そして「秘匿可能性」得点が関係性攻撃得点のみと有意な関連を示した。

本研究の結果では，関係性攻撃観の各下位尺度得点は，関係性攻撃得点のみへのユニークな関連を示すことができなかった。その理由としては，以下の 2 点が考えられる。第一に，外顕的攻撃に対する認知変数を設定しなかったこと

が挙げられる。先行研究では，外顕的攻撃に対する規範的信念と関係性攻撃に対する規範的信念を相互に統制し合わせることで，攻撃行動の形態別の信念が外顕的攻撃と関係性攻撃それぞれに独自に関連することが示されている（Werner & Nixon, 2005）。しかし，本研究では，関係性攻撃観尺度に対をなす，外顕的攻撃についての認識を測定しなかった。そのために，関係性攻撃観尺度の各下位尺度得点は，関係性攻撃のみならず，外顕的攻撃にも有意な関連を示したと考えられる。

第二に，攻撃行動の測定方法が挙げられる。本研究では，攻撃行動の測定は自己評定によって行われた。そのために，攻撃行動間の相関が非常に高くなったと考えられる。もともと，関係性攻撃と外顕的攻撃は仲間評定であっても，完全に分化したものではなく，中程度の相関関係にあることが示されている（Crick & Grotpeter, 1995）。よって，自己評定を採用した本研究においては，関係性攻撃と外顕的攻撃が仲間評定の結果よりも高い相関を持つものとして測定された可能性が考えられる。

その中で，本研究では「秘匿可能性」得点のみが関係性攻撃と有意な関連を示した。これは,「秘匿可能性」得点が関係性攻撃の不可視性といった関係性攻撃の特徴についての認識を捉えているためだと考えられる。そのため,「秘匿可能性」得点は関係性攻撃よりも目立つ外顕的攻撃に対して有意な関連を示さなかったと推察できる。つまり,「秘匿可能性」得点は関係性攻撃の独自の特徴を捉えることが可能であり，関係性攻撃観尺度の弁別的妥当性が部分的に示されたと考えられる。

5. 本研究のまとめ

本研究は，小学生用の関係性攻撃観尺度の改訂版の作成と信頼性，妥当性の検討を目的に実施された。本研究の結果，尺度項目の得点の偏りが修正された関係性攻撃観尺度の改訂版が作成された。改訂版の関係性攻撃観尺度は研究 1-2 の尺度の因子数と同じく,「身近さ」,「否定的認識」,「正当化」,「秘匿可能性」の 4 因子構造であり，各因子を構成した項目による α 係数は.68～.74 と使用に耐えうる値を示した。また，関係性攻撃観尺度の 4 下位尺度得点の性差と学年差，関係性攻撃経験による群間差の検討を実施し，概ね想定どおりの関連が示

された。これらのことから関係性攻撃観尺度の基準関連妥当性が確認された。さらに，関係性攻撃観尺度の 4 下位尺度得点と，外顕的攻撃と関係性攻撃の関連を検討した結果，今回改訂した尺度について，部分的に弁別的妥当性が確認された。

以上のことから，関係性攻撃観尺度の改訂を行うという本研究の目的は，概ね達成されたと考えられる。

第 4 節　第 4 章のまとめ

第 4 章では，小学生の関係性攻撃観を測定するための質問紙尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討することが目的であった。この目的を達成するために，第 1 節の研究 1-1 では，関係性攻撃観尺度の項目を作成するために，文章完成法方式の調査を実施した。その結果，関係性攻撃観の構成要素として，4 種類の大カテゴリ，12 種類の小カテゴリを得た。

第 2 節の研究 1-2 では，研究 1-1 の知見を基に，小学生用の関係性攻撃観尺度を作成した。その結果，4 因子 24 項目からなる関係性攻撃観尺度が作成された。この尺度について，因子を構成する項目群ごとに α 係数による信頼性係数を産出したところ，一部信頼性が低い項目群があったが，概ね十分な内的一貫性が確認された。しかし，尺度を構成する項目のほとんどにおいて，得点の偏りが見られ，尺度の問題として残された。

そこで，第 3 節の研究 2 では，前節で作成された関係性攻撃観尺度の項目を一部変更し，また件法も改めて，新たに質問紙尺度を作成し，信頼性，妥当性を検討した。件法を改めた結果，項目得点にみられた偏りは少なくなった。また因子分析の結果，4 因子 20 項目からなる関係性攻撃観尺度改訂版が得られた。特に第 4 因子を構成する項目に，若干の変更があり，前節で作成した尺度の「利便性」とは異なる因子の「秘匿可能性」が得られた。「秘匿可能性」は関係性攻撃の独自の特徴であると考えられるため，尺度の改訂によって，より関係性攻撃に焦点を当てることが可能になったと考えられる。また，因子を構成する項目群ごとに α 係数による信頼性係数を算出したところ，一部信頼性が低い項目群があったが，概ね十分な内的一貫性が確認された。次に，関係性攻撃観尺度改訂版の各下位尺度得点の分布を確認したところ，各得点において分布の偏り

が改善されたことが確認された。続いて，関係性攻撃観尺度改訂版の各下位尺度得点の性差・学年差を検討し，改訂前よりも多くの有意差が確認された。ただし，学年差については，研究 1-2 と研究 2 では対象となった学年が 5・6 年生と 4～6 年生という違いがあるので,単純に比較することはできないと考えられる。特に研究 2 では，4 年生と 6 年生の間に有意な差が確認されている得点もあるので，全てが尺度の改訂による変化とは考えられない。このことから尺度の改訂により，より明確な性差・学年差を確認することができた。これら，尺度の改訂による変化は Table4-21-1，4-21-2 にまとめた。

研究 2 では，関係性攻撃経験による関係性攻撃観の得点差の検討も行った。その結果，概ね想定通りの経験と関係性攻撃観の関連が示された。最後に，関係性攻撃観と攻撃行動の関連が検討された。その結果，関係性攻撃と外顕的攻撃の両者と関係性攻撃観尺度の各下位尺度が関連を示した。そして,「秘匿可能性」のみ，関係性攻撃だけと有意な関連を示した。これらの結果から，作成した関係性攻撃観尺度の基準関連妥当性が確認されたと考えられた。よって，信頼性・妥当性の確認された関係性攻撃観尺度が作成されたと考えられた。

Table 4-21-1 関係性攻撃観尺度の改訂前後の比較

	因子構造	信頼性	下位尺度得点の分布	
原版	**4因子構造23項目** Ⅰ. 否定的認識（9項目） Ⅱ. 身近さ（7項目） Ⅲ. 正当化（3項目） Ⅳ. 利便性（4項目）	**内的一貫性** Ⅰ. 否定的認識 α=.80 Ⅱ. 身近さ α=.77 Ⅲ. 正当化 α=.70 Ⅳ. 利便性 α=.68	**尖度** 否定的認識 3.50 身近さ -0.40 正当化 -0.52 利便性 0.59	**歪度** 否定的認識 -1.59 身近さ 0.13 正当化 0.38 利便性 0.86
改訂版	**4因子構造20項目** Ⅰ. 身近さ（6項目） Ⅱ. 否定的認識（7項目） Ⅲ. 正当化（3項目） Ⅳ. 秘匿可能性（4項目）	**内的一貫性** Ⅰ. 身近さ α=.71 Ⅱ. 否定的認識 α=.70 Ⅲ. 正当化 α=.74 Ⅳ. 秘匿可能性 α=.68	**尖度** 身近さ -0.37 否定的認識 1.66 正当化 -0.59 秘匿可能性 -0.31	**歪度** 身近さ 0.29 否定的認識 -1.19 正当化 0.29 秘匿可能性 0.10

Table 4-21-2 関係性攻撃観尺度の改訂前後の比較

	性差・学年差		
原版	**性差** 否定的認識 ns 身近さ ns 正当化 ns 利便性 ns	**学年差** 否定的認識 ns 身近さ 5年<6年 正当化 ns 利便性 ns	**交互作用** 否定的認識 男子：6年<5年 身近さ ns 正当化 ns 利便性 ns
改訂版	**性差** 身近さ 男子<女子 否定的認識 男子<女子 正当化 女子<男子 秘匿可能性 ns	**学年差** 身近さ 4年<5年<6年 否定的認識 ns 正当化 4年<6年 秘匿可能性 4･5年<6年	**交互作用** 身近さ ns 否定的認識 5･6年：男子<女子 男子：5年<4年 正当化 ns 秘匿可能性 4･5年：男子<女子 男子：4･5年<6年

第 5 章

小学生の関係性攻撃生起の内的プロセスに関する検討

（研究 3・研究 4・研究 5・研究 6）

第 5 章のはじめに

本章では，小学生の関係性攻撃が生起する内的プロセスの検討を行うため，Crick & Dodge（1994）の社会的情報処理（social information processing; SIP）モデルに基づき実施された一連の研究を報告する。本論文では，関係性攻撃の生起に関わる要因として，SIP モデルにおける潜在的知識構造に該当すると想定した関係性攻撃観を取り上げている。SIP モデルでは，潜在的知識構造は行動の表出にダイレクトに関与するだけでなく，対人相互作用場面における情報処理過程にも作用することで，行動の表出に関連することが想定されている（Crick & Dodge, 1994; Dodge, 1993）。実際に，潜在的知識構造，情報処理過程，外顕的攻撃の三者間の関連を検討した先行研究によれば，攻撃行動を容認する傾向が，反応行動のレパートリーにおける攻撃行動の多さ（反応行動の検索における歪み）を規定し，さらにその後の攻撃行動を高めることが示されている（Zelli et al., 1999）。しかし，関係性攻撃の生起については，潜在的知識構造とオンラインの情報処理過程の双方がどの様に関連しているか，未だに明らかになっていない（Linder et al., 2010）。そこで，本章では，関係性攻撃観，対人相互作用場面におけるオンラインの情報処理過程，表出される反応行動の三者間の関連を検討することを目的とする。

SIP モデルの先行研究の文脈では，対人相互作用場面におけるオンラインの情報処理過程は，場面想定法を用いた質問紙調査によって測定されてきた。子ども達に架空の被害場面を提示し，SIP モデルのオンライン情報処理過程である符号化・解釈，目標の明確化，反応検索，反応決定の 5 つのステップを測定するための設問への回答を求める手続きがとられる。そして最後に，反応実行過程に該当する応答的行動を測定する。さらに，この測定の手続きでは，場面による影響をコントロールするために，通常複数の架空の場面が提示される。つまり，上記の情報処理過程と応答的行動の測定が複数回繰り返されるため，質問の項目数が膨大になる傾向がある。本研究は対象が小学生であること，また調査時には小学校の授業時間を利用することといった理由から，質問項目数を少なくする必要があった。そこで，本研究では，SIP モデルのオンライン情報処理過程の各ステップを個別に取り上げ，それぞれと関係性攻撃観，応答的行動の関連を検討する。

よって本章の構成は，各節でオンライン情報処理過程の各ステップとの関連を検討する。まず，第 1 節で関係性攻撃観と，情報処理過程の第 1・2 ステップである符号化・解釈過程，応答的行動の関連を検討する（研究 3)。次に，第 2 節で関係性攻撃観と，情報処理過程の第 3 ステップである目標明確化過程，応答的行動の関連を検討する（研究 4)。続いて，第 3 節では，オンライン情報処理過程の第 4 ステップである反応検索を取りあげ，関係性攻撃観と応答的行動の関連を検討する（研究 5)。最後に，第 4 節で第 5 ステップである反応決定過程と関係性攻撃観，応答的行動の関連を検討する。本章の一連の研究を実施することで，関係性攻撃の生起に関わる詳細な内的過程を明らかにすることが期待できる。

第 1 節　小学生の関係性攻撃の認識と解釈ステップの検討（研究 3）

第 1 項　目的

本研究では，小学生の関係性攻撃の生起を説明するモデルとして SIP モデルを採用し，潜在的知識構造，対人相互作用場面における情報処理過程，応答的行動の関連を検討することを目的とする。特に，本研究では潜在的知識構造は，関係性攻撃をどの様に捉えているかという，子ども達の関係性攻撃についての認識であると仮定している。そのため，研究 1・2 で作成した小学生の関係性攻撃の捉え方を測定可能な関係性攻撃観質問紙尺度により，潜在的知識構造を捉える。

また，本研究では，オンライン情報処理過程の中でも第 1・2 ステップを取り上げる。第 1・第 2 ステップは，直面した社会的情報における手がかりに焦点を当てる符号化のプロセスと，その手がかりを解釈するに至るまでのプロセスである。過去の経験を通して得た関連する知識である潜在的知識構造を参照し，眼前に提示された状況を解釈し，理解に至るまでが第 1，第 2 ステップの機能であると想定されている。攻撃行動の生起に関連する符号化・解釈の情報処理の歪みとして，敵意帰属バイアス（hostile attributional bias）に非常に多くの注目が集まっており，研究の蓄積も多い。敵意帰属バイアスは，加害者の意図が曖昧な状況において，自分が何らかの被害を受けた場合，加害者の行動が故意に行われたなどと，より悪意のあったものとして解釈する傾向のことである。状況の解釈はその後の情報処理過程に影響し，結果的に心理社会的適応にも関わる重要な要因だと考えられる。先行研究においても，敵意帰属バイアスと関係性攻撃の関連が指摘されている（Crik, 1995; Crik et al., 2002）。そこで，本研究でも，敵意帰属バイアスを取り上げ，関係性攻撃観と応答的行動との関連を検討する。上記の目的を達成するために，本研究では場面想定法を用いた質問紙調査を小学生対象に実施した。

第 2 項　方法

1.　対象者

茨城県と千葉県の小学 4，5，6 年生 395 名（男子 197 名，女子 194 名，性別不明 4 名）を分析の対象者とした。ただし，分析の対象となる範囲の回答に不

備がない限り，全てを分析の対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2. 調査時期

調査時期は 2013 年 4 月から 2013 年 10 月であった。

3. 手続き

研究 1-2 と同様の手続きで調査を実施した。

4. 質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 4 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。また，本調査が筑波大学大学院の人間系研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②対象者の性別と学年

回答にあたる対象者の基本的な情報として，性別と学年について記入を求めた。

③関係性攻撃観尺度改訂版

研究 2 で作成した関係性攻撃観尺度改訂版を用いた。「否定的認識」（7 項目），「身近さ」（6 項目），「正当化」（3 項目），「秘匿可能性」（4 項目）の 20 項目 5 件法であった。

④場面想定法よる社会的情報処理過程と応答的行動の測定

仲間からの無視，仲間はずれ，陰口といった関係性攻撃被害を示唆する，加害者の意図が曖昧な関係性挑発エピソードを 2 場面提示し，各エピソードで敵

意帰属バイアスと応答的行動を測定した。使用した場面は，Crick et al.(2002)で用いられた場面を日本語訳した文章であり，その内容は①ろうかでのお話，②お昼ご飯のお話であった。①ろうかでのお話は，「学校で，ある朝 あなたがろうかに立っているところをそうぞうしてください。あなたがそこに立っていると，A と B という 2 人の同級生が歩いてきました。A と B はあなたのそばを通る時，あなたを見て，おたがいに何かをささやきあって，そのあとで笑いました。」というストーリーの提示を行った。②お昼ご飯のお話は，「この学校ではお昼ごはんは食堂で好きな友だちと好きな場所で食べてよいことになっていると思って下の文章を読んでください。あなたがお昼を食べるためにすわる場所をさがしているところをそうぞうしてください。へやのむこうがわにあるテーブルに，あなたのしっている人たちが何人か見えました。その子たちはわらったり，たがいに話をしたりして、とても楽しそうに見えました。あなたはその子たちのテーブルまで歩いていきました。あなたがすわったとたんに，その子たちは話すのをやめて，だれもあなたに話しかけません。」というストーリーの提示を行った。

上記の場面は，加害者の意図が曖昧で，明確に関係性攻撃的な危害を与えようとしているかどうかを示す手がかりが明示されていない状況である。こうした場面に置かれた際に，加害者の意図をことさら悪意があったと解釈する傾向が敵意帰属バイアスであり，SIP モデルにおける第 2 ステップ，解釈の情報処理過程の歪みと考えられている。その敵意帰属バイアスを測定するため，「○○（加害者側の登場人物　例 A と B)について，あなたはどのように思いますか」という教示のもと，「○○はわざとやったと思う」などの項目に回答を求めた。1 場面 5 項目ずつ 5 件法であった（Table5-1 参照)。

また，各場面に対する応答的行動を測定するために，「このとき，あなたはどうすると思いますか」という教示のもと，関係性攻撃，外顕的攻撃，主張的行動を想定した項目への回答を求めた。各行動の項目は，1 場面につき 3 項目ずつであり，5 件法であった（Table5-2 参照)。

そして，上記の敵意帰属バイアスと応答的行動に該当する項目の得点は，エピソード間で対応する項目を加算平均する得点化の手続きを行った。

第 3 項　結果

1.　各変数の基本的検討と記述統計量の算出

まず, 敵意帰属バイアスに関する 5 項目について, 主成分分析を行った（Table 5-1）。その結果，第 1 主成分のみが抽出され，寄与率は 52.27%であった。また α 係数は.76 であったため，一次元構造が確認されたと解釈した。そこで，敵意帰属バイアスの 5 項目の回答得点を加算し，項目数の 5 で割った値を下位尺度得点とした。この際，負荷量がマイナスを示した項目 3 に関しては，6 から得点を引く処置を行ってから加算した。この得点は理論的には 1 点から 5 点に分布し，この得点が高いほど，敵意帰属バイアスは高いということを示す。敵意帰属バイアスの平均値は 3.53（*SD*=1.03）であった。

続いて, 応答的行動の 9 項目について因子分析（最尤法, プロマックス回転）を行い，関係性侵害場面における反応表出の具体的な内容を検討した。因子分析の結果，9 項目 3 因子解が得られた（Table5-2）。第 1 因子は，“怒らずに，その子たちに「どうしてこういうことをするの」と言う”，“怒らずに，その子たちに自分の気持ちを伝える”などの項目から構成されていた。これらの項目は，事前に想定していた主張的行動に該当する項目群であった。そのため，第 1 因子を「主張的行動」と命名した。また，第 2 因子は，“その子たちのことをたたく”，“その子たちに乱暴なことをする”などの項目から構成されていた。これらの項目は，事前に想定していた外顕的攻撃に該当する項目群であった。そのため，第 2 因子を「外顕的攻撃」と命名した。そして，第 3 因子は，“その子たちのことを仲間に入れないように他の友だちに言う”, “その子たちがいない所で，「その子たちはいじわる」と他の友だちに言う”などの項目から構成されていた。これらの項目は，事前に想定していた関係性攻撃に該当する項目群であった。そのため, 第 3 因子を「関係性攻撃」と命名した。なお, α 係数は順に, .84, .85, .81 であり，十分な値を示していた。そこで，応答的行動の回答得点について，各因子を構成する項目ごとに加算し，項目数の 3 で割った値を下位尺度得点とした。この得点は理論的には 1 点から 5 点に分布し，この得点が高いほど，架空の場面での反応行動として表出されると考えられる。各下位尺度得点の平均と標準偏差は,「主張的行動」が 3.18（*SD*=1.20）,「外顕的攻撃」が 1.78（SD=0.96）,「関係性攻撃」が 2.34（SD=1.02）であった。

Table 5-1 敵意帰属バイアスに関する主成分分析の結果

	負荷量	平均 (SD)
HAB合成4_〇〇は、わざとやったと思う。	.84	4.15 (1.00)
HAB合成1_〇〇は、意地悪をしようとしていた。	.81	3.73 (1.11)
HAB合成5_〇〇は、あなたが来るまで、あなたの悪口を言っていたと思う。	.80	3.89 (1.04)
HAB合成2_〇〇は、あなたと話したくなかったのだと思う。	.71	3.53 (1.01)
HAB合成3_〇〇は、たまたま気づかなかったのだと思う。	-.35	1.77 (0.92)
固有値	2.61	

Table 5-2 応答的行動の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	F1	F2	F3
F1: 主張的行動			
AS合成1_怒らずに，〇〇に「どうしてこういうことをするの」と言う	.85	-.08	.09
AS合成3_怒らずに，〇〇に自分の気持ちを伝える	.81	.07	-.17
AS合成2_怒らずに，〇〇に「あやまって欲しい」と言う	.77	.04	.08
F2: 外顕的攻撃			
OA合成1_〇〇のことをたたく。	.01	.92	-.11
OA合成3_〇〇に乱暴なことをする。	-.04	.77	.08
OA合成2_〇〇に向かって、きつい言葉でどなる。	.06	.61	.24
F3: 関係性攻撃			
RA合成2_〇〇のことを仲間に入れないように他の友だちに言う	.10	-.05	.92
RA合成3_〇〇がいない所で，「〇〇はいじわる」と他の友だちに言う	.02	.08	.78
RA合成1_〇〇のことを無視する	-.22	.08	.52

因子間相関	F1	F2	F3
F1		-.31	-.32
F2			.68

最後に，関係性攻撃観尺度の各下位尺度を構成する項目による α 係数を算出したところ，.68～.74 の値を示していたので，下位尺度ごとに項目を加算し，項目数で除した値を算出し，下位尺度得点とした。以上にまとめた本研究で使用する尺度の得点分布と信頼性係数を Table5-3 に示す。

また，本研究で扱う変数について，性別と学年を独立変数とした多変量分散分析を行った。その結果，性別と学年の主効果，および交互作用のデータ全体の群間の差を示す Wilks のラムダが有意であった（性別：$\Lambda(7, 279)=.97$, $p<.001$, 学年：$\Lambda(14, 558)=.82$, $p<.001$, 交互作用：$\Lambda(14, 558)=.93$, $p<.083$）。そこで，各従属変数について，性別と学年と要因とする二要因の分散分析を行った（Table5-4）。

2. 関係性攻撃観と SIP 変数の相関係数の算出

関係性攻撃観の 4 下位尺度得点と，敵意帰属バイアスの尺度得点，および応答的行動の 3 下位尺度得点の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table5-5）。その結果，敵意帰属バイアスは，関係性攻撃観下位尺度得点のうち，否定的認識（$r=.23$, $p<.001$）と秘匿可能性（$r=.12$, $p<.05$）との間に有意な正の相関係数を示した。また，敵意帰属バイアスと応答的行動については，外顕的攻撃（$r=.11$, $p<.05$）と関係性攻撃（$r=.18$, $p<.001$）との間に，有意な正の相関係数を示した。次に，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点と応答的行動の 3 下位尺度得点の関連を検討した。特に，関係性攻撃との関連について言及すると，否定的認識は関係性攻撃に有意な負の関連を示し（$r=-.21$, $p<.001$），身近さ，正当化，秘匿可能性は有意な正の関連を示した（$r=.30$～$.42$, いずれも $p<.001$）。

3. SIP モデルの検証

本研究の主要な目的である，関係性攻撃観の各下位尺度得点が，オンライン情報処理過程である敵意帰属バイアスを介して，応答的行動に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証のために，共分散構造分析を行った。なお，欠損地を含むデータであったため，推定方法は完全情報最尤推定法を用いた。モデルの構成の際には，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を第一水準，敵意帰属バイアスを第二水準，応答的行動の 3 下位尺度得点を第三水準に設定した。SIP モ

Table 5-3 尺度得点の分布と信頼性

変数	*N*	項目数	得点 平均値(*SD*)	分布 歪度	尖度	理論的 中間点	α係数
否定的認識	374	7	4.20 (0.62)	-0.85	0.50	3.0	.71
身近さ	371	6	2.47 (0.74)	0.28	0.11	3.0	.72
正当化	377	3	2.38 (0.74)	0.43	-0.12	3.0	.74
秘匿可能性	374	4	2.54 (0.76)	0.17	-0.25	3.0	.68
敵意帰属バイアス	361	5	3.54 (1.03)	-1.38	1.75	3.0	.76
主張的行動	364	3	3.18 (1.20)	-0.23	-0.99	3.0	.84
外顕的攻撃	366	3	1.78 (0.96)	1.32	1.02	3.0	.85
関係性攻撃	370	3	2.34 (1.02)	0.59	-0.24	3.0	.81

Table 5-4　性別（2）×学年（3）の二要因分散分析

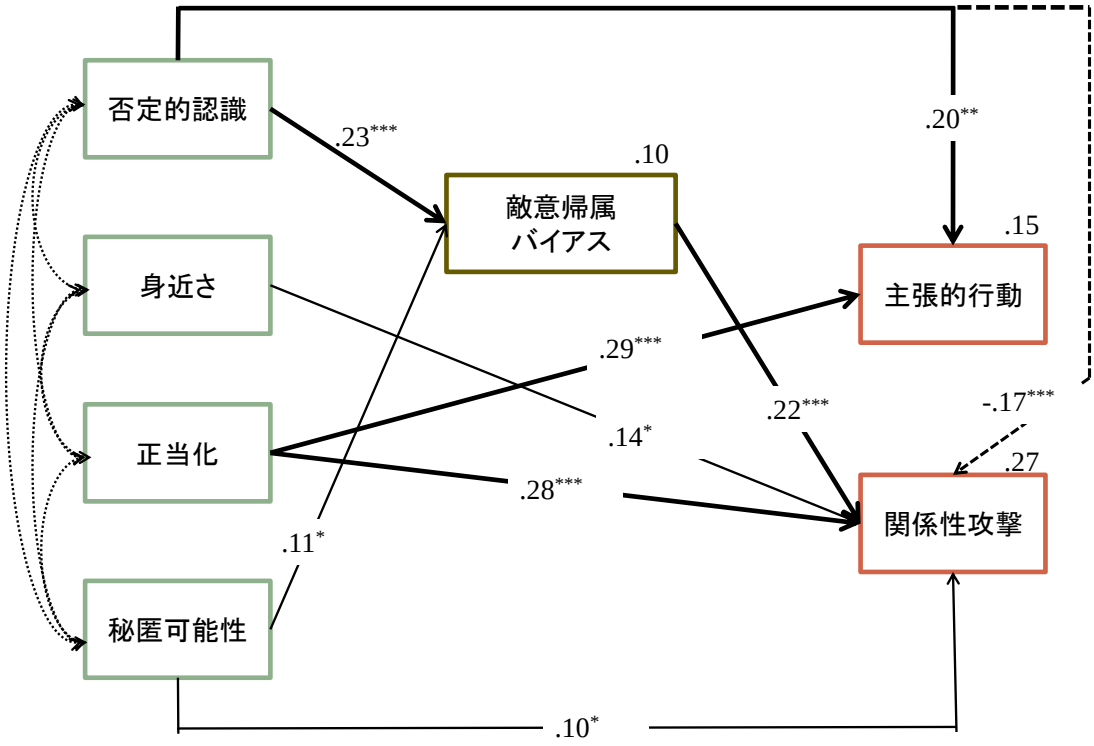
従属変数	性別	4年生(N=92) 平均 (SD)	5年生(N=118) 平均 (SD)	6年生(N=132) 平均 (SD)	主効果　F値$_{(df)}$ 性別	主効果　F値$_{(df)}$ 学年	交互作用 F値$_{(df)}$
否定的認識	男子(N=162)	4.14 (0.66)	4.10 (0.76)	4.16 (0.62)	*ns*	*ns*	$3.02_{(2,337)}{}^{*}$ 5年：男<女，女：6年<5年
	女子(N=180)	4.15 (0.60)	4.47 (0.49)	4.17 (0.55)			
身近さ	男子(N=162)	2.09 (0.76)	2.39 (0.73)	2.64 (0.71)	*ns*	$6.91_{(2,337)}{}^{***}$ **4・5年生<6年生**	*ns*
	女子(N=180)	2.28 (1.14)	2.42 (0.69)	2.64 (0.69)			
正当化	男子(N=162)	2.36 (0.78)	2.30 (0.69)	2.61 (0.84)	$3.32_{(1,337)}{}^{\dagger}$ 女子<男子	$7.34_{(2,337)}{}^{***}$ **5年生<6年生**	*ns*
	女子(N=180)	2.18 (0.89)	2.09 (0.55)	2.47 (0.76)			
秘匿可能性	男子(N=162)	2.26 (0.96)	2.48 (0.82)	2.63 (0.72)	*ns*	$7.04_{(2,337)}{}^{***}$ 4年生<5・6年生	*ns*
	女子(N=180)	2.03 (0.98)	2.61 (0.68)	2.67 (0.66)			
敵意帰属バイアス	男子(N=162)	3.77 (1.12)	3.54 (0.88)	3.53 (1.09)	*ns*	$2.36_{(2,337)}{}^{\dagger}$ 6年生<5年生	*ns*
	女子(N=180)	3.59 (0.84)	3.81 (0.79)	3.32 (1.13)			
主張的行動	男子(N=162)	3.48 (1.37)	3.48 (1.04)	2.81 (1.29)	*ns*	$14.88_{(2,337)}{}^{***}$ 6年生<4・5年生	*ns*
	女子(N=180)	3.84 (1.11)	3.34 (1.14)	2.67 (1.12)			
外顕的攻撃	男子(N=162)	1.82 (1.01)	1.86 (0.85)	1.91 (1.17)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=180)	1.78 (0.96)	1.75 (0.99)	1.76 (0.85)			
関係性攻撃	男子(N=162)	1.88 (0.81)	2.42 (0.99)	2.49 (1.08)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=180)	2.33 (1.17)	2.13 (0.95)	2.39 (1.08)			

注）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$

Table 5-5　関係性攻撃観とSIP変数の相関係数

	Step2　解釈	Step6　応答的行動		
	敵意帰属バイアス	主張的行動	外顕的攻撃	関係性攻撃
否定的認識	.23 ***	.26 ***	-.13 **	-.21 ***
身近さ	.06	-.27 ***	.19 ***	.36 ***
正当化	-.06	-.34 ***	.35 ***	.42 ***
秘匿可能性	.12 *	-.20 ***	.16 ***	.30 ***
敵意帰属バイアス	-	.08	.11 *	.18 ***

注1）$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.01$,　$^{***}p<.001$



注 1）$\chi^2_{(6)}$=20.65(p<.01)，CFI=.966，RMSEA=.079

注 2）$^{*}p$<.05（ ⟶ ），$^{**}p$<.01（ ⟶ ），$^{***}p$<.001（ ⟶ ）

注 3）誤差項の記載は省略した。

注 4）矢印の実線はパラメータ推定値が正

矢印破線はパラメータ推定値が負

Figure5-1　関係性攻撃観，敵意帰属バイアス，応答的行動の関連

デルでは，中心にあるデータベースから反応実行過程に直接作用することも想定されているため，第一水準から第三水準への直接的なパスも想定した。そして，有意でないパスや関連を示さなかった変数を削除していき，適合度が最適となるモデルを探索した。その結果，Figure5-1 に示すモデルが得られた。モデルの適合度は，$\chi^2_{(6)}$=20.65(p<.01), CFI=.966, RMSEA=.079 であり，CFI と RMSEA の数値が基準を満たしていたため，モデルを採用することとした。

まず，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，否定的認識と秘匿可能性が敵意帰属バイアスに有意な促進的な関連を示していた。さらに敵意帰属バイアスは，応答的行動のうち，関係性攻撃に対してのみ正の関連を示した。これに加え，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点の全てが，応答的行動のうち関係性攻撃と直接的に有意な関連を示すことが明らかになった。特に否定的認識は，関係性攻撃との直接的な関連においては抑制的に機能することが示され，情報処理過程を介して関連を示す場合とは異なる結果を示した。なお，否定的認識の関係性攻撃に対する総合的な効果は，直接的な関連の方が大きいため，基本的には抑制的に働くことが考えられた。また，外顕的攻撃に関しては，有意な関連が示されなかったので，モデルから削除した。

第 4 項　考察

本研究は小学生における関係性攻撃生起の内的プロセスを検討するために，関係性攻撃観と敵意帰属バイアス，応答的行動の三者間の SIP モデルの検証を実施した。その結果，関係性挑発場面における関係性攻撃の生起には，潜在的知識構造である関係性攻撃観とオンライン情報処理過程である敵意帰属バイアスの双方がともに関連していることが明らかになった。

オンライン情報処理の解釈過程である敵意帰属バイアスは，応答的行動のうち関係性攻撃のみを促進させる関連を示した。この結果は，関係性攻撃的な特徴を持つ子どもは，関係性攻撃による被害を想起させるような場面における敵意帰属バイアスと関連を示すという先行研究の知見を支持するものであったと考えられる（Crick, 1995; Crick et al., 2002）。ただし，本研究において検討できたのは，関係性挑発場面のみであった。そのため今回の結果は，身体的攻撃的な特徴を持つ子どもが強く関連するとされる道具的挑発場面における敵意帰属

バイアスの効果を統制することができていない結果であったと考えられる。そこで，今後は関係性挑発場面と道具的挑発場面の双方における情報処理過程を同時に測定し，両場面における敵意帰属バイアスを統制しあうことで，応答的行動とのより明確な関連を示すことが必要となるだろう。

そして，本研究では，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，否定的認識と秘匿可能性のみが敵意帰属バイアスを促進する効果を示した。関係性攻撃観の4下位尺度得点と攻撃行動の相関係数を考慮すると，秘匿可能性は攻撃行動と正の関連を示しているため，同じく攻撃行動と正の関連を示す敵意帰属バイアスと正の関連を持つことは自然なことと考えられる。一方で，攻撃行動とは負の相関係数を示す否定的認識が，敵意帰属バイアスと正の関連を示す結果は，矛盾したものと考えられるかもしれない。しかし，先行研究では，関係性攻撃を有害であり，精神的苦痛をもたらすものとみなすほど，関係性攻撃的な挑発に過敏に反応し，敵意的に捉える傾向があることが示されている（Crick, 1995; Crick et al., 2002）。さらに言えば，関係性攻撃を有害なものと捉えるほど，関係性攻撃に従事する傾向があることも指摘されている（Marry-Close et al., 2006）。そして，関係性攻撃観の否定的認識を構成する項目群には，関係性攻撃を容認しない命令的規範の要素に加え，関係性攻撃の有害性に関する項目も含まれている。つまり，関係性攻撃を脅威であるとみなしていることと，曖昧な場面であっても関係性攻撃的な挑発に過敏に反応する敵帰属バイアスの高さが関連することは矛盾しないと言える。さらに，近年，敵意帰属バイアスと関係性攻撃の関連をより詳細に説明する関係脆弱性モデル（relational vulnerability model）が提唱されている（Mathieson, Murray-Close, Crick, Woods, Zimmer-Gembeck, Geiger, & Morales, 2011）。関係脆弱性モデルによると，敵意帰属バイアスが単純にその後の関係性攻撃行動を促進させるのではなく，関係性攻撃の被害経験の頻度と被害時の感情的なショックの大きさが調整変数の役割を果たすと想定されている。さらに，それら全体的な関連は男子よりも女子の方が強いという性別の調整効果も想定されている。このモデルは実際に検証され，その結果，女子において敵意帰属バイアスと関係性攻撃の間に有意な関連が生じるのは，関係性攻撃被害経験と被害時の感情的な反応の2つの得点が高水準の場合であることが示されている（Mathieson et al., 2011）。つまり，関係性攻撃の被害経

験が多くあり，かつその経験をショックであったと捉えている場合に，敵意帰属バイアスが関係性攻撃を促進させるのである。そして，本論文の研究2において，関係性攻撃観の否定的認識は，関係性攻撃被害経験と関連することが示されている。被害経験があり，その経験をショックだったと感じているのであれば，関係性攻撃を有害なものと捉えたり，容認できないものと捉えたりすることは十分に考えられるだろう。よって，本研究において否定的認識と敵意帰属バイアスの間に有意な正の関連が示された結果は，関係脆弱性モデルの示唆する結果とも矛盾しないと考えられるだろう。

同様の観点から，秘匿可能性が敵意帰属バイアスとの関連を示した理由も説明できるかもしれない。秘匿可能性は関係性攻撃の不可視性に関する項目群から構成されている。つまり，秘匿可能性の得点が高いということは，関係性攻撃特有の危険性に精通していると解釈することができるだろう。よって，関係性挑発場面において自身に関係性攻撃的な振る舞いがなされた場合に，その脅威に鋭敏に反応したと考えることができる。まとめると，否定的認識と秘匿可能性は，関係性攻撃を脅威的なものと捉えているという点で共通していると言えるかもしれない。

一方で，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，身近さと正当化は，敵意帰属バイアスと有意な関連を示さなかった。身近さは，関係性攻撃についての記述的規範に関わる項目群による構成されている。そのため，身近さの得点が高いほど，関係性攻撃を誰もが取り得る標準的な行動とみなす傾向が高いと考えられる。一般に，頻繁に目にする行動は，その問題性や深刻さが低くみられがちになることが指摘されている（Bauman & Del Rio, 2006）。そのため，相手の関係性挑発的な行動に対しても，その有害性を低く捉え，敵意的な認知に結びつかなかったと考えられる。また，正当化は関係性攻撃に対して，攻撃行動による報復を容認する命令的規範に関わる項目群によって構成されている。攻撃行動を容認する傾向は，攻撃行動が被害者に与える影響を低く見積もる傾向や，攻撃行動を肯定的に捉えるといった情報処理過程の後半部分と関連していることが示唆されている（Crick & Dodge, 1996; Huesmann & Guerra, 1997）。そのため，関係性攻撃的な挑発場面においても，正当化と敵意帰属バイアスの関連が示されなかったと考えられる。しかし，逆に言えば，敵意帰属バイアスとの関

連を示さなかった身近さや正当化は，情報処理過程の他の部分との関連を示す可能性があると考えられるだろう。

以上の議論から，本研究は，関係性攻撃観，敵意帰属バイアス，応答的行動の関連を検討することで，SIP モデルの仮説通りに，潜在的知識構造がオンラインの情報処理過程と行動実行の双方に関与する機能があることを示すことができたと考えられる。よって，本研究の目的は達成できたと考えられる。

第 2 節　小学生の関係性攻撃の認識と目標明確化ステップの検討（研究 4）

第 1 項　目的

本研究では，前節に引き続き，小学生の関係性攻撃の生起を説明するモデルとして SIP モデルを採用し，潜在的知識構造，対人相互作用場面における情報処理過程，応答的行動の関連を検討することを目的とする。

特に本研究では，オンライン情報処理過程の中でも第 3 ステップを取り上げる。第 3 ステップは，状況の解釈を受けて，対人相互作用の中でどのような結果を求めるのかを決定する機能を持っていると想定されている。対人相互作用の中で生じる子どもの目標の選択は，心理社会的適応に関連があることが指摘されているので（Crick & Dodge, 1994），子ども達の適応問題に関連する重要な要素であると考えられる。外顕的攻撃と社会的目標の関連を検討した研究では，攻撃的傾向の高い子どもは，対人葛藤場面において，仲間との関係を維持しようとするよりも，自分の欲求を満たすことを優先とする道具的目標を持つ傾向があると報告されている（Crick & Dodge, 1996）。さらに，関係性攻撃との関連に注目した研究でも，小学 4 年生～6 年生の関係性攻撃傾向の高い者は，関係性挑発場面に置かれた際に，利己的で報復的な目標を持つ傾向があること，また，仲間との平等な関係を持ちたいという欲求とは負の関連を示すことが指摘されている。加えて，関係性攻撃児は，問題回避目標やより大きな仲間集団との関係を維持しようとする目標を持つことも示されている。つまり，関係性挑発場面で関係性攻撃を採用する者は，自己中心的で報復的な目標を達成するためのより有効な手段として，同時に仲間集団内の多数派との葛藤を回避し，関係維持にも役立つ手段として関係性攻撃を採用している可能性があると言及されている（Delveaux & Daniels, 2000）。

関係性挑発場面の加害者との関係は維持しないが，仲間との関係は維持するという目標は，他者を傷つけることを意図した行動という攻撃行動の文脈の中で，関係性攻撃のみとの関連が確認された社会的な目標である。これは関係性攻撃が，ターゲットの周囲に受け入れられているという感覚にダメージを与える攻撃行動だという特徴を反映した結果だと考えられる（Grotpeter & Crick, 1996）。そこで，本研究でも，目標明確化の中から，加害者側との関係維持目標を取り上げ，関係性攻撃観と応答的行動との関連を検討する。また，関係性攻

撃に対する関係維持目標の独自の関連を検証するため，他の応答的行動と対応する目標を設定した。具体的には，加害者に対する穏当な主張的行動に独自に関連することを想定し，相手に対する理由の説明や自分の率直な要求を求めることを重視する主張的目標を設けた。なお，この一連の研究では質問項目の数を抑えるために，SIP の全情報処理過程の測定を断念しているが，過去の研究の蓄積が最も多く，情報処理過程の前半部分の重要な要素である敵意帰属バイアスのみは，以降の研究の全てで取り上げる。上記の目的を達成するために，本研究では場面想定法を用いた質問紙調査を小学生を対象に実施した。

第 2 項　方法

1.　対象者

茨城県と千葉県の小学 5，6 年生 193 名（男子 95 名,女子 96 名，性別不明 2 名）を分析の対象者とした。ただし，分析の対象となる範囲の回答に不備がない限り，全てを分析の対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2.　調査時期

調査時期は 2013 年 4 月から 2013 年 5 月であった。

3.　手続き

研究 1-2 と同様の手続きで調査を実施した。

また，今回の調査の実施にあたって，調査協力校から要望があり，否定的な内容の質問項目を極力減らすよう求められた。そのため，本研究においては攻撃行動を測定する項目の部分的な削除を行っている。詳細は質問紙の構成にて言及する。

4.　質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 5 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。また，本調査が筑波大学大学院の人間総合科学研究科研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②対象者の性別と学年

回答にあたる対象者の基本的な情報として，性別と学年の記入を求めた。

③関係性攻撃観尺度改訂版

研究 2 で作成した関係性攻撃観尺度改訂版を用いた。「否定的認識」(7 項目)，「身近さ」(6 項目)，「正当化」(3 項目)，「秘匿可能性」(4 項目) の 20 項目 5 件法であった。

④場面想定法よる社会的情報処理過程と応答的行動の測定

研究 3 と同様に，Crick et al.(2002)で用いられた場面のうちの 2 つの関係性挑発場面である①ろうかでのお話，②お昼ご飯のお話を用いた。

まず，関係性挑発場面における敵意帰属バイアスを測定するため，「○○（加害者側の登場人物　例 A と B）について，あなたはどのように思いますか」という教示のもと，「○○はわざとやったと思う」などの項目に回答を求めた。1 場面 5 項目ずつ 5 件法であった（研究 3 と同じ)。

次に，関係性挑発場面における子ども達の社会的目標を測定するため，「このとき，あなたはどうしたいと思いますか」という教示のもと，項目への回答を求めた。具体的な項目には，「○○とはこれからも仲良しでいたいと思いますか」などの関係維持目標を想定した項目と，「○○に自分の気持ちを伝えたい」などの主張的目標を想定した項目を設定した（Table5-5 参照)。1 つの場面につき 6 項目ずつ，5 件法であった。

最後に，各場面に対する応答的行動を測定するために，「このとき，あなたはどうすると思いますか」という教示のもと，関係性攻撃，主張的行動を想定した項目への回答を求めた。なお，今回の調査では，調査の承諾を得る際に，学校側の要請があり，否定的な項目を極力減らす必要があった。そのため，本研

究においては，応答的行動の中に外顕的攻撃を想定した項目を含めなかった。各行動の項目は，1 場面につき 3 項目ずつであり，5 件法であった（研究 3 と同じ）。

そして，上記の敵意帰属バイアス，目標明確化過程の変数，応答的行動に該当する項目の得点は，エピソード間で対応する項目を加算平均することで，得点化を行った。

第 3 項　結果

1.　各変数の基本的検討と記述統計量の算出

まず，目標の明確化の 6 項目について因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い，関係性挑発場面における社会的目標の具体的な内容を検討した。因子分析の結果，6 項目 2 因子解が得られた（Table5-6）。第 1 因子は，“○○を困らせたくないと思いますか”，“○○をいやな気持ちにさせたくないと思いますか”などの項目から構成されていた。これらの項目は，事前に想定していた関係維持目標に該当する項目群であった。そのため，第 1 因子を「関係維持目標」と命名した。また，第 2 因子は，“○○に，自分の気持ちを伝えたいと思いますか”，“○○に，あやまって欲しいと思いますか”などの項目から構成されていた。これらの項目は，事前に想定していた主張的目標に該当する項目群であった。そのため，第 2 因子を「主張的目標」と命名した。なお，α 係数は順に，.80，.75 であり，十分な値を示していた。そこで，目標明確化過程の回答得点について，各因子を構成する項目ごとに加算し，項目数の 3 で割った値を下位尺度得点とした。この得点は理論的には 1 点から 5 点に分布し，この得点が高いほど，架空の場面での社会的目標を抱いていると考えられる。各下位尺度得点の平均と標準偏差は，「関係維持目標」が 2.89（*SD*=1.00），「主張的目標」が 3.69（SD=0.94）であった。

続いて，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を構成する項目群，敵意帰属バイアスの 5 項目，応答的行動の 2 下位尺度得点を構成する 6 項目について，α 係数を算出した後，下位尺度ごとに項目の得点を加算平均し，各下位尺度得点とした。以上にまとめた本研究で使用する尺度の得点分布と信頼性係数を Table5-7 に示す。

Table 5-6　目標明確化過程の質問項目に対する因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	F1	F2
F1: 関係維持目標		
RMG3_「○○を困らせたくない」と思いますか	1.01	-.12
RMG1_「○○をいやな気持ちにさせたくない」と思いますか	.71	.05
RMG2_「○○とは, これからも仲よしでいたい」と思いますか	.58	.10
F2: 主張的目標		
ASG3_「○○に，自分の気持ちを伝えたい」と思いますか	.12	.83
ASG1_「○○に，あやまって欲しい」と思いますか	-.07	.70
ASG2_「○○に，笑った理由を教えてもらいたい」と思いますか	-.01	.61

因子間相関	F1	F2
F1:	—	.27

Table 5-7 尺度得点の分布と信頼性

変数	*N*	項目数	得点 平均値(*SD*)		分布 歪度	尖度	理論的中間点	α係数
否定的認識	184	7	4.28	(0.54)	-0.85	0.69	3.0	.70
身近さ	181	6	2.50	(0.68)	0.11	-0.56	3.0	.65
正当化	191	3	2.40	(0.98)	0.25	-0.57	3.0	.75
秘匿可能性	185	4	2.70	(0.77)	0.02	-0.51	3.0	.68
敵意帰属バイアス	176	5	3.97	(1.44)	-1.18	0.37	3.0	.70
関係維持目標	188	3	2.89	(1.00)	0.06	-0.53	3.0	.80
主張的目標	187	3	3.69	(0.94)	-0.65	-0.06	3.0	.75
主張的行動	181	3	3.19	(1.09)	-0.24	-0.84	3.0	.85
関係性攻撃	187	3	2.30	(0.91)	0.40	-0.23	3.0	.77

また，本研究で扱う変数について，性別と学年を独立変数とした多変量分散分析を行った。その結果，性別と学年の主効果について，データ全体の群間の差を示す Wilks のラムダが有意であった（性別：$\Lambda(9, 132)=.88$, $p<.05$，学年：$\Lambda(9, 132)=.83$, $p<.001$）。そこで，各従属変数について，性別と学年と要因とする二要因の分散分析を行った（Table5-8）。

2. 関係性攻撃観と SIP 変数の相関係数の算出

関係性攻撃観の 4 下位尺度得点と敵意帰属バイアスの尺度得点，目標明確化の 2 下位尺度得点，ならびに応答的行動の 2 下位尺度得点の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table5-9）。その結果，関係維持目標は，関係性攻撃観下位尺度得点のうち，否定的認識（$r=.16$, $p<.05$）と正の関連を示し，身近さ（$r=-.21$, $p<.01$）と正当化（$r=-.36$, $p<.001$）との間に有意な負の相関係数を示した。また，関係維持目標は敵意帰属バイアスと有意な負の相関係数を示した（$r=-.25$, $p<.001$）。さらに，関係維持目標は応答的行動のうち関係性攻撃と負の関連を示し（$r=-.39$, $p<.001$），主張的行動とは正の関連を示した（$r=.33$, $p<.001$）。

一方で，主張的目標は，関係性攻撃観下位尺度得点のうち，否定的認識（$r=.33$, $p<.001$）と正の関連を示し，身近さ（$r=-.26$, $p<.01$）と正当化（$r=-.16$, $p<.05$）との間に有意な負の相関係数を示した。また，主張的目標は敵意帰属バイアスと有意傾向の正の相関係数を示した（$r=.14$, $p<.10$）。さらに，主張的目標は応答的行動のうち関係性攻撃と負の関連を示し（$r=-.16$, $p<.05$），主張的行動とは正の関連を示した（$r=.82$, $p<.001$）。

3. SIP モデルの検証

本研究の主要な目的である，関係性攻撃観の各下位尺度得点が，オンライン情報処理過程である敵意帰属バイアスと目標明確化過程を介して，応答的行動に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証のために，共分散構造分析を行った。なお，欠損値を含むデータであったため，推定方法は完全情報最尤推定法を用いた。モデルの構成の際には，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を第一水準，敵意帰属バイアスを第二水準，目標明確化の 2 下位尺度得点を第三水準，

Table 5-8　性別（2）×学年（3）の二要因分散分析

従属変数	性別	5年生(N=64) 平均 (SD)	6年生(N=80) 平均 (SD)	主効果　F値$_{(df)}$ 性別	主効果　F値$_{(df)}$ 学年	交互作用 F値$_{(df)}$
否定的認識	男子(N=63)	4.22 (0.62)	4.24 (0.52)	$4.71_{(1,140)}^{*}$ 男子<女子	$4.94_{(1,140)}^{*}$ 6年生<5年生	$6.19_{(1,140)}^{*}$ 5年：男<女，女：6年<5年
	女子(N=81)	4.61 (0.32)	4.22 (0.49)			
身近さ	男子(N=63)	2.37 (0.72)	2.57 (0.74)	*ns*	$3.86_{(1,140)}^{*}$ 5年生<6年生	*ns*
	女子(N=81)	2.32 (0.64)	2.58 (0.64)			
正当化	男子(N=63)	2.66 (1.21)	2.41 (0.91)	$4.08_{(1,140)}^{*}$ 女子<男子	*ns*	*ns*
	女子(N=81)	2.18 (0.80)	2.21 (1.02)			
秘匿可能性	男子(N=63)	2.65 (0.96)	2.73 (0.77)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=81)	2.78 (0.68)	2.73 (0.62)			
敵意帰属バイアス	男子(N=63)	3.97 (1.38)	3.93 (1.63)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=81)	4.39 (1.11)	3.78 (1.53)			
関係維持目標	男子(N=63)	2.97 (1.07)	2.89 (0.99)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=81)	2.92 (0.99)	2.75 (1.03)			
主張的目標	男子(N=63)	3.76 (1.02)	3.40 (0.95)	*ns*	$16.56_{(1,140)}^{***}$ 6年生<5年生	*ns*
	女子(N=81)	4.21 (0.60)	3.35 (0.93)			
主張的行動	男子(N=63)	3.48 (1.08)	3.00 (1.12)	*ns*	$17.33_{(1,140)}^{***}$ 6年生<5年生	*ns*
	女子(N=81)	3.74 (0.91)	2.74 (1.08)			
関係性攻撃	男子(N=63)	2.44 (1.05)	2.35 (0.97)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=81)	2.02 (0.73)	2.27 (0.96)			

注）$^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$

Table 5-9　関係性攻撃観とSIP変数の相関係数

	Step2　解釈	Step3　目標の明確化		Step6　応答的行動	
	敵意帰属バイアス	関係維持目標	主張的目標	主張的行動	関係性攻撃
否定的認識	.13 †	.16 *	.33 ***	.36 ***	-.23 **
身近さ	.01	-.21 **	-.20 **	-.23 **	.38 ***
正当化	.03	-.36 ***	-.16 *	-.21 **	.60 ***
秘匿可能性	.06	-.06	-.04	-.02	.29 ***
敵意帰属バイアス	-	-.25 ***	.14 †	.10	.15 *
関係維持目標		-	.24 ***	.33 ***	-.39 ***
主張的目標			-	.82 ***	-.16 *

注1）†p <.10, *p <.05, **p <.01, ***p <.001

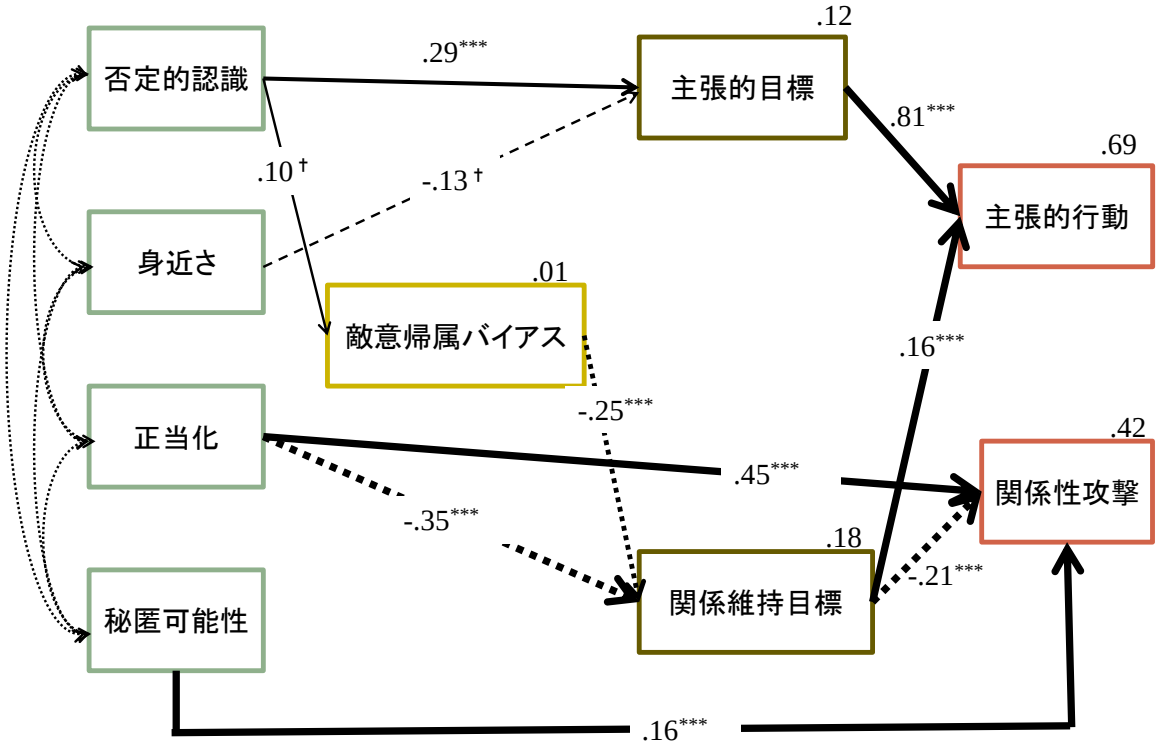
応答的行動の 2 下位尺度得点を第四水準に設定した。SIP モデルでは，情報処理過程は系列的な進行のみならず，中心にあるデータベースから各ステップに直接作用することも想定されているため，第一水準から第三，第四水準への直接的なパスも想定した。そして，有意でないパスや関連を削除していき，適合度が最適となるモデルを探索した。その結果，Figure5-2 に示すモデルが得られた。モデルの適合度は，$\chi^2_{(19)}$=27.10(p>.10)，CFI=.982，RMSEA=.047 と十分な値が示された。

まず，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，否定的認識が敵意帰属バイアスに有意傾向の促進的な関連を示した。さらに敵意帰属バイアスは，関係維持目標に負の関連を示し，結果的に関係性攻撃を促進させるように作用していた。また，関係性攻撃観尺度の正当化は，関係維持目標を抑制するように作用し，結果，関係性攻撃と間に正の関連を示した。さらに正当化と秘匿可能性は関係性攻撃に直接的な正の関連を示し，否定的認識は有意傾向ではあるが，直接的な負の関連を示した。一方で，関係性攻撃観のうち，身近さは，主張的目標を抑制する関連を示し，主張的行動との間に負の関連を示した。

第 4 項　考察

本研究は小学生における関係性攻撃生起の内的プロセスを検討するために，関係性攻撃観と敵意帰属バイアス，目標明確化過程，応答的行動の四者間の SIP モデルの検証を実施した。その結果，関係性挑発場面における関係性攻撃の生起には，潜在的知識構造である関係性攻撃観とオンライン情報処理過程の双方が関連していることが明らかになった。

まず，本研究の結果，敵意帰属バイアスは，関係維持目標を低め，結果として関係性攻撃を促進する機能があることが示された。そして，その他の応答的行動である主張的行動に対しては，敵意帰属バイアスが関連を示すことはなかった。この結果から，研究 3 と同様に，関係性挑発場面における敵意の認知と関係性攻撃傾向には独自の関連があるという先行研究を支持する結果が得られた（Crick, 1995; Crick et al., 2002）。また，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，否定的認識と敵意帰属バイアスの関連が，今回は有意傾向ではあったが示された。この結果は，研究 3 の結果を否定するものではなかった。そのため，研究



注 1）$\chi^2_{(19)}$=27.10(p>.10)，CFI=.982，RMSEA=.047

注 2）$^{\dagger}p$<.10（⟶），$^{***}p$<.001（➡）

注 3）誤差項の記載は省略した。

注 4）矢印の実線はパラメータ推定値が正

矢印破線はパラメータ推定値が負

Figure5-2　関係性攻撃観，敵意帰属バイアス，目標明確化，応答的行動の関連

3 の結果から考察された，関係性攻撃を有害だとみなすほど，関係性挑発場面において相手の行為を敵意的に捉える傾向が高まるという仮説を，関係脆弱性モデル等を踏まえながら，今後も検証する必要があると考えられる。

続いて，本研究では特に，オンライン情報処理過程の第 3 ステップである目標明確化の機能に注目した。その結果，関係性攻撃観のうち正当化が敵意帰属バイアスを介さず，直接関係維持目標と負の関連を示し，そして関係性攻撃と正の関連を，さらに主張的行動とは負の関連を示すことが明らかになった。つまり，報復的な関係性攻撃を容認する態度を持っていると，関係性攻撃的な要素を含む葛藤場面に直面した場合の，相手との友好的な関係の維持を重視する傾向を低め，反応表出として関係性攻撃の遂行を促進し，逆に主張的行動は抑制される可能性が示唆された。この結果は，先行研究で提示された関係維持目標と関係性攻撃の関連を支持するものだと考えられる（Delveaux & Daniels, 2000）。特に，本研究で，正当化と関係維持目標に負の関連がみられたことの説明としては，関係性攻撃の攻撃形態そのものが，相手との関係を攻撃のターゲットにするためだと考えられる。例えば，関係性攻撃の具体的な行動である無視などの相手を冷遇する扱い（silent treatment）は，相手を避けたり，関係を断とうとする行為だと考えられる。そういった行為を容認する傾向と関係維持目標が負の関連を示すことは当然の結果だと捉えられるだろう。同様に，正当化が最終的に主張的行動と負の関連を示した点も，相手との関係を継続しようとしなければ，自分の権利を訴えようとする主張的行動に結びつかないと考えることができ，了解可能な結果であると考えられる。加えて，本研究で正当化が敵意帰属バイアスを介さず，直接第 3 ステップとの関連を示したことは，非常に重要な示唆を含んでいると考えられる。本論文中で繰り返している様に，SIP モデルの先行研究は,敵意帰属バイアスに注目した研究が頻繁に行われており，知見の蓄積が最もなされている。確かに，対人相互作用場面において，状況を解釈することは，その後の情報処理過程にも影響を与え，子ども達の心理社会的適応に関わる重要な要素である。しかし，本研究の結果から，攻撃行動を容認するなど，データベースに歪みがある場合には，状況の解釈に関わらず，相手との関係を積極的に維持しようとしなくなる可能性が示唆されたのである。以上を踏まえると,敵意帰属バイアス以降の情報処理過程をより詳細に検証し，

その機能を検討することが求められると考えられるだろう。

今回の結果において，正当化以外の関係性攻撃観の下位尺度得点のうち身近さは，関係性攻撃との関連を示さず，主張的目標と負の関連を示し，最終的に主張的行動を低めるように作用することが示唆された。前節でも述べたように，身近さ得点の高さは，関係性攻撃を誰もが取り得る標準的な行動とみなす傾向の高さと捉えられる。本研究の結果からは，関係性攻撃を日常的なものと捉えていると，関係性攻撃的な被害を受けた際に，自分の被害の程度を訴えたり，相手に謝罪を求めるといった自分の正当な権利を主張する動機づけが高まらないという可能性があることが考えられる。本研究では，用いた架空の場面が相手の意図が曖昧な状況であるため，相手に謝罪を求めるように訴えることは過剰な反応であるとも考えられるが，身近さと主張的目標の関連については今後も検討が必要であろう。特に，関係性攻撃の被害を受けていても，自己の正当な権利を主張できない子どもの背景には，関係性攻撃の有害性を低く見積もるような規範がある可能性を考慮すべきだろう。

本研究は，関係性攻撃観，敵意帰属バイアス，目標の明確化，応答的行動の関連を検討することで，SIP モデルの仮設通りに，潜在的知識構造がオンラインの情報処理過程と行動実行の双方に関与する機能があることを示すことができたと考えられる。しかも，データベースの内容によって情報処理過程への作用の仕方が異なる可能性も示された。以上の議論から，本研究の目的は達成できたと考えられる。

第 3 節　小学生の関係性攻撃の認識と反応検索ステップの検討（研究 5）

第 1 項　目的

本研究では，前節に引き続き，小学生の関係性攻撃の生起を説明するモデルとして SIP モデルを採用し，潜在的知識構造，対人相互作用場面における情報処理過程，応答的行動の関連を検討することを目的とする。

特に本研究では，オンライン情報処理過程の中でも第 4 ステップを取り上げる。第 4 ステップの反応検索は，社会的情報の心的表象とその状況における目標を形成した後に，長期記憶に保存してある反応行動にアクセスするステップであると想定されている。先行研究では，反応行動として検索されるレパートリーの数の少なさと攻撃行動への従事の関連性が指摘されている（Pettit et al., 1988）。さらに攻撃行動を多く示す子どもの場合，最初に検索した行動が社会的に有能な行動であっても，2 番目以降に検索した行動が攻撃的であることが示されている（Richard & Dodge, 1982）。つまり，攻撃行動に関連する反応検索の歪みとは，検索される反応行動の選択肢に攻撃行動が多く含まれていることだと考えられている。これらの先行研究の指摘から，反応行動の選択肢の狭さが，攻撃行動の生起に関わる重要な要素であると SIP モデルは想定している（Dodge, 1993）。そして，反応検索は潜在的知識構造との関連が実証されているオンライン情報処理過程である。先行研究において，外顕的攻撃を容認する傾向は，対人相互作用場面における反応行動のレパートリーが攻撃的なものに偏ることを予測し，結果的に攻撃行動を導くことが示されている（Zelli et al., 1999）。しかし，関係性攻撃を対象とした場合に，外顕的攻撃と同様の関連が示されるのかどうか，検証した研究はみられない。

以上を踏まえて，本研究では，架空の関係性葛藤場面における反応行動の産出過程において，行動レパートリー内に占める攻撃行動の割合を反応検索の指標として取り上げ，関係性攻撃観ならびに応答的行動との関連を検討する。なお，本研究においても，敵意帰属バイアスとの関連も検討する。上記の目的を達成するために，本研究では場面想定法を用いた質問紙調査を小学生を対象に実施した。

第 2 項　方法

1.　対象者

茨城県の小学 4，5，6 年生 304 名（男子 159 名，女子 145 名）を分析の対象者とした。ただし，分析の対象となる範囲の回答に不備がない限り，全てを分析の対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2.　調査時期

調査時期は 2014 年 4 月から 2014 年 7 月であった。

3.　手続き

研究 1-2 と同様の手続きで調査を実施した。

4.　質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 6 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。また，本調査が筑波大学大学院の人間総合科学研究科研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②対象者の性別と学年

回答にあたる対象者の基本的な情報として，性別と学年の記入を求めた。

③関係性攻撃観尺度改訂版

研究 2 で作成した関係性攻撃観尺度改訂版を用いた。「否定的認識」（7 項目），「身近さ」（6 項目），「正当化」（3 項目），「秘匿可能性」（4 項目）の 20 項目 5 件法であった。

④場面想定法よる社会的情報処理過程と応答的行動の測定

研究 3 と同様に，Crick et al.(2002)で用いられた場面のうちの 2 つの関係性挑発場面である①ろうかでのお話，②お昼ご飯のお話を用いた。

まず，関係性挑発場面における敵意帰属バイアスを測定するため，「○○（加害者側の登場人物　例 A と B）について，あなたはどのように思いますか」という教示のもと，「○○はわざとやったと思う」などの項目に回答を求めた。1 場面 5 項目ずつ 5 件法であった（研究 3 と同じ）。

次に，関係性挑発場面における子ども達の反応検索を測定するため，「こんな時あなたならどんなことをしますか？下の囲みの中に、あなたが A と B に対してすることや言うことで思いつくだけ記入してください。ひとつの囲みの中に、思いついたアイデアをひとつずつ記入してください」という教示のもと，自由記述での回答を求めた。回答欄の囲いの中には，セリフを記入する箇所と，行動を記入する箇所がそれぞれ設定された。さらに，その行動を取っている際の表情を「怒った顔」，「普通の顔」「笑った顔」の 3 つの中から選ばせるという方法が採用された。そこで得られた反応は，濱口・新井（1992）の基準を参考に，セリフと行動，表情の組み合わせによって，無罰行動，合理的主張行動，感情表出的主張行動，攻撃的行動，驚愕・困惑・落胆の表出行動，その他の非攻撃的行動の 6 つのカテリゴリに分類された（各行動の定義と分類基準は，資料 7 に挙げる）。回答欄はひとつの場面につき，5 つ用意されたので，調査協力者は最大 5 つまで，反応を記述することが可能であった。

最後に，各場面に対する応答的行動を測定するために，「このとき，あなたはどうすると思いますか」という教示のもと，関係性攻撃，外顕的攻撃，主張的行動を想定した項目への回答を求めた。各行動の項目は，1 場面につき 3 項目ずつであり，5 件法であった（研究 3 と同じ）。

そして，上記の敵意帰属バイアス，反応検索で各行動について報告された回答数，応答的行動に該当する項目の得点は，エピソード間で対応する項目を加算平均することで，得点化を行った。

第 3 項　結果

1.　各変数の基本的検討と記述統計量の算出

まず，調査協力者によって算出された関係性挑発場面における応答的行動を濱口・新井（1992）の基準によって，無罰行動，合理的主張行動，感情表出的主張行動，攻撃的行動，驚愕・困惑・落胆の表出行動，その他の非攻撃的行動の 6 つのカテゴリに分類する必要があった。そのため，心理学を専攻する大学院生 2 名によって，検索された行動の分類が行われた。評定者間一致率は，すべてのカテゴリについて，80%を超えていたため，十分な評定者間一致率が得られたと考えられる。そして，上記の 6 カテゴリについて，個人が産出した回答数を得点として用いた。そして，本研究においては，攻撃的行動の産出率を攻撃行動の生起に関わる反応検索過程における歪みと捉えて用いた。この得点は，回答者が産出した応答的行動の総数に対して，攻撃的行動が占める割合である。この得点が高いほど，架空の関係性攻撃被害場面において，検索される行動レパートリーの中で攻撃行動が占める割合が高いことを意味する。

続いて，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を構成する項目群，敵意帰属バイアスの 5 項目，応答的行動の 2 下位尺度得点を構成する 6 項目について，α 係数を算出した後，下位尺度ごとに項目の得点を加算平均し，各下位尺度得点とした。以上にまとめた本研究で使用する尺度の得点分布と信頼性係数を Table5-10 に示す。

また，本研究で扱う変数について，性別と学年を独立変数とした多変量分散分析を行った。その結果，性別と学年の主効果について，データ全体の群間の差を示す Wilks のラムダが有意であった（性別：$\Lambda(14, 235)=.87$, $p<.01$，学年：$\Lambda(28, 470)=.68$, $p<.001$）。そこで，各従属変数について，性別と学年と要因とする二要因の分散分析を行った（Table5-11）。

2.　関係性攻撃観と SIP 変数の相関係数の算出

関係性攻撃観の 4 下位尺度得点と敵意帰属バイアスの尺度得点，反応検索における攻撃的行動の産出率，ならびに応答的行動の 3 下位尺度得点の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table5-12）。その結果，反応検索における攻撃的な歪みである攻撃的行動の産出率は，関係性攻撃観下位尺度得点のう

Table 5-10 尺度得点の分布と信頼性

変数	*N*	項目数	得点	分布		理論的中間点	α係数
			平均値(*SD*)	歪度	尖度		
否定的認識	296	7	4.41 (0.59)	-1.75	5.09	3.0	.70
身近さ	296	6	2.48 (0.80)	0.50	0.27	3.0	.70
正当化	297	3	2.27 (1.00)	0.62	-0.23	3.0	.74
秘匿可能性	292	4	2.72 (0.83)	0.16	0.00	3.0	.68
敵意帰属バイアス	296	5	3.98 (0.65)	-0.86	0.54	3.0	.74
攻撃的行動の産出率	294	-	0.10 (0.22)	2.51	6.25	-	-
主張的行動	287	3	3.35 (1.14)	-0.40	-0.73	3.0	.83
外顕的攻撃	286	3	1.77 (0.85)	1.43	2.27	3.0	.79
関係性攻撃	282	3	2.24 (0.95)	0.74	0.23	3.0	.76

Table 5-11　性別（2）×学年（3）の二要因分散分析

従属変数	性別	4年生(N=76) 平均 (SD)	5年生(N=82) 平均 (SD)	6年生(N=96) 平均 (SD)	主効果　F値$_{(df)}$ 性別	主効果　F値$_{(df)}$ 学年	交互作用 F値$_{(df)}$
否定的認識	男子(N=133)	4.24 (0.70)	4.47 (0.54)	4.40 (0.49)	*ns*	$2.38_{(2,248)}^{\dagger}$ 4年生<5年生	*ns*
	女子(N=121)	4.33 (0.78)	4.50 (0.50)	4.39 (0.40)			
身近さ	男子(N=133)	2.44 (0.83)	2.41 (0.69)	2.40 (0.73)	*ns*	$5.52_{(2,248)}^{**}$ 4･5年生<6年生	$6.18_{(1,248)}^{***}$ 6年：男<女，女：4･5年<6年
	女子(N=121)	2.32 (0.72)	2.19 (0.75)	2.92 (0.85)			
正当化	男子(N=133)	2.67 (1.13)	2.06 (0.84)	2.24 (0.98)	$3.08_{(1,248)}^{\dagger}$ 女子<男子	$4.68_{(2,248)}^{**}$ 4年生<5年生	*ns*
	女子(N=121)	2.17 (0.90)	1.87 (0.82)	2.29 (1.01)			
秘匿可能性	男子(N=133)	2.58 (1.02)	2.73 (0.94)	2.68 (0.78)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=121)	2.75 (0.88)	2.61 (0.76)	2.78 (0.79)			
敵意帰属バイアス	男子(N=133)	4.06 (0.69)	3.98 (0.72)	3.87 (0.69)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=121)	4.01 (0.55)	4.08 (0.49)	4.02 (0.64)			
攻撃的行動の産出率	男子(N=133)	0.10 (0.26)	0.13 (0.20)	0.15 (0.25)	$3.77_{(1,248)}^{\dagger}$ 女子<男子	*ns*	*ns*
	女子(N=121)	0.04 (0.17)	0.06 (0.19)	0.11 (0.18)			
主張的行動	男子(N=133)	3.44 (1.11)	3.57 (1.12)	2.98 (1.31)	*ns*	$10.69_{(2,248)}^{***}$ 6年生<4･5年生	*ns*
	女子(N=121)	3.64 (0.85)	3.90 (0.94)	3.01 (1.16)			
外顕的攻撃	男子(N=133)	2.05 (1.08)	1.97 (0.95)	1.85 (0.90)	$14.12_{(1,248)}^{***}$ 女子<男子	*ns*	*ns*
	女子(N=121)	1.55 (0.73)	1.56 (0.65)	1.56 (0.65)			
関係性攻撃	男子(N=133)	2.43 (1.12)	2.24 (0.91)	2.23 (0.96)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=121)	2.06 (0.91)	2.05 (0.79)	2.37 (0.96)			

注）$^{\dagger}p<.10$,　$^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

Table 5-12　関係性攻撃観とSIP変数の相関係数

	Step2　解釈	Step4　反応検索	Step6　応答的行動		
	敵意帰属バイアス	攻撃的行動の産出率	主張的行動	外顕的行動	関係性攻撃
否定的認識	.43 ***	-.14 *	.23 ***	-.10	-.23 **
身近さ	.14 *	.15 *	-.31 ***	.14 *	.38 ***
正当化	.18 **	.05	-.23 ***	.11 †	.25 ***
秘匿可能性	-.09	-.04	.06	.02	.18 **
敵意帰属バイアス	-	.07	.13 *	.10	.19 **
攻撃的行動の産出率		-	.01	.39 ***	.49 ***

注1）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

ち，否定的認識（r=-.14, p<.05）と負の関連を示し，身近さ（r=.15, p<.05）との間に有意な正の相関係数を示した。また，攻撃的行動の産出率は，応答的行動のうち外顕的攻撃（r=.39, p<.001）と関係性攻撃（r=.49, p<.001）に対して有意な正の関連を示した。

なお，本研究においても関係性攻撃観下位尺度得点のうち，否定的認識と敵意帰属バイアスの間に有意な正の関連が示された（r=.43, p<.001）。

3. SIP モデルの検証

本研究の主要な目的である，関係性攻撃観の各下位尺度得点が，オンライン情報処理過程である敵意帰属バイアスと反応検索過程を介して，応答的行動に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証のために，共分散構造分析を行った。なお，欠損地を含むデータであったため，推定方法は完全情報最尤推定法を用いた。モデルの構成の際には，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を第一水準，敵意帰属バイアスを第二水準，反応検索における攻撃的行動の産出率を第三水準，応答的行動の 3 下位尺度得点を第四水準に設定した。SIP モデルでは，情報処理過程は系列的な進行のみならず，中心にあるデータベースから各ステップに直接作用することも想定されているため，第一水準から第三，第四水準への直接的なパスも想定した。そして，有意でないパスを削除していき，適合度が最適となるモデルを探索した。しかし，得られたモデルの適合度は，$\chi^2_{(19)}$=107.63 (p<.001)，CFI=.841，RMSEA=.132 と基準を満たすには厳しい値であり，モデルが採用されることはなかった。

第 4 項　考察

本研究は小学生における関係性攻撃生起の内的プロセスを検討するために，関係性攻撃観と敵意帰属バイアス，反応検索過程，応答的行動の四者間の SIP モデルの検証を実施した。その結果，適合度の基準を満たすモデルが得られず，関係性攻撃観と反応検索過程が関係性攻撃の生起に関連するかどうかの検討は部分的にしかなされなかった。以下には，主に相関係数との関連から得られた示唆について言及する。

まず，反応検索過程における歪みである攻撃的行動の産出率は，応答的行動

の 2 つの攻撃行動と有意な関連を示したことから,関係性攻撃の生起において,反応検索過程は重要な要素であることが考えられる。先行研究で指摘されたように，行動の選択肢を攻撃的行動が締める割合が高く，選択の幅が少ないということは，攻撃行動の生起に結び付く可能性が高くなると考えられる（Pettit et al., 1988）。関係性挑発場面における反応検索においても先行研究と同様の可能性を示唆できたことは貴重な結果であったと考えられる。

また,関係性攻撃観の下位尺度得点と,攻撃的行動の産出率の関連について,有意な相関係数を示したのは，否定的認識と身近さのみであった。否定的認識との間に示された負の相関関係を考えるにあたって，研究 2 で示された結果を考慮することが必要だと考えられる。研究 2 において，否定的認識得点の高さは，関係性攻撃経験の被害群や受身群，未経験群と関連することが示されている。つまり，関係性攻撃を容認しようとしない傾向が強いと，そもそも関係性攻撃に従事しないという可能性が考えられる。そのため，子ども達が葛藤場面において取りうる選択肢として，関係性攻撃を想起しえなかったと解釈することができるだろう。一方で，身近さ得点との間には正の相関関係が示された。身近さ得点の高さは，関係性攻撃が日常的なものであり，誰もが行っている標準的な行動と捉える傾向を意味する。子ども達の間で，関係性攻撃が頻繁に生じるものであるとするならば，行動の選択肢として関係性攻撃が想起されることは十分に考えられるだろう。ただし，これら関係性攻撃観の下位尺度得点との関連は，非常に小さなものであったことにも留意する必要があるだろう。

本研究では，関係性攻撃観，反応検索，応答的行動の関連を検討するモデルが適合せず，不採択となった。その理由としては，以下のことが考えられる。攻撃的行動の産出率が応答的行動とは中程度に関連していたことを踏まえると,関係性攻撃観と反応検索過程における歪みは，同時点においてはどちらか一方が他方を規定するような関連を示さないのかもしれない。Dodge（1993）によると，攻撃行動の生起を規定する潜在的知識構造には，攻撃的な反応行動レパートリーも含まれるとしている。そもそも第 4 ステップは，データベース内にある行動の選択肢を検索する情報処理過程であり，その選択肢の内容が攻撃的なものに偏っているということは，データベースそのものの歪みであると考えられる。関係性攻撃観はデータベースに該当すると想定しているので，本研究

ではデータベースがデータベースを規定するようなモデルを構築してしまっていたと考えられる。一方で，規範的信念が反応検索の歪みを促進させる結果を示した先行研究の Zelli et al.（1999）は，縦断的研究デザインを採用したモデルであった。しかし，本研究は同時点のデータによるモデルであったため，Zelli et al. (1999)とは異なる結果になった可能性が考えられる。よって，今後はどのようなモデルが必要なのか，理論から考え直すとともに，研究デザインの工夫も求められると考えられる。

本研究は，関係性攻撃観，敵意帰属バイアス，反応検索，応答的行動の関連を検討したが，SIP モデルに合致した結果を得ることができなかった。しかし，関係性攻撃観と反応検索の歪みである攻撃的行動の産出率，関係性攻撃の各得点同士の相互相関について部分的な関連は示すことができた。そのため，潜在的知識構造とオンライン情報処理過程，応答的行動の三者間の関連が全て否定された訳ではなく，今後のモデルの改良や研究デザインの工夫によって解明が期待できると考えられた。

第 4 節　小学生の関係性攻撃の認識と反応決定ステップの検討（研究 6）

第 1 項　目的

本研究でも，潜在的知識構造，対人相互作用場面における情報処理過程，応答的行動の関連を検討し，小学生の関係性攻撃の生起を説明する SIP モデルの検証を行うことを目的とする。

特に本研究では，オンライン情報処理過程の中でも第 5 ステップを取り上げる。第 5 ステップ反応決定は，特定の状況に対する反応行動のレパートリーにアクセスした後に生じるステップで，検索された行動を反応評価，結果予期，自己効力感の 3 つの観点から評価するプロセスだと考えられている（Crick & Dodge, 1994）。反応決定における 3 つの観点のうち，反応評価とは，対人相互作用場面において，検索された行動を表出することが適切か否かを判断する過程を意味する。また，結果予期とは，検索された行動を実際に表出した場合，第 3 ステップで生じた社会的目標がどの程度達成できるかという予測を行う過程だと考えられている。最後に，自己効力感とは検索された行動について，自分自身が遂行可能かどうかを判断する過程である。そして，攻撃行動の生起に関わる反応決定における歪みとは，攻撃行動を適切なものと評価することや，肯定的な結果をもたらすと予期する傾向，攻撃行動を実行する自信が強いことであると考えられる（Crick & Ladd, 1990; Perry et al., 1986）。関係性攻撃との関連を指摘すれば，男子が身体的攻撃をより肯定的に評価しているのに対し，女子は関係性攻撃をより肯定的に評価する傾向があるといった，反応評価における性差が指摘されている(Crick & Werner, 1998)。また，外顕的攻撃傾向を統制してもなお，関係性攻撃傾向の高さと，関係性攻撃を容認する情報処理過程が関連することも報告されている（坂井・山崎, 2004）。しかし，先行研究においては，反応決定における 3 つの要素である反応評価，結果予期，自己効力感を個別に検討しているものが多く，関係性攻撃の生起における反応決定全体の機能は未だに明らかにされていない状況である。さらに，関係性攻撃について，潜在的知識構造と反応決定過程，応答的行動の関連を検討した研究は皆無である。

そこで，本研究では，関係性挑発場面において，反応決定の 3 要素である反応評価，結果予期，自己効力感の全ての観点による行動の評価を測定する。その上で，潜在的知識構造である関係性攻撃観と応答的行動のそれぞれが反応決

定の情報処理過程とどの様な関連を示すのかを検討する。なお，本研究においても，オンライン情報処理過程のその他のステップとして，敵意帰属バイアスを測定し，部分的ではあるが情報処理過程の前半部分の効果を統制する試みを行う。上記の目的を達成するために，本研究では場面想定法を用いた質問紙調査を小学生対象に実施した。

第 2 項　方法

1.　対象者

茨城県の小学 4～6 年生 434 名（男子 220 名，女子 208 名，不明 6 名）を分析の対象者とした。ただし，分析の対象となる範囲の回答に不備がない限り，全てを分析の対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2.　調査時期

調査時期は 2013 年 12 月から 2014 年 7 月であった。

3.　手続き

研究 1-2 と同様の手続きで調査を実施した。

4.　質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 8 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。また，本調査が筑波大学大学院の人間系研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②対象者の性別と学年

回答にあたる対象者の基本的な情報として，性別と学年の記入を求めた。

③関係性攻撃観尺度改訂版

研究 2 で作成した関係性攻撃観尺度改訂版を用いた。「否定的認識」(7 項目),「身近さ」(6 項目),「正当化」(3 項目),「秘匿可能性」(4 項目) の 20 項目 5 件法であった。

④場面想定法よる社会的情報処理過程と応答的行動の測定

研究 3 と同様に, Crick et al.(2002)で用いられた場面のうちの 2 つの関係性挑発場面である①ろうかでのお話, ②お昼ご飯のお話を用いた。

まず, 関係性挑発場面における敵意帰属バイアスを測定するため,「○○(加害者側の登場人物　例 A と B) について, あなたはどのように思いますか」という教示のもと,「○○はわざとやったと思う」などの項目に回答を求めた。1 場面 5 項目ずつ 5 件法であった (研究 3 と同じ)。

次に, 関係性挑発場面における子ども達の反応決定過程を測定することを目的に, 上記 2 場面に対する 3 種類の反応例を提示し,「お話の中で, あなたが以下の行動をしたと想像して, 次の質問に最も当てはまるところに○をつけてください」という教示のもと, 回答を求めた。3 種類の反応例の具体的な記述は, 本研究で応答的行動として扱われている主張的行動, 関係性攻撃, 外顕的攻撃に対応するものであった。まず, 主張的行動に対応する記述は,「あなたは○○に笑った理由を怒らずにたずねました」というものであった。次に, 外顕的攻撃に対応する記述は,「あなたは○○に向かって悪口を言いました」というものであった。最後に, 関係性攻撃に対応する記述は,「あなたはその後、○○のことを無視しました」というものであった。

協力児童は, ひとつひとつの反応例について,「あなたが無視のような行動をすることは, 適切なことだと思いますか (反応評価)」,「無視しても, ○○は嫌な気持ちにならないと思う(関係維持的結果予期)」,「もしあなたが無視したら, ○○は謝ってくれると思う (道具的結果予期)」,「あなたは、自分が無視のような行動をすることができると思いますか (自己効力感)」の 4 つの項目の観点から,「1 : 全くそう思わない」～「5 : とてもそう思う」の 5 段階で評定した。1 つの場面の反応例 1 つに対して 4 項目であったので, 3 種類の反応例全ての評定には, 1 場面につき 12 項目が用いられた (Table5-13 参照)。

最後に，各場面に対する応答的行動を測定するために,「このとき，あなたはどうすると思いますか」という教示のもと，関係性攻撃，外顕的攻撃，主張的行動を想定した項目への回答を求めた。各行動の項目は，1 場面につき 3 項目ずつであり，5 件法であった（研究 3 と同じ)。

そして，上記の敵意帰属バイアス，反応決定，応答的行動に該当する項目の得点は,エピソード間で対応する項目を加算平均することで,得点化を行った。

第 3 項　結果

1.　各変数の基本的検討と記述統計量の算出

まず，反応決定の 12 項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行い,関係性挑発場面における反応決定の内容を検討した。因子分析の結果，3 因子解が得られた（Table5-13)。

第 1 因子は,“あなたが無視のような行動をすることは、適切なことだと思いますか（反応評価;関係性攻撃）”,“あなたは、自分が無視のような行動をすることができると思いますか(自己効力感;関係性攻撃)”,“あなたが悪口のような行動をすることは、適切なことだと思いますか（反応評価;外顕的攻撃)”などの項目から構成されていた。第 1 因子は，反応例のうち関係性攻撃と外顕的攻撃に対する反応評価と自己効力感，ならびに関係維持的結果予期の項目群により構成されていた。関係性攻撃と外顕的攻撃の双方に対して，適切で自分が遂行可能であると評価し，遂行の結果も相手との関係がそこまで悪くならないとみなすような攻撃行動に対する肯定的な評価をする項目群と特徴づけられる。そこで，第 1 因子を「攻撃評価・自己効力感」と命名した。

また，第 2 因子は,“もしあなたが 無視したら、A と B はあなたに謝ってくれると思いますか（道具的結果予期;関係性攻撃）”,“もしあなたが悪口を言ったら、A と B は謝ってくれると思いますか。(道具的結果予期;外顕的攻撃）”,“もしあなたが理由を尋ねたら、A と B はあなたに謝ってくれると思いますか（道具的結果予期;主張的行動)”の 3 項目から構成されていた。第 2 因子は，反応例全ての加害者からの謝罪を得ようとすることを期待する道具的結果予期の項目により構成されていた。そのため，第 2 因子を「道具的結果予期」と命名した。

Table 5-13 反応決定情報処理過程の質問項目に対する因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	F1	F2	F3
F1：攻撃評価・自己効力感			
あなたが無視のような行動をすることは、適切なことだと思いますか。（反応評価;関係性攻撃）	.73	.03	-.09
あなたは、自分が無視のような行動をすることができると思いますか。(自己効力感;関係性攻撃)	.70	-.11	.14
あなたが悪口のような行動をすることは、適切なことだと思いますか。（反応評価;外顕的攻撃）	.68	.08	-.17
あなたは、自分が悪口のような行動をすることができると思いますか。（自己効力感;外顕的攻撃）	.65	-.06	.14
もしあなたが 無視しても、AとBはいやな気持ちにならないと思う。（関係維持的結果予期;関係性攻撃）	.44	.09	.20
もしあなたが悪口を言っても、AとBはいやな気持ちにならないと思いますか。（関係維持的結果予期;関係性攻撃）	.38	.05	-.05
F2：道具的結果予期			
もしあなたが 無視したら、AとBはあなたに謝ってくれると思いますか。（道具的結果予期;関係性攻撃）	.03	.79	.00
もしあなたが悪口を言ったら、AとBは謝ってくれると思いますか。（道具的結果予期;外顕的攻撃）	.17	.67	-.10
もしあなたが理由を尋ねたら、AとBはあなたに謝ってくれると思いますか。（道具的結果予期;主張的行動）	-.22	.54	.19
F3：主張反応決定			
あなたが理由を尋ねるような行動をすることは、適切なことだと思いますか。（反応評価;主張的行動）	-.06	-.02	.68
あなたは、自分が理由を尋ねるような行動をすることができると思いますか。（自己効力感;主張的行動）	.00	.05	.63
もしあなたが理由を尋ねても、AとBはいやな気持ちにならないと思いますか。（関係維持的結果予期;主張的行動）	.23	-.01	.38

因子間相関	F1	F2	F3
F1	-	-.07	.01
F2	-	-	-.03

そして，第 3 因子は，“あなたが理由を尋ねるような行動をすることは、適切なことだと思いますか（反応評価;主張的行動）”，“あなたは、自分が理由を尋ねるような行動をすることができると思いますか。(自己効力感;主張的行動)”，“もしあなたが理由を尋ねても、A と B はいやな気持ちにならないと思いますか（関係維持的結果予期;主張的行動)” の 3 項目から構成されていた。第 3 因子は，反応例のうち主張的行動に対する反応評価や自己効力感，関係維持的結果予期の項目により構成されていた。そのため，第 3 因子を「主張反応決定」と命名した。

なお，α 係数は順に，.76，.68，.68 であった。そこで，反応決定の回答得点について，各因子を構成する項目ごとに加算し，項目数で割った値を下位尺度得点とした。この得点は理論的には 1 点から 5 点に分布すると考えられる。各下位尺度得点の平均と標準偏差は,「攻撃評価・自己効力感」が 2.57（*SD*=0.86），「道具的結果予期」が 31.89（SD=0.75），「主張反応決定」が 3.35（*SD*=0.89）であった。

続いて，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を構成する項目群，敵意帰属バイアスの 5 項目，応答的行動の 3 下位尺度得点を構成する 9 項目について，α 係数を算出した後，下位尺度ごとに項目の得点を加算平均し，各下位尺度得点とした。以上にまとめた本研究で使用する尺度の得点分布と信頼性係数を Table5-14 に示す。

さらに，本研究で扱う変数について，性別と学年を独立変数とした多変量分散分析を行った。その結果，性別と学年の主効果について，データ全体の群間の差を示す Wilks のラムダが有意であった（性別：$\Lambda(11, 310)=.94$, $p<.05$，学年：$\Lambda(22, 620)=.85$, $p<.001$）。そこで，各従属変数について，性別と学年と要因とする二要因の分散分析を行った（Table5-15）。

2. 関係性攻撃観と SIP 変数の相関係数の算出

関係性攻撃観の 4 下位尺度得点と敵意帰属バイアスの尺度得点，反応決定の 3 下位尺度得点，ならびに応答的行動の 3 下位尺度得点の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table5-16）。その結果，攻撃評価・自己効力感は，関係性攻撃観下位尺度得点のうち，身近さ（$r=.27$, $p<.001$）と正当化（$r=.50$,

Table5-14　尺度得点の分布と信頼性係数

変数	*N*	項目数	得点	分布		理論的中間点	α係数
			平均値(*SD*)	歪度	尖度		
否定的認識	412	7	4.29 (0.65)	-1.29	1.79	3.00	.69
身近さ	410	6	2.49 (0.80)	0.30	-0.16	3.00	.73
正当化	414	3	2.46 (1.11)	0.41	-0.76	3.00	.74
秘匿可能性	414	4	2.59 (0.84)	0.16	-0.41	3.00	.70
敵意帰属バイアス	404	5	3.90 (0.73)	-1.07	1.23	3.00	.76
攻撃評価・自己効力感	402	6	2.57 (0.86)	0.23	-0.52	3.00	.76
道具的結果予期	407	3	1.89 (0.75)	0.87	0.63	3.00	.68
主張反応決定	406	3	3.35 (0.89)	-0.28	-0.28	3.00	.68
主張的行動	402	3	3.26 (1.22)	-0.34	-0.92	3.00	.84
外顕的攻撃	402	3	1.78 (0.96)	1.32	1.02	3.00	.86
関係性攻撃	402	3	2.35 (1.12)	0.69	-0.38	3.00	.81

Table 5-15　性別（2）×学年（3）の二要因分散分析

従属変数	性別	4年生(N=82) 平均 (SD)	5年生(N=154) 平均 (SD)	6年生(N=90) 平均 (SD)	主効果　F値$_{(df)}$ 性別	主効果　F値$_{(df)}$ 学年	交互作用
否定的認識	男子(N=164)	4.30 (0.75)	4.22 (0.88)	4.19 (0.78)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=162)	4.20 (0.75)	4.43 (0.69)	4.22 (0.67)			
身近さ	男子(N=164)	2.39 (0.83)	2.38 (0.87)	2.67 (0.88)	*ns*	$6.77_{(2,320)}^{***}$ 4・5年生<6年生	*ns*
	女子(N=162)	2.26 (1.10)	2.40 (0.79)	2.85 (0.86)			
正当化	男子(N=164)	2.61 (1.06)	2.51 (0.88)	2.65 (0.94)	*ns*	$2.60_{(2,320)}^{\dagger}$ 5年生<6年生	*ns*
	女子(N=162)	2.43 (1.00)	2.38 (1.00)	2.82 (0.96)			
秘匿可能性	男子(N=164)	2.63 (0.87)	2.52 (0.85)	2.57 (0.76)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=162)	2.40 (0.94)	2.61 (0.77)	2.79 (0.65)			
敵意帰属バイアス	男子(N=164)	3.96 (0.87)	3.84 (0.76)	3.88 (0.70)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=162)	3.99 (0.67)	3.97 (0.75)	3.89 (0.58)			
攻撃評価・自己効力感	男子(N=164)	2.53 (0.75)	2.58 (0.89)	2.74 (0.91)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=162)	2.48 (0.97)	2.63 (0.86)	2.81 (0.88)			
道具的結果予期	男子(N=164)	1.63 (0.72)	1.84 (0.62)	1.80 (0.61)	$7.08_{(1,320)}^{**}$ 男子<女子	*ns*	*ns*
	女子(N=162)	2.15 (0.90)	2.04 (0.87)	1.75 (0.61)			
主張反応決定	男子(N=164)	3.59 (0.93)	3.40 (0.88)	3.43 (0.93)	*ns*	$2.74_{(2,320)}^{\dagger}$ 5年生<4年生	*ns*
	女子(N=162)	3.49 (0.83)	3.11 (0.84)	3.29 (0.85)			
主張的行動	男子(N=164)	3.53 (1.22)	3.39 (1.10)	2.83 (1.34)	*ns*	$14.00_{(2,320)}^{***}$ 4年生<5年生<6年生	*ns*
	女子(N=162)	3.83 (0.95)	3.24 (1.20)	2.66 (1.14)			
外顕的攻撃	男子(N=164)	1.80 (0.99)	1.85 (0.84)	1.96 (1.18)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=162)	1.77 (0.94)	1.73 (0.99)	1.73 (0.84)			
関係性攻撃	男子(N=164)	2.11 (0.97)	2.43 (1.13)	2.49 (1.08)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=162)	2.32 (1.08)	2.38 (1.26)	2.56 (1.08)			

注）$^{\dagger}p<.10$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

Table 5-16　関係性攻撃観とSIP変数，応答的行動の相関係数

	Step2 解釈	Step 5　反応決定			Step 6　反応実行		
	敵意帰属バイアス	攻撃評価・自己効力感	道具的結果予期	主張反応決定	主張的行動	外顕的攻撃	関係性攻撃
否定的認識	.42 ***	-.05	-.06	.26 ***	.20 ***	-.07	-.06
身近さ	.03	.27 ***	-.01	-.04	-.26 ***	.18 ***	.24 ***
正当化	.10 †	.50 ***	-.04	-.02	-.27 ***	.36 ***	.46 ***
秘匿可能性	.19 ***	.30 ***	-.02	.13 *	-.22 ***	.18 ***	.28 ***
敵意帰属バイアス	—	.17 ***	-.11 *	.25 ***	.09 †	.11 *	.22 ***
攻撃評価・自己効力感		—	-.08	.11 *	-.29 ***	.43 ***	.61 ***
道具的結果予期			—	.02	.29 ***	.08	-.07
主張反応決定				—	.36 ***	-.06	-.03

† $p<.10$,　* $p<.05$,　*** $p<.001$

p<.001)，秘匿可能性（r=.30, p<.001）との間にと有意な正の関連を示した。また，攻撃評価・自己効力感は敵意帰属バイアスと有意な正の相関係数を示した（r=.17, p<.001)。さらに，攻撃評価・自己効力感得点は応答的行動の全てと有意な関連を示し，そのうち関係性攻撃とは強力な正の関連を示し（r=.66, p<.001)，主張的行動とは負の関連を示した（r=.29, p<.001)。

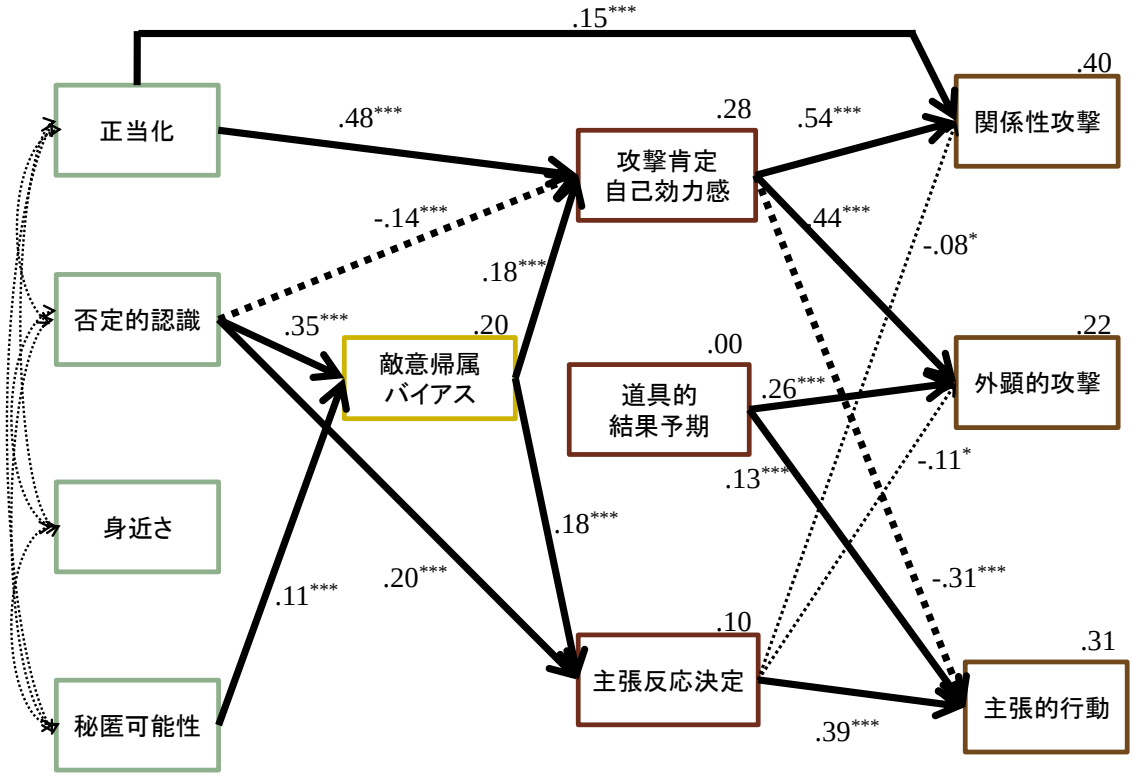
次に，道具的結果予期が有意な相関係数を示したのは，敵意帰属バイアス（r=-.11, p<.001）と主張的行動（r=.29, p<.001）との間のみであった。

最後に，主張反応決定は関係性攻撃観下位尺度得点のうち，否定的認識（r=.26, p<.001）と秘匿可能性（r=.13, p<.01）との間に有意な正の関連を示した。また，主張反応決定は敵意帰属バイアスとも有意な正の相関係数を示した（r=.25, p<.001)。そして，主張的目標は応答的行動のうち主張的行動のみと有意な正の関連をした（r=.36, p<.001)。

3. SIP モデルの検証

本研究の主要な目的である，関係性攻撃観の各下位尺度得点が，オンライン情報処理過程である敵意帰属バイアスと反応決定過程を介して，応答的行動に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証のために，共分散構造分析を行った。なお，欠損値を含むデータであったため，推定方法に完全情報最尤推定法を用いた。モデルの構成の際には，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を第一水準，敵意帰属バイアスを第二水準，反応決定の 3 下位尺度得点を第三水準，応答的行動の 3 下位尺度得点を第四水準に設定した。SIP モデルでは，情報処理過程は系列的な進行のみならず，中心にあるデータベースから各ステップに直接作用することも想定されているため，第一水準から第三，第四水準への直接的なパスも想定した。そして，有意でないパスを削除していき，適合度が最適となるモデルを探索した。その結果，Figure5-3 に示すモデルが得られた。モデルの適合度は，$\chi^2_{(31)}$=94.39(p<.001)，CFI=.937，RMSEA=.066 であり，CFI と RMSEA の数値が基準を満たしていたため，モデルを採用することとした。

まず，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，否定的認識と秘匿可能性が敵意帰属バイアスに促進的な関連を示した。さらに敵意帰属バイアスは，攻撃評価・自己効力感得点に正の関連を示し，結果的に関係性攻撃を促進させるように作



注 1）$\chi^2_{(31)}$=94.39(p<.001)，CFI=.937，RMSEA=.066

注 2）$^{\dagger}p$<.05（ ⟶ ），$^{***}p$<.001（ ➡ ）

注 3）誤差項の記載は省略した。

注 4）矢印の実線はパラメータ推定値が正

矢印破線はパラメータ推定値が負

Figure5-3　関係性攻撃観，敵意帰属バイアス，反応決定，応答的行動の関連

用していた。

次に，第 5 ステップとの関連をみると，関係性攻撃観尺度の正当化が，反応決定の攻撃評価・自己効力感に直接的な正の関連を示し，結果，関係性攻撃や外顕的攻撃とも正の関連があることを示した。一方で，否定的認識は攻撃評価・自己効力感に直接的な負の関連を示し，結果，関係性攻撃や外顕的攻撃とも負の関連があることを示した。また，否定的認識は主張反応決定に対しても促進的な関連を示し，結果，応答的行動において主張的行動と正の関連を示し，2 つの攻撃的行動に対して負の関連を示した。

さらに，正当化はこうしたオンライン情報処理過程との関連を介さずに，関係性攻撃に直接的な正の関連も示していた。

第 4 項　考察

本研究は小学生における関係性攻撃生起の内的プロセスを検討するために，関係性攻撃観と敵意帰属バイアス，反応決定過程，応答的行動の四者間の SIP モデルの検証を実施した。その結果，関係性挑発場面における関係性攻撃の生起には，潜在的知識構造である関係性攻撃観とオンライン情報処理過程の双方が関連していることが明らかになった。

まず，本研究の結果，敵意帰属バイアスは，研究 2 と同様に，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，否定的認識と秘匿可能性によって促進されることが示された。この結果から，関係性攻撃を有害だと捉えるほど，曖昧な関係性挑発に対しても敵意的に捉える傾向が高まる可能性が再度示唆された。そして，敵意帰属バイアスは，第 5 ステップの反応決定における検索された攻撃行動に肯定的な評価を与える傾向を促進させるとともに，主張的行動に対する肯定的な評価を抑制するように作用することが明らかになった。その結果，応答的行動の攻撃行動が促進され，主張的行動が抑制されることが示された。

続いて，本研究では特に，オンライン情報処理過程の第 5 ステップである反応決定の機能に注目した。特に，Crick & Dodge（1994）の構成概念を重視し，反応評価，結果予期，自己効力感の 3 つの観点による反応決定の情報処理過程を測定することが課題であった。そして，因子分析の結果，想定した 3 つの構成概念とは異なる攻撃肯定・自己効力感，道具的結果予期，主張反応決定の 3

因子が得られた。この結果のうち，攻撃肯定・自己効力感を構成する項目は，関係性攻撃と外顕的攻撃に対する反応評価，自己効力感，関係維持的結果予期の項目群であった。また，道具的結果予期は，曖昧な挑発場面にも関わらず，相手から謝罪を要求することの成否についての期待を示す項目群から構成されていた。そして，主張反応決定については，主張的行動に対する反応評価，自己効力感，関係維持的結果予期の項目群から構成されていた。よって，これらの 3 つの因子，特に攻撃肯定・自己効力感と主張反応決定は，特定の行動に対して，反応決定の 3 つの観点による情報処理の内容を網羅した得点であると捉えることができる。そもそも，反応決定では，検索された行動について，「適切か」，「目標は達成できるか」，「遂行可能か」の 3 つの観点から決定を下すことを想定している。つまり，行動の選択肢を評価する 3 つの観点が，それぞれ独立に機能するわけではなく，1 つの行動ごとにまとまって機能すると考えられるのである。よって，これらの得点が高いほど，反応決定過程での 3 つの観点からの評価が高く，反応実行を促進する機能があることが想定できる。道具的結果予期の要素だけ分離してしまった点については，今回用いた挑発場面が関係性挑発場面であったことが関連しているかもしれない。結果予期は，情報処理過程の第 3 ステップで立てた目標が，選択された行動によって達成できるか否かを判断する情報処理過程である。そして，自分の欲求を優先させる道具的目標は道具的挑発場面において外顕的攻撃の生起に関連し（Crick & Dodge, 1996），一方で，関係維持目標が関係性挑発場面において関係性攻撃の生起に関連することが示されている（Delveaux & Daniels, 2000）。今回は関係性挑発場面を用いたので，結果予期の中でも関係性攻撃の生起に関わる関係維持的目標に関する結果予期のみが，攻撃肯定・自己効力感と主張反応決定に含まれ，道具的結果予期は分離したという可能性が考えられる。そこで，以降は攻撃肯定・自己効力感と主張反応決定の結果を中心に検討する。

共分散構造分析の結果，関係性攻撃観のうち正当化と否定的認識が直接，攻撃肯定・自己効力感得点と主張反応決定得点に促進的に作用することが示された。正当化と否定的認識は，関係性攻撃を容認するか，容認しないかの基準である命令的規範の要素を強く持つ変数であるため，架空場面における攻撃行動を適切な反応とみなすような情報処理過程に関連を示したのだと考えられる。

この結果は坂井・山崎（2004）にて報告された結果を支持するものだと考えられる。なお，特に正当化は，攻撃評価・自己効力感得点を介して関係性攻撃に示した関連（パラメータ推定値=0.26）は，直接的な効果（パラメータ推定値=0.15）よりも大きかった。

この正当化と第 5 ステップの関連は，実は非常に興味深いものである。SIP モデルのオンライン情報処理過程は，第 2 ステップを中心とした前半部分と第 5 ステップを中心とした後半部分において，関連する攻撃行動の機能が異なると考えられている（Card & Little, 2007）。つまり，敵意帰属バイアスなどで特徴づけられる解釈過程は欲求不満攻撃仮説に基づく反応的攻撃が特に関連し，攻撃行動に対する自己効力感や攻撃行動の結果によって得られるものに価値を置くようなオペラント的な認知に特徴づけられる反応決定過程は，社会的学習理論に基づく能動的攻撃性との関連が指摘されているのである。しかし，本研究で反応決定過程と強力な関連を示したのは，関係性攻撃観の下位尺度得点のうちで正当化であった。報復的な関係性攻撃を容認する考え方という正当化の特徴は，反応的攻撃に関連するように感じられる。ただし，報復という攻撃は「行為者自身が被害を受け，相手にも自分と同じ苦しみを味わわせたいという自分と相手とのバランスを回復させる目標によって特徴づけられる」ことが言及されている（大渕, 2011）。つまり，欲求不満状態に陥って，誰に対してでも発散を行い，自己の内的なバランスを保とうとする情動発散説による反応的攻撃に対して，報復は欲求不満の対象が外にあるという点では同じだが，発散すればいいという訳でない点で異なると考えられる。報復には損なわれていた相手とのバランスを回復したり，さらには相手よりも上に立ちたいという動機があることが重要なのである。つまり，報復的攻撃には道具的，能動的な面があると考えられるだろう。そのため，本研究において，第 5 ステップと正当化の間に関連がみられたことも，報復に含まれる能動的攻撃の要素が関わったのだと考えられる。

これらの結果から，SIP モデルの理論通りに，潜在的知識構造が，オンライン情報処理過程を介して，攻撃行動の生起に関わることが示されたと考えられる。

第 5 節　第 5 章のまとめ

本章では，関係性攻撃の生起メカニズムを明らかにすることを目的に，関係性攻撃観を潜在的知識構造と仮定した SIP モデルの検証を行った。その結果，各情報処理過程における歪みと潜在的知識構造,応答的行動の関連が示された。

まず，解釈過程では，関係性攻撃観のうち否定的認識と秘匿可能性が敵意帰属バイアスと正の関連を示し，そして，応答的行動である関係性攻撃を促進させる結果が示された。この結果から,関係性攻撃を有害であると捉えていたり，容認できないと捉えていることは，相手の意図が曖昧な場合であっても，相手の行為を敵意的に捉え，関係性攻撃への従事を高める可能性があることが示唆された。

次に，目標明確化過程では，関係性攻撃観のうち正当化が関係維持目標と負の関連を示し，そして，応答的行動である関係性攻撃を促進させる結果が示された。この結果から，報復的な関係性攻撃は容認できるという捉え方は，関係性挑発場面に遭遇した際に，相手との関係を重視する目標に抑制的に関連し，関係性攻撃への従事を高める可能性が考えられた。

続いて，反応検索過程での歪みとして，攻撃的行動の産出率が測定され，潜在的知識構造や応答的行動との関連が検討された。しかし，適合度の基準を満たすモデルが得られず，関係性攻撃観と反応検索過程が関係性攻撃の生起に関連するかどうかの検討は部分的にしかなされなかった。相関係数を産出した結果，攻撃的行動の産出率は，関係性攻撃と外顕的攻撃と有意な正の関連を示した。また，攻撃的行動の産出率と関係性攻撃観の関連では，否定的認識が有意な負の関連を示し，身近さが有意な正の関連を示した。この結果から，関係性攻撃が日常的なものであり，誰もが行っている標準的な行動だと捉える傾向が反応検索における行動選択レパートリーを歪ませる可能性が示唆された。

最後に，反応決定過程では，関係性攻撃観のうち，正当化が攻撃行動に対する自己効力感や適切性の評価と有意な正の関連を示し，さらに関係性攻撃を促進させることが示された。この結果から，報復的な関係性攻撃を容認する傾向は，関係性挑発場面において，攻撃行動を遂行する自信や攻撃行動の適切性の評価に関連し，関係性攻撃行動の遂行を高める可能性が考えられた。

以上の本章の一連の研究の結果を概観すると，関係性攻撃観の中でも，正当

化や否定的認識などの，命令的規範に関わる変数が多くのオンライン情報処理過程と関連し，さらに関係性攻撃の生起にも関わる可能性が示唆された。潜在的知識構造の中でも，命令的規範に関わる要素は，先行研究でも中心的に検討されてきた点であり，攻撃行動に対する「良い - 悪い」の価値基準が，対人相互作用場面における認知過程に影響する可能性は大いに考えられることだろう。

また，本章で実施された一連の研究の結果，潜在的知識構造はオンライン情報処理過程の各ステップにダイレクトに作用する可能性を示唆できたことは重要な点だと考えられる。Crick & Dodge（1994）の円環モデルによって，データベースはどの情報処理過程とも相互に関連しあうことが示唆されてきた。本章では，反応検索との関連が不明瞭なままに終わったが，その他の情報処理過程とデータベースの関連を示すことができた。そのため，SIP モデルにおいて関係性攻撃の生起を説明する際には，敵意帰属バイアス以外にも重要な関連要因があることを改めて提示することができたと考えられる。以上の本章における新たな知見の提示によって，SIP モデルを扱った研究のさらなる発展の必要性が示唆されたと言えるだろう。

第 6 章

小学生の関係性攻撃の認識と心理社会的適応の関連

（研究 7・研究 8）

第 6 章のはじめに

本論文では，小学生の関係性攻撃の生起に関わる要因として，関係性攻撃についてどのように捉えているかといった小学生の認識を取り上げるために，小学生用の関係性攻撃観尺度を作成し，否定的認識，身近さ，正当化，秘匿可能性の 4 因子からなる質問紙尺度を得た。そして前章において,関係性攻撃観が，架空の対人相互場面における情報処理過程や攻撃行動の生起に関わることが示唆された。特に，報復的な関係性攻撃を容認する考え方は，攻撃行動を促進させる可能性が高いことが示された。では，そういった報復を容認するような考え方によって導かれた攻撃行動への従事は，子ども達の心理社会的適応とどのように関連するのであろうか。本章では，この疑問を解消することを目的に，小学生の関係性攻撃観と攻撃行動，そして心理社会的適応の問題との関連を検討する。

多くの先行研究において，関係性攻撃と心理社会的不適応の関連が指摘されている。関係性攻撃との関連が指摘されている心理社会的不適応の内容としては，まず，仲間からの拒否や孤独感の増加などの社会的適応の問題が挙げられる（Crick & Grotpeter, 1995; Werner & Crick, 2004; Zimmer-Gembeck et al., 2005）。関係性攻撃の研究が始まる以前から，攻撃行動への従事は，仲間から嫌われるという結果をもたらすことが報告されてきており（Cairns et al., 1988; Dodge et al., 1990），攻撃行動の研究の文脈に沿った重要な論点であると考えられる。また，不安や抑うつといった内在化問題との関連も先行研究で指摘されている（Crick, et al., 2006; Murray-Close, et al., 2007）。しかも，内在化問題は，身体的攻撃を統制した上でも関係性攻撃のみが有意な関連を示すことも報告されており，関係性攻撃が子ども達の適応の問題にもたらす影響の大きさを示唆する特に重要な検討点であると考えられる。以上の過去の知見を参考に，本章においても，心理社会的適応の問題として，社会的適応の問題と内在化問題について検証する。

よって本章の構成は，各節で社会的適応の問題と内在化問題との関連を検討する。まず，第 1 節で関係性攻撃観と攻撃行動，社会的適応の関連を検討する（研究 7)。社会的適応の状態を測る指標としては，学校生活満足度を取り上げる。次に，第 2 節で関係性攻撃観と攻撃行動，内在化問題の関連を検討する（研

究 8)。内在化問題を測る指標としては，状態不安と抑うつ傾向を取り上げる。本章の研究を実施することで，関係性攻撃を容認するような考え方と，攻撃行動や心理社会的適応との関連の全体像を明らかにすることが期待できる。

第１節　小学生の関係性攻撃の認識と社会的適応の関連の検討（研究 7）

第１項　目的

本研究では，小学生の関係性攻撃観と攻撃行動，社会的適応の関連を検討することを目的とする。そのために，本研究では，社会的適応の状態を測定する指標として，学校生活満足度尺度を用いる。学校生活満足度尺度は，自分の存在や行動が仲間や教師から認められているという感覚と関連する「承認」得点と，周囲からいじめや冷やかしにあっているという感覚に関連する「被侵害」の 2 因子からなる質問紙尺度である（河村・田上, 1997）。攻撃行動を扱った多くの研究において，攻撃児は仲間から拒否されるという結果が報告されているので（Cairns et al., 1988; Dodge et al., 1990），小学生本人が学級集団の中で認められているか，被害を受けているように感じているかを測定可能な学校生活満足度尺度は，関係性攻撃との関連を検討する社会的適応の指標として利用可能だと考えられる。

また，本研究では，関係性攻撃観と攻撃行動，学校生活満足度の関連を調整する変数についても検討する。関係性攻撃と心理社会的適応の関連を検討した先行研究では，関係性攻撃と仲間から認知された人気の関連が指摘されるなど（Cillessen & Mayeux, 2004; Rose et al., 2004），関係性攻撃への従事が単に不適応につながらない可能性が議論されている。北米で実施されている研究では，関係性攻撃と心理社会的適応の関連を調整する変数として，性別や仲間内地位などが扱われている（Crick et al., 2006; Rose & Swenson, 2009）。本邦においては，関係性攻撃における性差が北米ほど明確に表れていないため（坂井・山崎, 2004），性別による調整効果が北米ほどは認められない可能性が考えられる。そこで，調整変数としては仲間関係に注目する。しかし，ソシオメトリック指名法の実施は本邦においては困難なため，本研究では関係性攻撃の加害，被害の経験について着目する。

関係性攻撃の経験が,関係性攻撃と社会的適応の関連を調整する根拠として，攻撃行動の機能の違いによって，不適応の程度が異なるという知見が挙げられる（Card & Little, 2007）。具体的には，能動的攻撃傾向の高い者は，計画的に，秩序立てて，たやすく屈服できるような集団内での地位の低い者を攻撃対象に選ぶことが可能なため，自分の攻撃行動が仲間から非難されにくいと考えられ

ている。一方で，反応的攻撃傾向の高い者は，仲間集団内で支配しにくいような，既に地位を確立している仲間に対して遂行してしまうため，自分が仲間から非難されるリスクを持つとされている。そして，この違いによって，反応的攻撃傾向の高い者は能動的攻撃傾向の高い者よりも不適応の程度が大きいことが想定されている（Card & Little, 2007）。この知見から，被害経験ばかりが蓄積している児童は，関係性攻撃傾向が高まっても，関係性攻撃を巧みに扱えておらず，逆に仲間からの自分への非難が増えてしまっている，つまり，社会的不適応状態にある可能性が考えられる。逆に，加害経験しかない児童は，基本的には社会的適応が悪いことが前提となるので,関係性攻撃傾向が高まっても，それ以上の社会的適応の悪化にはつながらないことが想定される。さらに，加害経験のみの児童は，関係性攻撃を巧みに扱えるために，仲間から自分が非難されず被害経験を持っていない可能性も考えられる。以上を踏まえて，本研究では関係性攻撃の経験が，関係性攻撃観，攻撃行動，学校生活満足度の関連を調整する機能を持つと仮定する。具体的には，被害経験群において，関係性攻撃観が攻撃行動を規定し，さらに攻撃行動と社会的不適応が関連することが考えられる。一方で，加害経験群は，関係性攻撃観が攻撃行動を規定しても，攻撃行動と社会的不適応に有意な関連が見られない可能性が考えられる。この仮説を検証するために，本研究では小学生を対象にした質問紙調査を実施した。

第 2 項　方法

1.　対象者

茨城県の小学 4，5，6 年生 546 名（男子 285 名，女子 257 名，性別不明 4 名）を分析の対象者とした。ただし，分析の対象となる範囲の回答に不備がない限り，全てを分析の対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2.　調査時期

調査時期は 2013 年 9 月から 2013 年 12 月であった。

3.　手続き

研究 1-2 と同様の手続きで調査を実施した。

4. 質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 9 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。また，本調査が筑波大学大学院の人間総合科学研究科研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②児童の性別と学年

回答にあたる児童の基本的な情報として,性別と学年について記入を求めた。

③関係性攻撃観尺度改訂版

研究 2 で作成した関係性攻撃観尺度改訂版を用いた。「否定的認識」(7 項目),「身近さ」(6 項目),「正当化」(3 項目),「秘匿可能性」(4 項目) の 20 項目 5 件法であった。

④小学生用 P-R 攻撃性質問紙

調査対象となった児童の攻撃性の特徴を測定する目的のために，研究 1，2 でも使用した坂井・山崎（2004）の「小学生用 P-R 攻撃性質問紙」を用いた。「表出性攻撃（以下，外顕的攻撃)」と「関係性攻撃」の合計 14 項目を利用した。4 件法であった。

⑤学校生活満足度尺度

学校生活満足度尺度は，たのしい学校生活を送るためのアンケート Q-U（河村，2005）を構成するひとつの尺度である。「学校生活満足度尺度」は，承認 6 項目と被侵害 6 項目の計 12 項目からなる。本来は，承認と被侵害の得点をそれぞれ合計し，集計表に記入することで，学級生活に対する児童の満足度や学級の雰囲気を視覚化することができる尺度である。集計表から児童が学級生活満足群や，被承認群，被害行為認知群，学級生活不満足群のどこに属している

かを把握し，児童の特徴をより理解することを目的とした質問紙尺度である。本研究においては，集計表による群分けは行わず，承認と被侵害の得点を社会的適応の指標として利用ことを目的に使用する。「自分の気持ちに一番近い数字に○をつけてください。」という教示に基づいて，「まったくない，まったく思わない，まったくいない…1」，「あまりない，あまりそう思わない，あまりいない…2」，「少しある，少しそう思う，少しいる…3」，「よくある，とてもそう思う，たくさんいる…4」の 4 件法で回答を求めた。

⑥関係性攻撃経験質問項目

小学生の関係性攻撃経験を調べるために，研究 2 でも使用した姜・大重（2005）の関係性攻撃経験質問項目を参考に独自に作成した質問項目を用いた。「あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？あてはまるものすべてに○をつけてください」という教示のもと，「誰かに対しての「無視」や「仲間外れ」，「かげ口」などを（1）自分がしたことがある，（2）友達が他の友達にしているところを見たり聞いたことがある，（3）自分がされたことがある，（4）どれもあてはまらない」という 4 つの項目に対して回答を求めた。

本研究では，被害経験のみの子どもを抽出する目的があったため，（3）のみにに○をつけている者を被害群，（1）に○をつけている者を加害群，それ以外の者を受身・未経験群とした。よって，本研究における加害群は，純粋に加害経験のみのグループではなく，加害経験も被害経験もある群と考えられる。本研究の分類基準に基づく各群の人数分布を Table6-1 に示す。

第 3 項　結果

1.　各変数の記述統計量の算出

本研究で用いる関係性攻撃観尺度，小学生用 P-R 攻撃性質問紙，学校満足度尺度について，各下位尺度を構成する項目による α 係数を算出した上で，下位尺度ごとに項目を加算平均した値を算出し，下位尺度得点とした。これら本研究で使用する尺度の得点分布と信頼性係数を Table6-2 に示す。

続いて，各下位尺度得点について，関係性攻撃経験による得点の差を検討するために，一要因の分散分析を実施した。その結果を Table6-2 に示す。

Table 6-1　関係性攻撃経験の人数分布

	n	パーセント	累積パーセント
加害群	144	26.4	31.9
被害群	142	26.0	57.9
受身・未経験群	247	45.2	103.1
分類不能	13	2.4	105.5
合計	546	100.0	

注）加害群は，加害経験も被害経験もある児童も含まれる
被害群は，被害経験のみの児童で構成される
受身・未経験群は，加害経験も被害経験もない児童

Table6-2　各変数の記述統計量

変数	α係数	全体	①加害群	②被害群	③受身･未経験群	*F*値$_{(df)}$	多重比較
		平均値(*SD*)	平均値(*SD*)	平均値(*SD*)	平均値(*SD*)		
否定的認識	.70	4.21 (0.64)	3.97 (0.76)	4.35 (0.54)	4.27 (0.55)	$15.92_{(2, 518)}^{***}$	①<②, ③
身近さ	.70	2.57 (0.88)	3.08 (0.91)	2.50 (0.86)	2.32 (0.75)	$38.87_{(2, 520)}^{***}$	②, ③<①
正当化	.74	2.65 (1.10)	3.10 (1.08)	2.55 (1.08)	2.46 (1.04)	$17.34_{(2, 525)}^{***}$	②, ③<①
秘匿可能性	.68	2.67 (0.81)	2.74 (0.77)	2.61 (0.87)	2.66 (0.81)	*ns*	*ns*
外顕的攻撃	.85	2.01 (0.71)	2.58 (0.69)	1.92 (0.59)	1.74 (0.58)	$82.41_{(2, 514)}^{***}$	③<②<①
関係性攻撃	.83	1.65 (0.57)	2.14 (0.60)	1.58 (0.53)	1.40 (0.37)	$108.10_{(2, 521)}^{***}$	③<②<①
承認	.83	2.95 (0.71)	2.83 (0.69)	2.97 (0.71)	3.04 (0.69)	$3.88_{(2, 518)}^{*}$	①<③
被侵害	.81	1.98 (0.74)	2.17 (0.73)	2.27 (0.68)	1.69 (0.69)	$36.83_{(2, 514)}^{***}$	③<①, ②

注1）$^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$

分散分析の結果,「否定的認識」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められた（$F_{(2,518)}$=15.92, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ,「被害群」と「受身・未経験群」は「加害群」よりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.001）。

次に,「身近さ」得点（$F_{(2,520)}$=38.87, p<.001）と「正当化」得点（$F_{(2,525)}$=17.34, p<.001）に関係性攻撃経験の有意な主効果がみられた。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ，両得点とも「加害群」が,「被害群」と「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.001）。

また,「外顕的攻撃」得点（$F_{(2,514)}$=82.41, p<.001）と「関係性攻撃」得点（$F_{(2,521)}$=108.10, p<.001）のそれぞれについて，関係性攻撃経験の有意な主効果がみられた。多重比較の結果，両得点とも「加害群」が「被害群」よりも高く，そして「被害群」が「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.001）。

さらに,「承認」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められた（$F_{(2,518)}$=3.88, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ,「受身・未経験群」が「加害群」よりも有意に高い得点を示した（p<.05）。

最後に,「被侵害」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められた（$F_{(2,514)}$=36.83, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ,「加害群」と「被害群」が「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（p<.05）。

なお，本研究で扱う変数について，性別と学年を独立変数とした多変量分散分析も実施した。その結果，性別と学年の主効果，および交互作用のデータ全体の群間の差を示す Wilks のラムダが有意であった（性別：Λ(8, 461)=.90, p<.001, 学年：Λ(16, 922)=.87, p<.001, 交互作用：Λ(16, 922)=.94, p<.05）。そこで，各従属変数について，性別と学年と要因とする二要因の分散分析を行った（Table6-3）。

2. 各変数間の相関係数の算出

本研究で扱う変数の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table6-4）。また関係性攻撃の経験による得点差を考慮して，経験別にも相関係数を算出し

Table 6-3　性別（2）×学年（3）の二要因分散分析

従属変数	性別	4年生(N=145) 平均 (SD)		5年生(N=197) 平均 (SD)		6年生(N=132) 平均 (SD)		主効果　F値$_{(df)}$ 性別	主効果　F値$_{(df)}$ 学年	交互作用
否定的認識	男子(N=244)	4.29	0.49	4.09	0.68	4.11	0.73	$5.49_{(1,468)}^{*}$ 男子<女子	*ns*	*ns*
	女子(N=230)	4.31	0.61	4.27	0.63	4.32	0.56			
身近さ	男子(N=244)	2.21	0.75	2.43	0.80	2.85	0.99	$6.26_{(1,468)}^{*}$ 女子<男子	$24.54_{(2,468)}^{***}$ 4年生<5年生<6年生	*ns*
	女子(N=230)	2.28	0.74	2.73	0.87	3.07	0.95			
正当化	男子(N=244)	2.61	1.11	2.88	1.12	3.00	1.19	$8.16_{(1,468)}^{**}$ 女子<男子	$3.95_{(2,468)}^{*}$ 4年生<5･6年生	*ns*
	女子(N=230)	2.43	1.01	2.43	1.09	2.77	1.01			
秘匿可能性	男子(N=244)	2.47	0.77	2.48	0.79	2.91	0.84	$3.71_{(1,468)}^{\dagger}$ 男子<女子	$6.06_{(2,468)}^{**}$ 4･5年生<6年生	*ns*
	女子(N=230)	2.75	0.77	2.70	0.85	2.86	0.84			
外顕的攻撃	男子(N=244)	1.96	0.71	2.09	0.67	2.32	0.85	$12.21_{(1,468)}^{***}$ 女子<男子	$9.85_{(2,468)}^{***}$ 4年生<5年生<6年生	*ns*
	女子(N=230)	1.68	0.59	1.94	0.66	2.07	0.67			
関係性攻撃	男子(N=244)	1.46	0.49	1.70	0.62	1.83	0.64	*ns*	$15.14_{(2,468)}^{***}$ 4年生<5年生<6年生	*ns*
	女子(N=230)	1.47	0.49	1.62	0.54	1.85	0.55			
承認	男子(N=244)	2.90	0.70	3.02	0.66	2.79	0.78	$2.94_{(1,468)}^{\dagger}$ 男子<女子	*ns*	$4.18_{(2,468)}^{*}$ 4年：男<女，女：5年<4年
	女子(N=230)	3.17	0.57	2.88	0.77	2.99	0.68			
被侵害	男子(N=244)	1.93	0.74	1.87	0.71	2.06	0.81	*ns*	$3.84_{(2,468)}^{*}$ 4年生<6年生	*ns*
	女子(N=230)	1.75	0.57	2.04	0.81	2.11	0.72			

注）$^{\dagger}p<.10$，$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$

Table 6-4　各尺度得点間の相関係数

	外顕的攻撃	関係性攻撃	承認	被侵害
否定的認識	-.25 ***	-.30 ***	.16 ***	-.02
身近さ	.43 ***	.43 ***	-.12 **	.18 ***
正当化	.44 ***	.37 ***	-.15 ***	.06
秘匿可能性	.11 **	.19 ***	-.09 †	.06
外顕的攻撃		.66 ***	-.23 ***	.21 ***
関係性攻撃			-.20 ***	.26 ***

注1）† $p<.10$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

た（Table6-5）。

まず，全体の相関係数の結果について概説すると，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点は，2 種類の攻撃行動と承認得点に対して有意な関連を多く示した。そして，外顕的攻撃と関係性攻撃は，承認と被侵害に対して有意な関連をそれぞれ示した。

関係性攻撃の経験別の相関係数を算出したところ，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点は，2 種類の攻撃行動との関連において，全体の結果と同様に多くの有意な関連を示した。しかし，承認と被侵害との関連については，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点の中で有意な関連を示す変数があまりみられなかった。また，外顕的攻撃と関係性攻撃は，承認と被侵害との関連において，加害群のみ有意な関連を示さないという結果が認められた。

3. 関係性攻撃観と攻撃行動，学校生活満足度尺度の関連の検討

本研究の主要な目的は，関係性攻撃観と攻撃行動，学校生活満足度の関連を検討し，さらにその際に，関係性攻撃経験による調整効果を検討することであった。その目的を達成するために，共分散構造分析を行った。なお，欠損値を含むデータであったため，推定方法は完全情報最尤推定法を用いた。モデルの構成の際には，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を第一水準，外顕的攻撃と関係性攻撃を第二水準，承認と被侵害を第三水準に設定した。また，関係性攻撃観は，SIP モデルに基づきあくまで攻撃行動の生起に関連する指標であるという前提と，相関係数の結果から，第一水準から第三水準への直接的なパスは想定しなかった。そして，有意でないパスや関連を示さなかった変数を削除していき，適合度が最適となるモデルを探索した。続いて，得られたモデルに対する関係性攻撃経験の調整効果を検討するため，経験群別にモデルの検証を行った後，多母集団同時分析を実施した。そして，全てのパスに等値制約を置いたモデルと，制約を設定しなかったモデルの適合度の比較を行った（Table6-6）。その結果，等値制約を設定しなかったモデルが採用され，関係性攻撃経験による調整効果のあるモデルが得られた（Figure6-1）。よって以下の結果は，関係性攻撃経験群別に述べる。

まず，加害群において，関係性攻撃観の下位尺度得点のうち，身近さ，正当

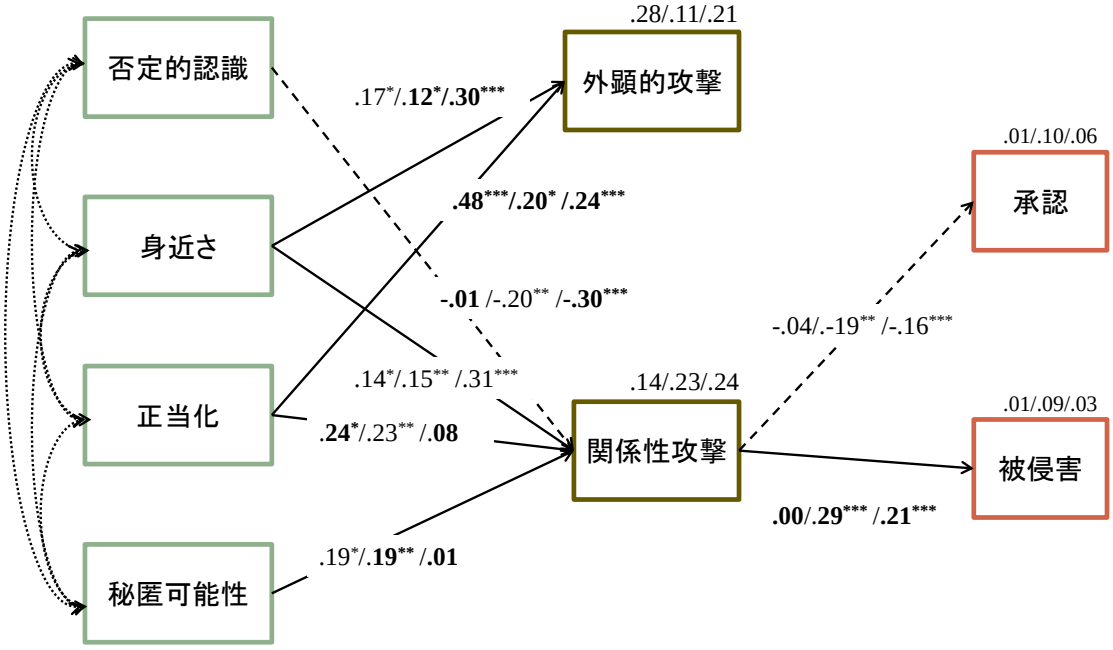
Table 6-5　各尺度得点間の相関係数（経験群別）

	外顕的攻撃	関係性攻撃	承認	被侵害
否定的認識				
加害群	-.18 *	-.17 *	.18 *	.05
被害群	-.17 †	-.24 **	-.06	-.03
受身・未経験群	-.20 **	-.35 ***	.19 **	-.02
身近さ				
加害群	.31 ***	.25 **	-.06	.13
被害群	.17 *	.29 ***	.05	.02
受身・未経験群	.37 ***	.37 ***	-.17 **	.15 *
正当化				
加害群	.53 ***	.32 ***	-.06	-.07
被害群	.25 **	.34 ***	-.15 †	.06
受身・未経験群	.34 ***	.23 ***	-.12 †	.03
秘匿可能性				
加害群	.26 **	.25 **	-.13	.12
被害群	-.10	.21 *	.08	-.06
受身・未経験群	.12 †	.12 †	-.14 *	.11
外顕的攻撃				
加害群		.47 ***	-.08	.10
被害群		.62 ***	-.27 **	.20 *
受身・未経験群		.57 ***	-.22 ***	.07
関係性攻撃				
加害群			.00	.04
被害群			-.27 ***	.31 ***
受身・未経験群			-.23 ***	.19 **

注1）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

Table 6-6　モデルの適合度の比較

モデル	χ^2	*df*	*P*	*CFI*	*RMSEA*	*AIC*	$\Delta\chi^2$	Δdf	*P*
モデル1（制約あり）	97.07	49	.001	.925	.043	263.066			
モデル2（制約なし）	46.75	27	.001	.969	.037	256.753	50.32	22	.001



注 1）$\chi^2_{(27)}$=47.65, p<.001, CFI＝.969, RMSEA=.037

注 2）$^{*}p$<.05, $^{**}p$<.01, $^{***}p$<.001

注 3）誤差項の記載は省略した。

注 4）各数値は，加害群／被害群／受身・未経験群の順に配置した。

注 5）太字のパラメータ推定値間は 5%水準で有意に差がある。

なお，正当化と外顕的攻撃の間の推定値で有意差があるのは，加害群と被害群，加害群と受身・未経験群である。関係性攻撃と被侵害の間の推定値で有意差があるのは，加害群と被害群，加害群と受身・未経験群である。

Figure 6-1 関係性攻撃観，攻撃行動，社会的適応の関連

化，秘匿可能性が関係性攻撃に対して有意な正の関連を示した。また，身近さと正当化は，外顕的攻撃に対しても有意な正の関連を示した。しかし，関係性攻撃と外顕的攻撃は，承認と被侵害に対して有意な関連を全く示さなかった。次に，被害群において，否定的認識が外顕的攻撃と関係性攻撃に対して有意な負の関連を示した。そして，身近さ，正当化，秘匿可能性は関係性攻撃に対して有意な正の関連を示した。さらに，関係性攻撃のみが承認に有意な負の関連を示し，被侵害に対しては有意な正の関連を示した。しかし，外顕的攻撃は承認と被侵害に対して有意な関連を示さなかった。

最後に，受身・未経験群において，否定的認識が関係性攻撃と外顕的攻撃の双方に有意な負の関連を示した。そして，身近さも関係性攻撃と外顕的攻撃の両方に有意な正の関連を示した。しかし，正当化は外顕的攻撃にのみ有意な関連を示し，秘匿可能性はどちらの攻撃行動とも有意な関連を示さなかった。さらに,承認と被侵害に対して有意な関連を示したのは,関係性攻撃のみだった。

第 4 項　考察

本研究は小学生における関係性攻撃観，攻撃行動，社会的適応の関連を検討することが主要な目的であった。そして，その際に，関係性攻撃の経験による調整効果に注目し，関係性攻撃と社会的適応のより詳細な関連を明らかにすることも意図していた。その結果，関係性攻撃の経験によって，関係性攻撃観，攻撃行動，社会的適応の関連に違いがみられることが明らかになった。

まず，加害群は，関係性攻撃観のうち，身近さ，正当化，秘匿可能性といった関係性攻撃について肯定的な捉え方に関連する変数が，攻撃行動と正の関連をすることが明らかになった。そして，社会的適応の指標に対して，攻撃行動から有意なパスが確認されることはなかった。この結果から，加害経験がある小学生は，関係性攻撃に従事しても，社会的不適応に関連しないことが明らかになった。ただし,「承認」得点と「被侵害」得点の平均値の群間比較の結果から，加害群は基本的に社会的適応が低いことが示されていた。そのため，関係性攻撃に従事したことがある小学生は，既に仲間から嫌われているので，関係性攻撃傾向の高低と，社会的不適応が関連することがなかったのだと考えられる。

一方，関係性攻撃傾向の高さが社会的不適応と関連することを示したのは，被害群と受身・未経験群であった。被害群は，関係性攻撃観の全ての変数が関係性攻撃と有意な関連を示し，そして関係性攻撃のみが社会的適応の指標に対して，マイナスの効果をもたらすように作用することが確認された。この結果から，関係性攻撃の被害経験のある小学生の中で，関係性攻撃傾向が高いことは，社会的不適応を促進させる可能性があることが考えられた。被害群の「承認」得点と「被侵害」得点の平均値は，加害群とあまり大きな差が見られないので，被害群の小学生も，加害群と同様に既に社会的適応が悪い状態であると考えられる。それに加え，多母集団同時分析の結果から，被害経験しかない小学生の中で，関係性攻撃傾向が高いことと社会的適応の悪さに関連があることが示された。こうした結果を総合すると，Card & Little（2007）の反応的攻撃傾向の高い子どもは，攻撃行動を遂行しても，自分の周りの仲間からの非難を受け，却って報復を受けるという知見に類似した結果であったと考えられる。特に，関係性攻撃はターゲットの周囲の人間関係を攻撃するので，社会的な影響力や魅力,仲間集団内における中心性が求められる攻撃行動である。つまり，被害経験しかない子どもは，報復の手段として関係性攻撃を採用しても，それを十分に使いこなせていないため，結果的に仲間から拒否されることにつながる可能性が示唆されたと考えられる。

次に，受身・未経験群といった直接的に関係性攻撃に関与していない児童に確認された結果は，関係性攻撃観のうち，身近さ得点と否定的認識得点が関係性攻撃得点に有意な正の関連を示すという結果であった。そして，被害群と同様に，関係性攻撃のみが社会的適応の指標に対して，マイナスの効果をもたらすように作用することが確認された。この結果から，関係性攻撃の加害経験も被害経験も直接自分が関与したことがない児童の中では，関係性攻撃に従事することで，社会的不適応と関連することが示された。また，受身・未経験群では，関係性攻撃に関連を示した関係性攻撃観は，身近さと否定的認識のみであった。このうち，身近さは，関係性攻撃を誰もが行っている標準的な行動と捉える傾向を意味する指標である。現在関係性攻撃に直接的に関与していない群において,身近さ得点の増加が,関係性攻撃得点の増加と関わるという結果は，関係性攻撃という現象に対する脱感作が起きることで，誰もが関係性攻撃への

従事につながる事を示唆していると考えられるだろう。

最後に，本研究で，関係性攻撃と外顕的攻撃を同時に検討した時に，社会的適応にマイナスに作用するのは関係性攻撃のみであることが示された。関係性攻撃は，身体的攻撃に比べて，深刻な問題と捉えられていないことが報告されている（Werner & Grant, 2009）。しかし，実際に不適応に関連するのは，関係性攻撃であるという結果から，子どもだけでなく，周囲の大人も関係性攻撃を深刻な問題と捉えなおす必要があると考えられる。

本研究の結果から，関係性攻撃は社会的適応を抑制する作用をもつことが示された。よって，関係性攻撃の生起に関わる関係性攻撃観は，小学生の社会的適応に直接的には関連しないが，重要な要因であることが示されたと考えられるだろう。

第 2 節　小学生の関係性攻撃の認識と内在化問題の検討（研究 8）

第 1 項　目的

本研究では，小学生の関係性攻撃観と攻撃行動，心理的適応の関連を検討することを目的とする。そして，本研究では，心理的適応の中でも内在化問題を取り上げる。内在化問題は，Achenbach（1966）により提唱された子どもの精神医学的症状の分類であり，過度の不安や恐怖，抑うつ，引っ込み思案や身体的愁訴などの問題行動を指す。そして，小学生を対象にした縦断的研究で，関係性攻撃が将来の内在化問題を予測することが明らかにされている（Crick et al., 2006; Murray-Close et al., 2007）。なお，関係性攻撃への従事が，内在化問題に結び付くプロセスは，未だ明確に説明されていない。ただし，関係性攻撃への従事が，将来の仲間からの拒否を招くことは明らかにされている（Crick, 1996）。この仲間からの拒否に関連して，他者からの受容や排斥を感知することが，自尊心の変動を招き，結果，精神的健康と関連することが指摘されている（Baumeister & Leary, 1995）。このように社会的適応の悪化が，心理的適応の悪化に結びつく可能性は理論的に考えられるが，それらを検証した研究は未だみられない状況である。また，関係性攻撃と内在化問題の関連を検討した研究は，北米で実施されたものであるので，まずは，本邦における関係性攻撃と内在化問題の関連について検討する必要があるといえる。そこで，本研究において内在化問題と関係性攻撃の関連を検討する。内在化問題を捉える指標は，北米の研究では Achenbach（1991）の CBCL-TRF による教師評定が用いられるが，本邦においては，学校教員が学級全員分の採点を実施することが困難なので，自記式の調査によって測定を試みる。内在化問題の構成要素としては，過度の不安や恐怖，抑うつ，引っ込み思案や身体的愁訴などが挙げられるが，本研究においては先行研究でも中心的に議論されている，抑うつと不安を取りあげる。

また，本研究では，研究 7 と同様に，関係性攻撃観と攻撃行動，内在化問題の関連を調整する変数についても検討する。関係性攻撃と心理社会的適応の関連を検討した先行研究では，関係性攻撃と抑うつに正の関連が示されたり，男女において関係性攻撃への従事と適応の悪さの程度が異なることが報告されている（Crick, 1997; 坂井・山崎, 2003）。多くの研究で，性別による調整効果へ

の関心が高いが，本邦においては，関係性攻撃に性差があまり報告されていないことを考慮すると，性別による調整効果が十分に確かめられない可能性が考えられる。一方で，研究 7 の結果から，関係性攻撃観と攻撃行動，社会的適応の関連は関係性攻撃経験によって調整されることが示された。先行研究を基に，社会的適応の悪化によって，心理的適応が阻害されると仮定すると，社会的適応との関連を調整する関係性攻撃経験によって，攻撃行動と内在化問題の関連も調整される可能性が考えられる。よって，本研究で注目する調整変数は，関係性攻撃経験とする。

以上を踏まえて，本研究では，関係性攻撃観，攻撃行動，内在化問題の関連を検討することを第一の目的とする。さらに，この三者間の関連において，関係性攻撃経験が，調整効果を示すかどうかを検証する。この 2 つの目的を達成するために，本研究では小学生を対象にした質問紙調査を実施した。

第 2 項　方法

1.　対象者

茨城県の小学 4，5，6 年生 367 名（男子 203 名，女子 264 名）を分析の対象者とした。ただし，分析の対象となる範囲の回答に不備がない限り，全てを分析の対象としたため，分析によって対象者の人数は異なる。

2.　調査時期

調査時期は 2014 年 5 月から 2014 年 6 月であった。

3.　手続き

研究 1-2 と同様の手続きで調査を実施した。

4.　質問紙の構成

本研究において使用した質問紙の構成を以下に記載する。なお，実際に使用した質問紙を，資料 10 として本文末に添付する。

①フェイスシート

回答に当たる際の注意事項，実施責任者と実施分担者の氏名，連絡先などを明記した。また，本調査が筑波大学大学院の人間系研究倫理委員会の承諾のもと実施されていることを明記した。

②児童の性別と学年

回答にあたる児童の基本的な情報として,性別と学年について記入を求めた。

③関係性攻撃観尺度改訂版

研究 2 で作成した関係性攻撃観尺度改訂版を用いた。「否定的認識」(7 項目),「身近さ」(6 項目),「正当化」(3 項目),「秘匿可能性」(4 項目) の 20 項目 5 件法であった。

④小学生用 P-R 攻撃性質問紙

調査対象となった児童の攻撃性の特徴を測定する目的のために，研究 1，2 でも使用した坂井・山崎（2004）の「小学生用 P-R 攻撃性質問紙」を用いた。「表出性攻撃（以下，外顕的攻撃)」と「関係性攻撃」の合計 14 項目を利用した。4 件法であった。

⑤DSRS

DSRS（Depression Self-Rating Scale）は，児童青年の抑うつ症状を測定する自記式の質問紙尺度である（村田・清水・森・大島，1996)。「わたしたちは、楽しい日ばかりでなく、ちょっとさみしい日も、楽しくない日もあります。みなさんがこの一週間、どんな気持ちだったか当てはまるものに〇をつけて下さい。良い答え、悪い答えはありません。思ったとおりに答えてください。」という教示のもと，回答を求めた。18 項目，3 件法であった。

⑥STAIC

STAIC（State-Trait Anxiety Inventory for Children）は，子どもの不安を測定する目的で，古くから使用されてきている自記式の質問紙である（曽我，

1983)。STAIC の特徴としては,「今の」不安である状態不安と,「ふだんの」不安である特性不安を測定することが挙げられる。本研究では，関係性攻撃の遂行の有無によって不安の程度が変動すると仮定しているため，特性不安ではなく状態不安のみを採用した。20 項目 3 段階評定であった。

⑦関係性攻撃経験質問項目

児童の関係性攻撃経験を調べるために,研究 2･7 でも使用した姜･大重(2005)の関係性攻撃経験質問項目を参考に独自に作成した質問項目を用いた。「あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？あてはまるものすべてに○をつけてください」という教示のもと,「誰かに対しての「無視」や「仲間外れ」,「かげ口」などを（1）自分がしたことがある,（2）友達が他の友達にしているところを見たり聞いたことがある,（3）自分がされたことがある,(4) どれもあてはまらない」という 4 つの項目に対して回答を求めた。

本研究では，研究 7 と同様の基準で群分けを実施した。まず，被害経験のみの児童を抽出する目的があったため,(3) のみにに○をつけている者を被害群,（1）に○をつけている者を加害群，それ以外の者を受身・未経験群とした。よって，本研究における加害群は，純粋に加害経験のみのグループではなく，加害経験も被害経験もある群と考えられる。本研究の分類基準に基づく各群の人数分布を Table6-7 に示す。

第 3 項　結果

1.　各変数の記述統計量の算出

本研究で用いる関係性攻撃観尺度，小学生用 P-R 攻撃性質問紙，抑うつ（DSRS)，不安（STAIC）について，各下位尺度を構成する項目による α 係数を算出した上で，下位尺度ごとに項目を加算平均した値を算出し，下位尺度得点とした。これら本研究で使用する尺度の平均値と標準偏差，ならびに信頼性係数を Table6-8 に示す。

続いて，各下位尺度得点について，関係性攻撃経験による得点の差を検討するために，一要因の分散分析を実施した。その結果を Table6-8 に示す。

分散分析の結果,「否定的認識」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効

Table 6-7　関係性攻撃経験の人数分布

	n	パーセント	累積パーセント
加害群	117	31.9	31.9
被害群	92	25.1	57.0
受身・未経験群	140	38.1	95.1
分類不能	18	4.9	100.0
合計	367	100.0	

注）加害群は，加害経験も被害経験もある児童も含まれる
被害群は，被害経験のみの児童で構成される
受身・未経験群は，加害経験も被害経験もない児童

Table6-8　各変数の記述統計量

変数	α係数	全体	①加害群	②被害群	③受身・未経験群	*F*値$_{(df)}$	多重比較
		平均値(*SD*)	平均値(*SD*)	平均値(*SD*)	平均値(*SD*)		
否定的認識	.69	4.28 (0.70)	4.19 (0.75)	4.44 (0.65)	4.32 (0.61)	$3.67_{(2, 341)}^{*}$	①<②
身近さ	.75	2.73 (0.82)	3.20 (0.77)	2.55 (0.81)	2.51 (0.72)	$30.12_{(2, 337)}^{***}$	②, ③<①
正当化	.76	2.53 (1.08)	2.91 (1.10)	2.34 (1.00)	2.40 (1.01)	$10.60_{(2, 337)}^{***}$	②, ③<①
秘匿可能性	.70	2.94 (1.03)	2.96 (0.99)	2.88 (1.11)	2.97 (1.01)	*ns*	*ns*
外顕的攻撃	.84	2.08 (0.67)	2.57 (0.67)	1.93 (0.54)	1.82 (0.53)	$56.55_{(2, 333)}^{***}$	②, ③<①
関係性攻撃	.81	1.71 (0.54)	2.12 (0.47)	1.61 (0.54)	1.45 (0.38)	$71.31_{(2, 337)}^{***}$	③<②<①
抑うつ	.82	1.62 (0.33)	1.68 (0.34)	1.68 (0.36)	1.54 (0.30)	$7.26_{(2, 325)}^{***}$	③<①, ②
不安	.87	1.66 (0.43)	1.76 (0.48)	1.77 (0.41)	1.54 (0.37)	$11.25_{(2, 327)}^{***}$	③<①, ②

注1）$^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$

果が認められた（$F_{(2,341)}$=3.67, p<.05）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ，「被害群」が「加害群」よりも有意に高い得点を示した（p<.05）。

次に，「身近さ」得点（$F_{(2,337)}$=30.12, p<.001）と「正当化」得点（$F_{(2,337)}$=10.60, p<.001）に関係性攻撃経験の有意な主効果がみられた。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ，両得点とも「加害群」が，「被害群」と「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.001）。

また，「外顕的攻撃」得点（$F_{(2,333)}$=56.55, p<.001）に関係性攻撃経験の有意な主効果がみられた。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ，「加害群」が，「被害群」と「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.001）。

続いて，「関係性攻撃」得点（$F_{(2,337)}$=71.31, p<.001）について，関係性攻撃経験の有意な主効果がみられた。多重比較の結果，「加害群」が「被害群」よりも高く（p<.001），そして「被害群」が「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（p<.05）。

さらに，「抑うつ」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められた（$F_{(2,325)}$=7.26, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ，「加害群」と「被害群」が，「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.01）。

最後に，「不安」得点において，関係性攻撃経験の有意な主効果が認められた（$F_{(2,527)}$=11.25, p<.001）。そこで，Tukey 法による多重比較を実施したところ，「加害群」と「被害群」が，「受身・未経験群」よりも有意に高い得点を示した（いずれも p<.001）。

なお，本研究で扱う変数について，性別と学年を独立変数とした多変量分散分析も実施した。その結果，性別と学年の主効果におけるデータ全体の群間の差を示す Wilks のラムダが有意であった（性別：Λ(8, 287)=.91, p<.001，学年：Λ(16, 574)=.80，p<.001）。そこで，各従属変数について，性別と学年と要因とする二要因の分散分析を行った（Table6-9）。

2．各変数間の相関係数の算出

本研究で扱う変数の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table6-10）。

Table 6-9　性別（2）×学年（3）の二要因分散分析

従属変数	性別	4年生(N=108) 平均 (SD)	5年生(N=95) 平均 (SD)	6年生(N=97) 平均 (SD)	主効果　F値$_{(df)}$ 性別	主効果　F値$_{(df)}$ 学年	交互作用
否定的認識	男子(N=159)	4.25 (0.73)	4.37 (0.58)	4.26 (0.72)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=141)	4.24 (0.71)	4.35 (0.64)	4.37 (0.62)			
身近さ	男子(N=159)	2.50 (0.72)	2.47 (0.66)	3.16 (0.90)	*ns*	$24.81_{(2,294)}^{***}$ 4･5年生<6年生	*ns*
	女子(N=141)	2.35 (0.61)	2.81 (0.83)	3.21 (0.88)			
正当化	男子(N=159)	2.46 (1.03)	2.62 (0.98)	3.15 (1.14)	$10.60_{(1,294)}^{***}$ 女子<男子	$5.72_{(2,294)}^{**}$ 4年生<6年生	*ns*
	女子(N=141)	2.21 (0.96)	2.36 (1.06)	2.49 (1.02)			
秘匿可能性	男子(N=159)	2.70 (1.06)	2.83 (1.01)	3.38 (0.87)	*ns*	$8.07_{(2,294)}^{***}$ 4･5年生<6年生	*ns*
	女子(N=141)	2.87 (1.08)	2.93 (1.03)	3.26 (1.00)			
外顕的攻撃	男子(N=159)	2.02 (0.67)	2.19 (0.52)	2.36 (0.77)	$10.95_{(1,294)}^{***}$ 女子<男子	$8.68_{(2,294)}^{***}$ 4年生<5･6年生	*ns*
	女子(N=141)	1.70 (0.52)	2.06 (0.59)	2.09 (0.71)			
関係性攻撃	男子(N=159)	1.53 (0.50)	1.75 (0.51)	1.91 (0.61)	*ns*	$9.57_{(2,294)}^{***}$ 4年生<5･6年生	*ns*
	女子(N=141)	1.51 (0.51)	1.75 (0.52)	1.78 (0.58)			
抑うつ	男子(N=159)	1.68 (0.35)	1.54 (0.31)	1.73 (0.34)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=141)	1.56 (0.29)	1.64 (0.35)	1.64 (0.38)			
不安	男子(N=159)	1.69 (0.39)	1.58 (0.42)	1.73 (0.39)	*ns*	*ns*	*ns*
	女子(N=141)	1.57 (0.44)	1.73 (0.51)	1.67 (0.44)			

注）$^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

Table 6-10　各尺度得点間の相関係数

	外顕的攻撃	関係性攻撃	抑うつ	不安
否定的認識	-.03	-.11 *	-.01	.02
身近さ	.44 ***	.43 ***	.18 **	.21 ***
正当化	.42 ***	.33 ***	.20 ***	.20 ***
秘匿可能性	.14 **	.11 *	.07	-.01
外顕的攻撃		.62 ***	.27 ***	.30 ***
関係性攻撃			.32 ***	.31 ***

注1）$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

また関係性攻撃の経験による得点差を考慮して，経験別にも相関係数を算出した（Table6-11）。

まず，全体の相関係数の結果について概説すると，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点の中でも，身近さ得点と正当化得点が，2 種類の攻撃行動と抑うつ・不安得点に対して有意な関連を多く示した。そして，外顕的攻撃と関係性攻撃は共に，抑うつと不安に対して有意な正の関連を示した。

関係性攻撃の経験別に，各変数間の相関係数を算出したところ，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点のうち，身近さと正当化を中心に，2 種類の攻撃行動との関連において，全体の結果と同様に多くの有意な関連を示した。しかし，抑うつと不安との関連については，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点の中で有意な関連を示す変数があまりみられなかった。また，外顕的攻撃と関係性攻撃は，抑うつと不安との関連において，経験による変化はあまり確認されず，似たような関連の仕方を示すものが多かった。

3. 関係性攻撃観と攻撃行動，内在化問題の関連の検討

本研究の主要な目的は，関係性攻撃観と攻撃行動，内在化問題の関連を検討し,さらにその際に,関係性攻撃経験による調整効果を検討することであった。その目的を達成するために，共分散構造分析を行った。なお，欠損地を含むデータであったため，推定方法は完全情報最尤推定法を用いた。モデルの構成の際には，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点を第一水準，外顕的攻撃と関係性攻撃を第二水準に設定した。そして，第三水準に潜在変数を想定し，抑うつと不安に対してをパスを引いた。また，関係性攻撃観は，Dodge （1993）のモデルに基づくとあくまで攻撃行動の生起に関連する指標であるという前提と，相関係数の結果から，第一水準から第三水準への直接的なパスは想定しなかった。そして，有意でないパスや関連を示さなかった変数を削除していき，適合度が最適となるモデルを探索した。続いて，得られたモデルに対する関係性攻撃経験の調整効果を検討するため，経験群別にモデルの検証を行った後，多母集団同時分析を実施した。そして，全てのパスに等値制約を置いたモデルと，制約を設定しなかったモデルの適合度の比較を行った。その結果，比較したモデルの適合度間に有意な差が確認されず，関係性攻撃経験群間に差のあるモデルは採

Table 6-11　各尺度得点間の相関係数（経験群別）

	外顕的攻撃	関係性攻撃	抑うつ	不安
否定的認識				
加害群	-.12	-.19 *	-.03	-.02
被害群	.05 †	-.02	.16	.10
受身・未経験群	.04	-.06 ***	-.09	-.02
身近さ				
加害群	.17 †	.12	.15	.13
被害群	.34 **	.45 ***	.22 *	.18 †
受身・未経験群	.40 ***	.29 ***	.09	.15 †
正当化				
加害群	.40 ***	.20 *	.26 **	.28 **
被害群	.32 **	.31 **	.09	.11
受身・未経験群	.29 ***	.22 ***	.20 *	.08
秘匿可能性				
加害群	.17 †	.08	.11	.00
被害群	.09	.25 *	.15	.14
受身・未経験群	.17 *	-.02 †	.01 *	-.09
外顕的攻撃				
加害群		.44 ***	.23 *	.22 *
被害群		.51 ***	.30 **	.32 **
受身・未経験群		.52 ***	.17 †	.23 **
関係性攻撃				
加害群			.30 **	.26 **
被害群			.35 ***	.28 **
受身・未経験群			.16 †	.22 **

注1）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

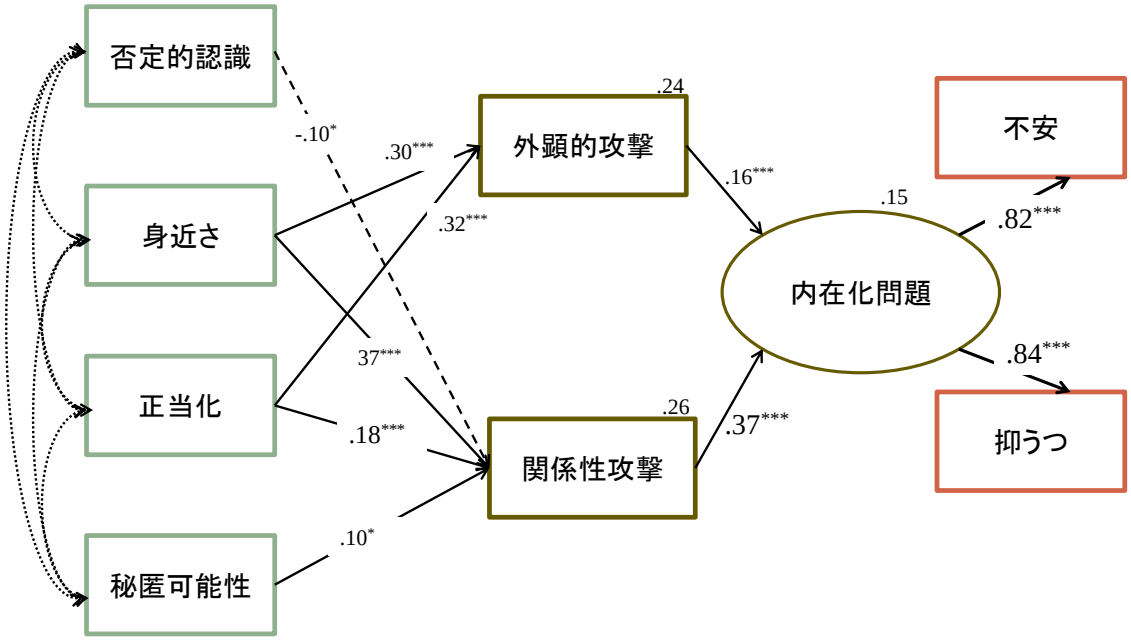
用されず,全体モデルを用いた(Figure6-2)。モデルの適合度は $\chi^2_{(11)}$=12.72, p>.10, CFI=.997，RMSEA=.021 であった。

モデルについて説明すると，まず，関係性攻撃観の下位尺度得点が関係性攻撃に対して有意な正の関連を示した。また，身近さと正当化は，外顕的攻撃に対しても有意な正の関連を示した。そして，関係性攻撃と外顕的攻撃の双方が内在化問題に対して有意な正の関連を示した。

第 4 項　考察

本研究は小学生における関係性攻撃観，攻撃行動，内在化問題の関連を検討することが主要な目的であった。そして，その際に，関係性攻撃の経験による調整効果に注目し，関係性攻撃と心理的適応問題のより詳細な関連を明らかにすることも意図していた。その結果，関係性攻撃の経験によって，関係性攻撃観，攻撃行動，心理的適応の関連に違いがみられることはなかった。

得られたモデルからは，関係性攻撃観が 2 種類の攻撃行動と関連し，そしてどちらの攻撃行動も内在化問題を促進させる結果を示すことが明らかになった。そして，関係性攻撃の経験による違いが確認されなかったことから，関係性攻撃への従事は，どのような関係性攻撃の経験の小学生にとっても，心理的な不適応に関連する可能性が考えられる。関係性攻撃への従事が，内在化問題と関連することは先行研究の知見に一致した結果である（Crick et al., 2006; Murray-Close et al., 2007）。しかし，関係性攻撃の経験によって，攻撃行動と内在化問題の関連の仕方に違いが見られなかったことから，関係性攻撃の遂行と内在化問題の関連のプロセスに関する仮説を明らかにすることはできなかった。本研究では，関係性攻撃への従事が，社会的適応を不良にし，その結果，心理的問題に結びつく可能性を想定していた。そのため，研究 7 の結果を参考に，関係性攻撃と社会的不適応の関連が示された被害群と受身･未経験群において，関係性攻撃と内在化問題が関連を示すという経験による調整効果の検討を試みた。その結果，社会的適応が悪化しない可能性がある加害群を含む全ての経験群において，関係性攻撃への従事が内在化問題を促進するように関連することが示された。この結果から，関係性攻撃への従事が内在化問題に結び付くプロセスは，社会的適応の悪化を介する経路以外も存在する可能性が示唆されたと



注 1）$\chi^2_{(11)}$=12.72, p>.10, CFI=.997, RMSEA=.021

注 2）$^{*}p$<.05, $^{**}p$<.01, $^{***}p$<.001

注 3）誤差項の記載は省略した。

Figure 6-2　関係性攻撃観，攻撃行動，内在化問題の関連

考えられる。関係性攻撃への従事が，将来のパーソナリティ障害傾向と関連するという知見もあることから（Crick et al., 2006），攻撃行動に従事することで，認知面やパーソナリティなどに影響がもたらされ，結果的に内在化問題に結びつく可能性も考えられるだろう。

経験による調整効果は確認されなかったが，今回の結果は，北米で一般的に示されていた関係性攻撃と内在化問題の関連が，本邦においても確認されたという貴重なものである。さらに言えば，本研究では，小学生の認知的な要因である関係性攻撃観が，攻撃行動を促進させ，そして，心理的な不適応も攻撃行動によって促進されるという三者間の関連を明らかにすることができた。よって，攻撃行動の生起に関連する関係性攻撃観は小学生の心理的適応に関わる重要な概念であると言えるだろう。

第 3 節　本章のまとめ

本章では，関係性攻撃観と攻撃行動，そして心理社会的適応との関連を検討するために，2 つの研究が実施された。まず，研究 7 の社会的適応との関連においては，関係性攻撃経験の効果によって，加害群，被害群，受身・未経験群ごとに異なる関連が示された。つまり，加害群では関係性攻撃観が攻撃行動を予測するが，攻撃行動が社会的適応との間に関連を示すことはなく，被害群と受身・未経験群のみ関係性攻撃と社会的不適応の関連が示された。この結果から，関係性攻撃の遂行と，仲間から認められないと感じたり，仲間から侵害を受けていると感じる傾向は，関係性攻撃の被害経験しかない小学生や直接的な経験のない小学生の間で関連することが示された。関係性攻撃をより効果的に遂行することができるのは，仲間関係内の人間関係を操作できる高地位でいるものであると考えられているが（Cillessen & Mayeux, 2007），関係性攻撃の被害経験しかない小学生や受身・未経験の小学生が，仲間集団内で中心的で影響力がある存在とは考えにくい。そうした効果的な関係性攻撃を遂行できない被害群と受身・未経験群の子どもは，関係性攻撃を遂行したとしても，攻撃のターゲット以外の仲間達からの非難を受け，結果，不適応の程度が大きくなると考えられる（Card & Little, 2007）。

このように，関係性攻撃は，一部の遂行者の社会的適応のみを抑制させるように考えられる。しかし，研究 8 で示された通り，どのような関係性攻撃の経験にも関係なく，関係性攻撃の従事は心理的な不適応と関連することが示された。つまり，関係性攻撃を遂行することによって，仲間集団内における自分の立場を巧みに操作できてもできなくても，不安や抑うつ症状は高ってしまうということが考えられる。先行研究においても，仲間集団内で高地位にいる者は，その地位の維持のために関係性攻撃に従事しても，不安と緊張を余儀なくされる可能性が指摘されている（Cillessen & Mayeux, 2007）。また，研究 8 の結果は，関係性攻撃の遂行の結果，社会的適応の悪化を招き，内在化問題に関連するという仮説以外に，攻撃行動が内在化問題を促進させるメカニズムがある可能性を示唆するものであったと考えられる。最近の 6 年生から 8 年生を対象にした研究では，関係性攻撃被害を統制した上で，関係性攻撃と抑うつが関連を示すのは，関係性攻撃の加害や被害について反芻する傾向の高い児童・生徒である

ことが報告されている（Mathieson et al., 2014）。つまり，関係性攻撃によって内在化問題が増悪するメカニズムには，外的適応の悪さだけでなく，個人内の認知的な要素も深く関わっている可能性が考えられる。これら個人内の関連要因を扱いながら，内在化問題の形成における関係性攻撃の機能を検討していく必要があるだろう。

そして，本研究では，社会的適応との関連について検討した際に，関係性攻撃を促進させる関係性攻撃観の種類が，関係性攻撃経験によって異なることも示された。この結果を活かすことで，小学生の示す関係性攻撃への介入をより効果的にすることが期待できる。例えば，否定的認識は，被害群と受身・未経験群においてのみ関係性攻撃を抑制することが示された。この結果に加えて，否定的認識が加害群よりも被害群と受身・未経験群で高いことを合わせて考えると，既に被害経験がある者や，関係性攻撃の直接的な経験のない者は，関係性攻撃の有害性や非容認性を十分に承知しているので，実際の攻撃行動を抑制するように作用した可能性が考えられる。しかし，加害経験のある子どもは，関係性攻撃の有害性や非容認性を十分に理解していないため，実際の攻撃行動が抑制されることにはつながらなかった可能性が考えられる。また，加害群において，関係性攻撃と有意な関連を示した関係性攻撃観は，身近さ，正当化，秘匿可能性であり，特に正当化は受身・未経験群よりも有意に推定値が高いという結果であった。よって，加害経験のある小学生に対しては，正当化を中心とした関係性攻撃に対して許容的な捉え方に介入する必要もあるだろう。同様に，受身・未経験群では否定的認識以外に，身近さのみが関係性攻撃と有意な関連を示し,正当化や秘匿可能性が有意な関連を示すことはなかった。そこで，直接的な関係性攻撃の経験のない小学生に対しては，関係性攻撃が生じる状況が標準的であるという規範を形成させないことが重要であると考えられる。

最後に，関係性攻撃観と適応指標との関連は，全体的に大きな相関係数は示されなかった。Dodge（1993）によると，潜在的知識構造の内容によって，行為障害や抑うつといった適応の結果が異なることが想定されている。本研究で議論した関係性攻撃観は，行為障害の生起に関わるという Dodge（1993）のモデルに基づき，SIP モデルの潜在的知識構造に該当する概念であることが想定されている。関係性攻撃観と社会的適応や内在化問題などの適応指標に大きな

関連が見られなかった結果は，関係性攻撃観が攻撃行動の生起に関わるという潜在的知識構造の限定的な機能を支持するものだと考えられる。よって，基本的には，関係性攻撃観は攻撃行動を規定し，その攻撃行動の表出の結果，児童生徒の適応問題に関連するという機能があることが考えられる。

しかし，攻撃行動の結果，児童の心理社会的適応が悪化するメカニズムは，未だ明らかになっていない。特に内在化問題に関して，攻撃行動への従事がなぜ抑うつや不安を高めるのか,そのメカニズムは不明瞭な点が多い状況である。研究 8 においても，攻撃行動の結果として社会的適応が悪化し，内在化問題を導くという仮説は支持されなかった。そこで，今後は関係性攻撃が内在化問題を形成するメカニズムを明らかにして行く必要がある。研究 8 では，個人内の認知要因が内在化問題の生起に関連するか否かを検討する必要性が考察されたが，Dodge（1993）も潜在的知識構造の中で否定的なセルフ・スキーマが抑うつに関連することを想定している。こうした認知的な要因が内在化問題の形成に関連することを検討する際，関係性攻撃観と否定的なセルフ・スキーマなどとの関連を検討する必要もあると考えられる。関係性攻撃に対する特定の捉え方が，セルフ・スキーマなどと相互に関連しあう可能性は十分に考えられるだろう。内在化問題の形成について周囲の人間関係などの外的要因と，個人の考え方などの内的要因の双方から検討していくことが求められるだろう。

第Ⅲ部

総　合　的　考　察

第 7 章

本研究のまとめと意義

第 1 節　本研究のまとめ

第 1 項　本論文の目的

第 3 章で述べたように，本論文は，小学生の心理社会的不適応と密接に関わる関係性攻撃を深刻な問題と捉え，関係性攻撃の生起メカニズムのより深い理解を得るため，3 つの目的を設定した。3 つの目的とは，「小学生の関係性攻撃についての潜在的知識構造を網羅的に捉えることができる質問紙尺度を作成し，関係性攻撃との関連を検討することがすること（目的 1)」,「関係性攻撃についての潜在的知識構造がオンライン情報処理過程を介し，実際の行動の表出に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証を行う事(目的 2)」,「関係性攻撃についての潜在的知識構造と関係性攻撃の遂行，心理社会的不適応の関連を検討すること（目的 3)」であった。本節では，前章までに実施された理論的検討から実証研究の結果に至るまでの，本研究で得られた知見を本論文の目的に沿って整理していく。

第 2 項　小学生の関係性攻撃観尺度の作成と攻撃行動との関連の検討（目的 1）

本研究の第一の目的は，関係性攻撃の生起に関わると想定されている，SIP モデルの潜在的知識構造の内容を網羅的に捉え，さらに個人差を測定可能な質問紙尺度と作ることであった。そのためには，まず，先行研究で個別に検討されていた潜在的知識構造の構成概念の内容を整理する必要があった。先行研究において，攻撃行動との関連が指摘された潜在的知識構造とは，攻撃行動について個人がどの様に捉えているかという観点から,様々な議論がなされていた。そこで，先行研究で指摘されていた関係性攻撃についての捉え方をもとに，本研究で扱う潜在的知識構造を関係性攻撃観と命名し,「過去の経験から形成された関係性攻撃に対する個人の構造化された知識」と定義した。そして関係性攻撃観の構成要素として，関係性攻撃についての規範や効果，秘匿可能性を想定した。

以上の理論的な検討を踏まえて，小学生の関係性攻撃観を測定可能な質問紙尺度の作成が行われた。研究 1-1 では小学生の関係性攻撃についての捉え方が，自由記述調査によって収集され，得られた項目を分類した結果，理論的な検討で想定した構成要素にほぼ内包されることが明らかになった。

研究 1-2 では，関係性攻撃観尺度の作成が行われ，その信頼性と妥当性が検討された。その結果，28 項目 4 因子構造の関係性攻撃観尺度が作成され，信頼性も概ね十分な値が示された。また，関係性攻撃観と 2 種類の攻撃行動の偏相関分析の結果から，関係性攻撃観の弁別的妥当性も示された。しかし，得られた尺度は，そのほとんどの項目に得点の偏りが認められるという課題が示された。

その課題を受け,研究 2 では小学生用関係性攻撃観尺度改訂版が作成された。その結果，20 項目 4 因子構造からなる新たな尺度が得られた。各因子は「否定的認識」（7 項目),「身近さ」（6 項目),「正当化」（3 項目),「秘匿可能性」（4 項目）であった。各因子を構成する項目群の信頼性係数も概ね満足できる値が示され，また想定された学年差や関連要因よる差の検討（関係性攻撃経験による得点差)，さらに攻撃行動との関連から，十分な妥当性も確認された。

第 3 項　小学生の関係性攻撃生起の内的プロセスに関する検討 (目的 2)

本研究の第二の目的は，SIP モデルの中に関係性攻撃観を組み入れ，関係性攻撃生起に関わる内的プロセスを明らかにすることであった。その目的を達成するために，関係性攻撃観と場面想定法を用いた架空の関係性挑発場面における情報処理過程，応答的行動の関連が検討された。

まず，研究 3 では SIP モデルの解釈過程における歪みである敵意帰属バイアスとの関連が検討された。その結果，否定的認識が敵意帰属バイアスを促進させるという結果が示され，さらに関係性攻撃観の各尺度得点と応答的行動の関連も確認された。

研究 4 では SIP モデルの目標明確化過程との関連が検討された。その結果，正当化が関係維持目標を抑制する作用を示し，結果的に攻撃行動に寄与するという結果が示された。しかも，正当化は敵意帰属バイアスを介さず，直接関係維持目標と関連することが示され，SIP モデルの円環構造を支持する結果が得られたと考えられた。

研究 5 では，SIP モデルの反応検索過程との関連が検討された。反応検索過程における情報処理の歪みとして，架空の関係性挑発場面における応答的行動の産出数に対する攻撃的行動の割合が測定された。その結果，関係性攻撃観の

否定的認識や身近さとの相関関係は示されたものの，SIP モデルによる検証はデータがモデルに対して十分な適合度を示すことがなく，明確な結果が得られなかった。

最後に，研究 6 では，SIP モデルの反応決定過程との関連が検討された。その結果，関係性攻撃観のうち否定的認識や正当化が，架空の関係性挑発場面における攻撃行動に対する適切性の評価や自己効力感を規定することが示され，最終的に攻撃行動の生起と関連することが明らかになった。

第 4 項　小学生の関係性攻撃の認識と心理社会的適応の関連（目的 3）

本研究の第三の目的は，関係性攻撃観と関係性攻撃，そして心理社会的不適応の関連を検討することであった。さらに，関係性攻撃と心理社会的適応の関連の理解を深めるため，関係性攻撃経験による調整効果を考慮に入れたモデルの検討も実施した。

社会的適応との関連を検討した研究 7 においては，関係性攻撃の経験による調整効果が示され，加害群，被害群，受身・未経験群では，関係性攻撃観，攻撃行動，社会的適応の関連の仕方が異なることが明らかにされた。まず加害群では，関係性攻撃観と攻撃行動の関連が示されるのみで，攻撃行動から社会的適応に有意なパスが導かれないという結果が示された。一方で，被害群や受身・未経験群では，関係性攻撃観と攻撃行動の関連が加害群と同様に確認された上に，関係性攻撃から社会的適応を抑制する方向の関連が示された。

心理的適応との関連を検討した研究 8 においては，関係性攻撃の経験による調整効果が示されることはなく，加害群，被害群，受身・未経験群の全群において同一のモデルが採用された。その結果，関係性攻撃観が攻撃行動との有意な関連を示し，さらに攻撃行動が心理的不適応との有意な関連を示すことが明らかにされた。

第 5 項　本研究の結論

本項では，本研究から得られた知見を踏まえて，小学生の関係性攻撃の生起メカニズムと心理社会的適応の関連についての考察を示す。

本論文は，関係性攻撃の生起メカニズムの説明する理論を SIP モデルに依拠していたが，特にその中でも，潜在的知識構造に注目した研究であった。潜在

的知識構造とは，過去の経験に基づいて形成される記憶の貯蔵で，獲得されたルールや社会的知識から構成されるといわれている（Crick & Dodge, 1994）。そして，その機能は，対人相互作用場面における行動の表出に直接的に作用するだけでなく，情報処理過程に対しても作用し，作業を効率化することで，結果的に表出される行動を規定すると想定されている。本論文では，この潜在的知識構造を，関係性攻撃のことをどの様に捉えているかという観点から包括的に概念化する試みを行った。その結果が，関係性攻撃観と本論文で呼称していた児童の関係性攻撃についての認識であり，否定的認識，身近さ，正当化，秘匿可能性の4構成要素からなることが明らかになった。この4構成要素のうち，否定的認識は関係性攻撃を容認できないものとみなす捉え方を意味し，攻撃行動を抑制する作用が期待できる。その他の身近さ，正当化，秘匿可能性は，関係性攻撃についての肯定的な捉え方であり，攻撃行動を促進させる機能があると考えられる。そして，否定的認識は被害群や受身群，未経験群の得点が加害経験のある群よりも高いことが示された。また，身近さと正当化は，加害経験があるほど得点が高くなることが示された。なお，秘匿可能性は経験による得点差はみられなかった。さらに，関係性攻撃観の 4 下位尺度得点は，全てが関係性攻撃に対して直接関連することを示した（研究 2）。このことから，潜在的知識構造が行動の表出に直接作用することが示されたと考えられる。しかし，攻撃行動に対する説明率はそれほど大きくなかった。この結果は，関係性攻撃観が他の変数を介して攻撃行動と関連する可能性を示唆していたとも考えられるだろう。

関係性攻撃観の 4 構成要素は，対人相互作用場面における情報処理過程に対して作用することで，行動の表出に関与することも示された。しかも，構成要素によって，作用する情報処理過程が異なる可能性が示された。まず，否定的認識と秘匿可能性が，解釈過程に対して作用することが示された（研究 3）。有害性や秘匿可能性といった関係性攻撃を脅威的なものと認識していることが，解釈過程において相手の意図を読み取る際に，敵意的に捉える傾向を促進させたと考えられる。次に，関係性攻撃観の正当化が，目標の明確化過程や反応決定過程に直接関連することが示された（研究 4，6）。この結果から，報復的な関係性攻撃ならば容認されるという捉え方は，状況の解釈を待たずに，その後

の情報処理過程に作用し，攻撃行動の表出を規定する可能性が考えられた。最後に，身近さは，反応検索過程に作用する可能性が示された（研究 5）。ただし，本論文においては明確な結果は示されなかったので，今後も検討が必要となるだろう。

以上のように，関係性攻撃観，つまり潜在的知識構造は，SIP モデルの通りに，直接的，あるいは情報処理過程を介して間接的に，行動の生起に関連する機能があることが示された。

本研究において，関係性攻撃観の構成要素の中でも，オンライン情報処理過程との関連が多く示されたのは，正当化と否定的認識であった。この 2 つの下位尺度得点には，関係性攻撃を容認するかしないか，という観点に基づく命令的規範に該当する項目群によって構成されているという共通点が挙げられる。よって，関係性攻撃の生起に，最も関連があるのは，「関係性攻撃は容認できるものではない」という捉え方と，「報復の場合は，関係性攻撃は容認できるものである」という捉え方であると言えるだろう。そして，否定的認識と正当化が，オンライン情報処理過程の変数と多くの関連を示した理由も，命令的規範という特徴から考えることができるだろう。命令的規範は，社会規範の中でも，多くの人々がとるべき行動とか，望ましい行動と評価するであろうとの，個人の知覚に関連する規範である（Cialdini et al., 1990）。つまり，命令的規範は個人の行動判断において，常に望ましいとされる行動を志向しており，多くの人が「～すべきである」と評価しているとの予測に基づいた行動の典型例だと考えられる。この社会規範の特徴から，命令的規範は場面に依存しない，より一般性の高い概念であると考えられる。そのため，場面特殊的な社会的情報処理の変数とも常に一定の関連を示したという可能性が考えられる。

続いて，心理社会的適応との関連について言及する。社会的適応との関連については，関係性攻撃経験による調整効果が確認され，関係性攻撃が社会的不適応と関連するのは，被害群と受身・未経験群においてであることが示された。この結果から，関係性攻撃を遂行してもしなくても，社会的適応との関連しない小学生の存在が示唆された。この結果に加え，関係性攻撃観と関係性攻撃の関連においても，経験の調整効果が散見された。関係性攻撃観の身近さ得点は，受身・未経験群において攻撃行動を促進するように作用し，その推定値は加害

群よりも有意に高いことが示された。この結果は,「関係性攻撃はみんながやっている」という考え方により，普段関係性攻撃の関与しない児童も加害者になりうるという可能性を示唆している。つまり，もともと攻撃行動を容認する傾向が少ない児童においては，周囲に関係性攻撃が氾濫すること自体がリスク要因になりうると言えるだろう。なお，身近さは，社会規範の下位分類では，記述的規範に相当すると考えられる（Cialdini et al., 1990）。記述的規範には,「赤信号，みんなで渡れば怖くない」といった考えに代表されるような，周囲の他者がとる行動を，その状況における適切な行動の基準とする特徴がある。この特徴から，今回の受身・未経験群における身近さ得点と関係性攻撃の間に強い関連がみられた結果は矛盾しないと考えられる。また，正当化の得点は，加害群において他群よりも有意に高い関連を示した。攻撃行動に従事している加害群が，関係性攻撃を容認する傾向と攻撃行動の間に強力な関連を示したことは自然な結果と捉えられるだろう。以上の結果から，経験の立場によって，攻撃行動とより強く関連する関係性攻撃観の種類があることが示唆された。

そして，関係性攻撃という行動傾向が高まることと，心理的不適応の関連も示唆された。関係性攻撃経験による調整効果は認められず，関係性攻撃の遂行の結果，社会的適応が悪くなり，内在化問題も悪化するという仮説は支持されなかった。そのため,関係性攻撃と内在化問題の関連のメカニズムについては，社会的適応の悪化による経路だけでなく，認知などの個人内の要因の検討を含めて検討する必要性がある。研究 7・8 の結果では，Dodge（1993）の発達精神病理学モデルの想定通り，関係性攻撃観が直接，心理社会的不適応を予測する機能を持つことは示されず，あくまでも攻撃行動の規定因としての機能が示された。関係性攻撃観が直接，適応に関連する訳ではないが，児童の心理社会的適応に深く関わる関係性攻撃の規定因である以上，関係性攻撃観も児童の心身の健康において，重要な要素であると考えられる。

以上の本論文の研究において示された関係性攻撃観の関連要因について，Table 7-1 に示す。まず，関係性攻撃観のうち，否定的認識は攻撃行動を促進するようなオンライン情報処理過程に抑制的に作用し，結果的に関係性攻撃の表出を抑えることが基本的な機能であると考えられる。そして，研究 2 と研究 7 の知見から，否定的認識は加害経験のある子どもほど低くなる傾向があり，そ

Table 7-1 関係性攻撃観の関連要因のまとめ

	性差・学年差	関係性攻撃経験による差	攻撃行動との関連	SIPオンライン過程との関連	心理社会的適応との関連	
否定的認識	主効果：性別 男子<女子 主効果：学年 ns 交互作用 5･6年:男子<女子 男子：5年<4年	加害群＜受身群 被害群 加害・被害群＜未経験群 受身群 被害群	外顕的攻撃：－ 関係性攻撃：－	Step2 解釈 敵意帰属バイアス：＋ Step4 反応検索 攻撃的行動の産出率：－ Step5 反応決定 攻撃肯定・自己効力感：－	社会的適応 ・加害群 外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：ns ・被害群 外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：－ ・受身・未経験群 外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：－	内在化問題 外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：－
身近さ	主効果：性別 男子<女子 主効果：学年 4年<5年<6年 交互作用 ns	加害群　＜ 加害・被害群 被害群 受身群 未経験群 未経験群　＜ 加害群	外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋	Step4 反応検索 攻撃的行動の産出率：＋	社会的適応 ・加害群 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋ ・被害群 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋ ・受身・未経験群 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋	内在化問題 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋
正当化	主効果：性別 女子<男子 主効果：学年 4年<6年 交互作用 ns	被害群　＜ 加害群 受身群　　加害・被害群 未経験群	外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋	Step3 目標明確化 関係維持目標：－ Step5 反応決定 攻撃肯定・自己効力感：＋	社会的適応 ・加害群 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋ ・被害群 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋ ・受身・未経験群 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：ns	内在化問題 外顕的攻撃：＋ 関係性攻撃：＋
秘匿可能性	主効果：性別 ns 主効果：学年 4･5年<6年 交互作用 4･5年：男子<女子 男子：4･5年<6年	ns	外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：＋	Step2 解釈 敵意帰属バイアス：＋	社会的適応 ・加害群 外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：＋ ・被害群 外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：＋ ・受身・未経験群 外顕的攻撃：ns 関係性攻撃：ns	内在化問題 外顕的攻撃：na 関係性攻撃：＋

のために関係性攻撃が抑制する機能が示されなくなる可能性が指摘できる。さらに，否定的認識は敵意帰属バイアスに対して正の関連も示しているので，関係性攻撃に対して過敏に反応し過ぎると，却って関係性攻撃を促進させるような機能も持ってしまう可能性も考えられる。

次に，関係性攻撃観の身近さは，関係性攻撃の表出を導くようなオンライン情報処理過程に促進的に作用し，結果的に関係性攻撃の表出につなげることが基本的な機能である可能性が考えられる。身近さは，加害経験があるほど高くなるが，受身・未経験群といった直接的な関係性攻撃経験がなく，加害群よりも身近さの得点が低い小学生においても，関係性攻撃を促進させる唯一の要因であることも示された。よって，身近さは関係性攻撃の傍観者や全く関与した経験がない小学生でも関係性攻撃へ誘う可能性のある捉え方であると考えられる。

また，関係性攻撃観の正当化は，オンライン情報処理過程の中でも，攻撃的な目標や反応に対して肯定的に作用し，結果的に関係性攻撃の表出につなげることが基本的な機能である可能性が考えられる。正当化は加害経験のあるほど高い傾向があり，加害経験のあるほど攻撃行動が促進され，結果的に心理社会的不適応につながる可能性が考えられる。

最後に，秘匿可能性は，敵意帰属バイアスのみに作用し，表出される攻撃行動も関係性攻撃に対してのみに関連を示した。秘匿可能性は関係性攻撃観の中で，最も関係性攻撃に特有な関連を示したと考えられる。

第２節　本研究の学問的意義

本研究は，日本における知見の蓄積が乏しい関係性攻撃をテーマに，小学生児童を対象とした複数のデータからなる研究を実施したものであった。よって，本研究のデータ自体が非常に貴重なものであると考えられる。日本においては，小学生を対象にした様々な分野の研究の実施が非常に困難ではあるが，本研究の知見で示されたように，いじめに関連する小学生の攻撃行動は大きな社会的問題であるので，子ども達を直接の対象にした研究を実施する意義は大きいと言える。本研究で得られた知見も，教育現場に丁寧にフィードバックすることで，小学生を対象とした更なる研究を実施する必要性を訴えることが期待でき

るだろう。

また，本研究は，SIP モデルにおいて，今まであまり検討されてこなかった潜在的知識構造に焦点を当て，その機能を明らかにしたという点でも，非常に価値の高いものだと考えられる。潜在的知識構造の内容を包括的に捉え，明らかにしたことで，場面特異的でなく一般的な関係性攻撃の生起に関して，説明するモデルを提供することができたと考えられる。つまり，本研究の成果によって，潜在的知識構造を含めた SIP モデルの全体的な機能を検討することが可能になったと考えられる。特に，SIP モデルの研究の多くは，敵意帰属バイアスに関する研究によって占められている。そのため，本研究において，関係性攻撃の生起に至る内的プロセスを詳細に検討し，情報処理過程の多様な側面に焦点を当てたことは，今後の SIP モデル研究の発展につながることも期待できる。

さらに，本研究では，関係性攻撃と心理社会的適応の関連における調整効果の検討を行い，先行研究で乱立していた関連の矛盾に対して，一定の示唆を提供することができたと考えられる。本研究では，調整変数として関係性攻撃の経験を採用したが，性差や周囲の人間関係，仲間集団と密接に関わる関係性攻撃を検討する際には，常に何らかの変数による調整効果が働いている可能性を考慮する必要があるだろう。

第３節　本研究の社会的・臨床的貢献

本邦において，いじめは深刻な社会的な問題であるにも関わらず，本邦における関係性攻撃の研究の蓄積は乏しい状態である。その中で，関係性攻撃の生起メカニズムの詳細を検討し，さらに心理社会的適応の関連を検討した日本のデータは非常に貴重であると考えられる。特に，社会的適応との関連において確認された，経験による効果から得られた示唆は，臨床的な貢献も大きいと考えられる。なぜなら，経験の違いにより，攻撃行動と関連する関係性攻撃観に違いがあることが示されたためである。特に，受身・未経験群という，従来，傍観者と言われてきたような子ども達にとって，攻撃行動を促進させる効果があるのは，関係性攻撃のことを頻繁に見られる現象だと捉える傾向であった。この結果から，関係性攻撃が蔓延しない環境作りによって，加害行為者の増加

を防ぐことが可能であると考えられる。また，加害群にとっては，報復を正当化する考え方が，特に攻撃行動を促進させる結果を示した。このことから，既に関係性攻撃に従事している小学生には，報復でも容認されないという関係性攻撃についての明確な指導を行うことが有効だと考えられる。同様に，加害群では，関係性攻撃に対する否定的認識が低く，そのために関係性攻撃に対する抑制的な関連が示されないことも明らかになった。よって，正当化等の関係性攻撃を許容する考え方への介入と同時に，関係性攻撃の有害性の知識も教育していく必要性が考えられる。

また，SIP モデルのオンライン情報処理過程において，敵意帰属バイアスをはじめとする関係性攻撃の生起に関わる情報処理の歪みに対して作用する潜在的知識構造の機能を検討できたことも臨床に対する大きな貢献となる。SIP モデルの多くの研究は，場面特異的な情報処理による関係性攻撃の生起を説明するモデルであった。しかし，本研究で示した関係性攻撃観は，場面によらない一般的な小学生の認知である。SIP モデルでは，潜在的知識構造にそもそも歪みがあれば，情報処理過程でエラーや歪みが頻発してしまうので，有能な社会的行動の表出が阻害されることが想定されている（Crick & Dodge, 1994）。よって，オンライン情報処理過程に対する介入よりも，関係性攻撃観に対して働きかけることは，より広範な場面での関係性攻撃の低減につながることが期待できるだろう。

また，関係性攻撃観を測定することで，関係性攻撃の予防に有益な可能性がある。関係性攻撃には痕跡が残らないため，目立ちにくく，また周囲の大人からは被害の程度が軽くみられる傾向があるという特徴がある（Bauman & Del Rio, 2006）。しかし，関係性攻撃の被害は，外顕的攻撃と同じく，被害者に深刻なダメージを与えることが示されている。さらに，本研究で示したように，関係性攻撃に従事した加害者も，心理社会的不適応につながることが明らかになっている。そこで，例えば関係性攻撃観の否定的認識を測定し，その結果，関係性攻撃に対する有害性の知識が低ければ，その子どもは将来関係性攻撃に従事する可能性が考えられる。このように関係性攻撃観を攻撃行動のリスク要因，防御要因として扱い，小学生の関係性攻撃に対する捉え方を測定することで，将来の関係性攻撃の発生を予防することが可能になると考えられる。そし

て，子ども達の関係性攻撃に対する捉え方そのものを介入のターゲットとし，関係性攻撃が被害者に与える有害性，加害者が至る心理社会的不適応などについての心理教育を行うことで，関係性攻撃に対する許容的な態度を改め，関係性攻撃が実際に生じる前に防ぐことも可能になると考えられる。

さらに，関係性攻撃観を測定し，関係性攻撃について許容的な捉え方をしているかどうかを検討することで，目立たない関係性攻撃児を把握することも可能になると考えられる。関係性攻撃児の中には，関係性攻撃を巧みに用いることで，仲間内の地位を確立している者の存在が示唆されている。しかし，従来の介入の対象にされていた攻撃児の特徴は，仲間から孤立していたり，拒否されているなどの特徴を持つ者であった。社会的適応上の問題がない関係性攻撃児の存在を仮定すると，従来の攻撃児の特徴の把握では，仲間から受け入れられている関係性攻撃児を見逃してしまう恐れが考えられる。そこで新たに関係性攻撃について許容的な捉え方をしているかどうかといった，関係性攻撃観についての視点から子ども達の特徴を捉えることで，関係性攻撃を用いて恩恵を享受している者を捉えることが可能になると考えられる。加えて，従来の攻撃性置換プログラムでは，友情形成スキルなどの社会的スキルの促進を対象としていたが，関係性攻撃児の場合は社会的スキルが優れている可能性も十分に考えられる。また，すでに仲間内での地位を持っており，関係性攻撃を有効な道具として認識している者の場合，攻撃性を低減させるようなプログラムに参加する動機自体が非常に低くなる可能性も危惧される。そこで，介入のターゲットとして，関係性攻撃に対する捉え方そのものを変える必要性も生じるであろう。その際にも，関係性攻撃観を測定することが有用であると考えられる。

第４節　本研究の限界と今後の展望

本研究には，いくつかの問題点が指摘できる。まず，関係性攻撃観という概念の測定方法の問題である。本研究は全て質問紙調査によって構成された。そのため,測定できたのは,小学生が意識しているレベルでの認知や行動である。SIP モデルにおける潜在的知識構造を質問紙で測定することの是非は，欧米でも議論され始めており（Werner & Hill, 2010），今後は無意識レベルでの測定が可能な方法を用いた検討が望まれるかもしれない。

第二に，調査対象者が全て小学生児童本人であったことも挙げられるであろう。攻撃行動のような社会的望ましさに関わる対象を測定する時には，複数の評定者からの得点を用いる方が望ましいと考えられる。さらに，認知や行動面が同一人物によって測定されたために，他者評定を用いた場合よりも変数同士の関連が大きくなった可能性も考えられる。現状の小学校の授業の一部を利用した形式での調査では，限界があるかもしれないが，今後は教師評定なども含めた調査の実施も求められるだろう。

第三に，本論文を構成する研究は全て縦断的研究ではないため，本研究の結果からは因果関係について言及することが不可能であることが挙げられる。今後は社会的情報処理モデルにおけるオンラインの情報処理変数を含めた，縦断的な研究デザインによる関係性攻撃観の検討が求められるであろう。また，可能であれば，数年に渡る追跡調査によって，関係性攻撃の生起メカニズムの発達的変化を検討する必要性もあるだろう。

引　用　文　献

Achenbach, T. M. (1966). The classification of children's psychiatric symptoms: A factor-analytic study. *Psychological Monographs General and Applied*, **80**, 1-37.

Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human aggression. *Annual review of psychology*, **53**, 27-51.

Archer, J. (2004). Sex differences in aggression in real-world settings: A meta-analytic review. *Review of General Psychology*, **8**, 291-322.

Arsenio, W. F., & Lemerise, E. A. (2004). Aggression and Moral Development: Integrating Social Information processing and moral domain models. *Child Development*, **75**, 987-1002.

Bauman, S., & Del Rio, A. (2006). Preservice teachers' responses to bullying scenarios: Comparing physical, verbal, and relational bullying. *Journal of Educational Psychology*, **98**, 219-231.

Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.

Berkowitz, L. (1989). Frustration-aggression hypothesis: Examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, **106**, 59-73.

Biederman, J., Faraone, S., Mick, E., & Lelon, E. (1995). Psychiatric comorbidity among referred juveniles with major depression: Fact or artifact? *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **34**, 579-590.

Björkqvist, K., (1994). Sex differences in physical, verbal, and indirect aggression: A review of recent research. *Sex Roles*, **30**, 177-188.

Cairns, R. B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Ferguson, L. L., & Gariépy, J-L. (1989). Growth and aggression: I. Childhood to early adolescence. *Developmental Psychology*, **25**, 320-330.

Cairns, R. B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Gest, S. D., & Gariepy, J.-L. (1988). Social networks and aggressive behavior : Peer support or peer rejection? *Developmental Psychology*, **24**, 815-823.

Card, N. A., & Little, T. D., (2007). Differential relations of instrumental and reactive aggression with maladjustment: Does adaptivity depend on function? In Hawley, P. H., Little, T. D., & Rodkin, P. C. (Ed.), *Aggression and adaptation: the bright side to bad behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., pp. 107-134.

Card, N. A., Stucky, B. D., Sawalani, G. M., & Little, T. D., (2008). Direct and indirect aggression during childhood and adolescence: A meta-analytic review of gender differences, intercorrelations and relations to maladjustment. *Child Development*, **79**, 1185-1229.

Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1990). A focus theory of normative conduct. *Advances in Experimental Social Psychology*, **24**, 201–234.

Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2004). From censure to reinforcement: Developmental changes in the association between aggression and social status. *Child Development*, **75**, 147-163.

Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2007). Variations in the association between aggression and social status: Theoretical and empirical perspectives. In Hawley, P. H., Little, T. D., & Rodkin, P. C. (Ed.), *Aggression and adaptation: the bright side to bad behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., pp. 135-156.

Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. (1982). Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental psychology*, **18**, 557-569.

Conner, D. F. (2002). *Aggression and antisocial behavior in children and adolescents: Reserch and treatment*. The Guilford Press. A Division of Guilford Publications, Inc.
(コナー, D. F. 小野善郎(訳) (2008). 子どもと青年の攻撃性と反社会的行動　その発達理論と臨床介入のすべて　明石書店)

Craig, W. M., Pepler, D., & Atlas, R. (2000). Observations of bullying in the playground and in the classroom. *School Psychology International*, **21**, 22-36.

Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Developmental and Psychopathology*, **7**, 313-322.

Crick, N.R. (1996). The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, **67**, 2317-2327.

Crick, N. R. (1997). Engagement in gender normative versus nonnormative forms of aggression: Links to social-psychological adjustment. *Developmental Psychology*, **33**, 610-617.

Crick, N. R., Bigbee, M. A., & Howes, C. (1996). Gender differences in children's normative beliefs about aggression: how do I hurt thee? Let me count the ways. *Child Development*, **67**, 1003-1014.

Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.

Crick, N. R., & Dodge, K, A. (1996). Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, **67**, 993-1002.

Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.

Crick, N. R., & Grotpeter, J. K., Bigbee, M. A. (2002). Relationally and physically aggressive children's intent attributions and feelings of distress for relational and instrumental peer provocations. *Child Development*, **73**, 1134-1142.

Crick, N. R., & Ladd, G. W. (1990). Children's perceptions of the outcomes of aggressive strategies: Do the ends justify being mean? *Developmental Psychology*, **26**, 612-620

Crick, N. R., Murray-Close, D., & Woods, K. A., (2006). Borderline personality features in childhood: A shorter-term longitudinal study. *Development and Psychopathology*, **17**, 1051-1070.

Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **34**, 131-142.

Delveaux, K. D., & Daniels, T. (2000). Children's social cognitions: Physically and relationally aggressive strategies and children's goals in peer conflict situations. *Merrill-Palmer Quarterly*, **46**, 672-691.

Dishon, T. H., Véronneau, M., & Myers, M. W. (2010). Cascading peer dynamics underlying the progression from problem behavior to violence in early to late adolescence. *Development and Psychopathology* **22**, 603–619.

Dodge, K. A. (1993). Social-cognitive mechanisms in the development of conduct disorder and depression. *Annual Review of Psychology*, **44**, 559-584.

Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personlity and Social Psychology*, **53**, 1146-1158.

Dodge, K. A., Coie, J. D., Pettit, G. S., & Price, J. M., (1990). Peer status and aggression in boys' groups: Developmental and contextual analyses. *Child Development*, **61**, 1289-1309.

Dodge, K. A., & Frame, C. L. (1982). Social cognitive biases and deficits in aggressive boys. *Child Development*, **53**, 620-635.

Dodge, K. A., Pettit, G. S., McClaskey, C. L., & Brown, M. M. (1986). Social competence in children. *Monographs of the Society for Reserch in Child Development*, **51**(2, Serial No.213).

Dollard, J., Doob, L., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). Frustration and aggression. New Haven: Yale University Press.
（ドラード, J. ・ドーブ, L. ・ミラー, N. E.・マウラー, O. H.・シアーズ, R. R. 宇津木 保（訳） (1959). 欲求不満と暴力　誠心書房）

Galen, B. R., & Underwood, M. K. (1997). A developmental investigation of social aggression among children. *Develpmental Psychology*, **33**, 589-600.

Grotpeter, J. K., & Crick, N. R., (1996). Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, **67**, 2328-2338.

濱口佳和 (2001). 不人気な児童の挑発場面での社会的情報処理と応答行動　日本教育心理学会総会発表論文集, **43**, 318.

濱口佳和・新井邦二郎 (1992). 児童の社会的情報処理と行動との関連についての研究 ： 仲間による挑発場面をめぐって 筑波大学心理学研究, **14**, 107-119.

Harper, B. D., Lemerise, E. A., & Caverly, S. L. (2010). The effect of induced mood on children's social infomation processing: Goal clarification and response decision. *Journal of Abnormal Child Psycholgy*, **38**, 575–586.

Hart, C. H., Nelson, D. H., Robinson, C. C., Olsen, S. F., McNeilly-Choque, M. K., (1998). Overt and Relational Aggression in Russian Nursery-School-Age Children : Parenting style and marital linkages. *Developmental Psychology*, **34**, 687-697.

Henry, D., Guerra, N., Huesmann, R., Tolan, P., VanAcker, R., & Eron, L. (2000). Normative influences on aggression in urban elementary school classrooms. *American Journal of Community Psychology*, **28**, 59-81.

肥後橋敬子　(2005).　母親の養育スキルが子どもの社会的スキルに及ぼす影響　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要,　**15**,　197-206.

Huesmann, L. R. (1988). An information processing model for the development of aggression. *Aggressive Behavior*, **14**, 13-24.

Huesmann, L. R., & Guerra, N. G. (1997). Children's normative beliefs about aggression and aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 408-419.

Hyde, J. S. (1984). How large are gender differences in aggression? A developmental meta-analysis. *Developmental Psychology*, **20**, 722 – 736.

Kasen, S., Cohen, P., Skodol, A. E., Johnson, J. G., Smailes, E., & Brook, J. S. (2001). Childhood depression and adult personality disorder. *Archives of General Psychiatry*. **58**, 231-236.

勝間理沙・山崎勝之　(2008). 児童の関係性攻撃における自己評定と仲間評定の比較　心理学研究, **79**, 263-268.

河村茂雄・田上不二夫　(1997). いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究 30, 112-120.

姜 信善･大重絵美里 (2005). 小学生における関係性攻撃経験が対人関係に及ぼす影響 富山大学教育実践総合センター紀要, **6**, 13-19.

国立教育政策研究所 (2013). いじめ追跡調査 2010-2012 いじめ Q&A 国立教育政策研究所 2013 年 7 月

Lagerspetz, K. M. J., Björkqvist, K., & Peltonen, T. (1988). Is indirect aggression typical of females? Gender differences in aggressiveness in 11- to 12-year-old children. *Aggressive Behavior*, **14**, 403 – 414.

Lemerise, E. A., &Arsenio, W. F. (2000). An Integrated Model of Emotion Processes and Cognition in social information processing. *Child Development*, **71**, 107-118.

Linder, J. R., Werner, N. E., & Lyle, K. A. (2010). Automatic and controlled social information processing and relational aggression in young adults. *Personality and Individual Differences*, **49**, 778-783.

Little, T. D., Jones, S. M., Henrich, C. C., & Hawley, P. H. (2003). Disentangling the whys from the whats of aggressive behaviour. *International Journal of Behavioral Development*, **27**, 122-133.

Loeber, R., & Stouthamer-Loeber, M. (1998). Development of juvenile aggression and violence: Some common misconceptions and controversies. *American Psychologist*, **53**, 242-259.

文部科学省 (2014). 平成 24 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」文部科学省 2014 年 3 月 31 日 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/03/__icsFiles/afieldfile/2014/03/31/1345890_01.pdf > (2014 年 7 月 6 日)

村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 (1996). 学校における子どものうつ病― Birleson の小児期うつ病スケールからの検討 最新精神医学, **1**, 131-138.

Mathieson, L. C., Klimes-Dougan, B., & Crick, N. R. (2014). Dwelling on it may make it worse: The links between relational victimization, relational aggression, rumination, and depressive symptoms in adolescent. *Development and Psychopathology*, **26**, 735-747.

Mathieson, L. C., Murray-Close, D., Crick, N. R., Woods, K. E., Zimmer-Gembeck, M., Geiger, T. C., & Morales, J. R. (2011). Hostile intent attributions and relational aggression: The moderating roles of emotional sensitivity, gender, and victimization. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **39** 977-987.

Murray-Close, D., Crick, N. R., & Galotti, K. M. (2006). Children's moral reasoning regarding physical and relational aggression. *Social Development*, **15**, 345-371.

Murray-Close, D., Ostorv, J. M., & Crick, N. R., (2007). Growth of relational aggression during middle childhood: Associations with gender and internalizing problems. *Development and Psychopathology*, **19**, 187-203.

大渕憲一　(1993). 人を傷つける心 攻撃性の社会心理学 サイエンス社

大渕憲一 (2011). 新版 人を傷つける心 攻撃性の社会心理学 サイエンス社

Ohbuchi, K., & Tedeschi, J. T. (1997). Multiple goals and tactical behaviors in social conflicts. *Journal of Applied Social Psychology*, **27**, 2177-2199.

Parkhurst, J. T., & Hopmeyer, A. (1998). Sociometric popularity and peer perceived popularity: Two distinct dimensions of peer status. *Jurnal of early Adolescence*, **18**, 125-144.

Perry, D. G., Perry, L. C., & Rasmussen, P. (1986). Cognitive social learning mediators of aggression. *Child Development*, **57**, 700-711.

Pettit, G. S., Dodge, K. A., & Brown, M. M. (1988). Early family experience, social problem solving patterns, and children's social competence. *Child Development*, **59**, 107-120.

Pettit, G. S., & Mize, J., (2007). Social-cognitive processes in development of antisocial and violent behavior. In Flannery, D. J., Vazsonyi, A. T., & Waldman, I. D., (Ed.),*The cambridge handbook of Violent Behvior and Aggression*. New York: Cambridge University Press, pp. 322-344.

Prinstein, M. J., Boergers, J., & Vernberg, E. M. (2001). Overt and relational aggression in adolescents: Socialpsychological adjustment of aggressors and victims. *Journal of Clinical Child Psychology*, **30**, 479 – 491.

Richard, B. A., & Dodge, K. A. (1982). Social maladjustment and problem solving in school-aged children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **50**, 226-233.

Rose, A. J., & Rudolph, K. D (2006). A review of sex differences in peer relationship processes: Potential trade-offs for the emotional and behavioral development of girls and boys. *Psychological Bulletin*, **132**, 98-131.

Rose, A. J., & Swenson, L. P. (2009). Do perceived popular adolescents who aggress against others experience emotional adjustment problems themselves? *Developmental Psychology*, **45**, 868-872.

Rose, A. J., Swenson, L. P., & Waller, E. M. (2004). Overt and relational aggression and perceived popularity: Developmental differences in concurrent and prospective relations. *Developmental Psychology*, **40**, 378-387.

坂井明子・山崎勝之（2003）. 小学生における 3 タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響. 学校保健研究, **45**, 65-75.

坂井明子･山崎勝之 (2004). 小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性，妥当性の検討. 心理学研究, **75**, 254-261.

Smith, R. L., Rose, A. J., & Schwartz-Mette, R. A., (2010). Relational and overt aggression in childhood and adolescesnce: Clarifying mean-level gender difference andassociations with peer acceptance. *Social Development*, **19**, 243-269.

曽我祥子 (1982). 日本版 STAIC 標準化の研究 心理学研究 **54**, 215-221.

Sullivan, T. N., Farrell, A. D., & Kliewer, W. (2006). Peer victimization in early adolescence: Association between physical and relational victimization and drug use, aggression, and delinquent behaviors among urban middle school students. *Dvelopment and Psychopathology*, **18**, 119-137.

田上不二夫 (監修) 河合茂雄 (著) (2005). Q-U実施・解釈ハンドブック小学1~6年共通 日本図書文化協会

Tomada, G., & Schneider, B. H. (1997). Relational aggression, gender, and peer acceptance: Invariance across culture, stability over time, and concordance among informants. *Developmental Psychology*, **33**, 601-609.

Werner, N. E., & Crick, N. R. (2004). Maladaptive peer relationships and the development of relational and physical aggression during middle childhood. *Social Development*, **13**, 495-514.

Werner, N. E. & Grant, S. (2009). Mother's Cognitions about Relational Aggression: Associations With Discipline Responses, Children's Normative Beliefs, and Peer Competence. *Social Development*, **18**, 77-98.

Werner N. E., & Hill, L. G. (2010). Individual and peer group normative beliefs about relational aggression. *Child Development*, **81**, 826-836.

Werner, N. E., & Nixon, C. L. (2005). Normative beliefs and relational aggression : An investigation of the cognitive bases of adolescent aggressive behavior. *Journal of Youth and Adolescent*, **34**, 229-243.

Werner, N. E., Senich, S. & Przepyszny, K. A. (2006). Mother's responses to preschoolers' relational and physical aggression. *Applied Developmental Psychology*, **27**, 193-208.

Xie, H., Swift, D. J., Cairns, R. B., & Cairns, B. D. (2002). Aggressive behaviors in social interaction and developmental adaptation: A narrative analysis of interpersonal conflicts during early adolescence. *Social Development*, **11**, 205-224.

吉澤寛之 (2005). 社会的情報処理モデルによる反社会的行動研究の統合的考察-心理学的・生物学的・社会学的側面を中心として- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 **52**, 95-122.

Zelli, A., Dodge, K. A., Lochman, J. E., Laird, R. D., & Conduct Problems Prevention Research Group (1999). The Distinction between belirfs legitimizing aggression and deviant processing of social cues: Testing Measurement Validity and the hypothesis that biased processing mediates the effects of beliefs on aggression. J*ournal of Personality and Social Psychology*, **77**, 150-166.

Zimmer-Gembeck, M. J., Geiger, T. C., & Crick, N. R. (2005). Relational and physical aggression, prosocial behavior, and peer relations: Gender moderation and bidirectional associations. *Journal of Early Adolescence*, **25**, 421 – 452.

要　旨

目的

本論文は，小学生の心理社会的不適応と密接に関わる関係性攻撃を深刻な問題と捉え，関係性攻撃の生起メカニズムのより深い理解を得るため，SIP モデルを基にした一連の研究を実施した。SIP モデルとは，対人相互作用場面における情報処理モデルであり，データベースとなる潜在的知識構造を参照しながら，複数の情報処理ステップを経て，行動が表出されると仮定した理論である（Crick & Dodge, 1994）。この SIP モデルを参照しながら，本研究では関係性攻撃の生起と心理社会的適応の関連を検討するために，3 つの目的を設定した。3 つの目的とは,「小学生の関係性攻撃についての潜在的知識構造を網羅的に捉えることができる質問紙尺度を作成し，関係性攻撃との関連を検討することがすること（目的 1)」,「関係性攻撃についての潜在的知識構造がオンライン情報処理過程を介し，実際の行動の表出に関連を示すかどうかという SIP モデルの検証を行う事(目的 2)」,「関係性攻撃についての潜在的知識構造と関係性攻撃の遂行，心理社会的不適応の関連を検討すること（目的 3)」であった。

対象と方法

上記の目的を達成するために，本研究では，小学生 4～6 年生約 3000 名を対象に，複数回の質問紙調査を実施した。いずれの調査においても，調査用紙は学級担任によって配布ならびに回収が行われた。

結果

本研究の第一の目的は，関係性攻撃の生起に関わると想定されている，SIP モデルの潜在的知識構造の内容を網羅的に捉え，さらに個人差を測定可能な質問紙尺度を作ることであった。そのためには，まず，先行研究で個別に検討されていた潜在的知識構造の構成概念の内容を整理する必要があった。先行研究において，攻撃行動との関連が指摘された潜在的知識構造とは，攻撃行動について個人がどの様に捉えているかという観点から,様々な議論がなされていた。そこで，先行研究で指摘されていた関係性攻撃についての捉え方をもとに，本研究で扱う潜在的知識構造を関係性攻撃観と命名し,「過去の経験から形成され

た関係性攻撃に対する個人の構造化された知識」と定義した。そして関係性攻撃観の構成要素として，関係性攻撃についての規範や効果，秘匿可能性を想定した。

以上の理論的な検討を踏まえて，小学生の関係性攻撃観を測定可能な質問紙尺度の作成が行われた。研究 1～研究 2 において，小学生用関係性攻撃観尺度改訂版が作成された。その結果，20 項目 4 因子構造からなる新たな尺度が得られた。各因子は「否定的認識」（7 項目），「身近さ」（6 項目），「正当化」（3 項目），「秘匿可能性」（4 項目）であった。各因子を構成する項目群の信頼性係数も概ね満足できる値が示され，また想定された学年差や関連要因よる差の検討（関係性攻撃経験による得点差），さらに攻撃行動との関連から，十分な妥当性も確認された。

本研究の第二の目的は，SIP モデルの中に関係性攻撃観を組み入れ，関係性攻撃生起に関わる内的プロセスを明らかにすることであった。その目的を達成するために，場面想定法を用いた架空の関係性挑発場面における，小学生の情報処理過程と，関係性攻撃観，応答的行動の関連が検討された。

まず，研究 3 では SIP モデルの解釈過程における歪みである敵意帰属バイアスとの関連が検討された。その結果，否定的認識が敵意帰属バイアスを促進させるという結果が示され，さらに関係性攻撃観の各尺度得点と応答的行動の関連も確認された。

研究 4 では SIP モデルの目標明確化過程との関連が検討された。その結果，正当化が関係維持目標を抑制する作用を示し，結果的に攻撃行動に寄与するという結果が示された。しかも，正当化は敵意帰属バイアスを介さず，直接関係維持目標と関連することが示され，SIP モデルの円環構造を支持する結果が得られたと考えられた。

研究 5 では，SIP モデルの反応検索過程との関連が検討された。反応検索過程における情報処理の歪みとして，架空の関係性挑発場面における応答的行動の産出数に対する攻撃的行動の割合が測定された。その結果，関係性攻撃観の否定的認識や身近さとの相関関係は示されたものの，SIP モデルによる検証はデータが適合せず，明確な結果が得られなかった。

最後に，研究 6 では，SIP モデルの反応決定過程との関連が検討された。そ

の結果，関係性攻撃観のうち否定的認識や正当化が，架空の関係性挑発場面における攻撃行動に対する適切性の評価や自己効力感を規定することが示され，最終的に攻撃行動の生起と関連することが明らかになった。

以上の結果から，関係性攻撃観は，SIP モデルで想定されていた潜在的知識構造の機能と同様に，オンラインの情報処理過程の歪みと関連を示し，結果的に関係性攻撃の生起にも関連することが明らかになった。特に，関係性攻撃観の中でも，正当化や否定的認識がオンラインの情報処理の歪みと関連することが多くみられた。

本研究の第三の目的は，関係性攻撃観と関係性攻撃，そして心理社会的不適応の関連を検討することであった。さらに，関係性攻撃と心理社会的適応の関連の理解を深めるため，関係性攻撃経験による調整効果を考慮に入れたモデルの検討も実施した。

社会的適応との関連を検討した研究 7 においては，関係性攻撃の経験による効果が示され，加害群，被害群，受身・未経験群では，関係性攻撃観，攻撃行動,社会的適応の関連の仕方が異なることが明らかにされた。まず加害群では，関係性攻撃観と攻撃行動の関連が示されるのみで，攻撃行動から社会的適応に有意なパスが導かれないという結果が示された。一方で，被害群や受身・未経験群では，関係性攻撃観と攻撃行動の関連が加害群と同様に確認された上に，関係性攻撃から社会的適応を抑制する方向の関連が示された。

心理的適応との関連を検討した研究 8 においては，関係性攻撃の経験による効果が示されることはなく，加害群，被害群，受身・未経験群の全群において同一のモデルが採用された。その結果，関係性攻撃観が攻撃行動との有意な関連を示し，さらに攻撃行動が心理的不適応と有意な正の関連を示すことが明らかにされた。

考察

本論文は，関係性攻撃の生起メカニズムの説明する理論を SIP モデルに依拠していたが，特にその中でも，潜在的知識構造に注目した。潜在的知識構造とは，過去の経験に基づいて形成される記憶の貯蔵で，獲得されたルールや社会的知識から構成されるといわれている（Crick & Dodge, 1994）。そして，その

機能は,対人相互作用場面における行動の表出に直接的に作用するだけでなく,情報処理過程に対しても作用し，作業を効率化することで，結果的に表出される行動を規定すると想定されている。本論文では，この潜在的知識構造を，関係性攻撃のことをどの様に捉えているかという観点から包括的に概念化する試みを行った。その結果が，関係性攻撃観と本論文で呼称していた児童の関係性攻撃についての認識であり，否定的認識，身近さ，正当化，秘匿可能性の 4 構成要素からなることが明らかになった。この 4 構成要素のうち，否定的認識は関係性攻撃を容認できないものとみなす捉え方を意味し，攻撃行動を抑制する作用が期待できる。その他の身近さ，正当化，秘匿可能性は，関係性攻撃についての肯定的な捉え方であり,攻撃行動を促進させる機能があると考えられる。そして，実際に，関係性攻撃観の 4 構成要素は，全てが関係性攻撃に対して直接関連することを示した（研究 2）。このことから，潜在的知識構造が行動の表出に直接作用することが示されたと考えられる。しかし，攻撃行動に対する説明率はそれほど大きくなく，関係性攻撃観が他の変数を介して攻撃行動と関連する可能性も示唆された。

関係性攻撃観の 4 構成要素は，対人相互作用場面における情報処理過程に対して作用することで，行動の表出に関与することも示された。しかも，構成要素によって，作用する情報処理過程が異なる可能性が示された。まず，否定的認識と秘匿可能性が，解釈過程に対して作用することが示された（研究 3）。有害性や秘匿可能性といった関係性攻撃の脅威的な面を認識していることが，解釈過程において相手の意図を読み取る際に，敵意的に捉える傾向を促進させたと考えられる。次に，関係性攻撃観の正当化が，目標の明確化過程や反応決定過程に直接関連することが示された（研究 4，6）。この結果から，報復的な関係性攻撃ならば許容されるという捉え方は，状況の解釈を待たずに，その後の情報処理過程に作用し，攻撃行動の表出を規定する可能性が考えられた。最後に，身近さは，反応検索過程に作用する可能性が示された（研究 5）。ただし，本論文においては明確な結果は示されなかったので，今後も検討が必要となるだろう。これらの結果から，関係性攻撃観の中でも，正当化や否定的認識がオンライン情報処理の歪みと多く関連することが示された。

さらに，関係性攻撃観が規定した攻撃行動が，児童の心理社会的不適応に関

連することが明らかになった（研究 7，8）。特に，児童の社会的適応との関連においては，関係性攻撃の被害経験や目撃経験だけ，あるいは，未経験である場合に，関係性攻撃行動と不適応の関連が示された。この結果から，関係性攻撃の加害経験のない子どもでも，関係性攻撃傾向が高まると仲間から受け入れられなくなるリスクが高まる可能性が示唆された。一方で，関係性攻撃は心理的な不適応とは群間差なく関連を示したので，仲間集団内の立場に関わらず，関係性攻撃への従事が，否定的な結果をもたらすことが考えられた。

結論

以上のように，本研究では，関係性攻撃観，つまり SIP モデルにおける潜在的知識構造は，4 構成要素からなることが示された。そして，それらの 4 つの潜在的知識構造は，それぞれが関係性攻撃の生起や心理社会的適応と関連することが明らかになった。

まず，関係性攻撃観のうち，否定的認識は攻撃行動を促進するようなオンライン情報処理過程に抑制的に作用し，結果的に関係性攻撃の表出を抑えることが基本的な機能であると考えられる。そして，研究 2 と研究 7 の知見から，否定的認識は加害経験のある子どもほど低くなる傾向があり，そのために関係性攻撃が抑制する機能が示されなくなる可能性が指摘できる。さらに，否定的認識は敵意帰属バイアスに対して正の関連も示しているので，関係性攻撃に対して過敏に反応し過ぎると，却って関係性攻撃を促進させるような機能もある可能性が考えられる。

次に，関係性攻撃観の身近さは，関係性攻撃の表出を導くようなオンライン情報処理過程に促進的に作用し，結果的に関係性攻撃の表出につなげることが基本的な機能である可能性が考えられる。身近さは，加害経験があるほど高くなるが，受身・未経験群といった直接的な関係性攻撃経験がなく，加害群よりも身近さの得点が低い小学生においても，関係性攻撃を促進させる唯一の要因であることも示された。よって，身近さは関係性攻撃の傍観者や全く関与した経験がない小学生も関係性攻撃へ誘う可能性のある捉え方であると考えられる。

また，関係性攻撃観の正当化は，オンライン情報処理過程の中でも，攻撃的な目標や反応に対して肯定的に作用し，結果的に関係性攻撃の表出につなげる

ことが基本的な機能である可能性が考えられる。正当化は加害経験があるほど高い傾向があった。そのやめ，加害経験があるほど，攻撃行動が促進され，結果的に心理社会的不適応につながる可能性が考えられる。

最後に，秘匿可能性は，敵意帰属バイアスのみに作用し，表出される攻撃行動も関係性攻撃に対してのみに関連を示した。秘匿可能性は関係性攻撃観の中で，最も関係性攻撃に特有な関連を示したと考えられる。

資料

第 4 章　小学生の関係性攻撃の認識と攻撃行動に関する検討

資料 1…研究 1-1（自由記述による項目収集）

資料 2…研究 1-2（関係性攻撃観尺度の作成①）

資料 3…研究 2 （関係性攻撃観尺度の作成②）

第 5 章　小学生の関係性攻撃生起の内的プロセスに関する検討

資料 4…研究 3（SIP①敵意帰属バイアスとの関連）

資料 5…研究 4（SIP②目標明確化過程との関連）

資料 6…研究 5（SIP③反応検索過程との関連）

資料 7…研究 5（SIP 番外編：応答的行動の分類基準）

資料 8…研究 6（SIP④反応決定過程との関連）

第 6 章　小学生の関係性攻撃の認識と心理社会的適応の関連

資料 9 …研究 7（社会的適応との関連）

資料 10…研究 8（心理的適応との関連）

「小学生の生活に関するアンケート」
ご協力お願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。となりのページの注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意をして行われています。

研究の内容についてご意見ご質問などございましたら，気軽に実施責任者（濱口佳和）または実施分担者（関口雄一）にお尋ねください。

実施責任者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　教授　濱口佳和
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　心理専攻　関口雄一
TEL: 029-853-8380　E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp

また，この研究について困ったなと思うことなどございましたら，下記の委員会までご相談ください。

人間総合科学研究科研究倫理委員会　体育芸術系支援室　研究支援

TEL: 029－853－2571　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

研究へのご協力どうもありがとうございます。

☆注意事項です☆

■このアンケートはテストではありません。あなたの学校の成績とは全く関係がないものです。ですから、答えなかった質問があることで、あなたの成績がわるくなることは決してありません。

■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。

■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。

■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、あなたのありのままの意見を答えてください。

アンケートにご協力いただける場合は、下の□の中の当てはまるところに〇をつけてください。

【　男子　　女子　】

小学５年生　小学６年生

【質問 1】

・わざと無視する

・仲間外れにする

・誰かのことについて噂を流す

あなたは今までに，上のような「いじわるなこと」をしたり，されたり，見たことがありますか？

ある　／　ない

【質問 2】

上のような「いじわるなこと」について，あなたはどの様なイメージを持っていますか？「いじわるなこと」の性質についてあなたがいつも思っていることを，できるだけ詳しく，たくさん，下の文に続けて自由に書いてください。回答欄が足りない場合は余白に書いてください。

例）無視は　よくあることだと思う

無視は ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

無視は ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

仲間外れは ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

仲間外れは ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

仲間外れは ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

噂を流すのは ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

噂を流すのは ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

噂を流すのは ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

質問は以上です。
ご協力ありがとうございました。

「小学生の友人関係に関するアンケート」ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

- ■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。
- ■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。
- ■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。
- ■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。
- ■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、 あなたのありのままの意見を答えてください。
- ■このページは切り離して、お持ち帰りください。
- ■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2 ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。
研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）
E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp
研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間系支援室　総務係
TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。

3 ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年、クラス、生年月日をきかせてください。下の口の中のあてはまるところに〇をつけ、クラス・生年月日を記入してください。

【　男子　　女子　】

【　４年生　　５年生　　６年生　】

クラス【　　組】

生年月日【　　月　　日】

【質問2】　あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？あてはまるものすべてに〇をつけてください。

友達と一緒にいるときに、「困っている子の手助け」などの親切なことを

（１）自分が友だちにしたことがある　□

（２）友だちからされたことがある　□

（３）友だちが他の友だちにしていることを見たことがある　□

（４）どれもあてはあらない　□

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。
これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視	話しかけられても聞こえてないふりをする その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう
仲間はずれ	遊びの仲間にわざとさそわない グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと
かげ口	その人のいないところで，その人の悪口や嫌な噂を言いふらす

4 ページに進もう！

【質問3】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった，「仲間をひとりぼっちにする攻撃（ひとりぼっちにする攻撃）」について，いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～４：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに〇をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　よくないと思う	1	2	3	4
2	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないと思う	1	2	3	4
3	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　それほど悪いことではないと思う	1	2	3	4
4	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　する人のことを正しいと思わない	1	2	3	4
5	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　何度でもできると思う	1	2	3	4
6	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	で　相手をこらしめられると思う	1	2	3	4
7	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をすると　けんかやいじめにつながると思う	1	2	3	4
8	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をすると　後できっと後悔すると思う	1	2	3	4
9	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をする人は　同じようにやり返されると思う	1	2	3	4
10	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　された人をきずつけると思う	1	2	3	4
11	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　よくあることだと思う	1	2	3	4
12	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　大人もすることだと思う	1	2	3	4
13	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　ごまかせると思う	1	2	3	4
14	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　ひとりを相手に大勢でやることだと思う	1	2	3	4
15	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をされたら　やり返した方がいいと思う	1	2	3	4
16	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　ひきょうだと思う	1	2	3	4
17	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　嫌いな人にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4
18	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　やってる側は楽しいと思う	1	2	3	4
19	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4
20	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　かんたんにできると思う	1	2	3	4
21	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	で　相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4
22	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　ずっと続いてしまうものだと思う	1	2	3	4

5 ページに進もう！

【質問３】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	少しそう思う	とてもそう思う
23	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をすると　自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4
24	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をすると，した人の信頼がなくなると思う	1	2	3	4
25	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4
26	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　ふつうのことだと思う	1	2	3	4
27	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4
28	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　自分がやったと気づかれないですむと思う	1	2	3	4
29	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　一人だけではできないと思う	1	2	3	4
30	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をされたら　他の子と仲良くなればいいと思う	1	2	3	4
31	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　ひどいことだと思う	1	2	3	4
32	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　うっかりしてしまっていることがあると思う	1	2	3	4
33	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　されてもそんなに傷つかないと思う	1	2	3	4
34	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　する人はとても悪い人だと思う	1	2	3	4
35	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　する人の気持ちが分からない	1	2	3	4
36	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　その気になればできると思う	1	2	3	4
37	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	で　相手を思い通りにできると思う	1	2	3	4
38	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　どんどん広がってしまうものだと思う	1	2	3	4
39	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をすると　した人もつらくなると思う	1	2	3	4
40	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をすると，した人は仲間をなくすと思う	1	2	3	4
41	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　された人をつらい思いをさせることだと思う	1	2	3	4
42	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　たまにしかないことだと思う	1	2	3	4
43	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4
44	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　まわりの人は気づきにくいと思う	1	2	3	4
45	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をされても　気にしない方がいいと思う	1	2	3	4
46	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　自分もされたらいやだと思う	1	2	3	4
47	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	を　される方にも問題があると思う	1	2	3	4
48	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	は　こっそりやるので，秘密にできると思う	1	2	3	4
49	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をされたら，誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4
50	ひとりぼっちにする攻撃（無視，仲間はずれ，かげ口）	をするような人とは　無理に仲良くしない方がいいと思う	1	2	3	4

6 ページに進もう！

【質問４】

この質問は、ふだんのあなたの学校での様子についてきくものです。ふだんの自分の行動を思い浮かべて、次の質問について１：まったくあてはまらない～４：とてもよくあてはまるの中で、一番あてはまると思うものに〇をつけてください。	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	よくあてはまる	とてもよくあてはまる
1. 人に乱暴なことをしたことがある	1	2	3	4
2. だれかを仲間はずれにしたことがある	1	2	3	4
3. からかわれたら、たたいたり、けったりするかもしれない	1	2	3	4
4. 放課後みんなで遊ぶ相談をするときに、だれかを入れなかったことがある	1	2	3	4
5. たたかれたら、たたき返す	1	2	3	4
6. その子がみんなからきらわれるようなうわさ話をしたことがある	1	2	3	4
7. 自分を守るためなら、暴力をふるうのもしかたがない	1	2	3	4
8. 友だちといっしょになって、言うことを聞いてくれない人の悪口を言ったことがある	1	2	3	4
9. じゃまをする人がいたら、文句を言う	1	2	3	4
10. 遊ぶときや班を作るとき、気に入らない友だちは仲間に入れたくない	1	2	3	4
11. すぐおこる方だ	1	2	3	4
12. あの子とは、いっしょに遊ばないで、とだれかにたのんだことがある	1	2	3	4
13. すぐにけんかをしてしまう	1	2	3	4
14. いつもみんなでいっしょに帰るのに、わざとだれかをおいて先に帰ったことがある	1	2	3	4

以上で質問は終わりです。答えてくださってありがとうございました。

下の［　　］は自由欄です。

ご意見・ご感想などが、もしありましたら、ご自由に書いてください。

(自由欄ですので、白紙のままでもかまいません)。

ご協力
ありがとう
ございました

「小学生の友人関係に関するアンケート」
ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

- ■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。
- ■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。
- ■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。
- ■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。
- ■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、 あなたのありのままの意見を答えてください。
- ■このページは切り離して、お持ち帰りください。
- ■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）

E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp

研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）

TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間系支援室　総務係

TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。

3 ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年、クラス、生年月日をきかせてください。下の□の中のあてはまるところに○をつけ、クラス・生年月日を記入してください。

【　男子　　女子　】

【　4 年生　　5 年生　　6 年生　】

クラス【　　組】

生年月日【　　月　　日】

【質問2】　あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？あてはまるものすべてに○をつけてください。

友達と一緒にいるときに、「困っている子の手助け」などの親切なことを

（1）自分が友だちにしたことがある　□

（2）友だちからされたことがある　□

（3）友だちが他の友だちにしていることを見たことがある　□

（4）どれもあてはあらない　□

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。
これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視	話しかけられても聞こえてないふりをする その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう
仲間はずれ	遊びの仲間にわざとさそわない グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと
かげ口	その人のいないところで，その人の悪口や嫌な噂を言いふらす

4 ページに進もう！

【質問３】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった，「ひとりぼっちにする攻撃」について，いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～４：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに〇をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4	5
2		よくあることだと思う	1	2	3	4	5
3		先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないことだと思う	1	2	3	4	5
4		目立たないものだと思う	1	2	3	4	5
5	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	すると，けんかやいじめにつながることだと思う	1	2	3	4	5
6		大人もすることだと思う	1	2	3	4	5
7		されたら，やり返した方がいいと思う	1	2	3	4	5
8		することで，相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4	5
9	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	ひきょうだと思う	1	2	3	4	5
10		かんたんにできると思う	1	2	3	4	5
11		嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4	5
12		周りの人に気づかれにくいものだと思う	1	2	3	4	5
13	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4	5
14		ふつうにあることだと思う	1	2	3	4	5

5ページに進もう！

【質問３】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
15	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	される方が悪い場合もあると思う	1	2	3	4	5
16		他の人に秘密にしやすいものだと思う	1	2	3	4	5
17		すると，自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4	5
18		誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4	5
19	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	怪我させるわけではないので，まだ許されると思う	1	2	3	4	5
20		することで，相手を思い通りにできることだと思う	1	2	3	4	5
21		すると，した人の信頼がなくなることだと思う	1	2	3	4	5
22		たまにしかないことだと思う	1	2	3	4	5
23	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	怒るようなことをされたら，してもしかたがないと思う	1	2	3	4	5
24		やった人が見つかりにくいものだと思う	1	2	3	4	5
25		されたら，誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4	5
26		やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4	5
27	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	相手に乱暴なことをするよりも，悪いことではないと思う	1	2	3	4	5
28		大人の目を盗んでできることだと思う	1	2	3	4	5

6ページに進もう！

【質問４】

この質問は、**ふだんのあなたの学校での様子**についてきくものです。ふだんの自分の行動を思い浮かべて、次の質問について１：まったくあてはまらない～４：とてもよくあてはまるの中で、一番あてはまると思うものに○をつけてください。	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	よくあてはまる	とてもよくあてはまる
1. 人に乱暴なことをしたことがある	1	2	3	4
2. だれかを仲間はずれにしたことがある	1	2	3	4
3. からかわれたら、たたいたり、けったりするかもしれない	1	2	3	4
4. 放課後みんなで遊ぶ相談をするときに、だれかを入れなかったことがある	1	2	3	4
5. たたかれたら、たたき返す	1	2	3	4
6. その子がみんなからきらわれるようなうわさ話をしたことがある	1	2	3	4
7. 自分を守るためなら、暴力をふるうのもしかたがない	1	2	3	4
8. 友だちといっしょになって、言うことを聞いてくれない人の悪口を言ったことがある	1	2	3	4
9. じゃまをする人がいたら、文句を言う	1	2	3	4
10. 遊ぶときや班を作るとき、気に入らない友だちは仲間に入れたくない	1	2	3	4
11. すぐおこる方だ	1	2	3	4
12. あの子とは、いっしょに遊ばないで、とだれかにたのんだことがある	1	2	3	4
13. すぐにけんかをしてしまう	1	2	3	4
14. いつもみんなでいっしょに帰るのに、わざとだれかをおいて先に帰ったことがある	1	2	3	4

【質問５】　あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？

あてはまるものすべてに○をつけてください。

誰かに対しての「無視」や「仲間はずれ」,「かげ口」などを

（１）自分が友だちにしたことがある　□

（２）友だちからされたことがある　□

（３）友だちが他の友だちにしていることを見たことがある　□

（４）どれもあてはあらない　□

以上で質問は終わりです。答えてくださってありがとうございました。

下の □ は自由欄です。

ご意見・ご感想などが、もしありましたら、ご自由に書いてください。

(自由欄ですので、白紙のままでもかまいません)。

ご協力
ありがとう
ございました

「小学生の友人関係に関するアンケート」
ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。
以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。

■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。

■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。

■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。

■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、 あなたのありのままの意見を答えてください。

■このページは切り離して、お持ち帰りください。

■回答には15分～20分程度かかります。人によりスピードは変わりますが、自分のペースで回答してください。

■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。
研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）
E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp
研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間エリア支援室　研究支援
TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

資料 4

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。
3ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年をきかせてください。
下の□の中のあてはまるところに○をつけてください。

【　男子　　女子　】

【　4 年生　　5 年生　　6 年生　】

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて

「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。

これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，

それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視
- 話しかけられても聞こえてないふりをする
- その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう

仲間はずれ
- 遊びの仲間にわざとさそわない
- グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと

かげ口
その人のいないところで、その人の悪口や嫌な噂を言うこと

4 ページに進もう！

【質問３】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった、「ひとりぼっちにする攻撃」について、いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～5：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに○をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4	5
2		よくあることだと思う	1	2	3	4	5
3		先にやられたのなら、やりかえしてもしかたないことだと思う	1	2	3	4	5
4		目立たないものだと思う	1	2	3	4	5
5	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	すると、けんかやいじめにつながることだと思う	1	2	3	4	5
6		大人もすることだと思う	1	2	3	4	5
7		されたら、やり返した方がいいと思う	1	2	3	4	5
8		することで、相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4	5
9	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	ひきょうだと思う	1	2	3	4	5
10		かんたんにできると思う	1	2	3	4	5
11		嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4	5
12		周りの人に気づかれにくいものだと思う	1	2	3	4	5
13	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	する人は、される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4	5
14		ふつうにあることだと思う	1	2	3	4	5

5 ページに進もう！

【質問３】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
15	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	される方が悪い場合もあると思う	1	2	3	4	5
16		他の人に秘密にしやすいものだと思う	1	2	3	4	5
17		すると、自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4	5
18		誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4	5
19	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怪我させるわけではないので、まだ許されると思う	1	2	3	4	5
20		することで、相手を思い通りにできることだと思う	1	2	3	4	5
21		すると、した人の信頼がなくなることだと思う	1	2	3	4	5
22		たまにしかないことだと思う	1	2	3	4	5
23	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怒るようなことをされたら、してもしかたがないと思う	1	2	3	4	5
24		やった人が見つかりにくいものだと思う	1	2	3	4	5
25		されたら、誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4	5
26		やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4	5
27	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	相手に乱暴なことをするよりも、悪いことではないと思う	1	2	3	4	5
28		大人の目を盗んでできることだと思う	1	2	3	4	5

６ページに進もう！

なぜ人がそうするのか？

これから、いくつかのお話を読んでください。それぞれのお話でおこっていることが、じっさいにあなたにおこっていると思ってください。そして、それぞれのお話につづく質問にこたえてください。

ろうかでのお話

学校で，ある朝 あなたがろうかに立っているところをそうぞうしてください。あなたが そこに立っていると，AとBという２人の同級生が歩いてきました。AとBは あなたのそばを通る時，あなたを見て，おたがいに何かを ささやきあって，そのあとで 笑いました。

	1. AとBについて、あなたはどう思いますか。以下の項目について、1：全くそう思わない～5：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	AとBは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	AとBは、あなたのことを怒らせようとしていた。	1	2	3	4	5
3	AとBは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	AとBは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	AとBは、あなたのことをからかっていた。	1	2	3	4	5

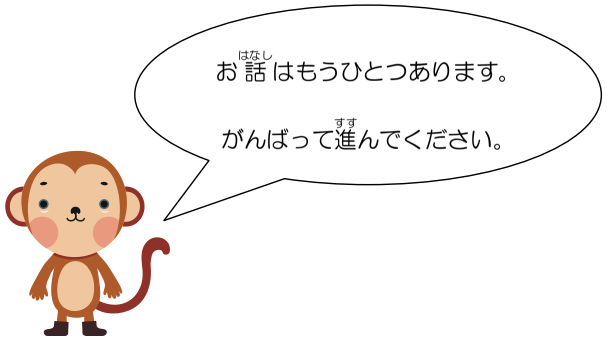
2. このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？

ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。 以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに，AとBに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	AとBのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	AとBのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに，AとBに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	AとBのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	AとBに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに，AとBに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	AとBのいない所で，「AとBはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	AとBに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5



お昼ごはんのお話

この学校では　お昼ごはんは　食堂で　好きな友だちと好きな場所で食べてよいことになっていると思って　したの文章を　読んでください。

あなたが　お昼を食べるために　すわる場所をさがしているところを　そうぞうしてください。へやの　むこうがわにある　テーブルに，あなたの　しっている人たちが　何人か見えました。その子たちは　わらったり，たがいに話をしたりして、とても楽しそうに見えました。

あなたは その子たちのテーブルまで　歩いていきました。あなたが　すわったとたんに，その子たちは　話すのをやめて，だれもあなたに話しかけません。

1. その子たちについて、あなたはどう思いますか。 以下の項目について、1：全くそう思わない～5：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	その子たちは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	その子たちは、あなたと話したくなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
3	その子たちは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	その子たちは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	その子たちは、あなたが来るまで、あなたの悪口を言っていたと思う。	1	2	3	4	5

2. このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？

ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。 以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに〇をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに，その子たちに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	その子たちのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	その子たちのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに，その子たちに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	その子たちのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	その子たちに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに，その子たちに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	その子たちがいない所で，「その子たちはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	その子たちに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5

以上で質問は終わりです。

ご協力
ありがとう
ございました

「小学生の友人関係に関するアンケート」
ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。
以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。

■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。

■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。

■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。

■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、 あなたのありのままの意見を答えてください。

■このページは切り離して、お持ち帰りください。

■回答には15分～20分程度かかります。人によりスピードは変わりますが、自分のペースで回答してください。

■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。
研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）
E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp
研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間エリア支援室　研究支援
TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。

3 ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年をきかせてください。
下の□の中のあてはまるところに〇をつけてください。

【　男子　　女子　】

【　４年生　　５年生　　６年生　】

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて

「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。

これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，

それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視	話しかけられても聞こえてないふりをする その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう
仲間はずれ	遊びの仲間にわざとさそわない グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと
かげ口	その人のいないところで、その人の悪口や嫌な噂を言うこと

4 ページに進もう！

【質問３】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった、「ひとりぼっちにする攻撃」について、いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～５：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに○をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4	5
2		よくあることだと思う	1	2	3	4	5
3		先にやられたのなら、やりかえしてもしかたないことだと思う	1	2	3	4	5
4		目立たないものだと思う	1	2	3	4	5
5	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	すると、けんかやいじめにつながることだと思う	1	2	3	4	5
6		大人もすることだと思う	1	2	3	4	5
7		されたら、やり返した方がいいと思う	1	2	3	4	5
8		することで、相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4	5
9	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	ひきょうだと思う	1	2	3	4	5
10		かんたんにできると思う	1	2	3	4	5
11		嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4	5
12		周りの人に気づかれにくいものだと思う	1	2	3	4	5
13	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	する人は、される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4	5
14		ふつうにあることだと思う	1	2	3	4	5

５ページに進もう！

【質問３】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
15	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	される方が悪い場合もあると思う	1	2	3	4	5
16		他の人に秘密にしやすいものだと思う	1	2	3	4	5
17		すると、自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4	5
18		誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4	5
19	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怪我させるわけではないので、まだ許されると思う	1	2	3	4	5
20		することで、相手を思い通りにできることだと思う	1	2	3	4	5
21		すると、した人の信頼がなくなることだと思う	1	2	3	4	5
22		たまにしかないことだと思う	1	2	3	4	5
23	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怒るようなことをされたら、してもしかたがないと思う	1	2	3	4	5
24		やった人が見つかりにくいものだと思う	1	2	3	4	5
25		されたら、誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4	5
26		やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4	5
27	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	相手に乱暴なことをするよりも、悪いことではないと思う	1	2	3	4	5
28		大人の目を盗んでできることだと思う	1	2	3	4	5

６ページに進もう！

なぜ人がそうするのか？

これから、いくつかのお話を読んでください。それぞれのお話でおこっていることが、じっさいにあなたにおこっていると思ってください。そして、それぞれのお話につづく質問にこたえてください。

ろうかでのお話

学校で，ある朝 あなたがろうかに立っているところをそうぞうしてください。あなたが そこに立っていると，ＡとＢという２人の同級生が歩いてきました。ＡとＢは あなたのそばを通る時，あなたを見て，おたがいに何かを ささやきあって，そのあとで 笑いました。

1. ＡとＢについて、あなたはどう思いますか。以下の項目について、１：全くそう思わない～５：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ＡとＢは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	ＡとＢは、あなたのことを怒らせようとしていた。	1	2	3	4	5
3	ＡとＢは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	ＡとＢは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	ＡとＢは、あなたのことをからかっていた。	1	2	3	4	5

2. このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？

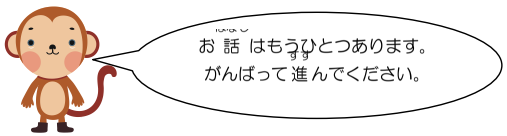
ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

3. このとき、あなたはどうしたいと思いますか。以下の項目について、「1：ぜんぜんそう思わない～5：本当にそう思う」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		ぜんぜんそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	本当にそう思う
1	「ＡとＢをいやな気持ちにさせたくない」と思いますか	1	2	3	4	5
2	「ＡとＢに，あやまって欲しい」と思いますか	1	2	3	4	5
3	「ＡとＢのふたりとは，これからも仲よしでいたい」と思いますか	1	2	3	4	5
4	「ＡとＢに，笑った理由を教えてもらいたい」と思いますか	1	2	3	4	5
5	「ＡとＢに，自分の気持ちを伝えたい」と思いますか	1	2	3	4	5
6	「ＡとＢを困らせたくない」と思いますか	1	2	3	4	5

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに、ＡとＢに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	ＡとＢのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	ＡとＢのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに、ＡとＢに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	ＡとＢのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	ＡとＢに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに、ＡとＢに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	ＡとＢのいない所で、「ＡとＢはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	ＡとＢに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5



お昼ごはんのお話

この学校では　お昼ごはんは　食堂で　好きな友だちと好きな場所で食べてよいことになっていると思って　したの文章を　読んでください。

あなたが　お昼を食べるために　すわる場所をさがしているところを　そうぞうしてください。へやの　むこうがわにある　テーブルに，あなたの　しっている人たちが　何人か見えました。その子たちは　わらったり，たがいに話をしたりして、とても楽しそうに見えました。

あなたは その子たちのテーブルまで　歩いていきました。あなたが　すわったとたんに，その子たちは　話すのをやめて，だれもあなたに話しかけません。

1. その子たちについて、あなたはどう思いますか。以下の項目について、1：全くそう思わない～5：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	その子たちは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	その子たちは、あなたと話したくなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
3	その子たちは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	その子たちは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	その子たちは、あなたが来るまで、あなたの悪口を言っていたと思う。	1	2	3	4	5

2. このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？

ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

3. このとき、あなたはどうしたいと思いますか。以下の項目について、「1：ぜんぜんそう思わない～5：本当にそう思う」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		ぜんぜんそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	本当にそう思う
1	「その子たちをいやな気持ちにさせたくない」と思いますか	1	2	3	4	5
2	「その子たちに，あやまって欲しい」と思いますか	1	2	3	4	5
3	「その子たちとは，これからも仲よしでいたい」と思いますか	1	2	3	4	5
4	「その子たちに，話さなくなった理由を教えてもらいたい」と思いますか	1	2	3	4	5
5	「その子たちに，自分の気持ちを伝えたい」と思いますか	1	2	3	4	5
6	「その子たちを困らせたくない」と思いますか	1	2	3	4	5

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに，その子たちに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	その子たちのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	その子たちのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに，その子たちに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	その子たちのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	その子たちに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに，その子たちに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	その子たちがいない所で，「その子たちはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	その子たちに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5

以上で質問は終わりです。

ご協力
ありがとう
ございました

「小学生の友人関係に関するアンケート」
ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。
以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。

■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。

■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。

■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。

■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、 あなたのありのままの意見を答えてください。

■このページは切り離して、お持ち帰りください。

■回答には 15分～20分程度かかります。人によりスピードは変わりますが、自分のペースで回答してください。

■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2 ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。
研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）
E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp
研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間エリア支援室　研究支援
TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。

3 ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年をきかせてください。
下の□の中のあてはまるところに○をつけてください。

【　男子　　女子　】

【　4 年生　　5 年生　　6 年生　】

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて

「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。

これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，

それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視
- 話しかけられても聞こえてないふりをする
- その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう

仲間はずれ
- 遊びの仲間にわざとさそわない
- グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと

かげ口
その人のいないところで、その人の悪口や嫌な噂を言うこと

4 ページに進もう！

【質問３】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった、「ひとりぼっちにする攻撃」について、いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～5：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに○をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4	5
2		よくあることだと思う	1	2	3	4	5
3		先にやられたのなら、やりかえしてもしかたないことだと思う	1	2	3	4	5
4		目立たないものだと思う	1	2	3	4	5
5	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	すると、けんかやいじめにつながることだと思う	1	2	3	4	5
6		大人もすることだと思う	1	2	3	4	5
7		されたら、やり返した方がいいと思う	1	2	3	4	5
8		することで、相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4	5
9	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	ひきょうだと思う	1	2	3	4	5
10		かんたんにできると思う	1	2	3	4	5
11		嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4	5
12		周りの人に気づかれにくいものだと思う	1	2	3	4	5
13	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	する人は、される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4	5
14		ふつうにあることだと思う	1	2	3	4	5

5 ページに進もう！

【質問３】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
15	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	される方が悪い場合もあると思う	1	2	3	4	5
16		他の人に秘密にしやすいものだと思う	1	2	3	4	5
17		すると、自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4	5
18		誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4	5
19	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怪我させるわけではないので、まだ許されると思う	1	2	3	4	5
20		することで、相手を思い通りにできることだと思う	1	2	3	4	5
21		すると、した人の信頼がなくなることだと思う	1	2	3	4	5
22		たまにしかないことだと思う	1	2	3	4	5
23	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怒るようなことをされたら、してもしかたがないと思う	1	2	3	4	5
24		やった人が見つかりにくいものだと思う	1	2	3	4	5
25		されたら、誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4	5
26		やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4	5
27	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	相手に乱暴なことをするよりも、悪いことではないと思う	1	2	3	4	5
28		大人の目を盗んでできることだと思う	1	2	3	4	5

6 ページに進もう！

なぜ人がそうするのか？

これから、いくつかのお話を読んでください。それぞれのお話でおこっていることが、じっさいにあなたにおこっていると思ってください。そして、それぞれのお話につづく質問にこたえてください。

ろうかでのお話

学校で，ある朝 あなたがろうかに立っているところをそうぞうしてください。あなたが そこに立っていると，AとBという２人の同級生が歩いてきました。AとBは あなたのそばを通る時，あなたを見て，おたがいに何かを ささやきあって，そのあとで 笑いました。

	1. AとBについて、あなたはどう思いますか。以下の項目について、1：全くそう思わない～5：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	AとBは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	AとBは、あなたのことを怒らせようとしていた。	1	2	3	4	5
3	AとBは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	AとBは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	AとBは、あなたのことをからかっていた。	1	2	3	4	5

2. このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？

ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

7 ページに進もう！

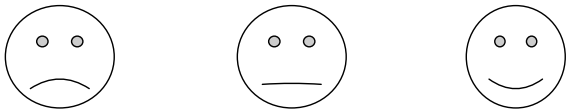
3. こんな時あなたならどんなことをしますか？

下の囲みの中に、あなたが A と B に対してすることや言うことで思いつくだけ記入してください。ひとつの囲みの中に、思いついたアイデアをひとつずつ記入してください。また、その時のあなたの表情について、下にある 1～3 の選択肢の中から一番あてはまるものをひとつ選んで○をつけてください.

＜アイデア①＞

（A と B に対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

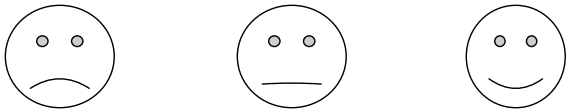


1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

＜アイデア②＞

（A と B に対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。



1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

＜アイデア③＞

（A と B に対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

＜アイデア④＞

（A と B に対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

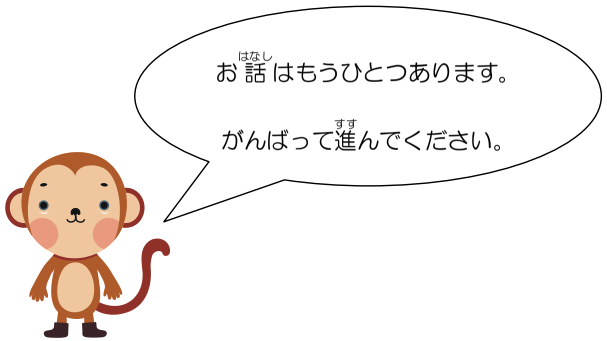
＜アイデア⑤＞

（A と B に対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。 以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに，AとBに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	AとBのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	AとBのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに，AとBに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	AとBのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	AとBに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに，AとBに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	AとBのいない所で，「AとBはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	AとBに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5



10 ページに進もう！

お昼ごはんのお話

この学校では　お昼ごはんは　食堂で　好きな友だちと好きな場所で食べてよいことになっていると思って　したの文章を　読んでください。

あなたが　お昼を食べるために　すわる場所をさがしているところを　そうぞうしてください。へやの　むこうがわにある　テーブルに，あなたの　しっている人たちが　何人か見えました。その子たちは　わらったり，たがいに話をしたりして、とても楽しそうに見えました。

あなたは その子たちのテーブルまで　歩いていきました。あなたが　すわったとたんに，その子たちは　話すのをやめて，だれもあなたに話しかけません。

1. その子たちについて、あなたはどう思いますか。 以下の項目について、1：全くそう思わない～5：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	その子たちは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	その子たちは、あなたと話したくなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
3	その子たちは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	その子たちは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	その子たちは、あなたが来るまで、あなたの悪口を言っていたと思う。	1	2	3	4	5

2. このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？

ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

11 ページに進もう！

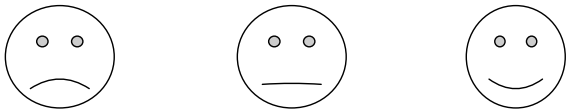
4．こんな時あなたならどんなことをしますか？

下の囲みの中に、あなたがその子たちに対してすることや言うことを思いつくだけ記入してください。ひとつの囲みの中に、思いついたアイデアをひとつずつ記入してください。また、その時のあなたの表情について、下にある 1～3 の中から一番あてはまるものをひとつ選んで○をつけてください.

＜アイデア①＞

（その子たちに対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

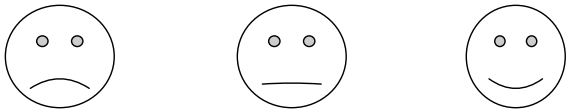


1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

＜アイデア②＞

（その子たちに対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。



1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

＜アイデア③＞

（その子たちに対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

＜アイデア④＞

（その子たちに対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

＜アイデア⑤＞

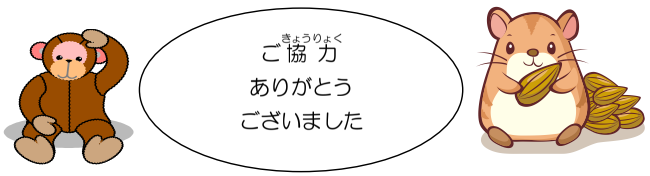
（その子たちに対して、あなたがすることや言うセリフを書いてください）

●その時、あなたがどんな顔をしているか、下の 1～3 からひとつ選んで○をつけてください。

1. 怒った顔　2. ふつうの顔　3. 笑った顔

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。 以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに，その子たちに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	その子たちのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	その子たちのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに，その子たちに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	その子たちのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	その子たちに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに，その子たちに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	その子たちがいない所で，「その子たちはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	その子たちに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5

以上で質問は終わりです。



応答的行動の検索における分類カテゴリー

1．無罰的行動

（定義）報復的行動や主張的行動を行わず，許容し，加害者の心理的，物理的負担を軽減する言動。

（表情）笑顔，普通の顔

（セリフの例）「いいよ，すぎたことだし」「気にしなくていいよ」「へいきへいき」「なかよしでいようね」「なかなおりしよう」

2．合理的主張行動

（定義）相手に非があると考えながらも，怒りなどの喚起された否定的な感情を表出せず，丁寧な言葉づかいで，加害者に対して，釈明，注意の喚起，謝罪，補償的措置など，被害者の立場として正当な要求を主張する言動。または，相手に非があることを表明する行動，加害行為に対する抗議。

（表情）笑顔，普通の顔，（困惑；言葉使いが丁寧な場合に限定）

（セリフの例）「気をつけてね」「そんなことしないでね」「これからは気をつけてね」「どうしてこんなことするの？」「あやまってほしいなぁ」「じぶんもやられるといやでしょ」「ちょっとひどいんじゃない？」「責任とってね」「どうするの？」

※丁寧さを表す終助詞で終わっているもの，または，「～なの？」「～してね」「～しよう」「～してくれる？」「～してくれないかなぁ」といった語尾で終わるものを指す。

※「～だ」というような常体文，または単に「～して」「～してよ」という語尾で終わっている場合，顔面表情が普通の顔であれば，このカテゴリーに含められる。

3．感情表出的主張行動

（定義）相手に非があると考え，困惑，怒りなおどの喚起された否定的な感情を表出しつつ，丁寧さを欠く言葉使いで加害者に対して，釈明，注意の喚起，謝罪，補償的措置など，被害者の立場として正当な要求を主張する言動。または，相手に非があることを表明する行動，加害行為に対する抗議。

（表情）怒り，または困惑，（困惑；言葉使いが丁寧な場合は除く），普通の顔（ただし普通の顔は，言葉づかいが丁寧さを欠く場合に限定される）

（セリフの例）「なんでこんなことをするんだ」「こんどから気をつけろよな」「ちゃんとあやまれよ」「気をつけろよ」「やめろ」「おまえがやられたらどういう気持ちになる！」「なんだよ！」「ひでぇな！」「ふざけんじゃねぇ！」「なにすんだよ」「よくもやったな！」「責任とれよ」「どうしてくれるんだよ」

※「丁寧さを欠く言葉づかい」とは，「～しろ」「～しなさい」「～しろよな」「～しなさいね」など，命令形を基本とするものを指す。また，「！」マークによって，語気

の激しさを表しているものも含まれる。「～だ」というような常体文，または単に「～して」「～してよ」という場合には，顔面表情が困惑または怒りの場合に限って，このカテゴリに含まれる。

４．驚愕・困惑・落胆の表出

（定義）自他のいずれに対する責任の帰属に関する表明はなく，単に，もたらされた結果に，驚き，困惑し，落胆していることを表情または発言（両者でもよい）によって示す行動。

（表情）普通の顔

（セリフの例）「ああ」「どうしよう」など

５．攻撃的行動

次の(1)～(4)のいずれかに該当する行動

(1)攻撃行動

（定義）相手に非があると考え，加害者を罵倒する，加害者に侮辱的な発言をする，加害者に対する無視・仲間外れ・噂の流布などを他の仲間と行うなどの報復的言動を遂行する。ただし，被害者としての正当な要求は行わない。

（表情）怒り

（セリフの例）「バカ！」「ばかやろう」「このやろー！」「いじわる」「あんたなんか嫌い」

(2)威嚇行動

（定義）加害者の身体，所有物に損害を加える，加害者を社会的関係から排除するなどの報復的行動の遂行を，予告，または示唆する。

（表情）怒り

（セリフの例）「ぶっころすぞ」「ひどい目にあわせるぞ」「顔も見たくない」

(3)加害者に対する過剰な補償的要求

（定義）相手に非があると考え，加害者に対する不当に過剰な補償的要求，または実現不可能な補償的要求を行う。

（表情）怒り

（セリフの例）「土下座しろ」

(4)嫌悪的な驚愕・困惑・落胆の表出

（定義）自他のいずれに対する責任の帰属に関する表明はなく，単に，もたらされた結果に，驚き，困惑し，落胆していることを発言（両者でもよい）によって示す。

（表情）怒り

（セリフの例）「ああ！」「どうしよう！」など

６．その他の非攻撃的行動

次の(1)～(4)のいずれかに該当する行動

(1)友好的な驚愕・困惑・落胆の表出

（定義）自他のいずれに対する責任の帰属に関する表明はなく，単に，もたらされた結果に，驚き，困惑し，落胆していることを発言（両者でもよい）によって示す。

（表情）笑顔

（セリフの例）「ああ」「どうしよう」など

(2)抑制的・忍耐的行動

（行動）報復的攻撃行動も，許容的行動もとらず，苦痛，怒りなどの喚起された否定的な感情も，被害者の立場として正答な要求も抑制し，耐える。

（表情）普通の顔，または笑顔

（セリフの例）「……」

(3)事後措置の独語的表明

（行動）自他のいずれに対する責任の帰属も行っておらず，単に，もたらされた被害の処理に要する行動や道具について，あるいはその後行動について独語的に言及する。

（表情）普通の顔，または笑顔

（セリフの例）「さ，早く教室に行かなくちゃ」「ごはん，ごはん」

(4)自罰的行動

（定義）自己の非を認める言動。

（表情）全て可。

（セリフの例）「私が何か気を悪くさせることしちゃったかな」「ごめんね」

「小学生の友人関係に関するアンケート」
ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。
以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。

■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。

■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。

■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。

■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、 あなたのありのままの意見を答えてください。

■このページは切り離して、お持ち帰りください。

■回答には15分～20分程度かかります。人によりスピードは変わりますが、自分のペースで回答してください。

■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。
研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）
E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp
研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間エリア支援室　研究支援
TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。
3ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年をきかせてください。
下の□の中のあてはまるところに○をつけてください。

【　男子　　女子　】

【　4 年生　　5 年生　　6 年生　】

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて

「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。

これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，

それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視
- 話しかけられても聞こえてないふりをする
- その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう

仲間はずれ
- 遊びの仲間にわざとさそわない
- グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと

かげ口
その人のいないところで、その人の悪口や嫌な噂を言うこと

4 ページに進もう！

【質問３】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった、「ひとりぼっちにする攻撃」について、いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～5：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに○をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4	5
2		よくあることだと思う	1	2	3	4	5
3		先にやられたのなら、やりかえしてもしかたないことだと思う	1	2	3	4	5
4		目立たないものだと思う	1	2	3	4	5
5	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	すると、けんかやいじめにつながることだと思う	1	2	3	4	5
6		大人もすることだと思う	1	2	3	4	5
7		されたら、やり返した方がいいと思う	1	2	3	4	5
8		することで、相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4	5
9	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	ひきょうだと思う	1	2	3	4	5
10		かんたんにできると思う	1	2	3	4	5
11		嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4	5
12		周りの人に気づかれにくいものだと思う	1	2	3	4	5
13	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	する人は、される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4	5
14		ふつうにあることだと思う	1	2	3	4	5

5 ページに進もう！

【質問３】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
15	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	される方が悪い場合もあると思う	1	2	3	4	5
16		他の人に秘密にしやすいものだと思う	1	2	3	4	5
17		すると、自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4	5
18		誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4	5
19	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怪我させるわけではないので、まだ許されると思う	1	2	3	4	5
20		することで、相手を思い通りにできることだと思う	1	2	3	4	5
21		すると、した人の信頼がなくなることだと思う	1	2	3	4	5
22		たまにしかないことだと思う	1	2	3	4	5
23	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怒るようなことをされたら、してもしかたがないと思う	1	2	3	4	5
24		やった人が見つかりにくいものだと思う	1	2	3	4	5
25		されたら、誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4	5
26		やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4	5
27	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	相手に乱暴なことをするよりも、悪いことではないと思う	1	2	3	4	5
28		大人の目を盗んでできることだと思う	1	2	3	4	5

6ページに進もう！

なぜ人がそうするのか？

これから、いくつかのお話を読んでください。それぞれのお話でおこっていることが、じっさいにあなたにおこっていると思ってください。そして、それぞれのお話につづく質問にこたえてください。

ろうかでのお話

学校で，ある朝 あなたがろうかに立っているところをそうぞうしてください。あなたが そこに立っていると，AとBという２人の同級生が歩いてきました。AとBは あなたのそばを通る時，あなたを見て，おたがいに何かを ささやきあって，そのあとで 笑いました。

	1. AとBについて、あなたはどう思いますか。以下の項目について、1：全くそう思わない～5：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	AとBは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	AとBは、あなたのことを怒らせようとしていた。	1	2	3	4	5
3	AとBは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	AとBは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	AとBは、あなたのことをからかっていた。	1	2	3	4	5

２．このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？ア～ウの中からひとつ選んで○をつけてください。

ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

7ページに進もう！

3-1. お話の場面で、あなたが下の［　　］の中の行動をしたと想像して、次の質問について最も当てはまるところに○をつけてください。 ア．あなたはその後、AとBのことを、無視しました。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	もしあなたが無視しても、AとBはいやな気持ちにならないと思う。	1	2	3	4	5
2	もしあなたが無視したら、AとBはあなたに謝ってくれると思いますか。	1	2	3	4	5
3	あなたが無視のような行動をすることは、適切なことだと思いますか。	1	2	3	4	5
4	あなたは、自分が無視のような行動をすることができると思いますか。	1	2	3	4	5

3-2. お話の場面で、あなたが下の［　　］の中の行動をしたと想像して、次の質問について最も当てはまるところに○をつけてください。 イ．あなたは AとBに笑った理由を　怒らずに　たずねました。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	もしあなたが理由を尋ねても、AとBはいやな気持ちにならないと思いますか。	1	2	3	4	5
2	もしあなたが理由を尋ねたら、AとBはあなたに謝ってくれると思いますか。	1	2	3	4	5
3	あなたが理由を尋ねるような行動をすることは、適切なことだと思いますか。	1	2	3	4	5
4	あなたは、自分が理由を尋ねるような行動をすることができると思いますか。	1	2	3	4	5

8 ページに進もう！

3-3. お話の場面で、あなたが下の［　　］の中の行動をしたと想像して、次の質問について最も当てはまるところに○をつけてください。 ウ．あなたは怒って、AとBに向かって　悪口を言いました。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	もしあなたが悪口を言っても、AとBはいやな気持ちにならないと思いますか。	1	2	3	4	5
2	もしあなたが悪口を言ったら、AとBは謝ってくれると思いますか。	1	2	3	4	5
3	あなたが悪口のような行動をすることは、適切なことだと思いますか。	1	2	3	4	5
4	あなたは、自分が悪口のような行動をすることができると思いますか。	1	2	3	4	5

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。 以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに○をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに，AとBに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	AとBのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	AとBのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに，AとBに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	AとBのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	AとBに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに，AとBに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	AとBのいない所で，「AとBはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	AとBに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5

お昼ごはんの前に

お話はもうひとつあります。
がんばって進んでください。

この学校では　お昼ごはんは　食堂で　好きな友だちと好きな場所で食べてよいことになっていると思って　したの文章を　読んでください。

あなたが　お昼を食べるために　すわる場所をさがしているところを　想像してください。へやの　むこうがわにある　テーブルに，あなたの　しっている人たちが　何人か見えました。その子たちは　わらったり，たがいに話をしたりして、とても楽しそうに見えました。

あなたは その子たちのテーブルまで　歩いていきました。あなたが　すわったとたんに，その子たちは　話すのをやめて，だれもあなたに話しかけません。

	1. その子たちについて、あなたはどう思いますか。以下の項目について、1：全くそう思わない～5：とてもそう思うの中で最も当てはまるものに○をつけてください。	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	その子たちは、意地悪をしようとしていた。	1	2	3	4	5
2	その子たちは、あなたと話したくなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
3	その子たちは、たまたま気づかなかったのだと思う。	1	2	3	4	5
4	その子たちは、わざとやったと思う。	1	2	3	4	5
5	その子たちは、あなたが来るまで、あなたの悪口を言っていたと思う。	1	2	3	4	5

2. このお話のようなことが　じっさいに　あなたにおこったら、あなたは　どのくらい　ショックだったり、はらがったたりしますか？

ア．ショックだったり、はらがたったりは　まったくしない。

イ．少し　ショックだったり、はらがたったり　する。

ウ．すごく　ショックだったり、はらがたったり　する。

10 ページに進もう！

	3-1. お話の場面で、あなたが下の［　　］の中の行動をしたと想像して、次の質問について最も当てはまるところに○をつけてください。 ア．あなたはその後、その子たちのことを、無視しました。	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	もしあなたが無視しても、その子たちはいやな気持ちにならないと思う。	1	2	3	4	5
2	もしあなたが無視したら、その子たちは謝ってくれると思いますか。	1	2	3	4	5
3	あなたが無視のような行動をすることは、適切なことだと思いますか。	1	2	3	4	5
4	あなたは、自分が無視のような行動をすることができると思いますか。	1	2	3	4	5

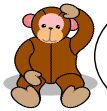
	3-2. お話の場面で、あなたが下の［　　］の中の行動をしたと想像して、次の質問について最も当てはまるところに○をつけてください。 イ．あなたはその子たちに，黙りこんだ理由を怒らずに尋ねました。	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	もしあなたが理由を尋ねても、その子たちはいやな気持ちにならないと思いますか。	1	2	3	4	5
2	もしあなたが理由を尋ねたら、その子たちはあなたに謝ってくれると思いますか。	1	2	3	4	5
3	あなたが理由を尋ねるような行動をすることは、適切なことだと思いますか。	1	2	3	4	5
4	あなたは、自分が理由を尋ねるような行動をすることができると思いますか。	1	2	3	4	5

11 ページに進もう！

3-3. お話の場面で、あなたが下の［　　］の中の行動をしたと想像して、次の質問に最も当てはまるところに〇をつけてください。 ウ．あなたは怒って、その子たちに向かって　悪口をいいました。		全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	少しそう思う	とてもそう思う
1	もしあなたが悪口を言っても、その子たちはいやな気持ちにならないと思う。	1	2	3	4	5
2	もしあなたが悪口を言ったら、その子たちはあなたに謝ってくれると思いますか。	1	2	3	4	5
3	あなたが悪口のような行動をすることは、適切なことだと思いますか。	1	2	3	4	5
4	あなたは、自分が悪口のような行動をすることができると思いますか。	1	2	3	4	5

4. このとき、あなたはどうすると思いますか。 以下の項目について、「1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる」の中で最も当てはまるものに〇をつけてください。		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	とてもあてはまる
1	怒らずに，その子たちに「どうしてこういうことをするの」と言う。	1	2	3	4	5
2	その子たちのことを無視する。	1	2	3	4	5
3	その子たちのことをたたく。	1	2	3	4	5
4	怒らずに，その子たちに「あやまって欲しい」と言う。	1	2	3	4	5
5	その子たちのことを仲間に入れないように他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
6	その子たちに向かって、きつい言葉でどなる。	1	2	3	4	5
7	怒らずに，その子たちに自分の気持ちを伝える。	1	2	3	4	5
8	その子たちがいない所で，「その子たちはいじわる」と他の友だちに言う。	1	2	3	4	5
9	その子たちに乱暴なことをする。	1	2	3	4	5

以上で質問は終わりです。



ご協力
ありがとう
ございました

「小学生の友人関係に関するアンケート」
ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

- ■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。
- ■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。
- ■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。
- ■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。
- ■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、あなたのありのままの意見を答えてください。
- ■このページは切り離して、お持ち帰りください。
- ■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）
E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp
研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間系支援室　総務係
TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。

3ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年、クラス、生年月日をきかせてください。下の□の中のあてはまるところに○をつけ、クラス・生年月日を記入してください。

【　男子　　女子　】

【　４年生　　５年生　　６年生　】

クラス【　　組】

生年月日【　　月　　日】

【質問2】　あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？あてはまるものすべてに○をつけてください。

友達と一緒にいるときに、「困っている子の手助け」などの親切なことを

（１）自分が友だちにしたことがある　□

（２）友だちからされたことがある　□

（３）友だちが他の友だちにしていることを見たことがある　□

（４）どれもあてはあらない　□

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。
これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視	話しかけられても聞こえてないふりをする その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう
仲間はずれ	遊びの仲間にわざとさそわない グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと
かげ口	その人のいないところで，その人の悪口や嫌な噂を言いふらす

4ページに進もう！

【質問３】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった，「ひとりぼっちにする攻撃」について，いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～４：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに〇をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4	5
2		よくあることだと思う	1	2	3	4	5
3		先にやられたのなら，やりかえしてもしかたないことだと思う	1	2	3	4	5
4		目立たないものだと思う	1	2	3	4	5
5	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	すると，けんかやいじめにつながることだと思う	1	2	3	4	5
6		大人もすることだと思う	1	2	3	4	5
7		されたら，やり返した方がいいと思う	1	2	3	4	5
8		することで，相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4	5
9	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	ひきょうだと思う	1	2	3	4	5
10		かんたんにできると思う	1	2	3	4	5
11		嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4	5
12		周りの人に気づかれにくいものだと思う	1	2	3	4	5
13	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	する人は，される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4	5
14		ふつうにあることだと思う	1	2	3	4	5

5ページに進もう！

【質問３】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
15	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	される方が悪い場合もあると思う	1	2	3	4	5
16		他の人に秘密にしやすいものだと思う	1	2	3	4	5
17		すると，自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4	5
18		誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4	5
19	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	怪我させるわけではないので，まだ許されると思う	1	2	3	4	5
20		することで，相手を思い通りにできることだと思う	1	2	3	4	5
21		すると，した人の信頼がなくなることだと思う	1	2	3	4	5
22		たまにしかないことだと思う	1	2	3	4	5
23	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	怒るようなことをされたら，してもしかたがないと思う	1	2	3	4	5
24		やった人が見つかりにくいものだと思う	1	2	3	4	5
25		されたら，誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4	5
26		やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4	5
27	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視，仲間はずれ，かげ口）	相手に乱暴なことをするよりも，悪いことではないと思う	1	2	3	4	5
28		大人の目を盗んでできることだと思う	1	2	3	4	5

6ページに進もう！

【質問４】

このアンケートは，どうすればみんなが楽しく学校生活を送ることができるかを考えるためのものです。

それぞれの質問には，下のようなめもりがついています。

《れい》にしたがって，自分の気持ちに一番近い数字に〇をつけてください。

《れい》　ゲームをするのは好きですか。

4	3	2	1

少しそう思うときは

数字にはこういう意味があります。
4……よくある，とてもそう思う，たくさんいる
3……少しある，少しそう思う，少しいる
2……あまりない，あまりそう思わない，あまりいない
1……まったくない，まったく思わない，まったくいない

1．あなたは運動や勉強，係活動や委員会活動，しゅみなどでクラスの人からみとめられる（すごいなと思われる）ことがありますか。	1	2	3	4
2．あなたが失敗したときに，クラスの人がはげましてくれることがありますか。	1	2	3	4
3．クラスの中に，あなたの気持ちをわかってくれる人がいると思いますか。	1	2	3	4
4．あなたが何かしようとするとき，クラスの人たちは協力してくれたり，おうえんしてくれたりすると思いますか。	1	2	3	4
5．あなたのクラスには，いろいろな活動に取り組もうとする人がたくさんいると思いますか。	1	2	3	4
6．あなたが自分の思ったことや考えたことを発表したとき，クラスの人たちはひやかしたりしないで，しっかり聞いてくれると思いますか。	1	2	3	4
7．あなたはクラスの人にいやなことを言われたり，からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか。	1	2	3	4
8．あなたはクラスの人にぼう力をふるわれるなどして、つらい思いをすることがありますか。	1	2	3	4
9．あなたはクラスの人にばかにされるなどして，クラスにいたくないと思うことがありますか。	1	2	3	4
１０．あなたは休み時間などに、ひとりぼっちでいることがありますか。	1	2	3	4
１１．あなたはクラスでグループをつくるときなどに、すぐにグループに入れないで、最後のほうまで残ってしまうことがありますか。	1	2	3	4
１２．あなたはクラスの人たちから、ムシされているようなことがありますか。	1	2	3	4

7 ページに進もう！

【質問５】

この質問は、ふだんのあなたの学校での様子についてきくものです。ふだんの自分の行動を思い浮かべて、次の質問について１：まったくあてはまらない～４：とてもよくあてはまるの中で、一番あてはまると思うものに〇をつけてください。	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	よくあてはまる	とてもよくあてはまる
1．人に乱暴なことをしたことがある	1	2	3	4
2．だれかを仲間はずれにしたことがある	1	2	3	4
3．からかわれたら、たたいたり、けったりするかもしれない	1	2	3	4
4．放課後みんなで遊ぶ相談をするときに、だれかを入れなかったことがある	1	2	3	4
5．たたかれたら、たたき返す	1	2	3	4
6．その子がみんなからきらわれるようなうわさ話をしたことがある	1	2	3	4
7．自分を守るためなら、暴力をふるうのもしかたがない	1	2	3	4
8．友だちといっしょになって、言うことを聞いてくれない人の悪口を言ったことがある	1	2	3	4
9．じゃまをする人がいたら、文句を言う	1	2	3	4
10．遊ぶときや班を作るとき、気に入らない友だちは仲間に入れたくない	1	2	3	4
11．すぐおこる方だ	1	2	3	4
12．あの子とは、いっしょに遊ばないで、とだれかにたのんだことがある	1	2	3	4
13．すぐにけんかをしてしまう	1	2	3	4
14．いつもみんなでいっしょに帰るのに、わざとだれかをおいて先に帰ったことがある	1	2	3	4

8 ページに進もう！

【質問６】　あなたはいままでに以下の項目にあてはまることを実際に経験しましたか？
あてはまるものすべてに〇をつけてください。

誰かに対しての「無視」や「仲間はずれ」,「かげ口」などを

（１）自分が友だちにしたことがある　□

（２）友だちからされたことがある　□

（３）友だちが他の友だちにしていることを見たことがある　□

（４）どれもあてはあらない　□

以上で質問は終わりです。答えてくださってありがとうございました。
下の □ は自由欄です。
ご意見・ご感想などが、もしありましたら、ご自由に書いてください。
(自由欄ですので、白紙のままでもかまいません)。

ご協力
ありがとう
ございました

「小学生の友人関係に関するアンケート」
ご協力よろしくお願いします

このアンケートは、あなたが日々の生活で感じていることや考えていることについてたずねるものです。
以下の注意事項をよく読んで、アンケートへの協力を決めてください。

☆注意事項です☆

■このアンケートはテストではありません。学校の成績とは全く関係がないものです。答えた内容で成績が悪くなることは決してありません。

■アンケートに答えるかどうかはあなたの自由です。どうしても答えたくない質問には、無理に答えなくてもかまいません。答えなかった質問があることで、あなたの成績が悪くなることも決してありません。

■気分が悪くなった場合は、無理に答えなくてもかまいません。いつでも回答を中止することもできます。

■あなたの答えが他の人に知られたり、この研究以外の目的に使われることはありません。

■このアンケートに正しい答はありません。まわりの人と相談せずに、 あなたのありのままの意見を答えてください。

■このページは切り離して、お持ち帰りください。

■回答には 15分～20分程度かかります。人によりスピードは変わりますが、自分のペースで回答してください。

■ご協力いただける場合は、次ページの（　　）に〇をつけてください。

2 ページに進もう！

この研究は協力してくださる皆さんに困ったことが起きないように注意して行われています。
研究の内容についてご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施分担者または研究実施責任者にお尋ねください。

研究実施分担者　筑波大学大学院人間総合科学研究科　ヒューマン・ケア科学専攻　関口雄一（せきぐちゆういち）
E-mail: yseki@human.tsukuba.ac.jp
研究実施責任者　筑波大学人間系　教授　濱口佳和（はまぐちよしかず）
TEL: 029-853-7501　E-mail: yhama@human.tsukuba.ac.jp

また、この研究に協力して困ったなと思うことがございましたら、筑波大学人間系研究倫理委員会までご相談ください。

人間エリア支援室　研究支援
TEL: 029-853-5605　E-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

注意事項に同意して調査に協力する

（　　）

次のページから質問が始まります。

3 ページに進もう！

【質問1】　まずは、あなたの性別と学年をきかせてください。
下の□の中のあてはまるところに○をつけてください。

【　男子　　女子　】

【　4 年生　　5 年生　　6 年生　】

！注意事項！

次のページから「無視」・「仲間はずれ」・「かげ口」をぜんぶ合わせて

「ひとりぼっちにする攻撃」と呼ぶことにします。

これから「ひとりぼっちにする攻撃」という言葉が出てきたら，

それは「無視」「仲間はずれ」「かげ口」のことだと思ってください。

具体的には以下のようなことを表します。

無視	話しかけられても聞こえてないふりをする その人がそこにいるのに、わざといないようにふるまう
仲間はずれ	遊びの仲間にわざとさそわない グループ活動のときに声をかけなかったり，追い出してしまうこと
かげ口	その人のいないところで、その人の悪口や嫌な噂を言うこと

4 ページに進もう！

【質問２】

この質問は、「無視・仲間はずれ・かげ口」といった、「ひとりぼっちにする攻撃」について、いつもあなたが考えていることをきくものです。ふだんの自分が考えていることを思いうかべて、次の質問について１：まったくそう思わない～5：とてもそう思うの中で、一番あてはまると思うものに○をつけてください。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
1	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	された人が学校に来たくなくなると思う	1	2	3	4	5
2		よくあることだと思う	1	2	3	4	5
3		先にやられたのなら、やりかえしてもしかたないことだと思う	1	2	3	4	5
4		目立たないものだと思う	1	2	3	4	5
5	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	すると、けんかやいじめにつながることだと思う	1	2	3	4	5
6		大人もすることだと思う	1	2	3	4	5
7		されたら、やり返した方がいいと思う	1	2	3	4	5
8		することで、相手に思い知らせてやれると思う	1	2	3	4	5
9	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	ひきょうだと思う	1	2	3	4	5
10		かんたんにできると思う	1	2	3	4	5
11		嫌なことをする人を相手にするのはしかたがないと思う	1	2	3	4	5
12		周りの人に気づかれにくいものだと思う	1	2	3	4	5
13	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	する人は、される人の気持ちがわからないのだと思う	1	2	3	4	5
14		ふつうにあることだと思う	1	2	3	4	5

5ページに進もう！

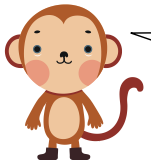
【質問2】のつづきです。

			まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	とてもそう思う
15	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	される方が悪い場合もあると思う	1	2	3	4	5
16		他の人に秘密にしやすいものだと思う	1	2	3	4	5
17		すると、自分もいやな気持ちになると思う	1	2	3	4	5
18		誰でもやっていることだと思う	1	2	3	4	5
19	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怪我させるわけではないので、まだ許されると思う	1	2	3	4	5
20		することで、相手を思い通りにできることだと思う	1	2	3	4	5
21		すると、した人の信頼がなくなることだと思う	1	2	3	4	5
22		たまにしかないことだと思う	1	2	3	4	5
23	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	怒るようなことをされたら、してもしかたがないと思う	1	2	3	4	5
24		やった人が見つかりにくいものだと思う	1	2	3	4	5
25		されたら、誰かに相談した方がいいと思う	1	2	3	4	5
26		やったことがない人はいないと思う	1	2	3	4	5
27	ひとりぼっちにする攻撃は(を)（無視、仲間はずれ、かげ口）	相手に乱暴なことをするよりも、悪いことではないと思う	1	2	3	4	5
28		大人の目を盗んでできることだと思う	1	2	3	4	5

6ページに進もう！

【質問3】

この質問は、ふだんのあなたの学校での様子についてきくものです。ふだんの自分の行動を思い浮かべて、次の質問について１：まったくあてはまらない～４：とてもよくあてはまるの中で、一番あてはまると思うものに〇をつけてください。	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	よくあてはまる	とてもよくあてはまる
1. 人に乱暴なことをしたことがある	1	2	3	4
2. だれかを仲間はずれにしたことがある	1	2	3	4
3. からかわれたら、たたいたり、けったりするかもしれない	1	2	3	4
4. 放課後みんなで遊ぶ相談をするときに、だれかを入れなかったことがある	1	2	3	4
5. たたかれたら、たたき返す	1	2	3	4
6. その子がみんなからきらわれるようなうわさ話をしたことがある	1	2	3	4
7. 自分を守るためなら、暴力をふるうのもしかたがない	1	2	3	4
8. 友だちといっしょになって、言うことを聞いてくれない人の悪口を言ったことがある	1	2	3	4
9. じゃまをする人がいたら、文句を言う	1	2	3	4
10. 遊ぶときや班を作るとき、気に入らない友だちは仲間に入れたくない	1	2	3	4
11. すぐおこる方だ	1	2	3	4
12. あの子とは、いっしょに遊ばないで、とだれかにたのんだことがある	1	2	3	4
13. すぐにけんかをしてしまう	1	2	3	4
14. いつもみんなでいっしょに帰るのに、わざとだれかをおいて先に帰ったことがある	1	2	3	4



半分以上終わりました。

がんばって進んでください。

【質問4】

わたしたちは、楽しい日ばかりでなく、ちょっとさみしい日も、楽しくない日もあります。みなさんがこの一週間、どんな気持ちだったか当てはまるものに〇をつけて下さい。良い答え、悪い答えはありません。思ったとおりに答えてください。	そんなことはない	ときどきそうだ	いつもそうだ
1. 楽しみにしていることがたくさんある。	1	2	3
2. とても良く眠れる。	1	2	3
3. 泣きたいような気がする。	1	2	3
4. 遊びに出かけるのが好きだ。	1	2	3
5. 逃げ出したいような気がする。	1	2	3
6. おなかが痛くなることがある。	1	2	3
7. 元気いっぱいだ。	1	2	3
8. 食事が楽しい。	1	2	3
9. いじめられても自分で「やめて」と言える。	1	2	3
10. 生きていても仕方がないと思う。	1	2	3
11. やろうと思ったことがうまくできる。	1	2	3
12. いつものように何をしても楽しい。	1	2	3
13. 家族と話すのが好きだ。	1	2	3
14. こわい夢を見る。	1	2	3
15. 独りぼっちの気がする。	1	2	3
16. 落ち込んでいてもすぐに元気になれる。	1	2	3
17. とても悲しい気がする。	1	2	3
18. とても退屈な気がする。	1	2	3

もう少しです。

8ページに進もう！

【質問5】

ここに書いてあることは、私たちが自分の気持ちを言うときに使うことばです。一つずつよく読んで、今あなたが自分のことをどう思っているかについて答えてください。ここに書いてあることを、今あなたがとても強く感じているときには（はい）のところを〇でかこんでください。少し感じているときには（すこし）のところを〇でかこんでください。ここに書いてあることを今、ぜんぜん感じていないときには（いいえ）のところを〇でかこんでください。正しい答えやまちがった答えはありませんから、あなたが今、思っているとおりに答えてください。

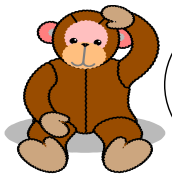
1.	私は今、落ち着いています。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
2.	私は今、心がみだれています。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
3.	私は今、気楽な気分です。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
4.	私は今、いらいらしています。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
5.	私は今、じっとしておれないような気持ちです。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
6.	私は今、ゆったりした気持ちです。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
7.	私は今、不安です。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
8.	私は今、のんびりした気持ちです。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
9.	私は今、何か心配です。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
10.	私は今、満足した気持ちです。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
11.	私は今、びくびくしてます。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
12.	私は今、安心しています。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
13.	私は今、平気な気持ちです。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
14.	私は今、安らかな気分です。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
15.	私は今、どきどきしています。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
16.	私は今、何か不満な気がします。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
17.	私は今、ほっとした感じです。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
18.	私は今、おびえています。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
19.	私は今、きんちょうしています。	（いいえ）	（すこし）	（はい）
20.	私は今、楽な気持ちです。	（いいえ）	（すこし）	（はい）

9 ページに進もう！

【質問6】

あなたは、あなたのまわりの友だちが、普段どのくらいあなたの助けになっていると感じていますか。1番あてはまるところに1つだけ〇をつけてください。		絶対にちがう	たぶんちがう	たぶんそうだ	きっとそうだ
1	あなたが、落ち込んでいると、元気づけてくれる	1	2	3	4
2	あなたが、誰かに嫌なことを言われた時に、慰めてくれる	1	2	3	4
3	あなたが、何かうれしいことがあった時に、それを喜んでくれる	1	2	3	4
4	あなたが、どうしてよいかわからなくなった時に、なんとかしてくれる	1	2	3	4

以上で質問は終わりです。



たくさんの質問に
答えていただいて
ありがとうございました。